

アクセル・ワールド9

—七千年の祈り—

「許さない。お前を殺す——バーストポイントが全部なくなって、加速世界から消えるまで、殺し続ける」

再び<クロム・ディザスター>となってしまったハルユキは、<アッシュ・ローラー>を痛めつけていたアバターたちを鬼神のごとき力で降参する。そして、深部まで完全に<災禍の鎧>と融合してしまうのだった。

滅すべき敵を求めて<加速世界>を飛翔するシルバー・クロウ。そして彼は、次なるターゲットとして、<ISSキット>とその制作者たる<加速研究会>に憎悪の矛先を向けた。

誰も制止不能の狂戦士。そんな彼の前に、一体のアバターが立ちふさがる。

その名は、<グリーン・グランデ>。最強の大盾<ザ・ストライフ>を携える絶対防壁の<緑の王>と、現われた狂気のアバターが激突する——！
<災禍の鎧>編、完結！



か-16-17



アクセル・ワールド9

川原 礫

電撃文庫 610



ISBN978-4-04-870954-5
C0193 V610E



発行 ● アスキー・メディアワークス

定価： 本体 610 円

※消費税が別に加算されます



アクセル弁当⑦ れき



かわはら れき
川原 礫

気づけば夏が終わっていました。いいんです楽しいの手だし。海も山も川も行ってないけどいいんです。キャンプもバーベキューも遊園地も（以下略）

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1~9
ソードアート・オンライン1~8

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵は今シリーズが初のイラストレーター。『電撃魔王』小何子への寄稿を見た文庫編集者が、今日の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って ブログやSNSなどでイラストを発表している。



アクセル・ワールド9

七千年の祈り

川原礫

電撃文庫

610

アクセル・ワールド9

—七千年の祈り—

「許さない。お前を殺す——バーストポイントが全部なくなって、加速世界から消えるまで、殺し続ける」

再び<クロム・デザスター>となってしまったハルユキは、<アッシュ・ローラー>を痛めつけていたアバターたちを鬼神のごとき力で瞬殺する。そして、深部まで完全に<災禍の鎧>と融合してしまうのだった。

滅すべき敵を求めて<加速世界>を飛翔するシルバー・クロウ。そして彼は、次なるターゲットとして、<ISSキット>とその制作者たる<加速研究会>に憎悪の矛先を向けた。

誰も制止不能の狂戦士。そんな彼の前に、一体のアバターが立ちふさがる。

その名は、<グリーン・グランデ>。

最強の大盾<ザ・ストライフ>を携える絶対防壁の<緑の王>と、明われた狂気のアバターが衝突する——！

<災禍の鎧>編、完結！



09

七千年の祈り

川原 礫
イサナ IZUNA

09 accel World 09

「加速世界」は、
「加速世界」は、
「加速世界」は、

電撃文庫



9784048709545



1920193006100

ISBN978-4-04-870954-5
C0193 ¥610E



ASCE
MEDIA
WORKS

発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 610 円

※消費税が別に加算されます



アクセル弁当⑦ れき



かわはら らう
川原 碌

気づけば夏が終わっていました。いもいもです暑いのだ
手だし。海も山も川も行ってないけどいいんです。キ
ャンプもバーベキューも遊園地も（以下略）

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1～9
ソードアート・オンライン1～8

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵はサシリーズが初のイラストレーター。
『電撃魔王』小冊子への依頼を見た文庫編集者が、今回の挿
絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本書仕事の依頼を請
うて、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。



アケル・ワールド

09

七千年の祈り

川原 礫
イラスト/11051
デザイン/ビビ

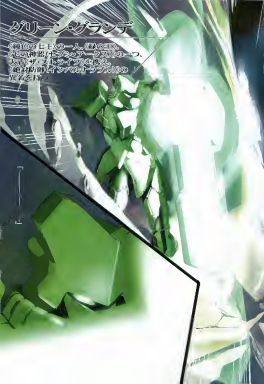
「グ……ル、オオオオッ!!」

ミルバー・クロウ

龍を倒すために、
Fallenの力を借りて、
ミルバー・クロウを
倒すために、
ミルバー・クロウを

グリーン・ブランド

新緑の季節、一人ひとりの心を
癒すための「グリーン・ブランド」が、
全国の各店舗で展開中。
ぜひ、お近くの店舗でチェック
してみてください。



リン

目もから飛び出した
ハルムキを引き止めた。
謎の少女。

「な、なんで……
僕なんか……」

「……………おまじなす」



黒雪姫

朝の王ブラック・
ロゼタスを降る
秘郷中学副生徒会長

「ハルユキ君、キミは私のものだ。
私は諦めな。キミを許さないと。
「お前様」も「おのり」も。『おのり』

「……せんはあ」

「これが、私の決断だ。
世界から……消えてくれ」

「……………」

《災禍の鎧》アビリティ/必殺技リスト

強化 外装

《体力増強 (トレイン)》

攻撃したアバターのHPを半分取り、自身のHPにチャージする。《災禍の鎧》のデフォルトアビリティ。

《連続予測演算》

敵の攻撃の軌道をリーチノスキャンし、属性・射撃・炎・氷・雷・毒・麻痺などを簡単に表示する。《災禍の鎧》のデフォルトアビリティ。

《レーザー・キャスト》

雷・火・大剣・《鎧》が持つデフォルトの強化属性。

《フラッシュ・ブリンク》

自身の体を相手の動きへと見え、同時に遠く離れた場所へ瞬間テレポートする。初代《クロム・ディザスター》である《シルバー・クロウ》の必殺技。

《フレイム・ブリーズ》

口から火柱を放ち、対象を攻撃する。後に引火した炎は、燃え広がるまでダメージを与え続ける。二代目《クロム・ディザスター》の必殺技。

《ワイヤー・フック》

草から覆たれる、紐の鋼索。対象に当たる

と文字通り《フック》となり、その対象を引寄せることができる。初代も応用範囲にわたる。不動のストラクチャー（障害物）に《フック》すれば、自身を高速移動させることも可能。五代目《クロム・ディザスター》である《チェーバー・ルース》のアビリティ。

《高速飛行》

空中から先制攻撃によって、《加速攻撃》唯一の発動を可能とする。六代目《クロム・ディザスター》である《シルバー・クロウ》のアビリティ。

《レーザー・ソード》

自身の手を鋭い剣のような形状に強化させ、敵を切り伏せる。威力増強により、離れた敵にもそのダメージは届く。六代目《クロム・ディザスター》である《シルバー・クロウ》の必殺技。

《レーザー・ランズ》

自身の手を鋭い剣のような形状に強化させ、敵を貫く。《レーザー・ソード》より射撃属性が強い。六代目《クロム・ディザスター》である《シルバー・クロウ》の必殺技。

アクセル・ワールド

七千年の祈り

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビィビィ



■ 特別展「タカシキチと41」開催中! 本館では、日本近代美術の巨匠、その傑作に思いを馳せてもらい、平岡アキ子に創作プログラムを共同開発し、デュエルアキ子に展覧会を企画・プロデュースしてもらった。

殺す。

全員殺す。

その衝動だけが存在した。すでに思惑くも野べるようなものではなかった。敵の腕を、脚を、頭を斬り飛ばし、引きちぎり、バラバラの残骸にしてやりたいという渴望が冷たい炎となって有田春雪の全身を駆け巡った。

「ダム…………」

獣のような低い唸りを漏らし、右手の太剣を振り直す。

デュエルアバター「ヘルバー・クロウ」の、純粋な銀色はすでに消え失せている。代わりに五体を彩るのは、より凶暴な黒みを帯びたクロム・シルバーだ。装甲形状も原形を留めない。細く滑らかだった四肢は、エッジが鋭く立った塊状の金属パーツにくまなく覆われている。胴体も同様。だが何より機々しいのは、本来の丸い胴部を上下から包む、肉食獣のあごとめいたヘルメットだ。牙を思わせる突起の並ぶバイザーが顔を完全に隠し、元の鏡面シールドは完全に見えない。

それらの装甲は、単なる装備アイテム——対戦格闘ゲーム（フレイン・バースト）で言うところの強化外装（エンハンスメント）ではなかった。

《七の神器》、または《七星外装》の名で呼ばれる、最強の武器たち。その六番星に列せられる銀（サ・ダイスタイニー）が、高位外装である大剣（スター・モクスター）と融合し、とあるバーストリンカーの深い怒りと哀しみを受けて形を歪めた。加速世界の装甲期から多くの破壊をもたらし、いつとき討伐されても消滅することなく燃り続けた《炎槍の龍》——。すでに神器をも超える力を持つ伝説の強化外装（サ・ダイズスター）が、いまシルバー・クロウの全身を隠無く覆っている。

いや、現象は《召喚》や《装置》の域に留まらない。もはやハルユキが龍であり、龍がハルユキだった。ダイズスターに宿る破壊の意志は完全にハルユキの意識と一体化し、これまで事あるごとに語りかけてきたあの声ももう聞こえない。

代わりに、ハルユキは、自身の意志によって低く囁いた。

「お前ら……全員、殺してやる」

悪魔めいたシルエットへと変じた両翼をいっばいに広げておハリンダするハルユキの眼下、現実世界の渋谷エリア・明治通り宮下公園北に相当する《魔都》ステーションの街路では、六人のバーストリンカーたちが輪を作つて立ち、乱入者を見上げている。

そして彼らの中心には、弱々しく瞬く二つの光があった。

一つが草色。もう一つが灰色。無制限中立フィールドに於いてバーストリンカーが死んだ位置に出現する《死亡マーカー》だ。草色は、緑のレギオン《グレート・ウォール》に所属する《フレッシュ・ウータン》。そして灰色は、彼の見当分にしてハルユキの長年のライバル、バイク使い《アンシュ・ローラー》――。

二人を取り囲んで何度か襲撃した六人のうち五人は、ほぼ初めて見る顔だった。だが一人だけ、つい数分前にアッシュに止めを刺したアバターには見覚えがあった。

細身の中背だが、両手にホリウム砲がある。装甲色は茶色がかった暗い緑。名を《オリーブ・グラブ》、ほんの数日前までブッシュ・ウータンとコンビを組んでいた緑のレギオンの中堅メンバーだ。当然アッシュとも面識があった、いや友人と言つていい間柄だったはずだ。

なのに彼は、一切の躊躇いなく、感情らしい感情も見せずにアッシュの心臓を貫いた。バーストポイント^{ポイント}を全て奪い尽くし、アッシュ・ローラーを加速世界から永遠に消し去ろうとしたのだ。

フニイスマスタに少々の訝し^{おどろ}きだけを添^そわせてハルユキを見上げるオリーブ・グラブや、他の五人の胸には、一様に奇妙な観望^{かんぼう}めいた生物型オブジェクトが装着されている。

著者^{著者}に、システム外の超攻撃力《心意システム》を操る力を与える代わりに負の感情をも増幅させ、生身の人格すら歪めてしまう闇の寄生体《ISSキット》。六人とも現在キットの支配下にあり、それゆえにオリーブの先輩たるアッシュ・ローラーや、同じくキット統^き統^け者

であつたブツシュ・ウータンへの攻撃を躊躇わなかつたのだらう。

しかし、そんな事情は、もうハルユキにはどうでもいいことだつた。

アツシュ・ローラーは、あくまで他レギオンに所属する、いわば敵だ。《現》こそネガ・ネビュラスの副長スカイ・レイカーだが、現実世界では彼と会つたことは一度もない。

でも――。

アツシュは、ハルユキがバーストリンカーとして初めて戦い、初めて負け、そして初めて勝つた相手なのだ。

どんな時でもブレイン・バーストをひとつの挑戦ゲームとして楽しもうとするアツシュは、いつしかハルユキにとってある種の《場所》にも等しい存在となつていた。苦しい時、迷つた時、彼はその陽性極まる戦闘スタイルと、そしてアメリカンバイクの爽快な排気音でハルユキをバーストリンカーとしての本道に立ち返らせてくれた。彼との《対戦》はいつだってひたすらに熱く、そして楽しかつた。

そのアツシュを、多勢と心意気勢力による圧倒的優位でいたぶり殺した六人を、ハルユキはただただ憎んだ。その憎しみに怒りが、せっかく種子状態にまで還元されていた《鬼禍の鎧》を纏らせ、ハルユキを対戦者の本道とは正反対の道へと突き進ませているというのは大いなる矛盾だつたが、それを意識することもしようでしなかつた。

空中に漆黒のスパークを散らしながら、ハルユキは鋭利に突つた大剣を高々と振りかぶつた。

そのモーションを敵性行動と判断したのだろう、地上のオリーブ・グラフ以下六人が、一糸乱れぬ動作で右手を掲げ、ハルユキへと向けた。

大小様々な掌を、まるで同じ色合いのどす黒い過剰光が包む。枯液のように滴る間はたちまち密度を増し、締められた恐るべき威力を示して周囲の空間を歪ませる。

同時に、ハルユキの視界を包む灰色の追加レイヤーを、小さな英字フォントが高速で横切った。意味するところは――《攻撃予測／心意攻撃 射撃・威力拡張／虚無エネルギー系 脅威度／10%》

六つの掌から、薄赤い透明なラインが音もなく伸びた。それは、攻撃の実体ではない。《驚》が、蓄積された膨大な瞬間経験から攻撃の軌道を予測演算し、ハルユキの視界に表示しているのだ。

自分の胸を照準する、何の工夫もない直線的超距離攻撃を、回避することは容易かった。

しかしハルユキはその場から一ミリたりとも動こうとせず、代わりに大剣を握る右手に少しだけ力を込めた。刃を包む凄風のオーラが激しく揺らめく。地上の六人が身に纏うオーラと色合いは似ているが、彼らのものが《枯液》だとすれば、ハルユキのそれは《炎》だ。荒れ狂う憤怒と、硬さ澄まされた殺意が重なりあう、絶対零度の炎。

地上のバーストリンカーたちが、掲げた右手の五指を一瞬たわめ、再びいっばいに開いた。異口同音に技名をコールする。

「ダーク・ショット！」

ISSキットが装着者に授ける、二つの基本心意技のひとつ。三日前、ブッシュ・ウーテンの右手から放たれシルバー・タロウの片翼を紙のように引きちぎったものと同じ暗黒のビームが六本、怪物の絶叫じみた共鳴音を振り撒きつつ迫る。

いかなるデュエルアバターであろうとも瞬時に消滅させ得るだけの威力を秘めた多重攻撃を、ハルユキは眼界まで引きつけ、軌道が一点で交差した瞬間——大剣（スター・キヤスター）を無動作に一発さした。

機え盛る暗黒の炎は、闇のビームが刀身に触れることすら許さなかった。同属性の心意攻撃が衝突した時特有の、空間そのものがひび割れるが如き衝撃音を轟かせ、六本のビームはハルユキから見えて右方向へと全て叩き落とされた。（遠く）ステージの強固極まる地形オブジェクトに穿たれた深い穴から、黒い爆炎が噴き上がる。

だがその現象には眼もくれず、ハルユキはひび割れた声で叫んだ。

「……温い」

所詮——お仕着せの心意技。機械的に事象の上書きを引き起こすことはできても、芯は虚ろだ。昨日の夕方、同じくISSキットに支配されかかったタムが放った（ライトニング・データ・スパイク）と比べるまでもなく軽い。技に感情がこもっていない。

オリーブ・クラブたちの中に存在するのは、ただの（獣）だけだ。ひたすらにパーストボ

イベントを求める空疎な衝動。誰かから買ったお手軽な力で、リスクなき勝利を貪ろうという醜態な欲求。

そんな奴らが、そんな力で、アツシユ・ローラーを散々にいたぶり殺したのだ。《格闘ゲーム》の所持によって心意気システムを遠ざけ、あくまで一対戦者であらうとし続けていた彼を六人で取り囲み、何度か、何度も、何度も何度も殺した。

いや、それだけではない。アツシユと一緒にいた彼の弟分、本来仲間であるはずのアツシユ・ウータンをも彼らは持った。六人の近くで寄り添うように眠く二つの死亡マークがその証だ。何事もなければ、アツシユとウータンは、遠く北東に離れた千代田エリアでハルユキたちと合流しているはずだったのに――。

今日、二〇四七年六月二十日午後七時、レジオン（ネガ・ネビュラス）のメンバー六人は、無制限中立フィールドの中央に屹立する《帝城》の深部に囚われてしまったハルユキ／シルバー・クロウと四葉宮謡／アーダー・メイテンの《脱出作戦》を決定した。

ハルユキと謡は、帝城内部で出会った謎のバーストリンカー（トリリッド・テトラオキサイド）の協力を得て、南門から離脱。黒宮殿・親子・タタム・チユリの四人は、タイムリンドを合わせて南門の守護者たる超級エネミー《四神ササク》を牽制し、ハルユキたちの離脱を援護する作戦だった。

実際には、スザクが予想より早く湧出してしまったために、ハルユキと霧は一直線の脱出はできなかった。あわや火焔プレスに焼き尽くされるところを、黒雪姫と楓子が決死の覚悟で飛び込んできてスザクのターゲットを引き受けてくれたのだ。しかし、そのままではレギオンのマスターとサブマスター双方が四神のテリトリ―深部で死に、《無限王》状態へと移行してしまうという最悪の結末を迎える。氣を失った霧をタタムとテュリに託したハルユキは、百八十度ターンして敬愛する二人を助けに戻った。

同時に黒雪姫と楓子を抱え、残された唯一の脱出路たる垂直方向に飛んだのだが、スザクはどこまでも追ってきた。飛行アビリティのエネルギー源である必殺技ターゲッドが枯渇したハルユキは、新たな心象技《光速翼》を発現させて威嚇圈を駆け抜け、星の世界にまで達した。

空気がなくては飛べないハルユキとスザクはそこで停滞したのだが、ブースター型強化外装《タイムスラストター》を持つ楓子が背中に黒雪姫を乗せて突進し、黒の王の凄絶なる心象技《星光速流撃》によってついにスザクを撃破。《四神相図》の治癒能力によって止めを刺すまでには至らなかったものの、ハルユキと黒雪姫、楓子はスザクのテリトリ―から生還した。

六人はかたぐち抱き合い、作戦の成功を喜び合った——のだが、予定ではそこにあるべきアツシユ・ローラーの姿がなかった。彼が合流予定地点に現れなかったと聞いたハルユキは、言い難い胸騒ぎを覚えて単身で捜索に飛び、そして発見、いや目撃したのだ。

アツシユが、オリーブ・クラブによって惨殺される、まさにその瞬間を。

本来は敵対関係にある緑のレギオン（タレート・ウォール）に所属するアツシユが、ネガ・ネビユラスの面々と、しかも危険な無制限中立フィールドで合流することになったそもその理由は、彼が己の信念を託けて心意システムの手ほどきを求めたからだ。

アツシユは、今朝の登校前に行った対戦のあと、ハルユキに語った、心意技を身につけて、無制限フィールドで何でもありのバトルをしたいわけじゃない。弟分のアツシユ・ウータンの日を阻まさせるための、たった一撃が放てればそれでいいんだ、と。

そんな彼が合流ポイントに姿を現さなかったのは、待機中に一般対戦フィールドでウータンと遭遇したからに違いない。アツシユはこの機を逃すまいと、ウータンに無制限フィールドまで同行するよう説得、あるいは強襲した。

そしてウータンは、恐らくアツシユの説得を――必死の言葉を受け入れたのだ。自分に取り憑くISSキットを捨て、もう一度バーストリンカーの本道に立ち返ると決意した。二人はこの無制限中立フィールドで持ち合わせ、ハルユキたちネガ・ネビユラスの《帝城脱出作戦》が終了し次第、改めて合流する予定だったに違いない。

しかし、オラীব・クラブたち六人が、アツシユとウータンの動向を察知し、待ち伏せて襲った。

二人のどちらが先に死んだのかは解らない。だが、ハルユキがこの場所に到着した時、アツ

シユはウータンの死亡マーカーを自らの体で抱え込むようにして守っていた。マーカーはその名の通り単なる目印に過ぎないので、アツシユの行為に実質的な意味はないのだが、しかし彼はそうせずにいられなかったのだらう。

二人の死に時間差があったとすれば、当然、六十分後の蘇生にもタイムラグが出る。一方が生き返っても、もう一方はまだ死んだまま。二人はきつと、兄弟と慕う相手が惨たらしく殺されるシーンを、無力な（幽霊状態）で繰り返し見せつけられてきたのだ。

「……………るさない」

ハルユキの口から、再び暖れた声が零れた。

「許さない。殺す。お前らみんな殺す。バーストポイントが全部なくなつて、加速世界から消えるまで、殺し続ける」

全身を駆け巡る絶好零度の熱火は、無限に内圧を高めつつ、解き放たれる瞬間を待ちわびている。怒りも憎しみもその炎に融け、青白く燃えるひとつの意志へと収斂されていく。

「…………それが、お前らの望みなんだろう？ 争い合い、殺し合うのが。その果てに、自分自身と、この世界さえも消し去ってしまうのが。——なら、叶えてやる。オレが、お前らを消してやる」

凶悪な形状のバイザーから漏れるその声は、もう半ば以上ハルユキの声色ではなかった。野獣の猛々しさと禽の冷徹さを備えた何者かの声が、強く井鳴している。

——いや、それだけではない。どこか遠く……ずっと深くで、かすかに響くもうひとつの声。嘆き、哀しみながらも、懸命に語りかけようとする誰かの声が……

しかし、その言葉がハルユキの意識に届く前に、眼下の六人が再び右手を持ち上げた。

六人同時の心意攻撃を刻の一振りで弾かれたというのに、さしたる動揺の気配もない。余裕がある、というよりも、感情そのものが磨滅しかけているようにも見える。

代わりに、彼らの胸に寄生するISSキットたちが、深紅の眼珠にしたたるような憎しみを蒸発してハルユキを睨んだ。六本の腕に、結晶質のオーラが濃くまとわりつく。それらは掌へと凝聚し、先刻を上回る威力を予感させる黒いスパークを細く空中に連ねせる。

ハルユキの視界に、再び攻撃の属性情報と予測軌道が表示された。同じ遠距離心意攻撃だが、軌道が異なる。クリアレッドのラインは、半ばで色合いを薄れさせながら広がり、ハルユキの周りの空間を球状に包んでいる。これはつまり――

「タータ・ショット!!」

まるで一人が六人の口を同時に動かしたかのように、完璧に揃った技名コール。掌から発射された漆黒のビームが、細かい飛沫を散らしながら迫る。しかし軌道は、先刻の攻撃と異なり直線ではない。空中で不規則にうねりながら、それでいて明確にハルユキを目標として殺到してくる。

「……………」

ハルユキは無言で背中の金屬翼を広げると、一気に右方向へと飛翔した。途端、ビーム群もぐうつと急角度に曲がつて追隨してくる。やはり（ホーミング攻撃）だ。最後まで軌道が重なる瞬間がないので、さっきのように、一度の衝撃による防御は不可能。一発を剣で弾いても、残り五発を全身に浴びるだろう。四神スザタとの戦闘で減少した体力ゲージは（僅）の召喚時に全快しているため即死は有り得ないが、ある程度のダメージは受けるはずだ。

大きく左に捻り込むように飛ぶハルユキを、黒いビーム群は深淵じみた隙を放射しながら追ってくる。どれほど高速移動しても、ホーミングビームの軌道が一本に集まれることはないようだ。フルスピードでどこまでも直線飛行すれば振り切れるかもしれないが、それは逃走と変わらない。

ここで逃げるつもりは毛頭なかった。代わりに、ハルユキは翼を広げて急制動をかけ、空中でホバリングすると張り向いた。

六本のビームが、複雑に絡み合いながら肉迫する。地上の六人が、ハルユキの停止を諦めと取ったか、薄く笑いを滲ませる。彼らに呼応するように――ハルユキもまた、玉厚いパイザの下で冷笑した。

右手に剣を握ったまま、両腕を胸の前で組む。儼然と胸を反らし、迫る鉄馬の心臓弾を喰ひ損する。高度約三十メートルに静止したまま、ビームを引きつけ……更に引きつけ。

全身に直撃を浴びるその寸前、小さく喘いだ。

「フランシエ・プリンタ」

ぶんっ！ という一瞬の振動音だけを残し、シルバー・クロウ、いや六代目タロム・ディザスターの姿がかき消えた。ビーム音はロックオン対象を見失い、数秒間もやると逃走してから、あるものはそのまま空中で、あるものは地上の建造物に突き刺さって、どす黒い煙炎を噴き上げた。

その時にはもう、ハルエキは、地上に立つ六人のI.S.S.キッド装着者のほとんど瞬と言つていい近距離で、星界の光芒を振り撒いて実体化していた。

《フラッシュ・ブリンク》。それは、加速世界に災禍の種を生み出した――正確には《七の増設》の六番星《サ・ディステイニー》を、怒りと絶望によつて既いの強化外装《サ・ディザスター》へと変えた古のバーストリンカーが身につけていた必殺技だ。己が体を極小の粒状へと変え、瞬時に遠く離れた場所へと疑似テレポートする。

ハルエキは、そのバーストリンカーの名前すら知らない。密城内で見た奇妙な事が、遠い過去の出来事を断片的な記憶の欠片として残していっただけだ。《彼》がどんな姿をしていたのか、どんな技を使ったのかなど覚えていないはずもない。

なのに《解った》、いや《知っていた》のだ。いまの自分には、その方が使えるのだと。

いきなり至近距離に出現したハルユキを、キツト装着者の一人——くすんだ藍色の装甲と、指先が全て鉄口になった左手を持つデュエルアバターは、さすがに驚いた表情で眺めた。

「……………タ……………」

技名をコールしながら、右手を突き出そうとする。

しかしその手は、ハルユキを簡単でさずそのまま真上を向き、可動範囲を無視して更に後ろへと回転した。少し遅れて、肩のつけ根を馬すんだ藍色のラインが走る。腕はその線で臭気なく胴体から離れ、ガシャンと騒々しい音を放って隠蔽ステージの地面に転がった。

ハルユキが、右手の大剣を超高速で抜き打ち、敵の腕を断ったのだ。

先刻の（フラッシュ・プリンタ）といい、本来ならば使えるはずのない技術だ。ハルユキはタタム——シアン・パイルと違い現実世界で剣道を学んだこともないし、加速世界ではずっと著手での格闘戦を専門にしていた。剣型強化外装の振り方はおろか、振り方すら知らない。

だが、自分に何が起こっているのかなど、ハルユキにはもうどうでもよかった。ただ、眼前の（敵）どもをばらばらに切り刻み、この世界から消し去りたいという強烈な衝動だけが意識を満たしていた。

暗い藍色のアバターは、地面に転がる自分の右手をしばらく眺めたあと、ついにフエイスマスタをそこはかない懐えに握りしめた。

「なんだよ、お前……………なんなんだよ、その力は……………」

ゴーグル状の丸いレンズが嵌るマスクから、そんな声が漏れる。ようやく受傷の痛みが追いついてきたらしく、左手が右肩の傷口をぎゅっと押さえる。彼若者の動機と苦痛を映してか、胸の観球——ISSキットの光までも不規則に揺らぐ。

だがその時、後方に立つ他の五人のキットが、ごくわずかな時間差をつけて赤々と輝いた。エネルギーが伝播したかのように、褐色アバターの胸のキットも強烈な観光を取り戻す。とうやう彼ら六人は、タタムの言葉にあつた《同一集団》に属する者たちだ。ISSキットがリシタしているということは、複製体として遺伝的に近い、つまり《息子》や《兄弟》だということ。とはいえ彼らを繋ぐのは単なる一時的な利害の一致であつて、それは《絆》と呼べるようなものではない。同じ集団の一員であるはずのブッシュ・ウータンまでも容赦なく狩つたのがその証だ。

絆……………。

その言葉を思い浮かべた途端、ハルエキの喉いところが鋭く疼いた。

遠てついた暗闇に、仄かな陽光がひと筋射し込むような感覚。誰かの声が、ずっとずっと遠くでこだまする。

——もいだして……あなたにも……いせつな絆が……るはず……………。

しかし直後、再び噴き上がった圧倒的な怒りが光と声を遠ざけた。青白く燃えるブリザードが荒れ狂う感覚に身を浸しながら、ハルエキは眼前の褐色アバターに喚びかけた。

「いまここで消えるお前等に……名乗る意味なんかない」

「……………調子に……来るなよ……」

レンズの裏の両眼が、赤く底光りした。胸のISSキットも、他の五人のキットと同期して心臓のように脈打っている。通常対戦フィールドの二倍に拡張されているはずの痛みも、もう感じていないらしい。

褐色アバターは、傷口から離した左手で小さく合図した。途端、五人が素早く動き、ハルユキを取り囲む。どうやら褐色が彼らのリーダーのようだが、片腕を失った今、威力的な主軸は他の誰かに変わったはずだ。次の一撃でそいつを潰すと機械的に判断し、ハルユキは体を回転させようとした。

だが、不意にがくんと足が停まる。見下ろすと、いつの間にか足許はでらでらと光る緑色の液体に浸されており、そこから二本の手が伸びてハルユキの両足首をしっかりと掴んでいる。

まるで《幕端》ステージの地形効果《移動阻害》だが、これは違う。手を生み出している液体は、左側に立つ一人のデュエルアバターの両腕が溶けて流れたものだ。細身のアバターは、ハルユキと眼が合うと、シンブルな箱形のマスタをニヤリと笑わせた。オリーブ・グラフ――

ハルユキは、右手に下げた大剣の切っ先で、自分の足を驚かす手を無条件に突いた。だが鋭い金属はとぶんと抵抗なく沈むだけで、ダメージを与えられた様子はない。どうやらこの

状態では、対象を適まじい握力で握えつつも物理攻撃は無効化しようとした。事前に攻撃予測表示が出なかったのは、視線を褐色アバターにのみ集中していたせいだ。

捕縛されたハルユキを、残り五人は等間隔に取り囲むと、きっちり揃った動きで左腕を持ち上げた。固く縛られた拳を、どす黒い結核質のオーラがぶ厚く覆う。

「タタ……お前のポイントも、一点残らず取り取ってやるよ」

褐色が、乾るような声で言った。

今度こそ、視界を文字列が横切る。(攻撃予測／心意攻撃 威力拡張／感測エネルギー消費感度／30)。同時に表示された赤い軌道予測ラインは、五方向からハルユキをまっすぐ突き刺している。

左拳を高々と振りかぶった五人は、いつせいに黄ダツシユしながら異口同音に叫んだ。

「(ターゲット・ブロー)!!」

闇をまとったストレート・パンチが、仮想の大気を焼き焦がして放たれた。いかに(威力)の防御力が高いと言っても、威力拡張型の心意技を五発同時に直撃されれば相当のダメージを受けるだろう。しかしハルユキは、迫る拳を冷ややかに見詰めた。心意によって強化されているのは攻撃力だけで、パンチのスピードは初心者に毛の生えた程度のものだ。赤黒スナイパーのライフル弾を避けるための特訓を積んできたハルユキにとっては、欠伸が出そうなほど遅い。今度も、たっぷりと引きつけ――双方のオーラが接触する寸前、バイザーの下で、呟く。

——フラッシュ・プリンク。

低い振動音だけを残し、黒雲のアバターはその場からかき消える。ハルユキの両足を蹴んでいたオリーブ・ダラブの拳が、むなしく空気を握り壊す。

直立した姿勢のまま後方に三メートルほど後退し、再実体化。眼前で、標的を見失った五つの拳が、もはや引き戻すことも叶わずに思ひ切り激突した。

天地を引き裂くような衝撃音。濃黒の暴風が吹き荒れ、視界を一瞬覆い隠す。押し寄せる高密度のエネルギーストームを、しかしハルユキはわずかに頭をそむけただけでやり過ごした。

すぐに回復した視界に映し出されたのは、地面に転がり低く叩く五人のデュエルアバターだった。全員の左腕が、肩口からごっそり消滅している。傷口は引きちぎられたかのような有様で、痛みは鋭い刃で斬られた時とは比較にならないだろう。

「……………そんな」

足音と声を上げるオリーブ・ダラブには限もくれずに、ハルユキは数歩移動すると、倒れている一人の胸を右足で踏み付けた。赤褐色の装甲を持つ、六人のリーダー格。しかし、両腕が部位欠損したいま、(タータ・ショット)も(タータ・ブロー)ももはや使えない。

声も出せずに両眼のレンズだけを明滅させる相手へと、ハルユキは低く囁きかけた。

「同じ手を、二度喰らうなよ」

目を改めての再戦ならばまだしも、一度の対戦中に同じ戦術——この場合は(フラッシュ・

プリンク」による直前回避——に二回も引つかかるなど熱の骨頂だ。これまでハルユキが鎧を削ってきたライバルたちなら、最初のビーム回避を見ただけで技の性質と能力を把握し、即座に対応してきただろう。もちろん、アツシュ・ローラーも。

手軽に得た方に溺れ、対戦のイロハも忘れたような煩らに、数を待みに狩られたアツシュはさぞ無念だったに違いない。そう考えた途端、再び胸がずきんと疼くが、そんな感覚すらもすぐに無明の怒りへと置き換わってしまう。

すぐ近くで、蘇生時間待ちの《幽霊状態》に置かれているアツシュ・ローラーの眼に、自分がどう映っているかを考えもせず、ハルユキは鋭い鉤爪を備えた右足に力を込めた。

足裏で、褐色アバターの胸に寄生するISSキットが激しく脈打つ感覚。同時に、アバターの口から、今度こそ明確な悲鳴が迸る。

「ぐあて……カ……ハッ……」

失った両腕で地面を掻こうとするかのようにじたはたとしたが、《鋼》が持つナイフ状の鉤爪は装甲に深く食い込んで外れない。ついに角張った装甲が放射状にひび割れ、鮮紅色のライトエフェクトが空中にしぶく。

怒りに駆られ、残虐な手段で敵の体力ゲージを削りつつも、ハルユキは意識の一部で、独立したプロセッサのようにデジタルな思考を巡らせた。

この状態で、ISSキットを道義的に破壊することは可能だろうか？ もし壊せれば、その

時何かが起きるだろうか？

先に見たとおり、ISSキットは不可視の《回路》により相互リンクしている。だがその接続は、端末であるキット同士が直接繋がる《ピアツーピア型》ではなく、中央集権的な《クライアントサーバー型》だ。キットが破壊された瞬間、何らかの信号のようなものが、加速世界のどこかに存在する《キット本体》に送信される——というようなこともあり得るのではないか。

足裏でISSキットの接続を感じながら、ハルユキは容赦なく右足を踏み込んだ。

「ダハアアッ……や、やめ……ダ……アアアアッ!!」

耳障りな悲鳴と、デニエルアバターの胴体が粉々に割れ砕ける異様なサウンドが同時に響いた。ハルユキの足の左右で、上半身と下半身に分離されたアバターは最後の絶叫を迸らせようとしたが、一瞬早く体力ゲージがゼロになったが、全身から朱色の光を放ちながら細かい欠片へと砕散した。

あまりにも酷いやり方で屠った相手の《死》を、ハルユキは冷ややかに観察した。シルバー・タロウの右足は、確かに褐色アバターのISSキットを踏み抜いたはずだ。だが、削減エフェクトや必殺技ゲージの加算量から見て、強化外装の破壊現象は起きなかったと見られる。つまり、通常の物理攻撃では、たとえISSキットをピンポイントで攻撃しても減少するのは相手の体力ゲージだけで、キットそのものは破壊できないということだ。

無機質な思考を漂らせるハルユキの右側で、左腕を吹き飛ばされた敵の一人が、ようやく立ち上がりながら短く叫んだ。

「……いったん引くぞー（ココア・クラッカー）は捨てていくー」

ココア・クラッカーというのが、ハルユキに踏み殺された銀色アバターの名前だろう。リーダーを捨てる、などとあっさり口にするのがいかにも急進集団らしい。ハルユキの正面で立ち尽くしたままのオリーブ・クラブを除く四人は、領き交わすやいっせいに南へと走り始めた。明治通りの先にある渋谷駅の横断ポイントから脱出するつもりか。動かないオリーブは、視線の向きからして、アビリティを再使用するためのゲージが貯まるのを待っているようだ。

全速力で走り去っていく四人を、ハルユキは立ったまま眺めた。しかし見送すつもりは毛頭ない。握っていた剣を近くの地面に突き立て、空いた右手を左手と同時に持ち上げる。鋭い五指をいっばいに開き、逃げる四人のうち両サイドの二人を掌で壓迫。素早く手首を返す。

キシユブ、というようなかなかな圧縮音を伴って、銀色の小さな光が掌の下部から放たれた。空中にさらさらと銀色の尾を引きながら、数十メートル先を疾走する二人を銃撃じみたスピードで追う。たちまち追いつき、背中の装甲に見事命中。乾いた金属音が軽く響いたものの、逃げる二人はふらつきせずそのまま走り続ける。ダメージはまるで受けていないようだ。だが――。

ハルユキが小さく腕を引くと、重い抵抗感が生まれると同時に、彼方の二人の足取りが乱れ

た。たたらを踏み、それでも懸命に地面を蹴ろうとするが、体は前に落ちない。やがて後ろに傾き、足底が路面から離れ、高い喚き声を上げながら空中を一直線に飛んでくる。正確には、ハルユキの両手から放たれた極細の鋼線によって有無を言わさず引つ張られているのだ。冥極の鎖に移められたアビリテイ、《ワイヤー・フック》の方だ。

あつという間に元の場所まで引きずり戻された二人の背中は、ハルユキは両手の腕息を根元まで突き刺して固定すると、そのまま高々と持ち上げた。

「お……下ろせ………」

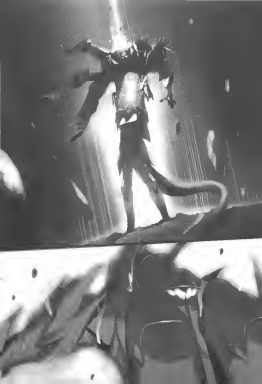
「嘘だつ、ISモードも使わないで、どうしてこんなパワーがっ………」

ピンに刺された昆虫めいた動きで暴れる二人の声は、ハルユキにとってはもう耳障りなノイズでしかなかった。両手にイメージを集中し、抑鬱強く発声。

「（レーザー・ソード）」

ズシユウウウッ!! と重々しい振動音が地面を揺らす。《冥極の鎖》をまとったシルバー・クロウの両手から、心意の刃が長々と伸び、揺らえた廢物たちを貫く。しかしその剣は、本来の白銀ではなく、宇宙の深淵を暴れさせる濃黒の逆剣光に染まっている。

クリティカル・ポイントである心臓——どころか胸郭全体にこっそり大穴を開けられた二人のデュエルアバターは、凄まじい攻撃力の余波によって宙に一メートル以上も浮き上がり、そこで辞けた。



二色の死亡エフエクトを照準の銃甲で反射しながら、ハルユキは両手を下ろした。バイザー越しに見舞える先では、残る二人の敵がいつそのスピードを緩り出して離脱していく。距離はもう百メートルを超えよう。

もちろん、背中の翼を使えば容易く捕捉できる。しかしハルユキは、代わりに地面から大剣を抜くと、腰を落とし、右肩の上で刀身をいつばいに引き絞った。

鋭利な剣先で、二人を精密に照準する。シルエクトはもう豆粒以下だが、(眼)が視界に重なった追加レイヤーの効果か、解像度はまるで変えない。冷静にタイミングを計り、前後して走る二人の体がひとつに重なりかけた、その瞬間――。

「(レーザー・ランス)」

技名コールと同時に右手の剣を思い切り前へと突き込む。刀身を取り巻いていた闇のオーラが、そのまま鋭い輪へと変じて宙を駆け回る。この技の原形となった黒の王フラタタ・ロータスの心意技(奪命撃)とはほとんど同一と言ってもいいほどの攻撃モーションだった。それを意識することもなくハルユキは細めた両眼で技の結果を見守った。

明拍通りの速か技方、盲探取の下へと姿を消しつつあった敵二人の背中を、心意の軌は容赦なく串刺しにした。今度もまた、体の真ん中に大穴を開けられたアバターたちは、まるで自分何が起こしたのかを気付いていないかのようにそのまま数歩走り、やがてよろけ、かすかな破砕音と消滅光を留めて身を散らした。

ゆつくりと引き戻した剣を肩の上に担ぐようにして、ハルユキは最後に残った一人——強化能力者オリーブ・クラブを見やった。

彼と対峙するのは初めてではない。三日前の月曜日の放課後、(烽火の巫女)アーダー・メイデンと共に格闘エリアでタッグ対戦をしたおり、彼女が相手に選んだのが、偶然マッティングリストにいたブッシュ・ウータンとオリーブ・クラブのコンビだったのだ。

あの時、ハルユキはISSキットを起動したウータンに手も足も出なかったが、メイデンは同じく闇の心意を操ったはずのオリーブを完全なるノーダメージで退けた。もちろん、元ネカ・ネビュラス(四元素)たる彼女の實力もあろうが、恐らくそれだけではない。きっと、何か圧倒的な(相性の差)が存在したはずだ。

一切の感情を交えず、冷静な思考のみを展開するハルユキのすぐ近くで、オリーブは相変わらず逃げるでもなく立ち続けている。余裕があるのではない。ハルユキのことを伝説の破壊者(クロム・ディザスター)だと認識しているのかどうかは定かでないが、仲間五人を殲殺した圧倒的戦闘力に驚み上がっているのだ。その前に、謝れたようなオリーブグリーンに光る全身は小刻みに震えている。

「早く……………早く……………」

□許から零れる掠れ声は、自分の必殺技(ケージ)に向けられたものだ。ゆるゆると動作を再開したハルユキと、リチャージ中であろう(ケージ)との間を、視線が何度も往復する。

シルバー・クロウの肩から下ろされた太剣が、ざりつと地面を擦ったのとは同時に、オリブは叫んだ。

「（ヘリビッド・リキンド）!!」

半ば衰退った技名発声。細い長身が、どぶん、と音を立てて一気に溶け崩れた。アバターは完全に影を失い、地面に広がるオリブ色の大きな水たまりへと変化。この状態なら、あらゆる純物理攻撃を無効化するだろう。

しかも移動力は残っているらしく、水たまりはまるでファンタジー系ゲームによく出てくる《スタイム》のような動きで、道路の左右に並ぶ建物の一つへと突進していく。《魔都》ステージの込み入った地形に逃げ込まれたら再発見は困難だ。

だが今度も、ハルユキはオリブを見送すために必殺技を使わせたのではなかった。

緑褐色の水たまりは、真ん中がぽこんと盛り上がり上がっている。よく見ると、その内部には固い球体が包み込まれている。SSキット。まじもの強化能力も、強化外装技いのキットまでは液体に変えられなかったのだ。

そしてこの状況こそ、ハルユキが意図的に導いたものだった。

ぬるぬると遠ざかる水たまりを凝視しながら、ハルユキは大きく息を吸い込んだ。すくなく、肺の中がチリチリ弾けるような感覚が訪れる。たっぷりな溜め——思い切り吐き出す。

固態なヘルメットの口許から放たれたのは、単なる空気ではなく、華々と燃え盛る火焔だっ

た。アビリタイ、《フレイム・ブリーズ》。

何かを感じたのか、水たまりは懸命な動きで建物を目指す。しかし、大気を焼き、気がしなから放射状に散られた炎から逃れるすべはなかった。火焔の息が触れた瞬間、水たまりはこつと音を立て、瞬時に燃え上がった。

プレスはすぐに拡散して消えたが、水たまりを包む炎は消えない。まるでそれ自体が可燃性の物質でもあるかのように――いや、事実そのとおりなのだ。オリーブ・ダラブが我が身を委しさせた液体は、水ではなく《油》。アーダー・メイデンに完結勝ちされたのは、《炎》との相性がとてつもなく悪いからだ。

液体となつても、体感覚は消えないのだろう。激しく燃える油の塊は、右へ左へと滅茶苦茶に跳ね回っている。ハルユキはこの無制限中立フィールドで、何度か《四神スザク》の火焔プレスを浴びかけたが、熱感はいくらにもリアルだった。あの感覚を継続的に味わっているのなら、その苦痛は耐え難いものだろう。

だが、今のハルユキには、《熱》の苦しみなどどうでもいいことだった。ついにもがく氣力すら尽きたのか、動かなくなった水たまり改め油だまりに歩み寄り、ハルユキは無条件に手を伸ばした。

燃える塊の中に鋭い五指を突っ込み、直径五センチほどの球体を探り当てると、しっかりと握る。ふちふち、と無数の細線がちぎれるような嫌な感度を味わいながら引きすり出したのは、

赤い眼球をほぼ瞬に隠した——ISSキット。

無制限中立フィールドでは、強化外装の扱いが通常対戦フィールドと少し異なる。

まず、一度破壊されると、たとえ所有者が死亡・蘇生しても外装アイテムは復活しない。再び使うためには、一度離脱ポイントからフィールドを出て再度入り直す必要がある。

そしてまた、アイテムの種類にもよるが、本来の所有者が生きている間なら（一時的に奪う）ことも可能だ。奪うには、落とした所を先に拾う、あるいは装着部位を切断する必要がある。いまハルユキが試みたのは後者だ。全身を肢体化させたオリーブ・タラフを火鎗プレスで無力化し、目ドゲージが尽きる前にキットを引きちぎる。これで、システムのな所有者権はオリーブのままだが、使用権はハルユキに移ったことになる。

だがもちろん、自分に装着しようなどというつもりは毛頭ない。

狙ったのは、その逆。

キットを装着したデュエルアバターを攻撃しても、先に装着者の体力ゲージがゼロになってキットそのものは破壊できないことは先に確認済みだ。ならば、まずアバターとキットを分離し、しかるのちにキットそのものを（攻撃）する。

バイザーの下で強盛な笑みを浮かべ、ハルユキは右手に力を込めた。

ナイフのように尖った爪が、眼球のビニールめいた表面に食い込む。途端、ぱちつと音が聞かれ、真っ赤な瞳孔が小刻みに震える。

眼球の後部から力なく垂れ下がっていた血管状組織が剥き、寄り集まってドリル状に突ると、ハルユキの右腕の装甲を突き刺さうとした。本来の主を見限り、ハルユキに寄生して支配しようともいうのか。昨夕のタタムとの対戦でも似たようなことが起きた。あの時は、キットの血管はシルバー・タロウの胸を容れず貫いた――のだが、しかし《史前の鎧》のお厚い装甲は、ドリルを完璧に跳ね返した。

「……………無駄だよ」

低く囁きかけ、ハルユキは右手にありったけの力を込めた。

「ばちゅん！」というおぞましい破裂音、そして異様な金属質の断末魔を響かせて、SSキットは粉々の組織片となって砕け散った。

無制限フィールドでSSキットを破壊すれば、きっと何かが起きるはず。

その予測は裏切られなかった。右手から、ひと筋の赤い光が空へと舞い上がり、遠く高みで九十度方向を変えて飛行し始めたのだ。光は余りにも秀逸で、ザ・ディザスターが視覚を強化してくれていなければ存在そのものにすら気づけなかったかもしれない。

すぐ傍らで、ようやく体力ゲージが尽きたオリーブ・クラブが、本来の人間型に戻りながらその身を散らした。しかしもう眼を向けることもなく、ハルユキは背中の中の眼を広げた。

キットから抜け出た光を追うために離陸しようとした、その寸前――。

ハルユキの視界に、少し離れた場所で寄り添って瞬く、二つの《死亡マーカー》が捉えられ

た。片方は草色、もう片方は灰色。六人のキツト装着者たちに殺された、フツシユ・ウータンと——アツシユ・ローラー。

この場所に駆けつけたのは、二人を救うためだったはずだ。

しかしもう、ハルユキの中で、彼らの優先順位は相当に低くなってしまっていた。代わりに駒を満たすのは、六人ものバーストリンカーを殲滅（せんめつ）してもいっこうに満たされない、破壊（はくわい）と殺戮（ころころ）への衝動（しょうどう）だった。これ以上この場所に留（とど）まっていると、蘇生（そせい）したアツシユとウータンをすら攻撃（こうげき）してしまうかもしれない。

それゆえにハルユキは、己（おのれ）を衝き動かす怒（いか）りの盟軍（めいぐん）をISSキツトそのものに向けたのだ。だが、自分のそんな心の動きすらも自覚せず、ハルユキは身を翻（ひら）した。消滅（しょうめつ）しに、（敵（てき）を倒（たふ）す）
となつて状況を見守っているであろう二人に言葉を投げかける。

「蘇生（そせい）したら……奴（やつ）らが生き返る前に、ポータルから離脱（りだつ）しろ」

軋（こ）む声でそれだけを告げ、ハルユキは、殺戮の舞台となつた交差点から一気に飛び立つた。

《魔界》ステージの青黒い色彩の中では、ISSキットから離脱した赤い光を識別することは容易だった。

遠く、魔界の近くまで垂直上昇したヘルユキは、真東の方向に高速で飛び去っていく発光体を見据え、逃がさない、と呟こうとした。しかしヘルメットの下面から零れたのは、

「クルアッ！」

という紙の唸りだけだった。

極めて強いアオルムに変化した金属翼を全力で震わせる。魔物を追う狂気朝にも似た勢いで、シルバー・タロウ―改め六代目タロム・ディザスターは翼を切り裂き、飛ぶ。

《鎧》召喚直後の凍えたような怒りはいつしか去り、代わりに冷たく硬き上げられた、破壊の意志とでも呼ぶべきものが全身を満たしていた。あるいはそれは、アッシュ・ローラーたちを襲うことを避けるためにヘルユキが無意識的に己を誤解した結果なのかもしれないが、そうとも自覚することも今はできない。

この瞬間、ヘルユキを衝き動かしているのは、一つの決意と二つの知識だ。

決意―「ISSキット破壊者、そしてキットの創造者たちを許してはおかない」。

知識その一——「I.S.R.キットを作り、ばらまいたのは加速研究会の奴らだ」。

知識その二——「災禍の鐘が誕生するきっかけとなった出来事を食んだのは、黒い精層アバターだ」。

精層アバターとはすなわち、対ダスタ・テイカー戦の最終局面に乱入しハルユキたちを翻弄した加速研究会の副会長、ブラッタ・バイスである。中高生とはとても思えない口調と態度、そして恐るべき強度の心意気を操る健敵。更に、頭蓋内の「ブレイン・インプラント・チップ」によって思考のクロックを落とす「減速能力」を持ち、常に現実比一千倍のスピードで時間か流れる無制限中立フィールドに於いて長時間の待ち伏せなどを容易くこなす。

そのブラッタ・バイスが、ずつとずつと皆にひとつの非情な罠を仕掛け、ひとりのバーストリンカーを加速世界初の「黒眼エネミー・キル」でポイント全損させた。その出来事が導いた怒りと哀しみによって、神器の六音星（サ・ディステイニー）はかたちを盗め、黒眼の鐘——「サ・ディザスター」となった。

本来、ハルユキが知るはずのない事実だ。黒眼が生まれたのは、加速世界の黎明期、つまり七年も昔。翻ってハルユキがバーストリンカーとなってからはまた八ヶ月しか経っていない。なのにハルユキは、精層アバターことブラッタ・バイスへの尿きの憎悪と怨嗟が、自分自身の記憶として五体を駆け巡ることを不思議とも思わなかった。

——許さない。絶対に許さない。

——ISSキットなどというものを作ってはらまき、タタムを惑わし、アッシュを傷つけた奴らを。

そして、魔獣（*モンスター*）の牙で何度も何度も………を殺させた奴らを、必ず見つけ出し、殺す。あの日奴らがやったのと同じように、最大の痛みと苦しみを与えながら、ポイントが全て尽きるまで無闇に殺し続ける。

絶滅年度の決意を誓め、ハルユキは赤い発光体を追ってひたすらに飛んだ。

渋谷エリア北部から東へ。青山道りと、その先にある学校らしき広い敷地を一旦に横切る。前方に見えてくる、小さな四角い石がびっしりと並ぶ場所は益々青山公園か。元は無数の墓標の上を、何かに吸い寄せられるように飛翔していく。

あの発光体が、ハルユキに破壊されたISSキットの言わば（コア）のようなものなら、その向かう先に存在するのはきっと（本体）だ。

昨日の深夜、タタムと直結しながら眠たハルユキは、イメージネーション回路を介して謎多き「フレイム・バースト中央サーバー」の内部へと導かれた。

そこで見たのは、加速世界にて保存・演算される全データが織りなす（光の銀河）と、空間の片隅を侵食して蠢く（黒い肉塊）、すなわちISSキットの本体だった。

その世界で、ハルユキはタタムに宿るキットの破壊に成功したのだが、それゆえにもう一度中央サーバーを訪れキット本体を攻撃することは不可能だろうと思われた。しかし考えてみれば

ば、サーバー内にデータとして記述されているということは、ゲーム世界としてのフィールドのどこかにもキット本体はオブジェクトとして存在するということだ。サーバー内部で星座の如く動いていた《七の神機》が、フィールドでは剣や鎧の姿で存在するのと同じように。

そして、ISSキットの本体が秘匿されているとすれば、それは対戦ごとに生成と消滅を繰り返す通常フィールドではなく、永続する無制限中立フィールドのどこかであるはずだ。赤い発光体を追跡すれば、きっと本体へと迫り着ける。その近くに――《奴ら》の誰かも必ず現れる。憎むべきブラック・バイス本人が、あるいはその仲間たちが。

「グルル……………」

抑えきれない唸りが、ハルユキの喉から漏れた。

今。

いまようやく、その時が来ようとしている。

《災禍》として、長い長い年月、何人ものパーストリンカーの精神を移植しながら待も続けた復讐の時間が、奴ら全員的首を刎ね、手足を引きちぎり、ばらばらに叩き潰す。その果てに、何が訪れようとも、完全に理性を失い、あらゆるパーストリンカーを無差別に襲う鬼神と化し、加害世界そのもののすら破壊してしまおうとも。いや、いっそそれこそが、この戦役とした闘争の世界に相応しい終焉なのだ。

すぐ頭上にも厚く濃い被さる黒雲を、背中の翼から放たれるショットウエーブでV字に切り

裂きながらハルユキは猛然と飛翔した。赤い発光体は、ほんの百メートル先を、まるで電撃あるもののように懸命に逃げていく。

その行く手に、ひととき背の高い建築物が姿を現した。魔都スナージ特有の、鋭くエッジが立った飾り柱に囲まれたそのビルは、道路との位置関係からして現実世界の港区赤坂にある複合商業施設、〈東京ミッドタウン・タワー〉だろう。発光体はビルの最上階付近目掛けて降下していくようだ。つまり、あそこに存在するのだ。無制限フィールドに於けるISSキアットの〈物理的本体〉が。

——潰す!!

破壊の意志を全身に漲らせ、ハルユキは飛行速度を限界まで引き上げようとした。

しかし——、その、寸前。

右下方のどこかで、何者かの声が響いた気がした。単なる言葉ではない。技名発声。

「〈光年長城〉」

これまで聞いた覚えのない、冷徹たる岩山を思わせる低くおごそかな男の声だった。同時に、ハルユキの視界を、深い緑色の光が塗りつぶした。

壁。一つ一つが人よりも大きな緑色の十字が無数に出現し、隙間なく組み合わさって、とて

つもなく高く高い壁を作り上げたのだ。上下左右どこまで續いているのか見当もつかず、狂悶（きやうもん）しているとき壁の裏側を飛んでいるはずの発光体を見失ってしまうかもしれない。今は、この壁を生み出したバーストリンカーを殲滅するよりも、発光体の行く先を突き止めることのほうが優先順位は上だ。邪魔物（よまもの）の始末はいつでもできる。

「……ルアツ」

低く吼え、ハルユキは左手に黒い心意の遮断光（てつだんこう）を宿した。飛行速度は一切緩めずに拳（こぶし）を振りかぶり、緑色の壁に真正面から叩き付ける。

黒銀の飛行者と緑色の壁が衝突した瞬間、凄まじい衝撃波（しやうげきは）が発生し、加速世界の天地を大きく揺るがした。

壁は——破れなかった。十字のバースツ群が少しずつ前後にすれながら、まるで水面のように同心円状の波を作って衝撃を吸収し、ハルユキの突撃を受け止めてのけたのだ。いまのハルユキは、スピードだけが取り柄だったシヤバー・クロウではない。（速度）に（力）と（防衛）までも兼ね備えた究極の戦闘体、六代目クロム・ディザスターだ。しかもハルユキは、拳に分厚い心意のオーラまでも宿していた。その一撃を阻んだからには、この隙縫もまた、何者かの心意技であると考えて間違いないまい。

「ダム……………」

背立ちの唸（うなり）声を響らしながら、ハルユキは突き出したままの左拳を引き戻した。装甲及び

体力ゲージにダメージはないが、緑の壁にもヒビ一つ入った様子はない。

翼を広げてホバリングしながら、ハルユキはゆっくりと翼の向きを変え、先ほどの技名発声の音源方向を見据えた。

右――ほぼ真南。首節第三号砲の高架を決んで五百メートルほど離れた地点に、ミッドタウン・タワーと並ぶほど高いビルが屹立している。同じく大規模な複合施設、〈六本木ヒルズ〉のメインタワービルだ。

ビルの屋上は、広いヘリポートになっている。その中央に、並んで立つ二つの人影。片方は高く掲げた左手から、緑色の過剰光を放く連らせている。ハルユキを阻んだ心霊障壁の発生源に違いない。

「……………なら、お前等から先に片付けてやる」

囁き、ゆるりと体ごと向きを変える。追っていた発光体、ISSキットの〈コア〉はもうミッドタウン・タワーのどこかに潜り込んでしまっているだろう。巨大な建築物の中からキット本体を探し当てるのは楽ではあるまいが、いざとなればビルごと破壊すれば済むことだ。二人の邪魔者との戦闘は、全速飛行で消費した必殺技ゲージのリチャージと考えればいい。

右手にぶら下げていた剣を肩に担ぎ、ハルユキは飛行を再開した。

六本木ヒルズ・タワーの屋上は、ホバリングしていた高度からは百メートルほど低かったの
で、移動はほぼ滑空だけで事足りた。両足の鉤爪で硬いタイルを引っ掻きながら、ハルユキは

ヘリボートの北側に着地した。

大規模な防衛用心意技を行使したバーストリンカーをまず見極めようと視線を向けたが、その手前に著早く二人目が割り込んできた。初めて見るデュエルアバターだ。サイズは中肉中背、いまのハルユキと体格的には互角だろう。シルエツトもオーソドックスだが、目を引く点が二つある。

一つは、両手がやけに大きいことだ。しかも、オリーブ・クラブのように手そのものが巨大化しているのではなく、丸く分厚いグローブを嵌めているように見える。そして二つ目の特徴は、全身の装甲色。驕な太陽光を反射する鈍い輝きは、明らかに金属質だ。加速世界に数少ないメタルカラーの一人と見て間違いないまい。

続いてハルユキは、金属アバターの後ろ側で、左腕を空にかざし続けている大柄なデュエルアバターへと視線を移した。

見覚えがある——とどこではない。その色彩、その形状。直接対面したのは一度きりだが、忘れようとしても絶対に不可能なほどの存在感に満ちている。

重量感溢れる装甲板を纏うのは、何にもたえようのないほど純粋な「緑」。四肢も胸板も太く分厚いが、要所は引き締まっているので地味な印象はかけらもない。ひと言で表現するならば「巨木」——いかなる嵐にも小揺るぎせずそびえ続ける、大地の支配者か。

これはどの圧力を持つバーストリンカーを見間違えることなど有り得ないが、しかしハルユ

キは、『家畜の魂』と精神融合していてもなお信じがたい思いだった。

発光体の通跡を察知したからには、この二人はISSキットの製造者、つまり『加速研究会』のメンバーだと判断せねばならない。だがハルユキはこの緑色のアバターを、過日の『七王会議』の席上で目撃しているのだ。職員ではなく、会議の主役の一人として。

一瞬の疑念を捨てきれず、ハルユキが無言で視線を照射していると、不意に緑のアバターが、いままでずっと発光続けていた左腕を下ろした。腕に宿っていた強烈な透刺光が薄れると同時に、視界の隅で空を埋め尽くしていた『長城』も消える。

いや、光は完全には消えていない。アバターの左腕に宿ったまま、四角く広がり実体を得る。出現したのは、まるで巨大なエメラルドの原石を板状に削り出したかのような、ひととき純粹なグリーンに輝く――盾。

周囲の空間を仄かに染めるほどのブライオリナイは、ノーマルな強化外装が持つはずのないものだ。すなわち『神替』。あの大層は、『七星外装』の三番星、『ザ・ストライフ』だ。

もはや間違いない。心念技で地上空を駆け規模の壁を作り出してハルユキの行く手を阻んだ緑色のアバターは、加速世界に君臨する最速者、大レギオン（ダレイト・ウォール）を統べる『純色の七王』の一人――

「……緑の王……ダリーン・ダランデ」

掉れ、軋んだ声で、ハルユキはその名を呼んだ。

「王」と相對しているというブレンツシャーはもちろん存在したが、それを上回る感情が畏れを忘れさせた。全身から黒い炎の如きオーラをたなびかせながら、自分より強一つ以上大きなアバターに向かって問いかける。

「あんたが……悪幕か。I S Sキットを作り、ほらまいてるのは、あんただったのか」

相手がわずかでも鎮くなりすれば、すかさず右手の剣で斬りかかる構えだった。しかし緑の王は、不思議な琥珀色のアイレンズでハルユキを静かに見据えるのみで、一切の反応を露さうとしない。

代わりに瞬んだのは、王の手前に立つメタルカラーだった。

「鉄れ言をッ……」

シンブルな肉筒型だが、それゆえに頑強さを感じさせる頭部を激しく一振りし、ダロープ状の右拳をハルユキに向けて更に引き捨てる。

「シルバー・クロウ……いやタロム・ディザスター、貴様こそ《研究会》の一味だったんだろぅがー。その凄汚い波動光が証明しているー。六王に《一瞬間の進化給予》という温情を与えてもらいながら、その裏でこそこそ動くとは卑劣の極みー。さすが、加速世界最大の裏切り者の《子》だなー」

その台詞が脳内に響いた瞬間、ハルユキの中でチリッと煮く弾けるものがあつた。

こいつは薬には殺さない。そう決意しながらも、思考の一部は白隠化されたデジタル回路の



如く情報を分析する。

この二人は、目の前に立つデュエルアバターが、『冥府の館』を召喚したシルバー・クロウであるとともに認識している。とはいえそれは不忠實ではない。加護世界広しといえども、高空を縦横的に飛行できるのはネガ・ネビュラスの（私）だけだというのはもう初心者ですら知っていることだし、王やその側近ならばシルバー・クロウが『冥府の館』に寄生されているという情報も高得得ているはずだ。何より、ハルユキは今の姿を、先日（ヘルメス・コード縦走レース）の終盤で数千人の目に晒しているのだ。

むしろ、緑の王はともかくとして、伝説の破壊者を目の前にしながら聴き取るところか桃発的な台詞を吐くメタルカラーの胆力を賞賛すべきかもしれない。無論、口に出しては何も言わず、更に悪考を凝らせる。

ハルユキを『加護研究会』の仲間だろうと誤った先の言葉が本心なら、この二人は研究会のメンバーではないということになる。しかしだとすれば、なぜ発光体を追うハルユキの邪魔をしたのか。そしてもうひとつ、どうしても看過できないことがある。城の前、これだけは問うておかねはならない。

メタルカラーの、ヘッドギア状のフェイスマスクを凝視し、ハルユキは問いかけた。

「あんたらが、研究会の一味じゃないって言うなら……どうしてこんな所にはんやり立っている？」

「………どういう意味だ？」

「ここからはんの三キロしか離れていない場所で、つい数分前まで、フアレート・ウォール」のメンバー二人が「SSキット」装着者に何度も殺されてたんだぞ。こんな近くにいたなら……なぜ助けに行かなかった？」

そう口にする間にも、胸を貫かれ五体を四散させるアッシェ・ローラーの妻が厲聲にフラッシュバックし、ハルユキは再び全身を絶対零度の憤怒が駆け巡るのを感じた。抑えきれない吐き声が、バイザーの下から出る、と漏れた。

「……………」

かすかに息を吞む様子のメタルカラーに向けて、右足を一歩踏み出す。バイザーの下から相手の眼を睨め付け、声になるやならすの囁きを投げかける。

「それとも、あんたらのレギオンじゃ、下位のメンバーがどんなに痛めつけられようが、ポイント全損しようが、知ったこっちゃないってわけか？ そんな奴に、誰かを卑劣だとか、裏切り者だとか言う資格があると思ってるのか……？」

薄青い舌の如き言葉を吐くハルユキは、しかし、自分自身の中にもひとつの巨大な矛盾が存在することを自覚していなかった。

六代目タロム・ディサスターとしてのハルユキが望むのは、還か過去に《大切な誰か》を殺した積層アバターすなわちブラッタ・バイスへの復讐と、そのような《悲劇の繰り返し》でしか

ない加速世界そのものの終焉だ。そこには当然、いまのハルユキが大切に思っている人たちの消滅も含まれる。

しかし、(鏡)の内部に残るシルバー・クロウとしてのハルユキは、いまだ自分がこの世界で生きてきたたくさんの(時)を惜し、求めている。だからこそ、親たる黒雪姫を侮辱されて怒りもしたし、アツシュ・ローラーを守らなかつた縁のレギオンの幹部を許せないと感じているのだ。

そのダブル・スタンダードは、ハルユキがいまだ黒箱の體と完全には融合していないという証なのか、それとも強化外装(ザ・ディザスター)自身が本能的に持つ二面性ゆえなのか——。とは言え、そんな猶らさが外面に出ることはなく、ハルユキはいっそう激しくオーラを進らせながらもう一歩詰め寄つた。

鈍い灰色のメタルカラーは、踏みとどまりつつもわずかに顔をそむけ、低く呟いた。

「そ、それは……………今は、大事の前ゆえ……………」

「——レギオンメンバーの命より大事なものなんかない。仲間を守りもしないような奴らは、(加速研究会)以下の屑だ。今……………オンがここで、二人まとめて加速世界から消してやる目」

鋭く呟び、右肩に担いでいた大剣を真横に切り払つた瞬間——。

鈍くメタルカラー・アバターの両眼が、重い振動音とともに光つた。ゆっくり顔を持ち上げ、正面からハルユキを見据える。

「……………お前に……………何が解る。我らが王が……………加速世界のために、どれほどの時間を犠牲にしてきたか……………お前らが気楽に対戦を楽しんできたこの世界を、いったい誰が守り、維持してきたと……………」

と、その時。

今まで沈黙を守っていた緑の王が、動きを見せた。と言っても、一歩退き、大盾の裏で両腕を組んだだけだ。しかしその動作によってメタルカラーは何らかの意思を受け取ったらしく、言葉を切り、再びどしどしと全身を加速らせながら怪いた。やがて顔を上げ、腹の張った態度で言う。

「……………もとより、(又機)たる貴様相手に戦わずに済むとは思っていない。不言実拳、あとは拳で語るのみ」

右足を引き、半身になるや、打って変わって軽やかな足跳きでトトンとステップを踏む。巨大な両の拳を持ち上げ、体の前にくっつけるようにして構える。

「――ダレート・ウォール(六階堂甲)第三座、レベル7(ファイアン・バウント)だ。三日後の七王会議を待たずして、この場で貴様を消し去ってくれろ！」

堂々たる名乗りを受け、ハルユキもヘルメットの所で口を開いた。

だが、「ネガ・ネビュラス所屬、シルバー・タロウ」――と名乗り返すことはできなかった。異常な精神状態にあつても、今の自分にその資格がないことだけは痛いまでに自覚していた。

ゆえに、呪われたアバターネームを、低く聴いた。

「……六代目、〈クロム・ディザスター〉」

その名に呼応してか、全装甲から立ち上る闇のオーラがこうつと勢いを増した。リズムよく上体を揺らし続ける敵メタルカラー、〈アイアン・バウンド〉も、ドロップ状の四撃に降着いオーラを宿して応える。

先の名乗りにあった〈六層装甲〉というのが、旧ネカ・ネビュラスの〈四元素〉に相当するリッター集団の名称なら、眼前のアバターは巨大レギオン〈ダレート・ウォール〉に於いてナンバー4に列せられる強者だ。しかもレベルは、現在のハルエキより二つも上。本来ならば、決死の覚悟で挑んでも勝機が見えるかどうかというほどの実力差がある相手だろう。

しかし今は、相対するアイアン・バウンドを、ハルエキは頼むしいオブジェクト程度にしか思っていないかった。真なる機能的は、〈緑の王〉その人のみ。レギオンの配下であるはずのアッシュ・ローラーを救おうとせず、しかもISSキットの追跡を邪魔したグリーン・グランデへの不信と怒りは、首を落とすすには取まらないだろう。

まずはこの邪魔者を一撃で片付ける。そう決意しながら、ハルエキは大剣の柄に左手も添え、高々と振りかぶった。切っ先が頂点で停止し、動きたそうとした、その寸前――。

彩度の落ちた視界を貫く、鮮やかな赤のライン。攻撃手調縦。同時に、攻撃属性情報の表示が開始される。〈攻撃手調／心意攻撃 射程・威力拡張／打撃系……〉。

しかし、小さなテキスト・メッセージはそこまでしか読めなかった。

なぜなら、子機線の出現とはほとんどタイムラグなしに、敵の心意技が發動したからだ。

加減世界でなら、ライフルから放たれた銃弾すら捉えるハルユキの眼にも、視認できたのは青い光の明滅だけだった。アイアン・バウンドの左拳が恐るべきスピードでパンチを連射し、腕のリーチを短える打撃を繰り出したのだ――と理解したのは、顔面に強烈なショックを与えられ、上体を仰け反らせた後だった。

「タ……ハルアッ!!」

怒りの咆哮を漏らし、踏ん張った両足の反動を使って、大剣を強引に振り下ろす。圓のオーラを帯びた刃は、技を出し終えたばかりの敵を頭から両断――

いや、剣が捉えたのは、アイアン・バウンドがハルユキの視界に残した残像だけだ。剣尖は六本木ヒルズ・タワー屋上のヘリポートを深くと切り裂き、込められた威力の余波が数メートル先まで鋭い亀裂を生み出したが、その時にはもう敵は二メートル近くも左に回り込み、再び大拳を閃かせる。

ババン、バン！ というようなリズムを伴う打撃がヘルメットの側面に弾けた。今度は、攻撃子機線が表示される暇もなかった。

――速い!!

《災禍の鎧》の演算能力すら超える、とてつもないスピード。一撃の威力はさほどでもない

が、手数が多いためにハルユキの体力ゲージは合計で五パーセント近くも削られている。鎧の持つ超防弾力を小技で貫いてくるからには明らかに心意攻撃なのだが、今まで見たか受けたかしてきいた技とはどこか勝手が違う。

床面から引き抜いた剣を中段に構え、敵の動きを牽制しながら、ハルユキは通和盛の理由を探り、そして気付いた。

心意攻撃に必ず伴うはずの（技名発声）がないのだ。だから技の仕が真様に速いし、タイミングも取りづらい。耳の奥に、もう遠かな音のように思える、赤の王スカーレット・レインの講義が断片的に聴える。

——心意技はいかに強くイメージを固めるかがキモなんだよ。理想は、元々持ってるアビリティや必殺技と同じくらい自然に出せるようになることだ。あんたさっき、構えてから動き出すまで三秒近く集中してたぞ。あんなん遅すぎるんだよ！ だからまずは技に名前を付けて、その発声を取りがうにしてイメージを確立するんだ……。

途端、ずきりと胸の奥底が疼いたが、ハルユキは無理矢理にその感情を消し去り、情報だけを整理した。

ニコの言葉にあったとおり、心意攻撃に於ける技名発声は、通常の必殺技と違ってシステム的な必須アクションではない。（技の名前を叫ぶ）という行為によって、イメージ・シシンの集中を言わば条件反射として半自動化し、発動を速めるのが目的だ。ハルユキは現在、自然体

で立った状態から、心意技（光線剣）を放ち終えるまで約一・五秒かかる。しかし技名発声なしたと、四秒以上もかかってしまう。

だが、そもそもなぜブレイン・バーストの通常必殺技に於いて技名発声が必須になっているかという点、それが強力な攻撃を放つことに対する「制」限の一環だからだ。後者からの不意打ちができなくなるのはもちろん、相手に攻撃のタイミングを教え、対処する余裕を与えてしまう。

だから、本当は、最強なのは（無言の必殺技）だ。そして、今アイアン・バウンドが行った攻撃がまさにそれだ。技名発声なしの心意技。構えてからパンチを出し終えるまで、せいぜい〇・一秒程度しかかかっているまい。霞の攻撃予測線表示が間に合わないのも当然だ。

――しかし。

いかに速いと言っても、両腕は素手のパンチだ。リーチも心意によって拡張されているようだが、剣の固合いを超えるものではない。敵の初動に斬撃を合わせれば、先に当たるのは剣のはうだ。

中段に据えていた剣をゆるりと持ち上げ、ハルユキは敵の動きに意識を集中した。

踵を浮かせ気味にした固足で、小刻みにステップを踏み続けるアイアン・バウンドの動作は先読みしづらい。だが、いかに技名発声をキャンセルしていいようとも、心意技の発動に伴う過剰光の増加だけは隠せない。

「……………シッ！」

鋭い呼吸音。同時に、敵の左拳を包むオーラが強く光るのをハルユキは見た。

カウンターのタイミングは完璧だった。アイアン・バウンドのパンチが放たれる寸前、ハルユキは大剣を振り下ろしていた。相手の拳は届かないが、剣の切っ先はきりきり届く間合い。

《魔導》ステージの構造特すら容易く切り裂く威力を秘めた刃が、敵のヘッドギア型マスクを切断する——はずだった。だが。

アイアン・バウンドは、ハルユキの経験的には有り得ない動きで、尾を残したまますうっと上体だけを後傾させた。必殺の刃は、チッ——とかすかな火花だけを生んで真下に流れた。

フェイント。

敵は、左のパンチを出すと見せかけ、ハルユキの攻撃を誘ったのだ。まんまと誘い出された剣を、体を傾げる動作だけで躲し、直後、深く踏み込むや否や右拳をまるで大型ライフルの弾丸の如く一直線に撃ち出した。

今度もまた技名発声はなかった。しかし、分厚いオーラをまとった渾身の右パンチは、剣を振り終えた瞬間のハルユキの顔面を痛烈に撃ち抜いた。

ヘルメットが丸ごと粉砕されてもおかしくないほどの衝撃だった。そこまでのダメージを危うく回避できたのは、ハルユキは反射的に両手で自身のバクスタストをかけたからだ。それでも、銃弾の瞬間は視界が真っ白に染まり、首がぐんと後ろに折れた。パンチの威力と

自身の後退方によって、ハルユキは仰け反ったまま十メートル以上も吹き飛ばされた。

「ダルト………」

怒りの咆哮を漏らしつつ、両足の齧爪を踏ん張って転倒を堪える。

一瞬の静止を経て、真上を向いた顔を引き戻すと、ヘルメントのバイサーに入った竜巻から細かい金属片がばらばらと零れた。マクマの如く噴出しようとする発作的な怒りをどうにか制御し、ハルユキは低く囁いた。

「……………その技は……ボクシング、か」

視線の先で、突き出したままだった右拳を滑らかに引き戻したアイアン・バウンドは、再び両手を口許にぴたりと構えつつ睨いた。

「そうだ。ボクサー系のハーストリンカーはほとんどいないから……初見での対処は難しいだろう」

その言葉は事実だ。ハルユキは、これまでボクシングの技術を操るハーストリンカーと対戦したことは一度もなかった。

打撃攻撃に特化した両手を持つ、青糸の《隙り型》は数多く存在するし、何度となく戦ってもある。しかし、ボクシングというスポーツの技術をこれほどのレベルで身につけ、またデュエル・バターの形状も完全なるボクサー型、という相手は初めてだ。恐らくは、生身のプレイヤーも現実世界でボクシングを練習しているのではないか。そう考えなければ、恐るべきス

ビードで連打される左パンチ——つまり「ジャブ」、流れるように体を反らす防衛——「スウェーパツク」、そして「一撃必殺の右パンチ——「ストリート」の完成度は説明がつかない。

フルダイフ型のVRゲームでは、生身のプレイヤーが持つ能力すなわち「フレイヤースキル」の比重が大きくなるというのは、数十年前から言われていることだ。剣と魔法の世界が舞台のVRMMOで、現実世界では剣道選手だったり暗記力に秀でていたりするプレイヤーが大活躍するといった傾向は、VR格闘ゲームであるブレイン・バーストにも受け継がれている。

だがその、言わば「初期能力ボーナス」は、加速世界のバランスを崩すほどのものではない。理由の一つは、そもそも「運動体系のバーストリンカー」自体がごく少ないことだ。ブレイン・バーストがあくまで対戦格闘ネットワークゲームである以上、そのプレイヤーは必然的にゲーム好きな、つまりはインドア派の子供が多くなる。

もちろん、剣道部に所属するタタムや陸上部のチユリといった例外は存在する。しかし、生身のプレイヤーが身につけたスキルが、常にそのままデュエルアバターに反映されるわけではない。と言うより、そんな例はほとんどないのだ。タタムの「シアン・バイル」は、青糸ではあっても剣ではなく「抵抗」を持って生まれたし、チユリの「ライム・ベル」も別に高速移動型というわけではない。ハルユキととも、種子空華のシルバー・クロウではなく、銃の一つも装備した赤糸に生まれたほうが、FPSゲームマニアの盛衰を活かすはずだ。その不一致こそ、初期ボーナスが対戦バランスにあまり影響しない理由の二つ目だ。

だがそれでも、ごく稀に、生身のプレイヤーの知識・経験・能力をそのまま反映したデュエルアバターが生成されることがある。そのようなアバターを尊称して――

「……（完全一致）」

敗れたハルユキに、アイアン・バウンドはもう一度頷きを返し、続けて言った。

「だが、貴様が俺に勝てないのは、それだけが理由ではない。グレート・ウォールではな……この数年というものの、《冥府の館》を研究し尽くしてきたんだよ。次こそは、好き勝手に暴れさせることなく、加速世界から完全に消し去るためにな」

「……………研究、だと…………？」

「そうだ。残念ながら、半年前に新宿以北にのみ出現した《五代目》は、六大陸オン間の相互不可侵条約が存在するゆえに接触できなかったが……六代目、貴様は逃がさん。予定では賞金首登録まで待つはずだったが、ここでもうして遭遇したからには、討伐を躊躇う理由もないな」

余計なつぶりにそう言つてのけるアイアン・バウンドを、ハルユキはひび割れたバイザーの下から冷ややかに見詰めた。

いかに《完全一致》のボクサータイプだろうと、そうと知れば攻略法は無數にある。というより、ボクサーだと認めた時点で、せいぜい六メートル――ボクシングリングの一回の長さ――までの近距離戦にしか対応できないと察知しているようなものではないか。その距離でど

れだけ速からうと、それ以上に離れれば——あるいは近寄れば、能力を封じるのは容易だ。

まずは捕まえる。あとは心意の側で串刺しにするなり、いつそビルの縁から地上に投げ捨ててやればそれで終わる。

「……………なら、その研究とやらが、まったくの無駄だったと教えてやる」

唾きかけ——ハルユキは、素早く左手を前に突き出した。

五指を開いた掌を、ぐんつと後ろに倒す。手首のつけ根から、かすかな音とともに放たれる銀光。一度突き刺さったが最後、決して外れない《ワイヤー・フック》だ。

これは本来、五代目ディザスターこと《チェリー・ルータ》の固有アビリティである。それを、初代の技《フラッシュ・プリンク》や二代目の《フレイム・ブリーズ》同様に鋼がコビーした。使用するためには鋼と極限の深度でシンクロする必要があるが、今のハルユキはその深みに達している。過去のディザスターの力が使え、それこそが六代目最大の力だとすら言えるかもしれない。

つい先ほど、アイアン・パウンドは「五代目とは接触していない」と口にしたので、ワイヤー・フックという技そのものを知らないはずだ。銃弾にも等しい速度で飛来する、しかも視認も難しいほどに小さいフックを初見で回避するのは、絶対に不可能——

カアアアンリ という乾いた金属音が、大木本ヒルズ・タワーの壁上に響いた。

そしてハルユキは見た。シルバー・クロウをも含む無数のアバターに対して猛威を振るった

究極の特殊技（ワイヤー・フック）が、アイアン・パウンドの丸い左肩に命中しながら、空しく舞ひ下るのを。

「——！！」

息を呑んだ時にはもう、熟練のボクサーは、恐るべき突進速度で距離を詰めてきていた。胸元に構えられた両のドロップが、同時に鮮やかな青に輝く。

「（突進乱舞）！！」

今度こそ、技名が鋭く発声された。

無数の拳が、視界全てを覆い尽くした。左から放たれる、マシンガンのようなジャブの嵐。その合間に右から連なる、ライフル弾じみたストレートや大銃の如きフック。それらの総数——おそらく秒間十発以上。

ガードを固める余裕すらなかった。上半身の至る箇所（オビ）に強烈な打撃を加えられ、ハルユキは無様に頭と胴を上げた格好のまま、空中に数十センチも浮かされた。反撃も移動もままならない、完全なる硬直状態。

仰け反るハルユキの懐に、青い残像を引いてアイアン・パウンドが滑り込んだ。一瞬体を沈め、右拳に、これまでに数倍する密度の過剰光を宿す。決めの一撃が来ると本能的に悟り、ハルユキは懸命に金網裏を暴動させようとした。だが巨大化した真は反応がわずかに鈍く、ようやく機力が生まれかけた、そのタイミングで——。

戦艦の主砲めいた右アッパークットが、無防備にさらけ出されたハルユキの頭を完璧に突入、青い軌跡を描いて撃ち抜いた。

急襲を機こそぎ刈り取られるほどの衝撃に見舞われ、ハルユキは四肢を投げ出した格好で空中を漂った。やがて放物線の軌点に達し、数秒かけて落下する。ザシヤアッーと鈍い音を立てて背中から床に激突、一度バウンドしてからそのまま大の字で寝転がる。

視界左上では、一気に半分以下まで持っていかれた体力ゲージが黄色く染まっていた。立たねばと畢うものの、余りにも深い衝撃と、状況を認めたくないという拒絶が思考を埋め尽くし、(零化)寸前の状態にまでハルユキを追い込んでいた。

背後の床面を這って、がつ、がつという硬い足音が聞こえた。次いで、声。

「——それが、貴様らの弱点だ。何代目だろうと関係ない、全てのクロム・ディサスターに共通する……な」

「……弱点……」

低く瞬きながら顔を持ち上げたハルユキは、二メートルほど先で立ち止まり冷然と視線を注いでくるアイアン・バウンドを懸命に睨み返した。

《完全一致》のボクサーは、シンブルな形のアイレンスに、どこか寂れむような色を浮かべて淡々と語った。

「(観)の性能は確かに凄まじい。ことに貴様は、過去の装着者のアビリティすら使えるほど

深く侵食されているようだしな。だが——それは所詮、借り物の力なんだよ。免許を持たない子供が、一千馬力のスーパーカーを運転しているようなものだ。直線コースで簡単にアクセルを踏んでどれほどスピードを出せても、コーナ―はまともに曲がれない。自分のものになっていない力に振り回されているから、対戦の基本中の基本……相手の個性すら眼に入らなくなるんだ」

クローブ型の右手を持ち上げ、そこだけは独立している視座の先で自分の左肩——先ほど、ハルユキの（ワイヤー・フック）を弾いたまさにその箇所をゴツゴツと叩く。

「俺は、メタルカラーの中でも最大級の対戦防御力を持つ（鉄）だ。心意強化すらされていない、あんな小さな鋼が刺さるものか」

——そういうことか。

ハルユキは、握りしめた両の拳を軋ませながら、ようやく己のミスを自覚した。

通常のカラーサークルに属さない金属色のデュエルアバターは、完全一致アバターと同じかそれ以上に稀少だ。ハルユキが知っているのは、自分の他には、青の王の相近（コバルト・ブレード）及び（マンガン・ブレード）、そして——いにしえの時代に災禍の鋼を生み出した、（タロム）の名を冠する誰か。それくらいのものだ。対戦経験となるとないに等しい。

ゆえに、各種防御に秀でるといふメタルカラーの有利を長年甘受していながら、敢て出した時の不利をまるで想像してこなかった。それを油断と言わずして何と云おう。

——いや、それだけではない。アイアン・パウンドに弾かれた（ワイヤー・フック）とでも、板に自ら生み出し最年使い込んできた技だったら、どんな相手には効きづらいかを本能的に理解できていたはずだ。そう、半年前に五代目ディザスターこと（チュリー・ルーク）と戦った折、彼はハルユキに対してワイヤー・フックを使おうとしなかったではないか。あれは悉く、メタルカターの鎧甲には弾かれやすいことを知っていたからなのだ。

借り物の………力。

仰臥したままその言葉をきりきりと囁み囁めるハルユキに、アイアン・パウンドは尚も静かに声を投げかけた。

「——（**鎧の効**）を分析し攻略法を導いた役々は、一つの結論に辿り着いた。それはつまり、ディザスターを倒しうるのは数の力でも超強力な心意技でもなく……（**磨き抜かれた基本技**）だけだ、ということだ。以来、我々グレート・ウォール（**六層鎧甲**）は、膨大な時間を費やして技を磨いてきた。最も標準とする基本技を、最強の心意技を超えた領域にまで高めるために……そして次こそ、王たちの力に縋ることなく、この世界を蝕む（**呪い**）を消し去るために」

ピツ、と鋭く空気が鳴る。パウンドが左ジャブを一発密撃もしたのだろうか、ハルユキの眼にも、雷を貫くオーラの残光しか捉えられない。

「……これまで出現した五人のディザスターは皆、王たちが自ら出現することと処理してきた。（**レベルのサドンデスルール**）のリストを買って、な。しかしそれは、王の衛兵たる我らにと

つてはこの上ない屈辱だ。今度こそ、我々……いや、俺の手で災禍を止めてみせる。悪いが、ここで完全消滅して貰うぞ、シルバー・クロウ。貴様が、生まれたばかりの……最期のデイズ・スターでいる間に」

――最期。

そのひと言が、ヘルメットの内部に強いエコーを呼びて響き渡った瞬間――。

渾えたような感情の大嵐がハルユキの全身に襲来し、次いで背中的一点へと集中した。

――殺す。殺す殺す、絶対に殺す!!

目も眩むほどの憤怒。そのエネルギ―は到底想像の中に留めておけず、背骨装甲の隙間から実体となって迸る。

するり、というような感觸とともに伸張したのは、金属の環節を無数に連ねた、長く鋭い

――《尾》だ。かつて、ヘルメス・コード縦走レースの終盤に、ハルユキが白らの心意で切斷した、六代目ディザスターの象徴的器官。

ナイフ状に尖った尻尾の先端を床面に突き刺し、その反動だけを使って、ハルユキは四肢を投げ出したままじりじりと体を持ち上げた。やがて直立すると、がしやうし錠甲を鳴らして前傾。右手に大剣を握り、左手の袖風を震わせながら、獣の如く吠える。

「タル……ルルル………コロス………ゴロ、ズ………」

五体を駆け巡る殺意と憤怒は凄厲のオーラとなって吹き荒れ、魔都ステージの硬い足場を放

射状にひび割れさせた。先刻の、己が失策に対する省察もどこかに吹き飛び、ハルユキはただ踏鞴に斬り掛かろうと全身を緊張させた。

そんなハルユキに対して——アイアン・バウンドは、まるで聴く様子もなく、静かに両拳をビーカブー、スタイルに構えた。

鋼鉄のグローブの向こうに覗くアイレンズには、揺るぎない決意と覚悟、そして情熱の色があった。

どこかで見た眼だ、とハルユキはわずかに残された理性の片隅で思った。

あれは……そう、半年前に《五代目クロム・ディサスター》の射撃戦に参加した時。激闘の最終幕で、赤の王スカーレット・レインが、自分の《親》である五代目ディサスターことチェリー・ルークを賢罪の一撃によって消滅させる寸前にあんな眼をしていたのだ。力に溺れ、怒りに吞まれ、ただ他人を殺つて喰らうだけの存在に成り果てたチェリー・ルークを……ニコは、無という名の呪いから解放してあげよう……。

そうと意識した瞬間、ハルユキは、右手の剣を高々と持ち上げ——足許に思い切り突き立てていた。

強張る五指を一本ずつ解き、柄から手を放す。そのまま腕をたろりと下ろし、五体に吹き荒れる発作的な怒りを制御しようとする。

不意に、頭の奥で、背立ちに満ちた唸り声が聞こえた。

——何ヲシテイル……。剣ヲ取レ。敵ヲ斬リ裂キ、引キチギリ、カケラモ残サズ喰ライ尽クセ。

語りかけるのは、災禍の鎧に宿る（獣）だ。悠久の時を経てきた鎧の中で、刻み込まれた歴代所有者たちの負の心意が凝集して作り上げた、疑似的な思考体。

ブレイン・バースト中央サーバー、別名（ノイン・ビジュアライザー）では、あらゆるデータは人間の記憶に移植した形式で保存・演算されているらしい。ゆえに、余りにも強い感情が染み込んだオブジェクトは、それ独自の意識と称べるものを持つこともある——とハルユキは以前聞いた。

しかし（獣）は、単なる疑似意識と称ふには余りにも支離的だ。歪んだ声が脳裏に響き渡った途端、再びハルユキ自身の思考が吹き散らさるようになったが、懸命に堪え、心の中で叫び返す。

——黙れ！！

——闇雲に逆上するだけじゃ、あいつには勝てないヨ。オレは……どうしても、あいつに勝ちたい、勝たなきゃいけないんだ！ 仲間や命よりも大事なものがあんなんで言う奴らに、負けるわけにはいかないんだよ！！

するとすぐに、奇立ちに聴れた唸り声が返る。

——ダルル……。ナラバ商売、我ノ力ガ必要ナハズダ。汝等休テハ、小サク無力チ一羽ノ

種^{しゅ}アシカナイノダカラ。

——ああ、そうだ、それは認める。でもな……今のオレじゃ、《^く煙》の力全部は使い切れないんだ。あいつのスピードには、一番練習した技^{わざ}じゃないと対抗できない。だから、際^はつてオレに力を貸せ!! お前も、こんなところで消えたくないだろう!!

それらのやり取りは、実際には言^{こと}語^{こと}化^{くわ}されない思考のリレーによってコンマ一秒以下の時間で行われた。感^{かん}は尙^{なほ}も不満^{ふまん}そうに聴^きつたものの、ハルユキの主張^{しゆじゆ}を是^ぜとしたらしく、アバターの操作^{さくしや}権^{けん}を一部^{いちぶ}明け渡^{わた}した。

もちろん、ハルユキ自身の怒^{いか}りが消えたわけではない。だがそれは、先刻^{さうしやく}までの、何もかもを無差別^{むさく}に焼き尽くすような^{くわ}氣^き運^{うん}の業火^{ごうか}とは少し違^{ちが}った。より鋭^{えい}く研^{けん}ぎ^ぎ上げられた、青白^{せいぱく}いブラスマの如^{ごと}き^{ごと}気^き体^{たい}となつて、アバターの末^{すえ}端^{たん}までを満^みたしているように思^{おも}えた。

鋭^{えい}い^い鉤^{かぎ}爪^{づめ}をまつすく伸^のばした両^{りやう}手^てを、ハルユキは前後^{ぜんご}にびたりと構^{かま}え、腰^{こし}を落^おとした。

両^{りやう}合^がい^いを結^{むす}めようとしていたアイアン・パウンドが、アイレンズをわずかに軋^こめた。剣^{けん}を捨てたハルユキの意^い図^ずを測^{はか}ろうとするかのように、左^{ひだり}シヤブの肘^{ひじ}程^{ほど}きりぎりで足を止め、視線^{しせん}を注^ついでくる。

ハルユキは動^{うご}かなかつた。左手^{ひだりて}を前に、右手^{みぎて}を後ろに構^{かま}えて半身^{はんしん}となり、ただ相手^{あいて}の拳^{こぶし}にのみ全^{ぜん}神^{しん}経^{けい}を集中^{しゆしゆ}する。

どうにか冷却^{れいきやう}に成功^{けいこう}した頭^{かぶ}で考^{かん}えるに、疑^ぎ似^にテレポ^てー^と能力^{のうりき}（フラッシュ・ブランク）によ

る回避、あるいは不意打ちは有効そうに思える。だが、必殺技である以上、どうしても技名発声は必要だ。敵の超高速パンチを見てから叫んでいたのでは到底間に合わないし、先制するにしても、一度見せてしまえば二度は通用するまい。

あるいは、必殺技グージにはほはフルチャージ状態なのだから、背中の翼を使って相手の技の届かない高さにホバリングし、《フレイム・ブリース》なり《光線槍》なりといった長距離技で攻めるという手もあるにはある。しかし、相手はもう六代目ディサスターがシルバー・クロウだと知っているのだから、当然《飛行アビリティ》への対抗策も用意していると思われる。それに、離れた場所で臨撃みをしたまま映像の如き沈黙を守っているタリオン・タランドの存在も忘れられるわけにはいかない。ハルユキが高堂から一方的攻撃を試みたら、蟻の王が再びあの心算技――《先年長城》を發動させることもあり得る。

やはり、王が状況を監視しているうちに、アイアン・バウンドを脱獄せねばならない。もはやディサスターの力があつたとしても途方もなく困難だが、やるしかないのだ。邪魔する二人を無力化し、東京ミッドタウンに突入してスラキットの本体を破壊。近くに加護研究会のメンバーがいればそいつらをすたすたに引き裂くことだけが、いまのハルユキに唯一残された存在意義なのだから……。

「――来い」

園のオーラを全身に溜くまといながら、ハルユキは低く囁いた。

呼応するように、アイアン・バウンドが上体を揺すり、軽くステップを踏み始めた。小刻みなフットワークでリズムを作りながら、じわじわと固合いを詰めてくる。

先に後が言ったとおり、あの左拳からノーモーション、ノーコマンドで放たれる（心意ジャブ）こそが、バウンド最大の武器だ。一撃のダメージはさほどでもないが連打が恐ろしく速く、しかも喰らうとどうしても動きが止まってしまうため、続く右ストレートを避けられない。

もしこれがボクシングの試合ならば、軽快なアウトボクサーに対抗するにはガードを固めてジャブを寄きつつ固合いを詰めるべきなのだろうが、ここは六メートル四方のリングではなく、広大な六本木ヒルズ・タワーの屋上ヘリポートだ。後退するにも回り込むにも充分すぎるスペースがある。防衛に徹しても反撃の機は見えず、逆に体力ゲージを削られてしまうだけだ。やはり勝機は、あの心意ジャブを放ったその光にしかない。

——おい、（眼）。

油断なく右手を構えながら、ハルユキは顔裏で再び眼に宿る思考体へと語りかけた。

——攻撃の予測精度は、オレよりお前のほうが上だ。奴のジャブの（出）だけ、どうにかして見切ってくれ。（察）はオレがやる。

言葉による返事はなかった。しかし、腹立ち紛れながらも確かな了解の唸り声がかすかに響いた——その、次の判別。

アイアン・バウンドの左ドロップを包む逆刺光が、仄かにその厚みを増し。

同時に、ハルユキの視界を、鮮やかな赤いラインすなわち「攻撃干渉線」が貫いた。

反射的に右の手刀を螺旋状に閃かせる。パウンドの心意ジャブは、干渉線とほとんどタイムラグなしで飛んでくる。思惑してからの迎撃は不可能。触れるのは己が本能のみ。

外から内へと円運動をする掌に、ちりつと焼けるような感覚があった。直線攻撃の軌道上にあるグローブに触れたのだ。しかしここで単純に弾いては、すぐに拳を引き戻され、次撃、次々撃を連打されるだけだ。

弾くのではなく――動きに巻き込む。

ハルユキは、掌にアイアン・パウンドのジャブを喰い付けるイメージを集中させつつ、攻撃軌道を左下に逸らした。敵攻撃の、エネルギーではなくベクトルのみに干渉・防御する高等技術、その名も《手法》――あるいは《受け返し》。

ジャブをブロックされるのではなく、逆に喰い込まれるとは、さしもの手練れも予想していなかったのだらう。上体がぐらりと揺れ、ステップが乱れる。

瞬間、ハルユキはヘルメットの中で叫んでいた。

「フラッシュ・ブリンク――」

銀色の鎧を身にまとうアバターは、実体なき粒子となってほんの一メートルだけ移動する。パウンドの体を左右からすり抜け――その背後へと。

体を反転させつつ再実体化したハルユキは、敵の無防備な背中にも右手指先をあてがいながら、

続けて叫んだ。

「——光線劍!!」

パウンドの心意シヤブと比較すれば、ハルユキの心意技は発動に遙かに長い時間がかかる。パウンドが即座に回避行動を取れば、直撃は免れたかもしれない。

だが、《完全一致》のボクサーは、完全一致であるがゆえに反応が遅れた。ボクシングの試合では、《背中への攻撃》はルール違反である。後ろに回り込まれ攻撃される状況は絶対に有り得ないのだ。

もちろんパウンドも、加速世界にそんなルールがないことは百も承知だろう。だが、生身の体にあみつけた反応はそう簡単に消せるものではない。剣道の突き技へのトラウマを持つタタムが、かつてダスタ・タイカーの放った《喉への突き攻撃》に対して硬直してしまったように、ましてやそれが、超短距離テレポートからの背面攻撃などというイレギュラーなものであれば尚更——。

パウンドの陥った利手の硬直、この対戦に於ける最大最後の機を、ハルユキの右手から進めた遠慮の刃が音高く牽ち抜いた。

物理防御に優る鋼鉄の装甲も、音頭離から放たれた心意攻撃は防げなかった。クリティカル・ポイントである心臓を貫通され、アイアン・パウンドは全身を大きく仰け反らせ、苦痛の声を漏らした。

「ぐあつ……………」

しかしさすがにレベルアと言うべきか、一撃死まではせず、必死の黄ダツシユで距離を取ろうとする。

大技の出し終わりで右手を伸ばし切った格好のハルユキは、通常ならばここから追いつ打ちを繋げることはできない。だが今度も本能的な反応で、ハルユキは右の翼だけを全力で振動させた。生まれた運動エネルギーが、攻撃するに足るだけの捻転力をアバターに与える。格闘戦の最中に飛行アビリティによって瞬間的推力を感じ、三次元的な機動を実現するハルユキのオリジナル技、《空中連続攻撃》だ。

背中から肩、そして右腕へと鋭いスピンを伝えつつ、ハルユキは吼えた。

「う……………ああああッ!!!」

ズギヤアアッ!!! という、金属が金属を引き裂く耳障りなサウンドが強く響き、消えた。

夕景の大本木ヒルズ・タワー屋上に、しばしの静寂が訪れた。嗚う二人のシルエットは完全に溶け合い、広大な床面に長い影を引いた。

アイアン・バウンドはだらりと両足をぶら下げ、両脚からも力が抜けていた。その美しい体を支えるのは、背中から胸へ深々と貫通した、クロム・ディザスターの右腕だった。《元凶襲撃》によって装甲に穿たれた傷口を、鋭い鉤爪が再度撃ち抜いたのだ。

バウンドの体に、右の肩手を肩まで埋め込んだハルユキは、不意に耳許で低い声が受せられ

るのを聞いた。

「……………それはどの……技を、修めながら……貴様は、なぜ……闇の力を……………」

そこまですを口にしたところで、《完全一致》のボクサーは、その五体を無数のポリゴン片へと変えて飛散させた。

巨大なエフエクト光が終息すると、ハルエキの足許には、ひとつの小さな炎——アイアン・パウンドの死亡マーカ―だけが鈍い灰色に揺れるのみだった。炎を見下ろし、ハルエキはひび割れた声を投げかけた。

「……………《笑顔》をここまで育てたのは……多分、あんたらの距離と無理解なんだ」
もちろん、聞くマーカ―はもう何も答えはしなかった。しかしハルエキは、続けて小さく呟いた。

「……………この闇は……きっと、誰の心の中にも……………」

その先は、胸の奥に吞み込む。頭の奥で、《眼》が凶暴な唸り声を上げたからだ。

——解ってる。ここからが、本書だよな……………」

思念でそう応じ、がしやりと頭を鳴らして向き直る。

視線の先には、巨大な十字盾を握り、悠然と腕を組み巨人の姿があった。《絶対防壁》の二つ名を持つ殿の王、グリーン・ダランド。眼前で腹心の部下が斃されたばかりだというのに、琥珀色のアイレンズは、あくまで静謐かつ諦めいた光だけを湛えている。

ハルユキが獄と共有する断片的記憶によれば、緑の王は、初代から四代目までのクロム・デ
イザスター全ての清盛に立ち会った唯一の、パーストリンカーだ。

直接攻撃こそほとんど行わなかったが、寛れ狂うデイザスターの攻撃を神器たる大盾（はず・
ストライフ）で堅固に受け止め続け、其間者が攻撃するタイミングを作った。つまり、緑の
王がいなければ、災禍の種がもたらした破壊は確実に二倍、三倍の規模に達していただろうと
思われる。

それはまた、鎧と、そこに宿る（獄）にとつては緑の王こそが最大の仇敵（あいつ）ということでも
ある。ハルユキの青盛に響き馳ける唸り声は、殺意を制御できずに今にも暴発してしまいそ
うな危うさに満ちている。

――抑えろよ。あいつこそ、闇雲に突っかけるだけじゃ勝てないぞ。

ハルユキは獄にそう語りかけ、一歩、二歩と緑の巨人にゆっくりに近づいた。

尚も数滴たにしない王を凝視し、まずは低く言葉を放つ。

「……アイアン・パウンドの言うとおり、あんたらが加連研究会とタルじやないって言うなら
……なぜ、きつきオレの邪魔をしたんだ」

三秒待ったが、やはり答えは返らない。グリーン・グランデは、昨日の（七王会議）の席上
でも最初から最後までついにひと言も発しなかったのだ。

「――と、訊いても無駄だよな。拳で論ってもらうしかないってわけだ」

半ば独り言としてそう呟き、ハルユキは腰を落として陸奥國勢に入ろうとした。
しかし、その寸前――

「――もう少し待てば、理由が解る」

強いエフエクトを帯びながらも、明々と響き渡る声だった。

間違ひなく、先の大規模心意技（光年長域）の技名をコールしたのと同一男の声だ。しかしそれはまるで、空気ではなく足許のフィールドから湧り上がって来るように聞こえたため、ハルユキは眼前のアバターが発したものでどうか確信できなかった。

じつと視線を注ぐが、緑の王は相変わらず微動だにしない。腕を離れたその巨体も、ハルユキから三十度ほど逸れて北東へと向けられている。無意識のうちに王の視線を追ったハルユキは、彼が凝視しているのが、首都高三号線を挟んで屹立するもうひとつの複合商業施設、「東京ミッドタウン」のメインタワーであることを知った。

魔都ステージ特有の鋭利な装飾に彩られた巨塔は、沈む寸前の陽光を受けてあかあかと輝いている。塵上は、ヒルズ・タワーとは異なり針状に細く尖っていて、その周囲を小型の飛行エネミーが周囲している物は、ビルに一切の動きはない。

だが、あの塔のどこかに、加速世界を黒く染みつつある（ISSキット）の本体が隠されて

いるはずだ。それを完全に破壊すれば、今や最低でも五十人以上のバーストリンカーに感染している。端末キットは活動を停止するはずである。

今のハルユキは、別に加速世界を救おうなどとは考えていない。むしろその逆——敵として立ちふさがるバーストリンカーたちを片端から屠り、その結果ブレイン・バースト自体が衰微・消滅してしまつてもはや構わない、そんな破壊的衝動に思考を半ば以上支配されている。だが、まず屠るべきはISSキットを作りばらまいた「加速研究会」だ。キットの一件だけではない。奴らこそ、……を卑劣な國に助け、途轍もない苦痛を与えながら何度も何度も……

「Acceleration」

いきなり、背骨の奥から頭を中心までを高圧電流にも似た激痛が貫き、ハルユキは全身を強烈に震らせた。

今まである程度抑制されていた《敵》が、たかが外れたかのように突然暴走を始める。圧倒的な憤怒と殺意に満ちたその絶叫は、いままでよりビツチがずっと高いため、いつそ泣き叫んでいるかのようにも聞こえる。

《災禍の鎧》を常時包む闇のオーラが、漆黒の火焰となって吹き荒れた。四肢を隠滅く襲う装甲のエッジが刃物にも似て鋭く立ち上がり、手足の鉤爪はより凶悪なフオムへと変わる。背中の尻尾がひとりてに鞭のように飛び、少し離れた場所に突き立ったままの大剣の柄に巻き

付いた。鈍い金属音とともに引き抜き、ハルユキのすぐ目の前に再び突き刺す。

「馬すんだ、しかし鏡のように滑らかな刀身には、屈めた体を不規則に破壊させるクロム・デ
イザスターの姿が映っていた。ひび割れたバイザーの下で暗闇に、本来シルバー・タロウには
存在しないはずのアイレンズが、機々しい真紅の光を帯びて強く瞬いた。」

「グ……ルウウウウ……」

《獣》と、そしてハルユキ自身の唸りが低く、重く轟いた。思考も理性も吹き飛び、頭の中
が煮えたぎる殺意のみに満たされる。負の心意の発作的暴走、《オーバーフロー現象》である
ことは明らかだったが、ハルユキにはもうそれと意識できない。

すぐ近くに立つ緑の王の存在すらも忘れ、ハルユキは背中の中の金屋敷をいっばいに広げた。眼
前の大剣を右手で引き抜き、じやっ——と横に振り払う。東京ミッドタウン・タワーに斬り込
むために、六本木ヒルズ・タワーの屋上から飛び立とうとした——その、寸前。

再び、あの声が響いた。

「待て、まだその時ではない」

「……………ダルフ……………」

殺意に満ちた唸りを漏らしつつ、ハルユキは右を向いた。

緑の王タリン・タランデは、今度こそその重厚なフェイスマスクをまつすぐハルユキに向
けていた。謎めいた琥珀色の眼は、ダイザスターのそれとは対照的にあくまでも静かだ。そこ

には怒りも、焦りも、ましてや畏れも存在しない。ただ、全てを知り、全てを見守る森の古木のように、悠然と立ち統括している。

しかし今のハルユキにとっては、そんな王の態度そのものが看過し得ぬ挑発に思えた。邪魔をするなら――斬り倒すのみ。理姓なる衝動に駆られるまま、右手の剣をゆつくりと振りかぶる。左手も柄に添え、ざり、ざりと全身を振めていく。あらゆる力、あらゆる速度、あらゆる心意を込めた一撃で、敵を両断するため。

もちろんハルユキには、現実世界でも加速世界でも剣という武器を修練した経験はない。だから、先のアイアン・パウンドが看破したように、これは《借り物の力であり技》だ。極限のスピードを競う域いでは通用するまい。

しかし今だけは、ハルユキはもう九割以上ハルユキではなかった。暴走した心意が、《強化外装ザ・ディザスター》を装備したシルバー・クロウを、かつてない精度で《真のクロム・ディザスター》へと近づけていた。

ハルユキは名前も知らないが、三代目ディザスターは青系の両手剣使いだった。その勇名はいつとき、《剣聖》の二つ名を持つ青の王ブルー・ナイトその人とする比喩され、最後は青の王の剣によって加速世界から去った。

その三代目が鎧に残した《技》が、ハルユキの体を動かしていた。これまで使ってきた初代の必殺技《フラッシュ・ブリンク》や、二代目のアビリティ《フレイム・フリーズ》、五代目

の（ワイヤー・フック）と同じだ。鎧、いや鎧に宿る（魂）と強くシンクロすることで、歴代のタロム・ディザスターが強った力を我が物とできる。それこそが、『真紅の鎧』の——いや六代目ディザスターこと今のハルユキの真なる力なのだ。

緑の王も、ハルユキが陥った暴走の深さを認識したようだった。右足を一歩前に出し、今度こそ体全体を正対させる。そのアバターは、巨大な十字架（ザ・ストライフ）に半ば以上覆われているが、ハルユキは構わず全身を弓の如く引き絞った。振りがぶられた大剣の切っ先が、背中を通り越して床面に投し、わずかに突き刺さる。限界まで挽められたアバターが、ざり、ざりと鈍く軋む。その緊張が、限界まで達した瞬間——。

「タ……ル、オオオオオッ!!」

爆音じみた吼え声を進らせ、ハルユキはあらん限りの力を解き放った。

踏み切りの勢いに、両翼による推進力をも乗せて突進する。仮想の天気が圧縮され、弾け、衝撃波となって破い屋上フロアを切り砕く。

十メートル以上の間合いは、近接属性攻撃を行うにはやや広すぎるものだった。しかしその距離を、ハルユキは客に等しい時間で詰めた。それに、どちらにせよタリオン・グランデには最初から回避するつもりはなかったようだった。決闘の三日目を描いて降り注ぐ刃を視認しつつも両足はびくりとも動かず、左手に装備した大盾だけがわずかに持ち上げられる。

強化外装には、装備すると持ち主のアバターカラーと同じ色に変化するものが多く、緑の王

の大盾や青の王の両手剣もその部類だと思われた。しかし、ハルユキの眼前に立ちほだかる盾は、ややもすると王自身の装甲色よりも深く玲瓏としたエメラルドグリーンに輝いているように見えた。

深遠なる大森林の如き存在感とともに屹立する緑色の壁に——ハルユキは、間違ひなく現在出方できる最大の攻撃力を乗せた大剣を叩き付けた。

音や光といったエフェクト効果ではもはや描画することが不可能な、純粹かつ莫大なエネルギーが、盾と剣の接点に生じた。まるで空間そのものが歪み、砕けるかのような異質なハイブレーションが球状にはかり、巨大な六本木ヒルズ・タワーの上半分がさざなみにも似た波紋を伴って揺れた。直撃——。

《魔都》ステージの特性により最大級の強度を与えられているはずのビルが、その半ばから、無数の微細な欠片へと分解した。

足場が消失し、ハルユキとグリーン・タランテは、雨のように降り注ぐオブジェクト片の中心をゆつくりと落下し始めた。しかし双方とも、剣と盾を打ち合わせた格好のまま微動だにしない。せめき合う双方の心意が、本来発生するべき反動や休勢の乱れを上書きし、アバターを固定し続けているのだ。

大盾（サ・ストライフ）から放たれる緑色のオーラは、萌え出でる新緑を思わせる動きで、かつて（スター・キヤスター）の鎧で呼ばれた大剣を包み込もうとする。それを、刀身を取り

圓む濃黒の炎に似たオーラが次々に焼き払うが、緑のオーラも無様に芽吹き、枯れる気配すらない。まさしく大樹——それも、北歐神話にある、九つの世界を支えるという世界樹のようだ。

——世界を、支える。

そんな言葉が頭の片隅を横切った瞬間、ハルユキは、ひとつのイメージもしくは記憶が意識に流入してくるのを感じた。膨大な、余りにも膨大な時間と、その中で無数に繰り返される戦闘。しかし相手はバーストリンカーではない。人ならぬ姿を持つ巨大な怪物、すなわち（エネミー）。

やがて二人は、かつてヒルズ・タワーの上まで分たつた複雑な瓦礫の山に、重い音を立てて着地した。

どちらからともなくオーラが収められ、それを追うように剣と盾も引かれた。発生した破壊の規模に比して、有り得ないほど静かな幕切れだった。気付くと、あれほど荒れ狂っていた怒りの大嵐も嘘のように風き、（獣）さえもが沈黙していた。

「……………あの一撃を、涼しい顔で受けられちゃ、な……………」

低く呟く。その声からは陰々としたエフエクトが傳れ、また言い回しも本来のハルユキ自身の感性が前面に出たものだったが、それを意識することもなく、ハルユキはふわりとジャンプして距離を取った。砂を軽く鳴らして着地し、剣を下ろす。

同じく盾を下ろした緑の王は、ハルユキを見据えたまま、重々しい動作でかぶりを振った。

確しくはなかった、と言いかのように右手で眉の一点を示す。よくよく見ると、上唇の縁が一箇所、ほんの三ミリほど欠けているようだ。そんな傷とも言えないような傷を作っただけで、「お前の勝ちだ」と言われた気がして、ハルユキは思わず小さく苦笑した。

「その暇ごと、あんたを叩き斬るつもりだったんだぜ」

そう口に出しながら、ちらりと周囲を見回す。

六本木ビルズ・タワーは先の激突の余剰エネルギーによって五割近くが分解され、高さが半分になってしまっている。周囲に建っていた付随ビルも、傾いたり、側面が砕けたりしているようだ。

少し離れた砂の上で、鈍い灰色に揺れる小さな炎は、アイアン・バウンドの死亡マーカーに違いあるまい。ビルの崩壊に伴って一緒に落ちてきたのだろう。今頃は、周囲の状況を見守ることしかできない（懸念状態）で、やきもきしながらハルユキとクリーン・グランテの対峙を注視しているはずだ。

戦いの前に、バウンドが口走った、「我らが王が、加速世界のためにどれほどの時間を犠牲にしてきたか」という言葉の意味を、緑の王と直接心意をせめぎ合わせ、相手の記憶を垣間見ることによって、ハルユキはある程度理解できた気がしていた。再び王に視線を戻し、言葉を投げかける。

「……………加速世界に、エネルギー狩りで供給されるポイントのほとんどは……本当は、あんた

が一人で稼いでたんだな」

答へはない。だがその沈黙は肯定の気配を帯びている。

（バーストポイント）は、千人以上存在するバーストリンカーにとって、ゲーム内通貨であり経験値でありそして生命そのものだ。対戦に勝てば増え、負ければ減るが、その他にも各種加速コマンドを使ったり、（ショップ）でアイテムを買ったり、レベルアップ操作をすることによって大量に消費される。

その消費ペースに対して、供給されるポイントは、普通に考えればまるで釣り合っていないように思える。毎月増える新人バーストリンカーの（人数×初期の1000ポイント）を大きく超える量のポイントが月々消費されていることは確実だ。

まかないきれない部分は、ハイレベルのリンカーが無制限中立フィールドに於けるエネミー狩りで支えていることになるのだが、それにしてもなぜそのポイントが加速世界に広く再分配されるのか、ハルユキはずっと不思議に思っていたのだ。

緑の王は、危険なダンジョンに棲息する高次元エネミーを単独で狩り、稼いだ莫大なポイント（ポイント）をショップでカードアイテムにチャージし、そのカードをフィールドに棲息する下位エネミーに喰わせている。カードを喰ったエネミーをいずれ他のレギオンの狩りパータイヤーが倒し、ポータス的に大量のポイントを得る。結果、ポイントは中小レギオンの低レベルリンカーの間にまで浸透する――。

まさしく、巨体に暮えた陽光と水分によって無数の小生命を支える大樹の如き行いだ。

緑の王がそんな無償の奉仕を長年続けている理由は、しかしどれほど考えても解らなかつた。
 「ポイントカード」を吐つたエネミーを狩るのが、緑のレギオン（グレート・ウォール）とは限らない。いや、そうではない場合のほうが圧倒的に多いだろう。つまり王の行爲は、実質的に他レギオンを利するものだということだ。思い返してみれば、ハルエキ自身、かつて参加したエネミー狩りパーティーで倒した怪物が、本来有り得ない量のポイントを吐き出して一同大喜びしたという記憶がある。

「……………なぜだ？」

敵対するバーストランカーにまで、広くポイントを分け与える。その一方で、レギオンの配下であるはずのアッシュ・ローラーやフッシュ・ウータンの命は最優先事項ではないと言う。そんな緑の王の行動基準がどうしても理解できず、ハルエキははそりと訊ねた。

イエスカノーで答えられない問いに、恐らく反応はあるまい。そう予想していたのだが。

「——全ては、『ブレイン・バースト2039』……またの名を『トライアル 巻2』が望みき試行に終わることを拒まんが為——」

沈黙の王がこれまでで最長の言葉を発したことよりも、ハルエキはその内容に——意味はほとんど理解できなかったにせよ——魂を強打されるか如き衝撃を覚えた。

「トライアル……ナンバー、ツー……た……」

「然り。先行した（アクセス・アサルト2038）、後発の（コスモス・コラプト2040）はすでに廃棄されて久しい。#1及び#3に足りなかった何らかの因子を、悉くこの#2は揃えている。その因子が具象化されるまで、世界を閉じさせるわけにはいかない」

「……………」

緑の王が、あくまで静謐な声で言語化した情報は、ハルユキの処理能力を大きく超えるものだった。それでもどうにか要点を三つにまで集約し、胸中で列挙した。

一つ。フレイン・バースト、すなわち加速世界は、《唯一無二》の存在ではない。

二つ。緑の王・グリーン・ダランデは、加速世界の維持、あるいは延命のために活動している。

三つ。グリーン・ダランデは——この世界が存在する理由を知っている。

「……………GM、なのか」

張り詰めた、軋む声で、ハルユキは巨人に問い質した。

「あんたは……あんたこそが、フレイン・バーストの管理者なのか。何千人ものバーストランカーを操り、賭らせ、戦わせてきたのは、あんただったのか」

仮に緑の王がその言葉を肯んじた時、自分がどうするつもりなのかも一切考えないまま、ハルユキは息を詰めて待った。

二秒後——王は、重厚なフェイスマスクを横に一振りし、答えた。

「否」

更に一秒間を空け、続ける。

「……我に与えられた権限は、其方と何ら変わらぬ。この首を落とされれば死ぬし、死ぬばポイントを失う。ポイントが尽きれば、その時は加速世界から永久に消える」

「なら……なんでそんな、他の誰も知らないようなことを知ってるんだ！」

「それもまた否だ。(トリアル #2) の名を知るのは我のみではない。我以外の(オリジネーター)の中には、恐らく我の知る以上の情報を持つ者も存在するはずだ」

「……オリジネーター」

低く繰り返したその言葉は、初めて聞くものではない。四日前の(七王会議)の後、いきなりハルユキの自宅に現れた赤の王ニコが、震え声で口にしたのだ。具体的な意味までは教えてくれなかったのだが、今となれば推測はできる。恐らく——親を持たない、言わば(最初のバーストリンカー)たちを指す言葉だろう。

——おい、(獣)。

ハルユキは、無意識のうちに緊張で鏡に宿る破壊者へと問いかけていた。

——お前を最初に生み出した誰かも、(オリジネーター)だったんだろう？ お前は何か知らないのか？

すると、自然した感いの最中も数分にわたって沈黙を守っていた(獣)が、苛立ったように唸る声が聞こえた。

——ダッル………知ラス。興味モナイ。我が目的ハ破壊ト殺戮ノミ。故モ、眼前ノ敵ヲ屠ルコトヲ考エレバヨイ。

その返事に、ハルユキは危うく苦笑しかけたが、す前で気を引き締める。《獣》は大人しくしているようでも、ハルユキを再び撃つ取る機を数々と窺っているはずだ。いや、それ以前に、今のハルユキはシルバー・タロウではなく六代目タロム・ディザスターなのだから、笑ったりしている場合ではないしそんな機利もないのだ。

——解つたよ。でも、あいつこそそう簡単には打ち取れないのは、さっきの一撃でお前も骨身に沁みたる。それに………なんだか様子が変だ。戦うにしても、その前に情報を取れるだけ取りたい。

そう囁きかけると、《獣》は再び短い唸りだけを返して鎧の奥に引ひ込んだ。

大きく息を吸い、思考を切り替えたハルユキは、もう一度グリーン・ブランドの両眼を監視した。一切の感情を漏らさない琥珀色のアイレンズが、静かに見返してくる。

「——あんたが、何らかの目的で加速世界の寿命を引き延ばそうとしていることと、そのために一人でずっとエネミー狩りをしてきたことは解つた」

そこまでを低く呟いてから、ハルユキは精気を強めた。

「でも………それなら尚更、なんでオレの邪魔をしたんだ。《加速研究会》とISSキットが、この世界を滅ぼそうとしていることは明らかだ。あのビル……《東京ミッドタウン・タワー》に

は、きつと観客の焦点がある。オレの目的は、その焦点を潰すことだったんだぞー」

「言ったはずだ。しばし待てば解る、と」

短く答へ、緑の王は北東にそびえるミッドタウン・タワーを見上げた。ハルユキも反射的にその視線をなぞる。ヒルス・タワーが半分になってしまったため、今は向こうの方が倍も高い。青黒い雲はしんと静まりかえり、一切の活動光景は見られない。

「……もう、じゅうぶん持ったぞ。時間稼ぎのつもりなら……」

ハルユキが言いかけた、その時――

不意に、遠く遠く東の空で、不思議な音が生まれた。無数に重なる鐘の音のような、薄い硝子板が徐々に砕ける響きのような。

視線を四十五度右に回したハルユキが見たのは、魔器ステーションに厚く集れ込める青黒い雲を切り裂いて漂れる、七色の薄網だった。オーロラ……いや、違う。あれは、世界の終わりと始まりを告げる光だ。

「……………(変遷)」

坂くと、緑の王が重々しく頷いた。つまり、王やアイアン・バウンドが待っていたのはこれだということか。

変遷とは、無制限中立フィールドに於いて、《魔器》や《保護》、《原始性》などのいわゆるステーション属性が切り替わる現象を指す言葉だ。変遷が起きると、知られて減少したエネミーは

再編出し、破壊されたオブジェクトは完全修復される。また、当然ながらフィールドの外観や地形効果もがらりと変わり、対人戦やエネミー編りが楽々をまたいでしまうと激しい戦術転換を要求される。

発生する国難はランダムだが、内部時間で最長三日（現実時間四十分）、最長でも十日のうちには起きると言われている。タイムリンドを予測することは不可能なので、グリーン・ドラゴンたちは、長ければ数日間もこの場所で大待ち続けたいということになる。

しかし——なぜ？

ハルユキが彼らの意図を推測しようとする間も、オーロラの機は物凄いスピードで近づいてくる。眼を凝らせば、空から降り注ぐ光の根元では、東京を中心に林立するビル群が瞬時に色や形を書き換えられていくのが判る。

最初の音が聞こえてからはほんの三十秒足らずでオーロラは六本木ヒルズにまで到達し、ハルユキにわずかな圧力を伝えながら、全てを紅色の輝きで塗りつぶした。直後、高速エレベーターのような上昇感が全身を包む。自分の翼で飛んでいるのではない。先ほど半壊したヒルズ・タワーが無数に再生し始めたため、ハルユキたちも元の屋上へと押し上げられているのだ。

上昇が止まり、足が再び硬い床を踏み、同時に、虹の七色が薄れ、消えた。

そのまま西へと突進していくオーロラの壁を見送ってから、ハルユキは振り返りを見回した。

（魔都）ステージの隠れたダークブルーは綺麗に消え去っている。代わりに世界を染めている

のは、濃く濁った赤。地面や建物は全て灰色のタイル張りなのだが、その鮮き目という鮮き目から、じくじくと粘度のある赤い液体——つまり血が染み出し、流れ、そこかしこに溜まっていくのだ。空もまた、夕焼けとは違う毒々しい赤みに満たされている。発生精度のこく低い、

《大衆》 ステージだ。

《魔物》と違つて特殊効果が山ほどある厄介な属性だが、中でも気をつけねばならないのは、《直接物理攻撃で敵に与えたダメージの半分が自分に跳ね返ってくる》ことだ。つまり遠隔型デュエルアバターに越有利なのだが、少なくともこの場に赤糸はいない。

——このステージ、チユのやつが物凄く苦手なんだよな。きつと今頃、ぎゃーぎゃー文句言つてるだろうな。

そんなことを一瞬考えてしまつてから、ハルユキは無理無理に思考の流れを断つた。いまこの瞬間も、遙か北に隔たった壹城南門近くで自分を待っているはずのネ方・ネヒユラスの仲間たちにこれ以上わずかでも悪いを致せば、その瞬間に自分がばらばらになつてしまうような予感があつた。

懸命に心を凍らせながら視線を動かし、緑の王が少し離れた場所まで相変わらずの仁王立ちを続けていくことを確認してから、ハルユキは口を開いた。

「……………それで？ 空濠が起きたから、何だつていうんだ？」

北東に屹立する東京ミッドタウン・タワーは、しとどに虫湧れた外観の他には何の変化も起

きているようには見えない。緑の王がハルユキの接近を妨げた理由は一切判らないままだ。

ハルユキの問いに答えたのは、王ではなく、背後で静かに生まれた声だった。

「……今度も……ハズレだったってことだ」

振り向いたハルユキが見たのは、半は乾いた重灌まりであぐらをかき、力なく肩を落とす銅鉄のボクサーだった。ハルユキに敗れ、死んでからまだ三十分足らずしか経っていないはずのアイアン・バウンドだ。発生するには早い、と訝しく思ってからようやく気付く。(変遷)にはもう一つ、幽霊状態のバーストリンカーを、六十分の発生待ち時間を無視して生き返らせるという効果があるのだ。

無味乾燥な発生待機が半分で済んだというのに、バウンドにはそれを喜ぶ様子はいまるで見えなかった。握りを緩めたドロップを投げ出すように尻に棄せているボクサーに、ハルユキは眉を寄せながら訊ねた。

「ハズレ……？ 今の変遷が、か？ お前たちは……いつたい、何を待ってたって言うんだ？」

「——変遷に、ある程度のバターンがあることを知っているか？」

問いを問いで返され、ハルユキはいっそう顔をしかめる。しかしこの場は白熱し、大人しくかぶりを振ってやると、バウンドはひとつ顔いて続けた。

「デュエルアバターがそうであるように、対戦ステージの各種属性もまた大まかに分類するこ

とができる。(水雪)や(氷塵)ステージは水系、(溶岩)や(焦土)は火系、(原始林)や(腐蝕林)は木系、(魔都)や(鉄鋼)は金系と言ったようにな。そして、それらの言わば自然系ステージの他に、(魔獣)や(魔域)などの暗黒系、(極光)や(霊境)などの神聖系が存在する。ここまでではいいな？」

教師じみた言い様に、ハルユキより先に(獣)が不機嫌な唸りを漏らしたが、そのお陰でハルユキ自身は直立つタイミシングを逃した。無言のまま手振りて先を促すと、アイアン・パウンドはゆっくりとした動作で立ち上がりながら再度口を開いた。

「……通算、同じ大分類に属するステージが二つ続くことはない。そしてまた、地水火風木金暗黒の八カテゴリーの出現率はほぼ等しい。だが稀に、前六つの自然系カテゴリばかりが長く続くことがある。すると、その後に出現する暗黒か神聖系のステージは、属性純度の高い……つまりものすごく邪悪だったり、ものすごく神々しいものになる。他にも細かい法則は色々あるが、大まかに言えばそういうことだ。――俺たちは、長期間のバターン解析によって、今日この時に(魔邪悪)なステージが出現すると予想し、この場所ですれを待っていたんだ」

「……………」なら、目的は達しただろう。この(大罪)より邪悪なステージはもうそうないはずだ。ハズレじゃなくて大当たりじゃないのか」

ハルユキの指摘に、パウンドは軽く頷き、次いで大きく首を横に振った。

「確かにそうだ。だが……これでもまだ足りないんだ。俺たちに必要なのは、暗黒中の暗黒、

この上なく邪悪な……《地獄》ステージなんだ」

「……………」

バーストランカーになつてはや八ヶ月、レベルもろくに届いてもはや新家とは言えないハルユキだが、それでも《地獄》ステージに関しては何度か名前を聞いたことがあるだけだった。特殊効果も見ただ目もおぼろげにしか知らないで暗闇に反応し続けたが、しかしここまでの説明ではどちらにせよ解るのはアイアン・バウンドたちが何を待っていたかだけで、なぜ、については一切語られていない。

「……………」無制限中立フィールドが地獄になることと、お前たちがここからオレの邪悪をしたことに、どういう関係があるっていうんだ」

いい加減苛立ちを抑えるのも難しくなり、ハルユキは足許のタイルから染み出す血溜まりに一歩踏み込みながら問い詰めた。

数メートル先に立つアイアン・バウンドは、口を閉じたままゆっくりと右拳を持ち上げた。今まで閉いていた鋼鉄のドロップを、ぎゅっと音を立てて握り締める。

ハルユキはパイザーの下で両眼を鋭く細めたが、バウンドは別にリターンマツチをしようという訳ではないようだった。左手のドロップを聞いてハルユキを制してから、体を北東五百メートルに屹立する東京ミッドタウン・タワーに向ける。

「……………」これを見れば腹でも解る」

ぼそりと呟き、烟族のボクサーは、あまりボクシングらしくからの奇妙なポーズを取った。両足を大きく開いて右拳をまっすぐ前に突き出し、左手は右腕の肘関節あたりにあてがう。

直後、固く握られたグローブを、強烈に青いライトエフエクトが包んだ。必殺技だ。反射的に身構えそうになるが、側の攻撃手側線は出ていない。バウンドは、息を詰めるハルユキに眼を向けることすらなく、ひたすらに彼方の直撃された巨塔を睨みながら技名を叫んだ。

「――（爆撃拳）!!」

いきなり、ボクサーの右腕が、肘の少し前あたりから爆発した。

いや、違う。分離したのだ。丸いグローブと前腕の一部がアバターから切り離され、真っ赤な炎を噴射しながら飛び去っていく。六代目ティサスターと化したハルユキも、これには少々唖然とせざるを得なかった。正統なボクシングには、というかあらゆる格闘技には絶対に存在しない技だ。

……………あんた、《完全一致》のボクサーアバターじゃなかったのかよ。

と叫びたいのを堪え、すっ飛んでいく拳——あるいはロケットパンチを眼で追う。構えから発動に五秒近く掛けただけあって、技の正統性はともかく素晴らしいスピードだ。純粹な遠隔系である赤の王スカーレット・レインの主権攻撃に並ぶほどの迫力がある。長い煙の尾を引きながら突進するパンチは、あつという間に首都商三号線と六本木の街並みを飛び越え、彼方の東京ミッドタウン・タワーに迫る。

——と、その時。

ハルユキは、屹立する巨塔の、鋭く尖った最上部付近で（何か）が動くのを見た。

途轍もなく大きい——ということしか判らない。正確なサイズも形状も判別できないのは、それがほぼ完全に透明だからだ。ディサスターの超解像力をもってしても、見えるのは尖塔の周りで赤い環境光が微妙に屈折する様子だけだ。

懸命に眼を凝らしていると、知の能力なのか（酸）が氣を利かせたのか、光の屈折が起きている空間の輪郭だけが強調され浮き上がった。薄い灰色に染まるそのシルエットは、人のような鳥のような奇怪なものだ。十本以上ある手足で尖塔をしっかりと握み、やけに丸く巨大な頭を、突進するロケットパンチに向けている……………

「タ……………」

直後、ハルユキは無意識的に全身を弛張らせた。

透明な何かの背中から、広く薄い膜のようなものが左右に広がったのだ。間違ひなく（翼）だ。蓋し澄しは、ミッドタウン・タワーの幅である五十メートルを超えている。全体のサイズは、あるいは帝城南門を守護する超級エネミー（四神スザク）をすら超えているかもしれない。大きく展開された透明な翼が、灰白い光を帯びた。

そして次の瞬間——巨大な頭部の中央から、一条の輝きが進った。

強調されていたハルユキの境界が、一瞬真っ白に焼き付くほどの光度だった。レーザーな

どという言葉で一掃するにはできない、恐るべき熱量を秘めたその輝線は、ビルを打ち砕くべく飛翔していたアイアン・パウンドの右拳を呑み込み——余りにも呆気なく蒸発させた。

そしてそのまま、数メートル下方の六本木市街地に突き刺さり。

わずかな溜めのもと、大願石の微突もかくやという凄まじい爆発を引き起こした。

「く……………」

ハルユキが思わず声を漏らすと同時に、煙の深いところで（獄）もまた低く唸った。充分に離れているはずの六本木ヒルズ・タワーを、再び崩壊するのでとは思えるほどの揺れが舞ったのだ。ハルユキとパウンドが足を踏ん張って堪える先で、緑の王だけは相変わず悠然と立っている。しかしその広い背中にも、ごく小さな緊張が見て取れる。

（透明な何か）がロケクトパンチを調整するべく放った光線は、デュエルアバターに発生可能な威力レベルを果てしなく超えるものだった。爆発が収束した跡にできたクレイターの広さ、深さからも明らかだ。バーストリングカーではない、ということはすなわちエネミーなのだ。だとすればその力は四神に迫る……いや、本体が透明で攻撃タイミングが見切りにくいことを勘案すれば比肩しているときと言えろかもしれない。

しかし——なぜ？（密城）から速く離れた、ただの一ランドマークに過ぎないはずの東京ミッドタウンを、なぜあそこまで強力なエネミーが護っているのか……？

「……………見えたか？」

と、片腕を喪失したアイアン・バウンドがぼそりと呟く声が聞こえた。ハルユキの返事を持たずに続ける。

「奴の固有名は……神獄級エネミー、（大天使メタトロン）。芝公園地下大迷宮のラスボスだ……った」

「メタ……トロン」

ブレイン・バースト以外のゲームやマンかなどで見聞きしたような気もする単語だったが、それ以前の大きな矛盾に氣を取られ、ハルユキは口を開いた。

「地下迷宮の……ラスボス、だと？　——でも、地下どころか、ミッドタウン・タワーの天辺にいるじゃないか……」

「だった、と言ったろう。何着かが移動させたんだよ。恐らく……ラスボスを調教して、な」「ラスボスを……テム。……できるのか、そんなことが……?」

「不可能だ。譯もがそう思ってきたさ。——現実時間で約一週間前、突如あの塔にメタトロンが出現するまではな」

同じようにそう言い、アイアン・バウンドは再び完全に姿を消した（天使）を睨んだ。

「——四大ダンジョンの一つ、芝公園地下大迷宮——固有名（コントラリー・カセドラル）は、正反対の名のとおり、デュエルアバターが特定のパネルを踏むことで内部の真性を百八十度裏返すことができる。神聖系の極致たる（天界）ステージから、暗黒系の極致（地獄）ステージ

へ……そしてまたその逆へ、とな。そのラスボス（大天使メタトロンの）は、通常状態では不可視・即死攻撃・全属性ダメージ適当というタフなステータスだ。だが、ダンジョンの属性が（地獄）の時に限ってその力が弱まり、こちらの攻撃も当たるようになる。だから、本来の居場所……コントラリー・カセドラルの最深部にいる限りに於いては、そこまで手に負えない敵というわけでもない。少々苦戦するが、ボス部屋の操作パネルさえ踏めれば、任意に（地獄）属性を発生させられるからな。少なくとも、密城の（四神）に較べればずっとマシな相手だ。——しかし……」

パウンドの説明をそこまで聞き、ハルユキはようやく話の全貌が見えた気がした。我知らず、おぼろげな推測を口に出す。

「……しかし、ひとたびメタトロンの外に出れば……（地獄）ステージなんて、滅多に出現しないわけだから……」

すると、ボクサーは軋むような動きでひとつ頷き、言葉を吐き出した。

「完全無敵、だよ。見えないし、攻撃が当たらないエネミーを倒す方法は存在しない。今や、あの東京ミッドタウン・タワー最上部から半径二百メートル以内は、何人たりとも立ち入れない絶対不可侵領域だ。いっそ、（小密城）とすら言いたくなるほどに……」

「……………」

もちろん、アイアン・パウンドは、ハルユキたちも方々・ネビュラスがほんの一時固足らず前

に《密城脱出作戦》を成功させたことを知るよしもないだろう。だがそれは、多くの偶然に助けられた、まさしく奇跡と呼ぶべきものだった。一番間違えば、ハルユキは敬愛する《剣の主》及び《覇王》と共に南門前で無敵E.K.状態になっていてもおかしくなかった……………

そこまで考えたところで、再び両手をきつく握って思考を断ち切る。脳裏に甦りかけた、大切な人たちの笑顔を無理矢理に早く塗りつぶし、低い声で呟ねた。

「……………近づけば一瞬で死に、そのまま無敵E.K.……………ってことか？」

ハルユキを見ていなかったパウンドは、真箇の墓前に気付いた様子もなく答えた。

「いや……………即死はするが、あまりにも攻撃が強烈すぎて、エネミーの反応圏の奥深くまで行けないので逆に無敵E.K.にはならない。蘇生直後に全力ダッシュで離脱すれば、ざりざり次のレーサーは受けずに倒む。俺が自分で実証済みさ」

ヘッドギアに覆われた口許に皮肉な笑みが浮かび、すぐに消える。

「……………加速世界で最大の戦闘力を持つ我らが王にして、心算制御全開で光線に耐えられたのが五秒間だったんだから、俺ことさかどうこうできるわけはなかったけどな……………。——ともあれ、これで、貴様にも事情が解っただろう。我々がこの場所は何を待っていたか。そして、貴様もミッドタウン・タワーに突っ込むのをなせ妨けたのか」

パウンドが口を閉じてても、ハルユキはしばらく沈黙を続けた。

確かに、状況はようやく理解できた。アイアン・パウンドとタリーン・ダランデがこの六本

本とルズ・タワー屋上で待っていたのは、バターン化された魔導の先に出現するかもしれない《魔獣》ステージ。その理由は、東京ミッドタウン・タワーを守護する《大天使メタトロン》が《魔獣》でのみ力を失い攻略可能となるため。

そして、緑の王が、心算技《光年長城》を発動させてまでハルユキの飛行を阻んだのは

「……………」

「おいを……………メタトロンの即死攻撃から助けるためだった、と言いたいのか」

剣呑な声で問うたハルユキに、パウンドは軽く肩をすくめた。

「最初からお前が……シルバー・クロウがそこまで《ディザスター化》していると知ってればそのまま行かせたかもな。賞金首に指定する手間もポイントも省けるからな」

「……………」

ハルユキがきりつと魔導を囁み合わせると同時に、《獣》もまた嫌々唸った。全身から立ち上る闇のオーラがきわどくと揺れるが、今は攻撃衝動を堪える。パウンドはともかく緑の王の硬さは骨身に沁みたばかりだ。闇雲に斬り掛かつて倒せる相手ではない。

そんなハルユキを横目で見て、パウンドは肘から失われた右腕をぐるりと回しつつ言った。

「——次に《魔獣》ステージ出現の確率が増大するのは、現実時間で三日後、日曜の夕方だ。

さすがにもう二ヶ月近くこの屋上にいていいかげん疲れたから、俺と王は一度ロクアウツする。貴様には……………どうあれ、一応礼を言っておくさ。レギオンメンバーが世話になったようだ

からな」

「一言言葉を切り、独り言のように、

「……まったく、妙な奴だ。そこまで深く、ナイザスター化していながら、こんな会話が成り立つとはな……」

最後の吐きは無視して、ハルエキは低く答えた。

「……………オレに札を言うくらいなら、お前が自分で……………」

しかし、途中で口を引き結ぶ。

とうやらパウンドと縁の王は、この場所ですべて三ヶ月以上も今回の《家運》を待っていたらしい。その苦行がミッドタウン・タワーを攻略するためだとしたら、彼らもまた《I S S キット》の毒証には大きな危機感を持つており、彼らなりの努力を続けているということだ。下位メンバーを融む《端末》を幾ら叩いても意味はなく、《本体》を破壊せねばならないことももう知っているのだらう。

「……………縁のレギオンの《フンシュ・ウータン》は、一度はI S S キットの誘惑に負けたが、さつき自暴的にそれを捨てようとした。キット所持者たちに攻撃されたのはそのせいだ。だから……………」

ハルエキが押し殺した声でそこまで言うのと、パウンドは体を震しながら頷いた。

「ああ、今回の件に関しては、軽々な《断罪》はしないのが王及びレギオンの方針だ。恐

らく、三日後の七王会議で、〈心意拳習キツト〉とやらに対する六大陸ギオンの統一対策方針が確認されるだろう。……無論、第一の議題である〈災情の鑑〉への処置が決まってから、
 だかな」

至って事務的な口調でそこまで言い終えると、鋼鉄のボクサーは数メートル先の緑の王へと歩み寄った。短く言葉を交わし、二人同時にまた歩き始める。ヒルズ・タワー屋上へリポートの南東端に設置されているエレベーター塔からビル内部に降り、近くにあるはずのボータルを使って現実世界へと帰還するつもりだろう。

確たる足取りで遠さかる二つの背中を見やりながら、ハルユキはどこか麻痺したような意識のまま考えた。

——オレは、怒りと憎しみの導くままに〈災情の鑑〉を召喚し、今度こそ完全に六代目〈タロム・ディサスター〉になった。そして、アツシユとウータンを襲っていた六人のISSキツト執着者たちを、本当は自分のものではない強力すぎる力で数々にいたぶり殺した。

——その行いはまるで、昨日のタタムの完全なトレースだ。あいつもISSキツトの生み出す闇の力で、自分を襲ってきた物理攻撃者集団〈スーパードワー・レムナント〉を完結無きまで叩き潰した。そんなあいつに、オレは何て言った……？

そこまで考えた瞬間、脳裏に、震盪じりの自分の声が遠くかすかに再生された。

……………お前もさっさと、その黒い力に抵抗できる！ 抗い、打ち破って、また前に進めるは

ずだー そうだろ、タク!!

そしてタカムは、その言葉どおりに自分の裡に潜む闇に立ち向かい、心の剣を振りかざして、見事に自分に寄生するISSキットを斬り伏せてみせたのだ。

—— オレには無理だよ、タク。

ハルユキは、揃々しい鉤爪を構えた自分の右手を見下ろしながら、自嘲気味に呟いた。

—— オレにはもう、この《體》と決別できる強さなんかこれっぽっちもない。いや……體と、あの《サ・ディザスター》と融合したっていうのにこの程度なんだから、そもそも最初からオレの強さなんて大したもんじゃなかったんだ。ダレート・ウォールの三番目の幹部程度に大苦戦して、その上の王にはまるで歯が立たなかった。これなら、前に記録動画を見せてもらった四代目や、一撃で黄の王を退けた五代目のほうがよっぽど強いよ。彼らでさえ退けられなかった體の支配力に、オレこそが今更抵抗できるわけもないんだ……。

もしこの場に黒雪姫がいたら、「タコム・ディザスターと化してもなおそこまで後ろ向きになれるのは、もはや一腕の芸だなー」と呆れたかもしれない。しかしもちろん声は聞こえず、代わりに背中から生える尻尾の付け根あたりで、《獣》が唸り声裏じりの言葉を発した。

—— ダルル……。放バ、我が長年探シ求メタ、最高ノ依代タルBBブレイヤーダ。我ト融合シテ聞モナイウチニ、コレホド職エタ素材ハ、汝ガ初メテナノダゾ。

その言いように、ハルユキはうなだれかけていた頭を持ち上げ、今度はこそ苦笑まじりの思念

を返した。

——なんだお前、オレ……僕を嫌（きら）めてるのか？

途端、胸の奥で燃（も）えはじめた叫（こゑ）え声が轟（とどろ）く。

——グルアアリ 戦（いくさ）し事ヲスカシテイルヒマガアフタラ、次ノ機（き）會（あ）いヲ探（たづ）メシニケレ

——と言（い）つてもなあ……最初に目（め）指（さ）してたミッドタウン・タワーは一（いっ）筋（すぢ）縋（すが）じや攻（こう）略（りやく）できなさ

そうだしな……。お前も見（み）たる、さっきのとんでもないレーザ（レーザー）。

——ルル……。《理論（りろん）機（き）面（めん）》アヒリティヲ入（い）手（て）デキレバ、アルイハ……。

いつしか、己（おのれ）が抱（か）き果（は）くう眼（め）とそんなやりとりをしていると――。

とつくに立ち去（さ）つたと思（おも）つていたアイアン・パウンドが、エレベータ塔（とう）手前（てまへ）で立ち止（とど）まり、

視線（しせん）にじつと視線（しせん）を注（つ）いでいるのに気づいた。

リターン・マツチでもやる気が、と思（おも）つてハルユキがしろりと睨（にら）み返（かへ）すと、ボクサーは「逆（さか）

う陣（じん）ウ」というように半分（はんぶん）になつた右腕（みぎうで）を動か（は）し、口（くち）を開（ひら）いた。

「……いや、気にするな、見間違（まちが）ひだつたようだが、一（いっ）瞬（しゆん）、貴（き）族（しゆ）の被（か）甲（こう）色（いろ）が……」

反射（はんしゃ）的にハルユキは自分の体（てい）を見（み）下（くだ）ろしたが、そこにあるのはもちろん固（か）態（たい）なフォルムの

《砲（ほう）》だけだ。色（いろ）ももちろん、影（かげ）を帯（た）びたようなクロム・シルバー。

「……忘れてくれ」

再び顔を上げたハルユキに、パウンドはそう言葉を返（かへ）し、離（はな）けて大声（おほこゑ）で叫（こゑ）んだ。

「いいな、シルバー・クロウ！ 貴様を与えられた猶予は、あと三日だぞ！ 日曜の午後一時までにその（猶）をアバターから完全に消滅させられなければ、貴様は加速世界最高額の賞金首になるのだから！」

「……その時は、あんたが最初に首を獲りに来いよ。リターン・マッヂ、やりたいんだろ」ハルユキの返事に、パウンドは何も言わずに背中を向けたが、すぐに左のドロップをぐっと突き上げた。次は負けない、という意思表示だろうか。そのまま、緑の王に続いて直進だらけのエレベーターに乗り込んでいく。

汚れたタイル貼りの箱が、ずるずると嫌なサウンドとともに下の階に消えた。（大罪）ステージのビル屋上に一人残されたハルユキは、我知らず声を出して呟いていた。

「……………あと三日、か……………」

冷静に考えれば、それがハルユキの、バーストリンカーとしての余命だ。

いかに鎧——強化外装（サ・ディザスター）が強力だろうとも、クロールバル接続している限り無限に乱入してくる対戦者たちの相手をはたすら続けられ、先にハルユキの集中力が尽きてしまう。どんなに高価なスポーツカーでも寝はけながら乗っていればすぐに事故る、いやその前に制御AIに操作権を停止させられてしまうように、集中できなくなったバーストリンカーほど脆いものはない。事実、初代から五代目までのクロム・ディザスターのはほとんどが、そういう敗れ方をしたのだ。

「……………おい、どうするよ、（敵）」

怒りや破壊衝動が消えたわけではもちろんないが、それらはアイアン・バウンド及びグリン・グランデとの激戦である程度燃焼されたのが、今は諦念や虚無感、自己嫌棄、そして少しばかりの白癡白痴といった感情のほうが強かった。もうあれこれ考えるのも面倒で、ハルエキが何気なく語りかけると、すぐにめらめらと燃えるような思念が応えた。

——我ラハ……モット、モットモット強クナラヌバナラス。敵方（オリジネーター）ダロウト（ビュア・カラス）ダロウト容赦二階リ、喰イ尽クセルホド強ク、ナ……………。

「……元気だな、お前は」

バイザーの下で、ふ、と笑う。

（敵）——正確には、強化外装（サ・ディザスター）が取り込んだ多くのネガティブな記憶や感情が、記録媒体の特殊性によって機械的な知性として機能するようになった存在——の目的は素直にシンプルだ。あらゆるバーストリンカーを敵と看做し、戦い、倒し、喰らう。その単純さゆえに、獣の精神支配力はとてつもなく強い。災禍の種そのものを生み出した（初代）はともかく、二代目から五代目までは、程度の差はあれ例外なく常に精神を侵され、暴るべき狂戦士と化した。彼らの手によって加速世界から永久退場したバーストリンカーの数は、それこそ百では済むまい。

つまり機械的に考えれば、現状ではSSキットや加速研究会などよりも、この（災禍の

「（獣）――（獣）――（六代目クロム・ディザスター）――（シルバー・クロウ）」のほうがずっと巨大な、いわば世界の敵だ。

ハルユキは二週間のヘルメス・コード縦走レースの終盤で一度敵を召喚してしまい、眼前の敵を秒殺したにとどまらず、数日人ものギャラリーにまで強いかがろうとした。そこを危うくライム・ベルの必殺技によって元の状態に引き戻してもらったのだが、次にもう一度敵を呼べば、二度と元には戻れないだろうと予感していた。自分の意識など一瞬で消し飛び、ただ闇雲に荒れ狂うだけの存在になるのだ、と。

そして今、ハルユキは、まさにその境界域に足を踏み込んでしまっている。二度目の敵召喚と、前回以上に深い融合。確かに、いつときは怒りに任せて暴れ狂った。だが、敵敵アイアン・パウンドとの戦いの最中から何かが変わり始め、緑の王との最大衝突を経て、今は――なぜか、不思議に静かだ。

これは、ハルユキがもう完全に「ディザスター」と一体化してしまったことの証左なのか？ それとも、ハルユキではなく鏡、あるいは敵側の要因によるものなのか……？

「……………なあ、お前……………お前はさ……………」

長い間、ずっと恐ろしい病根が、いつそ体内に埋め込まれた時限爆弾くらいに思ってきた（獣）に向けて、ハルユキは口が動くままに語りかけた。

「敵と戦って、勝って勝って勝ち続けて、最後の一人まで倒したとして……その後は、どうす

るんだ……」

しばらく、応ずる声はなかった。もしかしたら《歌》自身もその先のことは考えていなかったのか、と思ったが、やがて低い唸り声が頭奥に響いた。

——知ラヌ。ドウデモロイコトダ。我ノ目的ハタダ、眼前ノ敵ヲ破滅スルコトノミ。

「……………ふ、はは……………——そうだな……………」

ハルユキは短く笑い、頷いた。

己が意志で《翼機》を召喚し、完全に目覚めさせてしまった以上、タイム・ベルの《シトロ・コール》やアーダー・メイデンの《浄化能力》に頼つても元には戻れない可能性が高い。

つまり、敵と同じように、ハルユキにももう居る場所はなくなつてしまったのだ。ネガ・ネビュラスの仲間たちの顔を見たその瞬間、先ほどのように理性を失い、衝動的に斬りかかつてしまわないという保身はないのだから。

もちろん、いずれはこの無間獄中立フィールドから脱離し、現実世界でチユリやタタム、楓子、護を……そして——黒書庫と顔を合わせることになるだろう。

だが、そうなった時、愛する人たちにどんな表情と言葉を向ければいいのか、ハルユキには判らなかつた。いつそのこと、このまま一千倍に加速された時間が流れる無間獄中立フィールドをひたすら彷徨い続けるしかないとも思えた。エネミーでもバーストリンカーでも、視界に入るものを見境なく襲い、倒す。長い長い時間の中で自分自身が摩耗し、なくなつてしまふそ

の時まで。

そうなれば、あまり悲しみを感ぜずに済むかもしれない。大切な人たちに、道半ばで別れを告げねばならないとしても。

「……………これから、長い付き合いになりそうだな、相棒」

ハルユキの言葉には、不機嫌な唖りか短く返ってきただけだった。

——まさか、あの恐ろしい《獣》と、こんなふうに会話をするようになるなんてな。オレはあんまり動物に好かれるほうじゃないのにな……………」

そんなことを考えながら、とりあえず東——銀座方面を自指してみようと、ヒルズ・タワー屋上の縁に向かって歩き始める。

この時点でハルユキは、二つの重大な事実を放棄していた。

まず一つは、もしハルユキが史精の鎧（ザ・ディザスター）と本来に一体化しているなら、そもそも《獣》の声は聞こえないはずだ、ということ。事実、約一時期前に渋谷エリア北部で鎧を召喚してからしばらくは、ハルユキは獣の存在をまるで意識しなかった。自分自身が獣と化して狂り狂っていたからだ。

頭の中で声が聞こえるようになったのは、アイアン・バウンドとの激闘の最中、己の意思で鎧の支配力に抗おうとした瞬間からだ。以降、ハルユキは獣と鎧高速の交換を行いながら戦ってきた。それはすなわち、戦闘力はともかく精神面では鎧との融合率が低下していることの

証とも考えられるのだが、今のハルユキはそうと意識できない。

そして、ハルユキが完全に忘れている、二つ目の事実。

はば一時隙間に、弁城南門前でネガ・ネビユタスの面々と別れてアツシユ・ローラーを捜しに飛び立つ寸前、チユリが言ったのだ。

ハル、一時間待って戻らなかつたら、向こう側でケーブル引っこ抜くからね、と。

屋上の東端から、霧渡の戦士よろしくあてどなく飛び立とうとしたハルユキだったが、その寸前、視界のと真ん中に赤紫色のシステムメッケーシが激しく明滅した。『DISCONNECTION WARNING』。回線切断警告。

先に離脱がイントで現実世界に帰還した仲間たちの誰かが、ハルユキのニューロシンカーから、無制限中立フィールドとの経路となつてゐるXSDケーブルを物理的に引っこ抜こうとしてゐるのだ——とようやく気付いた数秒後。

《大罪》ステージの血に染れた風景が、鉛直方向に引き延ばされるようにして消え始めた。

加速世界から切り離される寸前、頭の奥で、短い獣の唸り声が聞こえた。

その声は、いつもの怒りや苛立ちの他に、願望みのない何らかの感情を少しばかり内包しているようにも思えた。

3

真っ先に感じたのは、現実世界の身体の純重さでも、背中を預けるソファの弾力でも、エアコンから排出される空気の冷たさでもなかった。

左肩をぎゅっと強く握る誰かの手と、仄かに甘いミント系の香り、頬をくすぐる絹糸のような髪の毛。

髪を持ち上げる前から、ハルユキは目の前にいるのが誰なのかを確信していた。それでも、ほんの三十センチ離れたところで、星空を思わせる瞳を大きく見開く黒書姫を見た瞬間、胸いっぱいには込み上げてきた感情に体が震えるのを抑えることはできなかった。

黒書姫は、右手でハルユキの肩を握り、左手にはハルユキのニューロリンカーから引き抜いたばかりのXSSBケーブルプラダを握っていた。どうやら、物理的な距離切断を実行したのはチユリではなく彼女らしい。

艶やかな、淡い桜色の唇が小さく動き、少し張り詰めた声が発せられた。

「……………ハルユキ君。一時間待っても君が戻らないので、諦めないが（緊急切断セーフティ）を発動させて貰った」

「……………はい」

どうかそれだけ答えたが、ハルユキの声は自分でも驚くほどガサガサに振れていた。口の
 中も完全に乾燥し切って、舌がまともに動かない。

すると、右側からすっとアイスウィロン茶入りのグラスが差し出される。持っているのは、
 黒雲姫に負けず劣らず心配そうな倉崎楓子だ。軽く頭を下げながら受け取り、よく冷えたお茶
 を一息に飲み下す。ようやく喉の痛みが治まり、軽く息を吐く。

ハルユキが落ち着くのを待っていたように、黒雲姫が再び口を開いた。

「何が――あつたんだ？ 我々が、帝城南門最寄りの警視庁の館屋ポイントから脱出しようと
 したす南……南の、恐らく赤坂方面で、凄まじい爆発現象を日撃したんだが……まさか、キミ
 は、あの爆発に………」

……そうか、と思う。ハルユキは、帝城南門で黒雲姫たちと別れる時には「アッシュ・ロー
 ラーを捜しに行く」としか言っていないのだから、皆は当然何も知らないのだ。早く一時間て
 発生した、余りにも多くの事柄を。

空になったグラスを両手で握りしめたまま、ハルユキはそつと視線を逸らせた。

正面で、ソファに片膝を載せて、まるでのし掛かるような姿勢の黒雲姫。その右には、カ
 ベットに膝立ちになる楓子。更に右側、ハルユキと並んでソファ上に正座しているのは、四壁
 宮崎。

反対側に眼を向けると、焼酎瓶と倉崎千百合が酒をくつつけるようにして身を乗り出して

いる。第二期ネガ・ネビユラス全メンバーの顔には、心の底からハルユキを氣遣う表情だけしか存在しない。

「……なのに。」

「……なのに僕は、みんなの信頼を。」

そんな瞬間的思惑を無理矢理に堪え止め、ハルユキはどうにか強張った笑みを浮かべることに成功した。もう一度黒雪姫を見て、しかし眼を合わせることはできないまま、どこか言い口調で言う。

「あ、あの、大丈夫……です。僕は、あの爆発には巻き込まれてませんし……一度も死んでません。ロダアウト前は、ポータルのすぐ近くにいたんで、正常離脱もたぶん簡単です……」
 そこまで□にしたところで、全員の顔にわずかながら安堵の色が浮かんだ。しかしそれを見た瞬間、逆にハルユキの胸には鋭い針にも似た罪悪感が突き刺さった。

言わなければならない。全てを、自分が何をしてしまったのかを。怒りに身を任せ、我を失って、大切なものを壊してしまったことを。

それは——可能性。ハルユキだけでなく、レギオン・ネガ・ネビユラスそのものの未来。

小さい子供のように泣き喚いてしまいたいという衝動を堪え、ハルユキは懸命の笑みを浮かべながら、右肩に掛かったままの黒雪姫の手をそっと押し戻した。最愛の側の主が、小さく肩をひそめながらも体を起こし、立つのを待って、ソファアの上で姿勢を正す。

手を伸ばし、ローテーブルに空のグラスを置くと、顔を上げて口を開いた。

「……ええと、順番に説明しますね」

まず親子を見て、ひとつ顔さかける。

「……経歴、アッシュ・ローラーは、渋谷駅の少し北で見つけました。どうやら、経歴たちと合流する前に、渋谷でブッシュ・ウータンと落ち合って連れてくるつもりだったみたいです。」

——でも、そこを、ISSキット装着者の集団に襲われて……」

「えっ……」

眼を見開き、声ならぬ声を上げる親子に向けて、姿早くもう一度傾く。

「大丈夫です。何度かポイントを押されたみたいですけど、アッシュさんもウータンも全損までは行ってません。今頃はもう、渋谷駅のポータルから正常離脱してるはずです」

「——そう、ですか……」

様子は詰めていた息を細長く吐くと、眉をきゅっと寄せながら言った。

「たうく、今更無駄と知りながら、地下駐車場まであの子のニューロリンカーを引っこ抜きに走るところでしたよ。まったくもう、何故言っても先走るクセが直らないんだから……あの子には、心意の特訓メニューを超スペシャルコースにしてあげる必要があるわね」

「UIV お手柔らかに、なのです」

なぜか顔が肩を縮めながらチャットでそう応じると、黒電燈とチエリ、タタムが揃って笑う。

ハルユキも懸命の努力で頬を焼め、何とか笑顔らしきものを作りながら、説明を再開した。

「えっと……それで、キットユーザーたちをどうにか整えたら、ISSキットの一つが東のほうに残んでいくのが見えて、僕はそれを追いかけて……六本木ヒルズのあたりまで移動したんですが、そこで他のレギオンのメンバーと鉢合わせして、そこでもちよっと戦闘になったんですけど、それも何とかなって……そいつらがヒルズ・タワーのボーターから脱出した直後に、先輩がケーブルを抜いてくれたんで、僕もバーストアウトしたんです。みんなが見た爆発は、あの近くにいたでっかいエネミーが起こしたものですけど、別にタゲられたわけじゃないですから……」

ハルユキはそこで口を閉じたが、あまりにも總部が省略された説明に、一同は暗に落ちない様子で眼を見交わした。代表して、副部長が質問を口にする。

「——ハルユキ君が董事だったのは何よりだが……キミはいま、ISSキットユーザーの集団を整理した……と言ったな？ それは、キミが一人で、複数の（ISSモード使い）を倒した、という意味か？ ——いや、もちろん、キミの実力を疑っているわけじゃないんだが……」

「え、えと……」

ハルユキが答えずに割ったのを無視に察したか、デュリが明るい声を出した。

「先輩、ハルだつてやる時にはやるんだよー 不利な状況でこすつからズルい手を使わせたら黄の王以上って評判なんだよ最近！」

「……チユリ君、それは褒めてるのか？」

二人のやり取りに、タタム、楓子、謎の三人がもう一度笑った。皆に合わせて、ハルユキも喉から懸命に笑い声をしきものを押し出そうとした。

しかし――同時に、胸の奥底では、いままで必死に押さえつけていた感情がついに決壊しようとしていた。

仲間たちの笑い声はあまりにも温かく、表情はあまりにも眩しい。壁の時計ではほんの数分前、無制限フィールドに皆でタイプするその瞬間までは、ハルユキもオガ・ネビュラスという小さく、しかし強烈な環の一部だったのだ。アーダー・メイデンを國神スザクの贖元から救出し、環の寄生因子を浄化して、これからずっと皆と一緒に戦っていけると信じていたのだ。なのに――それなのに……。

「……………ハルユキ君……………」

途惑ったような黒髪姫の囁き声に、ハルユキはようやく自分の右頬に一筋の涙が流れていることに気づいた。

随てて手の中は何度もぬぐい、再び笑顔を作る。

「す、すみません、何でもありません。因幡宮さんの救出作戦が終わったから、ほっとしちゃって、つい」

早口にそうまくし立てるが、現実世界の体はハルユキの制覇を拒み、両眼から次々に大粒の

液体が転がり落ちる。いつしか顔も歪み、胸は激しくわななく。

「——ハルユキ君」

はつきりした声で名前を呼び、白い手を差し出してくる黒書生を——。

ハルユキは、両腕でそっと、しかし力を込めて押し戻した。細い体が隠れるやいなやソファから飛び降り、リビングのドアへとどたどた走る。

ソファに手を掛けたところで、ハルユキは一度振り向き、眼を見開く仲間たちに向けて言った。
「……………ごめん、みんな。本当に、ごめん」

「ど……どうしたんだ、ハル。まず、説明してくれよ。ぼくたちは、もう隠し事はしないって約束したじゃないか——」

タタムの叫び声に、「反射的に眼を伏せかけたが、せめてそれだけは堪えた。」

ほやけ、にじむ視界の中央に大切な人たちを捉えながら、ハルユキは掠れ声で言った。

「……………僕は、もう、シルバー・クロウじゃないんだ。六代目の、クロム・ティザスターなんだ」

途端、揃って息を呑む気配が伝わったが、涙のベールで詳細な表情までは見えなかった。お陰で、どうにかもう少しだけ言葉を繋げることができた。

「僕は、僕のデムエルアバターと完全に一体化してしまった。還元も、浄化も、もう間に合わない……………。ごめんなさい、先輩。僕は……僕は、あなたと……………」

「緒に、加速世界の最果てを見たかった。」

そのひと言を吞み込み、ハルユキは黒雪姫の反応を待つことなく身を翻した。ドアを押し開け、廊下に飛び出る。

背後で、恐らくタタムと黒雪姫の足音が聞こえた。ハルユキは玄関へと走りながらホームサ―バーにアクセスし、ホロウインドウを開くと、セキユリタイ設定タブにある強制ロックボタンに指を載せた。

「ハルⅡ」

「待つんだ、ハルユキ君Ⅱ」

二人の声から逃れるように、スニーカーを突っかけると同時に玄関ドアを押し開ける。隙間から外の共用廊下に出るやすかさや背中ドアを開め、ロックボタンを押す。

「がちん！」という施錠音が、何かを断ち切るかのように響いた。直後、ブッシュブル式のドアノブを何度も押す音、次いでサムターンを回す音が続くが、ドアは開かない。有田家ホームサ―バーの管理者権限を持つハルユキでなければ、強制ロックは解除できないのだ。

ウインドウを操作し、施錠保持時間を最長の十五分間に設定しながら、ハルユキは厚さ五センチのドア越しに自分の名前を呼び続けている黒雪姫に語りかけた。

「先輩。……僕。……はく、自分の意思で《異世界の鏡》を召喚しました。せつかく……せつかくみんなが、僕に寄生する《魂》を浄化するために頑張ってくれて……メイさんも、斎城から

生還できたのに……僕が、それを全部無駄に……」

——無駄なものか！

——キミが、大切な友達を助けるためにそうしたことくらい、解らないと早うのか？
 《鐘》「……」とき、私が一撃でキミから切り離してやる！ だからここを聞ける、ハルユキ君！！

二枚のアルミ板を隔てても、黒雪姫の声ははっきりと耳に届いた。どんどんと力任せにドアを叩く振動も、背中から心臓にまで直接伝わるかのようだった。

「……………このままじゃ、日曜の《七王会議》で、先輩やレジオンのみんなまで責任を追及されかねません。もし全員が賞金首に指定されたら……木ガ・ネビュラスがなくなっちゃいます。それだけは、絶対に避けないと」

ハルユキの言葉に、振動が一瞬止まった。

短い静寂の中、ハルユキは懸命に最後のひと言を口にした。

《炎樹の意》は、僕が自分でケリをつけます。持つてってください……きつと、帰ってきますから。先輩の……みんなの、ところに」

それは、ハルユキが、黒雪姫の《子》としてバーストランカーになって以来初めてついた大きな嘘だった。

鐘はもう切り離せない。現実世界にいる今やさえ、自分の懐いところにあの《獄》の息吹を感じる。できることは、ただ一つ。共に消えることだけだ。無尽回の戦いの果てに、存在を

のものを握り切らせて。

「……………ごめんなさい。」

「……………さようなら、先輩。さようなら、調匠。ごめんな、タタ、チユ。そして……………四葉宮さん。」

心の中でそう呟き、ハルユキはドアから背中を隠した。

きゅつと両手を握り、エレベータホールへと走り始める。視界右下の時刻表示は午後七時二十分、中学生が一人で外を出歩いてもまだどうにか許される時間帯だ。どこかのダイブカフェから、すぐにもう一度無制限中立フィールドに入れば、十時に店を追い出される前に全てを終わりにできるだろう。

混乱と焦慮のさなかにあっても、自分の行動が、やや性急にすぎるものかもしれないと思わないでもなかった。だが、忘れてはならない。災禍の鐘は、それを警告したパーストリンカーの、現実世界に於ける人格すら徐々に侵食するということを。五代目ディザスターとなったチエリー・ルークが、自分の《子》にしてレギオンマスターたるニコをすら喰らおうとしたあの悲劇を、ハルユキが繰り返すわけにはいかない。それだけは、絶対に。

先のダイブでは、ハルユキが戦を忘れて攻撃したのは、ISSキットを装着したオリーブ・クラブたちだけだ。アイアン・バウンドや緑の王との戦闘中にも二度ほど暴走しかけたが、理性や記憶を失うほどの段階には幸い至らなかった。

自分がまだ自分でいられるうちに、決着をつけるのだ。

そう心に刻み込みながらエレベータに乗りうとしたその時、軽やかな合成音とともにボイスコールの着信アイコンが点滅した。発信者は——チユリ。

ハルユキは、單い切り両手を握ってアイコンを押したい衝動をやり過ごす、胸の中で耐りながらニューロリンカーの全てのネット接続を切った。そして、ARボタンではなく、ほとんど使った記憶のないエレベータ備え付けの操作パネルで一階を指定した。

ハルユキとタカム、チユリが暮らす北高円寺の高層複合マンションは、地下一階から地上三階までが大型のショッピングモールになっている。

平日の夜だが、一階の中央通路は、家族連れやカップルで大いに賑わっていた。楽しそうな笑顔たちを小走りで避けながら、ハルユキはちよつとしたデジャビュを感じていた。

そう——あれは、今年の四月。梅郷中に突如現れたバーストリンカー、《暗殺者》ダスク・テイカーによって、シルバー・タロウ唯一の力である《飛行アビリティ》を奪われた目のことだ。毎日バースト・ポイントを上納しろと命令されたハルユキは、同じように涙を堪えながら買い物客の間を走った。

あの時は、第七通り上で《対戦》に乱入してきたアッシュ・ローターに、結果として助けてもらったのだ。彼の親であるスカイ・レイカーに引き合わされ、《心意システム」と《ゲイル

「スラストー」という二つの力を与えられて、敵國の末にダスター・テイカーを倒した。

しかし、今回はかりは誰にも頼ることはできない。加速世界で対面すれば、ハルユキはその相手を見境なく攻撃してしまいかねないのだから。

そう考えると、無制限中立フィールドにダイブするという行いそのものが一定の危険性を孕んでいる。内部で、戦いたくない人たちと偶発的に遭遇してしまうことだってないとは言えないのだ。いっそ、昔からニューロリンカーを外して、へし折るなり噴水に投げ込むなりしてしまえばうがいいいのかもしれない。インスタールされたBBプログラムごと破壊するのが、あるいは《災禍の鎧》を奪う唯一の方法だということも……………

と、その時。

例え加減でエントランスを目指していたハルユキの視界前方に、びたりと據えられた二つの戦艦が入り込んだ。

新品ではないが、綺麗に手入れされた黒いローファア。真っ白いソフタスと、細いふくらはぎ。小さな膝の少し上でかすかに揺れる、チエタ柄のブリーツスカート。

誰かが――恐らくは女の子が、ハルユキの行く手で、つまりショタピンタモールの中央道路どまんなかで立ち止まっているのだ。仮想デスクトップの操作でもしているのだろうが、マナー違反も甚だしい。とは言えもちろん、そのまま交差して相手をとかす度胸があるわけもなく、ハルユキは相手の顔を見ないまま左に針路変更した。

しかし、何たることか。その途端に黒いローファ―も左に一歩動き、相違わず行く手を遮ぎ続けるではないか。

いよいよ軽い苛立ちを感じながら、ハルユキは右に再度転進した。だが、靴の持ち主は今度もまた同じ方向に横移動。そこで彼氏の距離が一メートルを切り、やむなくハルユキは立ち止まった。

依怙地に俯いたまま、ぼそつと言葉を発する。

「……すみません、そこ通ります」

あつ、ごめんなさい！

というような反応を、当然期待した——のだが。やや間を空けて、かなりの小ボリユームで聞こえた声は、あまりにも予想外のものだった。

「……通せま……せん」

……………は？

事ここに至り、きしものハルユキも丸めた背中を傳はさないわけにはいかなかった。

視線が上向くにつれ、壁の通せんぼ女子の全身が順番に目に入る。チェンタのスカートの上は、アイボリーのスタイルカーディガン。シャツの胸元にはスカートとお揃いのリボンタイ。制服だとすればかなりオシャレなデザインだ。その上に、斜めがけにした小さめのシヨルダーボーチ。

悉く中学生だろうが、体つきはかなり華奢で小柄だ。しかし、細い腕は三十度くらいの角度で広げられ、横幅で遠かに上回るハルユキを本気でプロッタしている。

いっそう唖然としつつ、ハルユキはついに相手の顔を見た。

声や制服同様、見覚えはないように思えた。目鼻立ちとは、どこか少年めいた印象もあるすつきりした容作で、髪型も少々癖っ毛なショートカット。人の顔を覚えるのが苦手なハルユキだが、まったくの初対面であることはほぼ間違いない。断言できないのは、顔を一瞬見ただけで反射的に眼を逸らしてしまっただからだ。

なぜなら、謎の少女は、髪型の制限を越える寸前の長さでうるるさせているのだ。

買い物客で溢れるショッピングモールの真ん中で、半泣きの女子中学生に遇せんぼされる理由など、考えるまでもなく一切思い当たらない。ゆえにハルユキは、入りかけた動転スイッチをどうにかオフにしつつ、もう一度ぼそと言葉を発した。

「あの……た、多分人違いです。すみません、慌急いでのので………」

そして、三度目の針路変更で左にすり抜けようと——したハルユキの右手首を。

半ばそ少女が、思いがけない握力でかしつと掴んだ。同時に、いっそうか細くなった声。

「人違いじゃ……ない、です。あなたを行かせることはできません、せん」

「は……？ な、なんで……僕、何もしてないです………」

そろそろ周囲から浴びせられる視線が気になってきて、ハルユキは口早に言った。



それに対する少女の回答は、更なる否定だった。

「いいえ……してくれ、ました。あなたは、私を、助けて、くれた」

途切れがちの声でそう告げると、少女は一重の睫に涙の粒を溜めながら、続けて言った。

「私……、アッシュ・ローラー、です」

ハーストリンカーたる者に要求される能力は色々あるが、中でも最重要な一つが、状況に対する反応力である。

対戦中には、たとえ相手がよく見知ったデュエルアバターであろうとも、数々の突発事態が生じる。想定されざるシチュエーションに、しかしのんびり構えていては勝利などおぼつかない。情報の収集と行動の選択。そのプロセスをいかに短時間で処理できるか、あるいはできないかが、アバターの性能を生かしも殺しもする。

シルバー・クロウ最大の力である《速さ》の基盤こそが、ハルエキのその《反応力》だった。対戦中の停頓時間^{（ストップタイム）}が飛び抜けて短いと評されるようになったのは、昨日今日の話ではない。

しかし――

今はかりは、ハルエキの地響クロツクは一ヘルツ以下にまで低下し、両眼と口をぼかーんとフルオープンすること以外の何もできなかった。

……アッシュ・ローラー。……って……感^{（カン）}だっけ？

遅々としたスピードで考え、自分で答える。

……アッシュさん……だよな。骨董^{（ボウドウ）}アメリカンバイク乗りの。無腰ヘルメットの。

ヒヤハア―俺様メ、カラッキイーの。

……………え？ あのアツシエさんの中身が？ この大人しそうな女の子？

たつぷり十秒を消費して、ハルユキはようやくわすかばかりの情報を咀嚼したが、そこで再び思考は停まった。自身の苦境も一時的にせよ丸ごと吹っ飛び、真っ白く染まった頭の中を、デフォルメされたバイクが左から右にぶろろーんと通過していった。

混雑するショッピンダモールのど真ん中で硬直するハルユキの右手首を、真目の少女はもう一度くいつと引つ張り、小声で言った。

「あの……、場所、変えま、しょう」

完全思考停止状態のハルユキが連れていかれたのは、モールの地下二階に設けられた広大なパーキングエリアだった。整然と並ぶEVの列を横切って歩くと、前方に見覚えのある小型車が出現する。鮮やかなカナリアイエローのイタリア製5ドアハッチバック―スカイ・レイカー―こと倉崎楓子の（正確には彼女の母親の）愛車だ。

少女は一時的電子鍵を持つているようで、右手が素早く動くと、車のウインカーが点滅するとともにロックが外れた。右後方のドアを開けてハルユキを座席に押し込み、自分も続けて乗る。

この車のキーを与えられている時点で、少女が楓子の関係者であることは証明されたと考え

ていい。それでもハルユキは、隣にちよこんと座る癖つ毛ショートヘアの女子中学生が、の、アツシユ・ローラーであるなどという話をどうにも受け入れられず、向も放心し続けた。比較すれば、かつて親戚のサイトウトモコちゃんを騙つてハルユキの自宅に入り込んだ女の子が実は二代目赤の王スカーレット・レインだと知らされた時のほうが、まだしも現実味があつたというものだ。

——とは言え。

ハルユキには、いつまでもフリーズしてられない事情もあつた。Tシャツにスリークォーターパンツといういい加減な格好で自宅を飛び出してきたから、すでに七分が経過している。黒髪娘たち五人を閉じ込めている有田家の緊急ロックが機能するのはあと八分、ドアが開けば皆はその瞬間ハルユキを捜しに走るだろう。

広大なマンシロン内で、ニューロリンカーをネットから切断している人間を見つけるのは至難のはずだが、何せあちらにはチユリとタタムがいる。幼少の頃はこの建物をステージに数度なりなく鬼ごっこや隠れんぼをして遊び、ハルユキの勝率はぶっちぎりで最下位だった。ことにチユリの動物的直感には神がかりで、えんじ屋のアイスあたりが熱かると、ハルユキの居所など数分で嗅ぎ当てたものだ。つまり、本当に自分ひとりで状況にケリをつけるつもりなら、せいぜいあと十分以内にはマンシロンの外に出なくてはならない。

迂回的にそう考えることでどうにか願のリブートに成功したハルユキは、隣で相変わらず鼻

をくすくす言わせている少女をちらりと見て、とにもかくにも口を開いた。

「えー……………つと、そのお……………さつき、君が言ったのは、アツシュ・ローラー……………アツシュさんの、知り合ひとか、メッセンジャーとか、そういう……………こと？」

万に一つ、先ほどの「私、アツシュ・ローラーです」という台詞が自分の聞き違いであった可能性に賭け、まずはそう訊ねた——のだが。

少女は、いつの間に取り出したのが両手で真っ白いハンカチを握りしめながら、ふわふわした髪を揺らして明確な否定の仕草を見せた。なぜかほんのり赤くなっている顔を俯け、羞じらいの滲んだ消え入りそうな声で——

「……………本人、です」

「……………」

再び思考がスタックしかけたものの、危うく回避。だが、どうしても信じられない。

広大な加速世界には、デュエルアバターと生身のイメージがかけ離れている者もそれはいらるだろう。ハルユキ自身がそうだともある。極限まで軽身なシルバー・タロウの姿しか知らなければ、現実世界のこの丸っこい中二男子が本体だとはなかなか想像できるまい。

しかしそれは、あくまで外見に於いてのことだ。口調や身振、すなわち（気配）まではそう距離するものではない。ハルユキがリアルを知っているバーストリンカーは、思慮極（しりょごく）たちも、ネビュラスの面々も、素（もと）のレギオンのニコやバドさんも、そしてあの奸智（えんち）に長けたダ

スク・テイカーすら例外ではなかった。

俯つて、隣に座る少女とアッシュ・ローラーは、たった一つの共通点すら存在しない——ように思える。言葉遣い、仕草、性格、そして何より性別までも正反対としか言えない。そう、あのバイク乗りはどう考えても《男性型アバター》ではないか。ブレイン・バーストでは、生身が女性なら必ずアバターも女性型になるはず……

「あ……………」

そこまで考えた時、ハルユキはふと、あるシーンを思い起こし小さく声を上げた。がぱつと体を右に傾け、ベそき少女の顔を初めて正面からじつくりと眺める。

多少萎縮した様子ながらもまっすぐ視線を返してくる、なよやかさと涼やかさが同居したその顔……間違いない女の子なのに、仄かに理系の少年めいた印象を受けるその相模は、

アッシュ・ローラーの、傷痕を懐したヘルメット・シールドの奥に隠れた《素顔》と、どこか似ている。

「……………君は……………本当に……………」——でも、なんで……………」

あまりにも曖昧な、ハルユキの問いかけに。

藍目の少女は、言葉ではなく行動で答えた。

スカートの膝に載っていた小さなシールド・ボーチを開け、ハンカチを仕舞うと、代わりに中からあるモノを取り出したのだ。左右のアームが折りたたまれた、縦いメタリクタレーの

——ニューロリンカー。

あれっ、と思ひながら、ハルユキは少女の細い首へと視線を移した。そこにはすでに、可愛らしいバステル・タリーンの数十通の葉書が装着されている。彼女は先ほど右手の一振りでの車を解錠したのだから、当然そうでなくてはおかしい。

しかしここで、次なる疑問。

ニューロリンカーは、旧時代の携帯電話やスマートフォンへの承諾に連なるモバイル機器だが、単にそれだけの存在ではない。名刺であり、開示であり、身分証でもあるのだ。ユーザーの固有秘密とコアチップに焼き込まれた固有IDが紐付けされ、装着しているだけで自分が誰であるかを証明してくれる。そのIDは、事実上の《国民番号》であるとも言えるわけだ。

つまり、表現を変えれば、ニューロリンカーは政府が国民に与えた《証票付きの首輪》だということでもある。その証として、ニューロリンカーの複製所持は法律で禁じられている。もちろん端末そのものを二台、三台と入手する方法は幾らでもあるが、肝心のコアチップが一人にひとつしか発行されないうえに、チップの移植（つまり複製変更）も区役所や政府公認ショップでしかできないので機械だけ手に入れても意味はない。あの黒雲帳ですら、ニューロリンカーは一つしか持っていないのだ。もし二つ持っていたら、六王の刺客から身を隠すために二年間もタロー・バルネットを切斷し続ける必要などなかったはずだ。

以上のような理由で、ハルユキは、少女が取り出した《二つ目のニューロリンカー》に本気

で驚愕した。

「そ、それ……………君の？ つ、使える……………の？」

雄れ声での問いに、少女は微妙な角度で首を傾け、言った。

「使える……………です。でも、私のじゃ、ありません。これは……………兄の、ニューロリンカーだった……………んです」

「お、お兄さんの……………だった……………？」

呆然と繰り返すと、謎の少女は今度はそこくりと頷き、レザーシートの上で体ごとハルユキに向き直った。とは言え車の中なので、必然的に上半身だけをひねることになり、更なる必然としてスカートの裾がずり上がって、真っ白い両脚がかなりの位置まで露わになった。

複雑化極まる状況にあっても、ハルユキとしてはアワワと不自然に眼を泳がせるしかないのだが、それを意に介する様子もなく少女は背筋をびんと伸ばし、すーはーと深呼吸した。まるで、ハルユキと同様、少女のほうもこの状況にかなり精神を緊張させているかのようだ。灰色のニューロリンカーをスカートの隙に置くと、がんばれ自分、とはかりに両手をきゅっと握る。最後にもう一度息を吸ってから、少女はまっすぐハルユキを見詰め、相変わず顔目ながらも明確な声で言った。

「私……………タサカベ・リンと言います」

同時に右手が小さく動くと、ハルユキの視界に薄緑色の矩形が出現する。アドホック接続

で送られてきたネームタダだ。表示された漢字フォントは「日下 麗 繪」とある。生まれは二〇三三年、ということはハルユキと同じく中学二年生か。

「あ、あの……有田、春雪です」

反動的に名乗りながらネームタダ返送ボタンを押すと、少女——繪は送られたタダにちらりと眼を落とし、起點以来初めてほんの少しだけ微笑んだ。いっそうの下ギマギ状態に迫り込められたハルユキは、そして優先度の高くない問いを半自動的の口にした。

「そ、そそう言えば……さっき、上のメールで、なんで僕が……シルバー・クロウだって解ったの……？」

「それは……私か、この車の中でバーストアウトした数分後に、阿匠からボイスコールが来て……あなたの写真が、送付されてて、マンションから出る前に何か何でも確保、って命令されて……」

「……………師匠、って、スカイ・レイカーさん……だよな？」

一応確認すると、ショートカットの頭がこくりと縦に動く。

確かに——ちよっとばかり腰に落ちない組み合わせ、ではあったのだ。少なくとも表面上は紙やかなお嬢様女子高生と言えなくもない倉崎楓子と、傍若無人な世紀末ライダーが（親子）だというのは、その観点では、眼前の少女のほうにまたしも楓子と接点がありそうなのは間違いないが、しかし根本的な疑問はいっとうに解消されない。

ハルユキが頭を抱え込みたい衝動と戦っている、且下部輪は再び両手でメタリックダレのニューロリンカーを抱いた。少女が動くたび、車内に仄かなフローラル系の香りが広がり、思考を減速させようとする。だが、次に発せられた言葉を聞き、ハルユキは僅てて居住まいを正した。

「あの……、最初から、お話し……します。私が、どうしても、バーストリンカーに……なったのか……」

私の兄は晴太という名前で、ICGPレースの選手でした。

結論の説明は、そんなふうに始まった。

「ICGPというのは、二輪車——つまりオートバイのレースカテゴリーの一つである。ICは内燃機関の頭文字。モータースポーツの世界も電動車に席巻されたこの時代に、A——制覇なしのガソリンエンジン車にこだわる、言ってしまえば前時代的なレースだ。

しかしながら、静岡かつスマートな印象の強い電動レーシングマシンに比べると、ガソリン車の中高いエキゾーストや荒々しいオイルスピンには抗いがたい魅力がある。環境破壊の象徴として長年攻撃され続け、現在ではいつ滅滅してもおかしくないカテゴリーではあるが、ハルユキも深夜の中継番組を眠気に耐えながら見たことは何度もある。

「兄は六つ年上で……私が言うのもなんですが、才能のあるライダー、でした。二年前、国内

でいい成績を挙げれば、来シーズンはヨーロッパに行ける……というチャンスを得たんです。

「……」
 納訥と語る輪の周囲に、再び透明な空がにじむ。

「でも、最後のレースで……インサイドから、他の車両にヒットされて……応援に行っていた、私の目の前で、クラッシュ……して……。—— 幸い、命は取り留めたんですが、それ以来、ずっと意識不明……です……。医療用ニューロリンカーで、強制フルタイプさせても、微少な反応しか、なくて……」

「……………」

どう応じていいのか判らず、ハルユキはただ無言で輪の濡れた面を見詰め続けた。

A1制覇が義務づけられているEVOレースでは、他車との接触事故はほとんど発生しない。そのぶんスリリングな追い抜きや、ホイール同士が火花を散らすような競り合いも見られず、逆にそれがあることがICGPやICフォーミュラの売りでもあるのだが——必然、危険な事故の発生率も桁違いに高い。

輪は何度も眼を瞬かせ、呼吸が落ち着いたところで続けた。

「……………」兄は、二年前から、渋谷区にある大きな病院に入院して……います。私は中野区江古田に住んでいるんですが、中学校は渋谷の私立を選び、ました」

「お見舞いに……行けるから？」

ハルユキが小声で訊ねると、梅はこくりと頷いた。

「お医者さまが……なるべく、現実世界で家族の声を聞かせたり、手を握ったりしたほうが、回復の可能性が高まるって、仰つたので……。毎日、学校帰りに、病院に寄って……います。夏休みも、毎日行きたかつたんですが、そのために、バスの定期を買ってもらうのも、気が引けて……。——そしたら、去年の夏に、主治医の先生が、院内のカフェテリアで、夏休みの間だけ、アルバイトをしたらどうか、って……。――」

「な、なるほど……」

労働基準法の改正で未成年の雇用制限が緩和されるに伴って、それまでは禁止されていた中学生のアルバイトも、労働時間を長く取ってではあるが可能となっている。とは言え、自分で働いてお金を稼ごうなどと考えたこともないハルユキは、思わず感心のため息をついた。

「凄いわ……お兄さんのために、夏休みじゅうずっとアルバイトするなんて……」

すると、相変わらず眼を潤ませつつも、梅はごくかすかに微笑みながらぶりを振った。

「いえ……仕事中は、ドジばかり、で……。去年の夏だけで、お皿と、グラスを、十回は割りました」

「そ、そうですか」

「それだけじゃ、なくて……。いちど、お客様の膝に、氷水を懸いっきり、ぶちまけて……」

「……そ、そう、ですか」

「幸い、そのお客様は、とても優しい方で……少し年上だったんですけど、同じ中学生で、学校も近かったこともあって、それをきっかけに仲良くなつて……進学のこととか、兄のこととか、色々相談に乗ってもらつて……」

「……ふむふむ」

話の行く末がまるで読めず、ハルユキは自身の苦境をもう少しだけ忘れて身を乗り出した。観界右端の時刻表示は、刻一刻と《家》を飛び出てから十五分《の》リミットへと近づいていくが、それすらも意識できない。

去年の夏休み、と言えば約十ヶ月前。ハルユキが黒雪姫に誘われバーストリンカーとなる、まさに直前の話だ。論は濡れた瞳でハルユキをじつと見返し、言葉を整へた。

「……何度が会つてるうちに、その人は、私が抱えている……《心の傷》を、見抜いて、しまいました。そして、言つたのです。この東京という街には、もう一つの姿がある。そこでなら、私は、私の答えを見つけられるかも、しれない……と……」

「心の傷……もう一つの、東京」

聴いてから、ハルユキは遅まきながらそれらの言葉が示すものを理解した。

心に傷を持つ少年少女たちが集い、戦う、仮想の東京都市。それはすなわち加速世界、ブレイン・バースト・プログラムが作り出す極めてられた戦場のことだ。

「じゃあ……その人が、君の《親》バーストリンカーってこと……？」

「そう、です。私の、優しく、優しい『師匠』……です」

傾きながら輪が発した言葉に、ハルユキはびくつと反応した。

うっかり忘れそうになっていたが、眼前の少女は、自分があのアツシユ・コーラーであると主張しているのだ。それが事実なら、輪が病院のカフェテリアで出会った中学生というのは、ハルユキ自身の師匠でもあるレベル8パーストリンカー、『鉄腕』スカイ・レイカーこと倉崎楓子……ということになるのか……。

今更考えるにくだいことではあるが、もし輪が何らかの意図を秘めて接近してきた敵性パーストリンカーだとすれば、こちらからレイカーの本名を出すのは躊躇われる。剽奪の逞いに黙り込むハルユキの内心を知ってか知らずが、輪はそつと視線を落とし、口を開いた。

「……プロタム、『フレイン・パースト2039』のインストール条件の説明を受けた時、私は……私には無理だと、思いました。私が、初めてニューロリンカーを買ってもらったのは、小学校に上がる直前、でしたから……」

「それじゃ……『第一条件』を、満たせない……よね？」

ハルユキの返事を、輪は小さく首肯する。

3日プロタムをインストールできる、すなわちパーストリンカーになれる条件の第一項は、『生まれた直後からニューロリンカーを装着していること』だ。よほど育児に熱心か、あるいはその逆の親でなければ、なかなかそこまでではない。

「私は、そう説明した、のですか……師匠は、にっこり微笑んで、言い……ました。あなたには……強い、意志の光を、感じる、と。わたしの、こういう勘は、外れたことがないんです、と……」

——その、(優しく穏やかに支配する)カンジの台詞は、いかにも楓子の言いそうなことだ。だが、いかに楓子が(本当は怖いレイカー先生)であろうとも、フレイン・バーストの第一条件をこまかすようなことはできないはず。ハルユキが首をひねっていると、輪は、いままでずっと両手で包み込んでいたものを再び持ち上げて言った。

「……………その時、私、思い出したん……………です。兄……………輪太は、小さい頃から、悪戯っ子で……………自分だけじゃなく、私も！ C G P ライダーにするって、赤ん坊だった私に、こっそり自分のニューロリンカーを着けさせて……………レースの映像を見せてた、って……………翼に、聞いたことがあって……………」

「……………す、すごいお兄さんだね」

ハルユキは強張り気味な笑いを浮かべてから、アレクと隣いた。いかに兄妹と言っても他人は他人だ。ニューロリンカーを着着させても、起死回生可能ではあるまいか。

すると輪は、ハルユキの疑問を読んだかのように、ひとつ頷いて答えた。

「……………新生児から、乳児までの間は、脳が未発達なので、脳波の固有パターンが、うまく読み取れないことが、あるらしい……………のです。もちろん、稀なケースですけど、兄のニューロ

リンカーは、赤ちゃんのもユーザーとして、認めたらしくて……私は、物心ついてからも、自分のニューロリンカーを買ってもらえるまで、時々兄のを借りて絵本を読んだり、フルダイブしたり、してたんです。それが……この、ニューロリンカーです」

輪が、両手で大事そうに包みながら持ち上げたもの——メタリクタクタレーの、古ぼけたウエアラブル・デバイス。

まじまじとそれを見詰めたハルユキは、あることに気づいた。いままでは車内の清静なゆえに見逃していたが、外装のプラスチック・シエルには、通常の使用による塗装剥けや擦り傷の他にも、何か強烈な衝撃を受けてきたと見せしめひび割れが一本、履帯状に走っている。

「兄は……子供の頃、最初に買ってもらったこのニューロリンカーを、シエルだけ大人用に換装してずっと使い続けていました。これを着けるほうが速く走れるからって、中学を出て、進学せずにバイクレースの世界に飛び込んでからも……ずっと……」

輪の兄、輪太が活躍していたというICGPレースはA1級制なしのオールドスタイルだが、最低限の各種情報のみ表示やピットとの交信のために、ライダーはニューロリンカーを着着しているはずだ。

で、あるならば。いま輪が両手に持つ機械は——。

「そのニューロリンカーを……お兄さんは、二年前の、クラッシュの時も……?」
ハルユキの、囁くような問いかけに、少女は小さな顔をゆっくりと腰に動かした。

「兄のチームの、監督さんが、事故のあったサーキットで、渡してくれました。たぶん……遺品の、つもりだったんだと、思います。兄は、一命を取り留めましたが、それ以来、ずっと怪我してて……でも、不思議なんです」

言葉を切り、繪はそっと微笑んだ。

「……師匠に、BBプログラムのインストールについて、説明された時……私は、自分のニューロリンカーを外して、これを装着してみました。最後に兄から借りたのは、小学校に上がる直前……八年以上も、昔のことだから……もう記憶はできないって思ってたんですけど……機械は、動きました」

「……………」

ハルユキは小さく息を呑んだ。ということは、眼前の少女——目下部隊は、原理的にも法的にも存在し得ないはずの（ニューロリンカー二丁使い）なのだ。

もちろん、身分を詐称して悪事を企む犯罪者でもない限り、ニューロリンカーを複数台使い分けることに意味はあまりない。しかし、BBプログラムのインストール条件をクリアするために、赤ん坊の頃に使っていたニューロリンカーそのものを使用するというのは有効な手かもしれない。

第一条件の（新生児の頃から養育していること）、第二条件の（長時間のフルダイブ経験があること）の双方とも、結局問うているのは脳とマシンの親和性、応答性だからだ。ニューロ

リンカーの量子接装デバイスには個体差が存在するので、生まれて初めて使ったマシンが、もともと体——いや脳に馴染んでいる、ということはある。

「……じゃあ……ブレイン・バースト・プログラムは、今試みてるその緑色のじゃなくて……お兄さんの、ニューロリンカーに？」

ハルユキの質問に、輪はごくごく小さな動作で頷いた。

「はい。インストールは、一回しか試行できないって師匠に言われたので、迷ったのですが……さっき、不思議と、言ったのは……このニューロリンカーを装着して、BBプログラムの作る仮想の炎の中で、インジケータの進行を、待ってた時……私、兄の声を、聞いたんです」

「え……？」

「——お前は、お前の道を走れ、って……。そのために、背中を押してやるから、って……」

阿の瞳に透明な半をいっばいに詰め、輪はこの不思議な対話が始まって以来、いちばんはつきりとした笑みを浮かべた。手の中の、古ぼけ、傷ついたニューロリンカーの左右ロタアームをそっと広げながら続けて言う。

「インストールは……成功、しました。でも、私……師匠と一緒に対戦ステージに入って、初めて自分のデュエルアバターを見た時……思わず、笑って、しまいました」

そこで言葉を切り、実際にはんのかすかなからクスツと声を漏らす。

「革ジャンに、革手なヘルメット。おつきくて、びかびかな、アメリカンバイク。――あれは、兄が、ヨーロッパでチャンピオンになったら、プライベートで乗り回すって言ってたマシンの……そのものだった、んです。私には……私の道を行け、なんて言って、おいて……アバターは、自分の夢そのまんまだなんて……ほんと、昔から……兄は……」

大粒の涙を、こぼれ落ちるす雨のところ、藁毛に留めながら、端はメタリックタダレのニューロリンカーを愛おしそうに胸に抱いた。その仕事に、ハルユキは自分も微笑みながら口を開いていた。

「そうか……。――じゃあ、加速世界での君……（アッシュ・ローター）は、何て言うか……ロールプレイ、っていうことなのかな……？ ああの口調や、戦い方は、お兄さんならそうするだろう姿を、演じている……」

だとしても、眼前の涙目少女と加速世界の世紀末ライダーはあまりにもかけ離れすぎているが、そこは限り続ける兄への悪いの探さということできりぎり納得できるような気がしなくもないかもしれない。

少々強引に状況を呑み込もうとしていると、不意に輪が上目遣いにハルユキを見て、思わぬ言葉を口にした。

「……別に、ヘンじや……ないですわね？ かっこいい……ですわね？」

「へっ!? カッコイイ……って、アツシユさんが?」

こくりと隠れたショートヘアの頭が、次いでじわりと前髪。微妙に距離を詰めつつ、顔は小さく、しかし熱っぽい声で言い募る。

「あのガイコツのヘルメットとか……トゲトゲいっばいの革ジャンとか……バイクについてるミサイルもかわいいし……」

いかにもお嬢様学校な制服に身を包んだ、いかにも育ちの良い女の子の趣味とも思えぬ台詞を連発され、ハルユキは小刻みに頷いたものの口許が軽くひきつってしまった。すると顔ははつと我に返ったように身を引き、今度は恥ずかしモードで嬉しく。

「す……、すみません……。私、加速世界のことになると、つい夢中になってしまつて……」

——対戦中も、実は、そんな感じ……。なんです。無我夢中に、なりすぎるせいかな、三十分があつという間……。現実世界に戻っても、対戦のことは、あまり……覚えてなくて……」

「な、なる……ホド」

再度顔をコタコタ動かしつつ、ハルユキは素早く考察した。

今の顔の言葉を聞いた感じでは、「アツシユ・ローラー」は単なる演技ではなく、過激かつ苛烈な対戦を繰り返すために二つ目の……ことによるとお兄さんのバーンナリティを半ば無意識的に借りている、というような話なのだろうか? ハルユキ自身、加速世界では、気持ちがいっぱいになると普段は「僕」な一人称が「オレ」に変わり、口調も一・五倍ほど荒くなる……ことはある。



夢を込みかけたハルユキは、小さな空気の流れを感じ、視線を持ち上げた。

すると、レザーシートの上でかつてないほど前送した輪と、かなりの至近距離で眼が合った。たつぷりと潤んだ瞳は、虹彩が少し灰色がかっていて、まるで深い水底を覗き込んでいるかのような奥行きを感じさせた。

「……………でも、ひとつだけ、現実世界の記憶よりもクリアに、憶えていることが、あります」

輪の声は、相変わらずか細く途切れがちだったが、密閉された車内では直結ケーブル越しの思考音声なみにクリアに響いた。ハルユキは、再び急上昇しかけた心拍を抑えるために、この子はアツシュ・ローラー、この子はアツシュ・ローラー、と内心で何度も唱えた——のだが。

更に一センチほど顔を近づけ、あの世紀末ライダーの中身であるはずの少女は、弱々しくも熱っぽい口調で囁いた。

「それは……、あなた、初めてかい、互いに一度ずつ勝って、負けた、あの日以来ずっと……あなたの姿や、声が、私の中から消えたことは、あり……ません……」

「……………さかべ、さん……………」

どうにかクールダウンしかけていた思考がまたしてもレッドゾーンまで吹き飛び、ハルユキは瞳をひたすら高速開閉させた。視界がシャッターのように切り取られるたび、輪の潤んだ瞳が微妙に接近してくる気がする。

「あなたは……どんなハーストリンカーも、気に留めさえしなかった、内然機関バイクの構造的特徴を突いて、車を倒し……ました。兄も、よく言っていました……前輪が回るなんて、バイクじゃねえ、って。レベルが下の、しかもまだまだ初心者だったあなたに負けて、兄は悔しかったでしょうけど、内心では、喜んでもいた……と思えます……」

すでに顔と顔との距離は二十センチを切り、思考能力の九割を喪失したハルユキの脳は、輪の台座の奇妙さに気づけない。そして彼女もまた、自分が何を言っているのか——あるいは何をしているのかをあまり意識していないかの如く、継続的なニジリコリを続ける。

「……でも……何よりも鮮やかに、私の心に刻み込まれているのは……あなたが、翼を広げ、空を飛ぶ姿、です。誰よりも速く……空気の壁を貫いて飛ぶあなたは……まるで……まるで、サーキットのホームストレートを六速全開で駆け抜けていく、あの頃の……兄のようです……」

そこでついに、いままで奇跡的な均衡によって輪の腰毛に留まり続けていた太鼓の半が、ばりりと頬に転がった。

涙は、少年めいて尖ったおとがいかから滴り、ハルユキの丁シャツに落ちた。

「私は……加護世界の空を飛ぶあなたを見るのが、好きでした。あなたと対戦して、地面を全速で走りながら、最んでいくあなたを追いかけるのが、好きでした。スピード、という言葉を、純粋に体現したような……あなたの姿は……」

声が震え、おななき、途切れる。輪が眼を伏せると、立て続けに幾粒もの涙が滴り落ちる。一度大きく息を吸い、数秒間溜めてから、輪は突然凄惨な色合いを帯びた声で続けた。

「なのに、それなのに……………私の、後先考えない、愚かな行動が……………あなたを……………危険な状況に……………追い込んで、しまった……………」

——え、何のこと？」

と一瞬首を傾げそうになってから、ハルユキはようやく自身の窮地を思い出した。

怒りに突き動かされるまま《鬼情の籠》を召喚し、完全融合して六代目クロム・ディザスターとなり、かくなる上はレギオンを守るために自らバーストリンカーとしての命に犠を引かねばならない——というこの現状のさっかけとなったのは、確かに輪の言うとおり、無制限中立フィールドでアツシュ・ローラーの死亡シーンを見たことなのだ。

そして、アツシュがオリーブ・クラブ以下六人のISSキット装着者たちに繰り返して行われる羽目になったのは、彼（あるいは彼女）が悪臣であるスカイ・レイカーの指示を無視して、合流時間より早く無制限フィールドにダイブし、しかも内部で危険な単独長距離移動を行ったためと言わねばならない。

だがその理由は、自分の弟分であるアツシュ・ウータンを助けようとしたからだ。オリーブと同じくISSキットに寄生され、しかし己の意志でその支配を断ち切ろうとしたウータンを平助けるために、アツシュは独断で動いた。そうせざるを得なかった。その行動を、いったい

誰が責められようか……………」

「あ……………」

そこまで考えたハルユキは、ようやくもつと早く確認しておくべきだった事柄に思い至り、至近距離まで身を乗り出す輪に訳ねた。

「き、君と、フツシュ・ウィタンは、無事にポータルから脱出できたの……………」

「……………」はい。あなたの指示どおり、蘇生したらすぐにウィークンと一緒に渋谷駅まで走って

……………」

「そ、そうか……………」良かった……………」

ハルユキが、安堵のため息を漏らしかけた、その時。

俯けられていた輪の頸が揺れ、傾き——丁シヤツの腕に、とすん、とぶつかった。

ひとたまりもなく完全凍結状態に陥るハルユキの背を、小さな左手が優しく、しかし確かな圧力で押さえる。表面的事象のみを側面に描写すれば、車の中、二人きりで抱き合っていると見えなくもない状況に、(この子はアッシュさん)の既文も効力喪失。臨内タロットは極限まで低下しているのに、心臓は最高速でビートを刻みまくりというのは、ブレイン・ハーストの精神加速ロジックと矛盾してはいるまいか——。

残されたなけなしの算考力で、ハルユキがこの際どうでもいい考案を繰り広げていると、密着した体を通して消え入るような声が聞こえた。

「私……、見ました。あなたが、私とクーくんを助けるために、素晴らしい強化外装を召喚する……ところを、あれは……（異物の箱）、ですね？ 私さえ、邪魔をしなければ、今日のうちに浄化できるはず、だった……」

「……………」

イエスともノーとも言えず、ただ口を開閉させる。呼吸器のすぐそばにある瞳の髪は細く、艶やかで、花の香りがはのかに漂ってくる。

それを嗅いでいるうちに、ハルユキは、胸の奥から奇妙な感覚が急激に湧き上がってくるのを自覚した。焦りにも、不安にも似ているが、少し違う。この、柔らかな針に突き刺されるような切ない疼きは――

「……………私が、私だけが、助かって……あなたが、加速世界の空を、飛べなくなるなんて、そんなの……間違っ、ます」

ハルユキが、無意識のうちに両手で何らかのアクションを行いそうになったその寸前に輪の言葉が再開され、焦りく手は空中で止まった。

「……………だって……私が、いままで、美しくも残酷な、あの世界で戦い続けてこられたのは……あなたが、いたから。（前世）ステージの夕焼けや、（世紀末）ステージのかかり火を反射しながら飛ぶ、あなたを見ていたかった、から。学校の、行き帰りのバスの中で、今日は私から盗入しようかな、それともあなたから盗入してくれるかな、って考えるのが、楽しみ……だ

2005

そこで、かみくも熱っぽい声を追加れさせ、輪は鎖を上げた

涙でしとどに濡れる両眼でまっすくにハルユキを見詰め——あのアダシユ・ローラー、暴走世紀末ライダー、ヒヤハハアでメガラッキイーな水溜のライバルであるはずの少女は、校色の唇からそのひと言を發した。

Figure 1

瞬間、ハルエキの全生体活動が停止——少なくとも主観的には——し、今まで輪のまきやかな重みを支えていた腹直筋とは背筋が弛緩した。

ときり、と音を立て、二人はハルエキを下にしてリアシートに倒れ込んだ。イタリアの名レーカー製ドラフトバタは、後部にも十分な広さがあったが、さすがにハルエキの頭がドアの内張りに多少ぶつかった。しかしそんな衝撃など、存在しないも同然だった。体の前面をくまなく覆う接触感と、告げられた言葉の透徹力が、ハルエキの魂を肉体から軽く離脱させてかけていたからだ。

TABLE 1

完全に裏返り、擦れきつてはいたものの、どうにか肉声で応答できたのはほとんど奇跡と言

うべきだろう。

「でも、僕、リアルじゃ、こんなだし」

この期に及んでそんな台詞を吐いてしまう自分を情けなく思う余裕すら、今のハルユキにはない。そして俺もまた、体を引くどころかいつそう密着させながら、低声で囁いた。

「私……、ほんととは、しばらく前から、あなたのリアル、知ってた……んです」

「え………、ど、どうして」

「だって、あなた、環七通りで対戦したあと、いつまでもアバター出現位置の、参道橋の上に、立ってるから……。私、あなたの下を、バスに乗って、通ったんです」

「……………」

これにはもはや返す言葉もない。オープンなバブリック・スペースで対戦したら、終了し次第移動するのは初歩中の初歩だ。しかしハルユキには、対戦があまりにも過熟した名勝負になったりすると、バーストアウト後にしばらくぼーっと戦いを回想してしまうという悪癖がある。どうやらそこを、輪にバスの隠滅しにばかり指摘されていたようだ。

「でも……………なら、なおのこと……………リアルを知ってるなら、なんで……僕なんか……」

「だって……あなたには、翼が、あるから。デュエルアバターだけじゃなくて……現実世界の、あなたにも、ちゃんと。私には、その翼が、はつきり……見える」

ハルユキの背中に回されたままの輪の左手が、背中の中央をゆっくりと撫でた。

何とも言い難い感覚が、つま先から頭までをつばまでを貫き、ハルユキは息を詰まらせた。

輪は、ハルユキの首もとに、いまだ乾かぬ涙をばた、ぼたと落としながらとろけるような微笑を浮かべ、言った。

「あの日から、私……もし……もしいつか、リアルであなたと会えたら、ちゃんと言おうって決めてた、んです。好きです、って。あなたがレベル1の頃から、ずっと好きでした、って。

……言えて、よかった。最後に……こうして、二人きりになれて……本当に、よかった」

「え……さ、最後……って……」

果敢と問いかけたハルユキに――。

目下、部輪という名のほとんど知対面の少女は、大きく一度息を吸ってから、表情と声を毅然としたものに变えて告げた。

「あなたが、石喚びしてしまった《世間の鏡》は……私が、消します。私の体で……私の心で……消して、みせます」

「それ……って、どういう、意味……」

「あなたの怒り、憎しみ、それら全てを、私が受け止め、ます。大丈夫……あなたになら、何をきかれても、こわく……ない」

ハルユキの背中から離れた輪の左手が、自分の首に装着されたバステルダリンのニューロリンカーを引き抜く。すかさず右手が、すっと持っていたメタリフタグレーの――元々はお兄

さんの持ち物だったというニューロリンカーを再検査する。

アームロッタが、細い首を優しくホルドするや否や、空になった輪の右手が閃いた。

ボーチから取り出したのであろう細いXSBケーブルの、片方の端子を自分のニューロリンカーに。そしてもう一方を、ヘルユキのそれに。

何と言う暇も、するタイミンクもなかった。視界に深紅のワイヤード・コネクション警告が浮かび、消えたその瞬間——ほとんど互いの臂が触れあうほどの距離で、輪が強いコマンドを囁いた。

「バースト・リンク」

あらゆる運命、当惑、そして名付けられない甘辛い疼きを、バシイイイッ！ という思考加速音が押し流していった。

HERE COMES A NEW CHALLENGER!!

ゆらめらと舞える文字列が眼前を鮮やかに横切り、消え、訪れた仮想の空間を落下していく間も、ハルユキは自分が次に見るであろうスナージの姿を強烈に予感していた。

やがて、金属質なアバターの足裏が、硬い地面を捉える。降下感覚が消えるまで待つて、そつと体を持ち上げる。

場所はもちろん、自宅マンションB2Fの、広大な地下パークキングダから動いていない。

しかし、現実世界では整然と並んでいた色とりどりのE.V.たちは、一様にひしゃげ、焦げ、錆び、朽ちている。すぐ左横に煩座する椅子の愛車——であつたらう黄色いコンバクトカーも、ボンネットが割き取られてむき出しのエンジンルームからちろちろと小さな火を上げる無残な姿だ。

対戦は始まったばかりなのだから、誰が壊したというわけではない。見れば足下のコンタクトも細かくひび割れ、太い柱や壁も崩れて内部の鉄筋をさらけ出している。おそらく、外に出ればマンションそのものも半分程度は崩壊し、中には入れないはずだ。この（終わった敵軍）

のイメージこそが、ハルユキの予感した、『世紀末』ステージの本質なのだ。

と、その時――。

二十メートルほど離れた薄闇の向こうで、どろんっ――と野太い機械の吐き声が聞こえた。すぐに、Vツインエンジン特有の不等間隔なアイドリリング音が続く。丸腰のヘッドライトが点灯され、温かな黄色みを帯びた光が、ハルユキのアバターを照らし出す。

反射的に自分の四肢を見下ろしたハルユキは、そこに存在するのが、シルバー・タロウの細く滑らかな銀色の装甲甲であることを確かめ、小さく息を吐いた。強化外装（サ・ディザスタ）は常時装着型ではないのだから、ボイスコマンドで降はなければ出現しない――はず……。

「……………」

だが、次の瞬間、ハルユキは自分の肩胛骨が甘かったことを痛感させられた。

シルバー・タロウは、完全には元のままではない。両手の、本来ならば殴り合いには不向きなほど華奢なはずの十指は、先端がナイフのように尖った鉤爪形状に変わっている。足先にも左右二本ずつの爪が残り、コンタリートに深く食い込む。慌てて手で頭を触ってみたところ、ヘルメットはもとの丸い形を留めているようだが、両のこめかみのあたりにバイザーの名残らしき突起が引つかる。

やはり――（鎧）は、もはや単なる強化外装の域に留まらず、デュエルアバターそのものと融合しようとしているのだ。ハルユキの感傷や行動がトリガーを与えれば容易に暴発し、あ

つという間に荒ぶる破壊者へと変わってしまっただろう。

そう認識し、体をふるりと震わせた遠境、宵中の奥深いところであいつがハルハ……と低く、しかし益々しく唸るのが聞こえた。戦いと戦線を予感し、短い眠りから目覚めようとしているのか。

——おい、（眠）。

——せめてこの一戦の間は、お前はおとなしくしててくれ！

懸命に語りかけ、自分が今のところはどうか自分のままであることを確かめ終えてから、ハルユキは前方のヘッドライトに向けて語りかけた。

「あの……、アツシム……さん」

強烈な光の奥に浮かぶライターのシルエットは、無言のまま、ただじつとハルユキを見詰めているようだ。周囲のあちこちで燃える車の残骸が、傷跡を模したヘルメット・シーマドを、時折オレンジ色に光らせる。

……あのガイコツの下が………実は、同じ年の女の子だったなんて。

……しかもその子から………告白、されちゃうなんて。

ハルユキの約十四年の人生に於いて、異性から真剣な告白を受けたのは、これが二回目だ。

一度目は、もちろんレジオンマスターであり剣の主であり（父親）でもある黒澤姫。暴走車の突進からハルユキを庇ってくれるす前、彼女は言った。「ハルユキ君、私は君が好きだ」と。

あの時は……いや、もしかしたら今も、なんて思書（しよ）に先單（せんたん）ほどの人がこんな僕を——という思いを完全には拭（ぬ）えていない。もちろん氣持ちは天にも昇るほど嬉しいし、ハルユキ自身も当然思書（しよ）のことは大好きだ。

だがその感情は、今のところ、（崇拜）とか（敬慕）とかいうカチ、ゴリに分類されるもののように自分では思える。いつか——今はまだちんちくりんの丸っこい泣き虫の意氣地（いきぢ）なだけでは、もしいつか彼女に相応（あうおう）しいと思えるような人間になれば、その時こそちゃんと返事をしよう、という言わば自衛（しゑい）モードを凝（こ）めているため、実はハルユキ自身は、思書（しよ）に自分の気持ちを明確な言葉にして伝えたことはない。

そして、数分前。

完全密閉された狭い車の中で、ハルユキは、人生二度目の告白を受けてしまった。目下（げげ）部輪（ぶりん）は、一切の留保なく、軍事的欺騙（きぼん）の割り込む余地のない肉声で、好きです、と言ったのだ。

どう反駁（はんぱく）すればいいのか、それ以前にどう受け止めればいいのかすら、ハルユキには解（と）らなかつた。ただ、突然の直結（ちけつ）封戦（ふうせん）によって生身（なみみ）からデュエルアバターへと変身（へんしん）したことで、わずかなから顔の冷却に成功したようだ。

アツシユ・ローターの中身が、輪（りん）という名前の少女だったこと。

その輪（りん）から、全力で告白されてしまったこと。

以上二点は、とりあえず指（さ）く。今更（いま）つ先に考えるべきは、輪（りん）の最後の言葉だ。彼女は、急調（きうてん）

の鐘は自分が消してみせる、と言った。しかしハルユキの知る限り、アッシュ・ローラーには「浄化」に類するアビリティは存在しない。

ということとは、その後に続いた、あなたの怒りと憎しみを全て受け止める、という言葉とおり——彼女は、我が身を《鐘》への言わば供物として捧げることで、破壊者クロム・ディザスターを鎮めるつもりなのではあるまいか。ディザスター復活のきっかけを作ってしまった責任を、そういう形で取ろうと考えているのではあるまいか……。

「……………アッシュさん……………いや、輪さん」

ギヤラリーの存在しない直結対戦フィールドであるがゆえに、ハルユキは取って相手のリアルネームを口にした。

「僕を……助けようとしてくれる、その気持ち嬉しいよ。でも——《英雄の鐘》のことは、君が責任を感じる必要はないんだ。この鐘、いや楳は、何ヶ月も前からずっと僕の中にいた。それを、僕が感情に任せて呼び出してしまっただけなんだ……」

楳々しく尖った右手の鉤爪をちらりと見て、ハルユキは尚も言葉を続けようとしたが、それを重々しくも穏やかなエンジン音が遮った。

とるるん、と内蔵機関が震え、発生した動力が分厚いリアタイヤをゆっくりと回転させる。二十メートルほど先の闇の中から、巨大なアメリカンバイクがその姿を現す。鋼鉄の騎馬にまたがる細身のライダーは、両手をだらりとハンドルに乗せ、スカルフェイスを深く俯けていて、

表情が見えない。

「輪、さん……………」

ハルユキが、再び呼びかけようとした——その瞬間だった。

黒車のクローブが、バイクのハンドルをがしつと力強く握った。右手でアクセルを煽りつつ、左手でクラッチを離く。エンジンが暴発じみた咆哮を轟かせ、リアタイヤが強烈な空転によって白煙を上げる。

「……………り、りん、さん……………」

果敢と、ハルユキは三度名前を呼んだ。だがそれ以上、何を言う余裕もなかった。十メートルの至近距離から、巨大なアメリカンバイクが、前輪をわずかに持ち上げながら突っ込んできたからだ。

左には親子の車。右には巨大なSUV。逃げ場ゼロで立ち尽くすハルユキを——バイクは、でこーん！と音もなく襲った。正確には、跳ね飛ばした。

もはやワケが解らず、受け身を取る精神的余裕もないまま、数メートル後方の床にお尻から落下する。火花を散らしながらバウンドするハルユキの眼前に、再び迫る灰色のタイヤ。

でこーん！ がしやーん！

でこーん！ がしやーん！

という衝突音と落下音の組み合わせが、広大な地下駐車場に、更に二度響いた。三度目は、

ハルユキは叫んだ。これが叫はずにいられようか。

マシンごとのし掛かり、スカルフェイスの服高に怒りの炎を離々と燃やすデュエルアバターを動かしているのは、(兄)ではなく(妹)のはずだ。輪は確かに言ったではないか。彼女の兄である、日下部輪太という名の若きCCGPライダーは、二年前のクラッシュ以来病院のベッドで昏睡を続けている、と。

ならば当然、バーストリンカーとして加速世界にフルダイブすることなど不可能だし、そもそもハルユキを後部座席に押し倒しつつ直結・加速したのは間違いない妹の日下部輪なのだ。それは、彼女が本当に見た目どおりの女子中学生なのかどうかを、何らかの手段によって確認したわけではもちろんないが——そしてまた輪が自分を女性だと明言したわけでもないが、でもだからと言って、この状況でアッシュ・ローラーに「妹に手を出した」などと糾弾されるのはあまりにも過不慮すぎる……

「あ、あの、きさき君、輪ちゃん……だよ、ね？」

胸部装甲をみしみしと軋ませる前輪の重みに耐えながら、ハルユキは囁き声でそう問い質した。対する、世紀末タイダーの答えは——。

「輪、ちゃん、だとおおオ？ てんめ二、陣に断つて妹をファースト名前で呼んでやがんだーセカンド名前、いやサード名前でもまだテラ早エぞこの野郎——」

……(ファーストネーム)に対応する単語は(ラストネーム)です。

と、いつもならツツコミを入れるところだが、今はとてもそんな余裕はなかった。バイク乗りが見せている怒りは、ロールプレイの域を遥かに超えている。どうやら、現在アッシュ・ローラーの中に存在する人格は、明らかに妹・輪ではなく兄・輪太のものだ。というか、今まで加速世界でハルユキと戦い、罵り合い、時として語り合ってきたのは全て兄のほうだと考えるべきだ。

つまりこれは……いわゆるひとつの「二重人格」？ 日下部輪という少女は、加速世界にタイプすると、兄に関する記憶、つまり思い出から作り出した二つ目の人格に切り替わってしまうのか……？

そんな思考を超高速で繰り返していったその時、大衛星タメージによってじわじわ減り続けていた体力ゲージが十分に半分を割り込み、黄色く変わった。

途端、背中の中であいつがもう一度、不機嫌そうに唸ったのをハルユキは聞いた。いけない、このままでは、せっかく無制限中立フィールドでアイアン・バウンド及びグリーン・ドラゴン相手に大勝して、ひとときの取りに就いてくれている（獣）が目覚めてしまう。輪は対戦前に、我が身を差し出して、兎撞の鎖を鎖めるといふ意のことを口にしていたが、まさかそれを実行してしまうわけにはいかない。まずはこの押し潰され状態から脱出し、とにかくアッシュと会話ができる状況を作らねば。

「あ、あ、ああああの、アッシュさん……いえ、お兄さん!!」

両手で巨大なタイヤを持ち上げようと苦闘しながら、ハルユキは無我夢中で叫んだ。

「そ、そ、そその、輪ちや……じやない、妹さんを、ええと、そのお………」

頭上の世紀末ライダーの中にあの少女の人格が存在するのなら、どうにか呼び出し、交代させられないものか。そんな意図が、混乱しきった思考回路を通過する間に妙な変換処理を施されたか――。

「い、い、いいい妹さんを、僕にください」

——というような囁きが、ハルユキの口から進った。

それを聞いたアツシユ・ローラーの両眼が、びかつと赤く光った。いや燃え上がった。

「なシ………だとオオ………」

「あ………いい、いえ、えっと、その、僕が言いたいのは」

「黙………らっ………シヤラアアアア——」

足踏にも似たアツシユ節が響き渡ると同時に、腕組みを解かれた両手がガツと左右のグリップを握んだ。ひと廻りされたVツインエンジンが、強烈なエキゾースト音をまき散らす。

「てめーは——オレ様の！ 怒りのラジエータを真つ赤にオーバーヒートさせたアリ」

傷痕の口元から、白い湯気がぶしゅーつと噴射された——ような、気がした。

二本出しのマフラーから炎が長々と伸び、ハルユキを押さえつけていた前輪が高々と持ち上がった。あれに再度直撃されたら、体力ゲージは一気に危険域まで減らだらう。ハルユキは

この隙に脱出せんと両手両足をしゃしゃか動かすが、アバターの背中側がコンクリ床に十センチもめり込んでいて外れない。

「わっ、わっ、待った、ストップ、ジャストアモーメント!!」

そんな悲鳴を、怒りに燃えるお兄様が今更氣に留めるわけもなく。

轟然と落下してきた分厚いタイヤは、ハルユキのヘルメットを粉々に打ち砕く——その寸前で軌道を変え、すぐ右側に停まっていたドイツ製高級車のボンネットを直撃した。鉄の浮いていた鉄板がひしゃげ、内部から爆手に火柱が立つ。

それはすぐに収まり、ちろちろ揺れる残り火を車体のクロームメッキに反射させながら、アグニュー・ローラーはほんの少しばかりトーンの落ちた声で呟った。

「……てめーもこうしてやうてゑのはソーマウンテンだが……」

ハルユキは少し考え、ああ（やまやま）のことと、と納得。

「……カラス野郎、てめーにはさっき、無制限中立フィールドでつけと借りを作っちゃったからな……ここは、こんでれーにしろってやる。バットかし! これ以上妹に近づいてみる、今度はこそでめーを焼き地……いやツクメにしてもちゃんこ鍋に入れっからな! アーユーアングスタン!」

「わわわわ解りましたイエッサー!」

反射的にびしっと敬礼し、続けて体を床のくぼみから引きはがして、ハルユキはやっと一息

ついた。顔を上げ、同じくバイタの車輪を床に戻したアツシユ・ローラーの調整マスクをまじまじと眺める。

やや迷いはしたものの、これだけは今どうしても試いておかねはならないと思えた。ゆえにハルユキは、床に座り込んだまま、大きく息を吸い、口を開いた。

「それで……その……アツシユさん。あなたは………いったい、**（誰か）**なんですか……？」

少し離れた場所に懸座していた、やけっぱちのように巨大なアメリカ製セダンのボンネットに、ハルユキとアツシユ・ローラーは並んで腰を下ろした。

視界上部のタイムカウン트는すでに六百秒——十分を刻んでいる。そして、現実世界でハルユキが自宅を飛び出してきてからは、そろそろドアの緊急ロックが解除される十五分が過ぎようとしているはずだ。レギオンの仲間たちから距離を置き、単独で**（実験の場）**に決着をつけるつもりなら、すぐにでも地下パーキングから走り出てマンシヨンの敷地外を目指さねばならない。

だがハルユキは、アツシユ・ローラーというバーストリンカーに格められた**壁**が叩かされない限りは、この対戦フィールドから出るつもりはなかった。単なる好奇心——が**（何事）**とは言わないが、それだけではない。加速世界の土を踏んでからのこの八ヶ月で、数限りなく対戦しては勝ったり負けたりしてきた、言わば**（最大のライバル）**が向こうからリアルを明かしてきた

以上、許される限りの事情を理解しようと努めるのは義務だと思っからだ。

幸い、《獣》はまだ浅いまどろみに身を委ねている。これ以上戦わなければ、この対戦中に覚醒することはあるまい。広大なボンネネットの左側に腰掛け、脚を小さく揺らしながら、ハルユキは辛抱強くアツシユの言葉を待った。

やがて――

「……………こいつは、レイカー師匠の推測だけだな」

そんな、やや唐突な台詞が、世紀末ステージの舞臺を揺らした。

「オレたちバーストランカーが、加害世界でこうして戦ったり、話したりした記憶は……………その全部が、白蘭の脳ミソに保存されるわけじゃねーんじゃねえか、ってな…………」

「え…………ええ!? 記憶が脳にセーブされなきゃ、いったいどこに行くって…………」

仰天しつつそこまで叫んだところで、ハルユキは一度口をつぐんだ。もう一度聞き、おそろおそろ、思いついたことを言葉にする。

「……………もしかして、ニューロランカー……………ですか?」

「イエス。もちろん、一切合切全部じゃねえ。あるカタマリの記憶を再生するのに必要な、言わば《鍵》みてえなバースツだけが、脳じゃなくニューロランカーに保存されるんじゃねーか…………と、そう師匠は考えてるみてーだ」

アツシユの言葉をしばし咀嚼し、即座にぶんぶんかぶりを振る。

「で、でも、それでもおかしいですよ。だってそれじゃ、僕らはニューロリンカーを外してる時、加速世界のことを一切思い出せないってことになっちゃう」

「ニューロリンカーを外す、か。だがよクロウ、どこから外すんだ？」

「そ、そりやもちろん前からですよ」

「サツツライ、首なんだよ。頭……もつと言や、(脳)じゃねーんだ。あのマシンは、オレたちの脳と無線で通信してんだよ」

そこで言葉を切り、アツシユ・ローラーは、自分のヘルメットの天辺と首部分を、革手袋の指で交互にコツコツ叩いた。

「確かに、ちゃんと首に装着しなきゃ普通は起動も通信もできねーよ？ でもそりや、マシンが脳との距離だの信号だの固定して、ロクタを掛けてっからだ。知ってっか……って、オレも既に教わるまで知らなかったんだけどな……ニューロリンカーが市販される前の大型実験機、言はソウル……何とか言っただけで、そいつは最終的に、十メートル離れたところから被験者の脳と接続できたんだと」

「じ……じ……十メートル？」

再び驚愕し、ハルユキは頸部の下で口をばくばくさせた。

もしそれが本当なら——そして現行のニューロリンカーにもその性能が存在するなら、そもそもあの機械を首輪よろしく延頸部に装着する必要などないということになる。胸でも、

いやいつそポケットや靴の中でも、運びやすいところに付けたり入れたりしておけるではないか。——ていうか、僕みたいな汗っかきには、夏場は蒸れてつらいんだよ。いくらインナーパッドをメッシュのにしても、すぐびっしょりになっちゃって、小学校の頃なんか「アリーブーの汗しほり」とか言われて散々からかわれ……」

「い、いや、そうじゃなくて」

悲しい記憶を辿りその外まで張り飛ばし、ハルユキは懸命に思考を立て直した。

「ええと……じゃ、じゃあつまり、アツシさんの言いたいのはこういうことですか？ ニューロリンカーは、たとえ僕らの首から外されてる時でもコアソリ脳と通信してて、加速世界の記憶がちゃんと再生できるようにしてる……って……」

「あくまで副匠の仮説だよ。でもよ……そうしなくても考えねーと、オレが今こうしてオレとしてここに存在することに、説明がつかねーんだよ」

その台詞に、ハルユキはこくりと生唾を呑み、擦れ声でおそろおそろ確認した。

「……ということとは……あなたはやっぱり、輪ちゃ……じゃない、目下部輪さんのお兄さん……も……CGPライダーだった、目下部輪太さん、なんですか……」

答えは、たっぶり十秒以上も戻らなかった。

アツシ・ローラーは、鈍い顔色の顔が打たれた左右の重手袋をじっと見つめ、やがて手の甲を上に向けた形で、何かの感觸を試すかのように何度か開閉した。

「……………解らねえ。アイハブノーアイデア、だ」

ぼつりと呟く。その返しは、ハルユキにはやや予想外だった。なぜなら彼は、さつき間違はなく輪のことを鉢だと言っただけではないか。

ハルユキの訝かしむ視線を受け、ライダーはぼつり、ぼつりと言葉を繋げた。

「少なくとも……………オレが現実世界でマジモンのGPライダーをやったって記憶はねえ。それどころか、オレには、バーストリンカーになる以前の記憶がすっぱり存在しねえんだ。いちばん最初の記憶は……………このデュエルアバターが、不器用に戦うのを見てるシーンだ」

「え……………み、見てる……………？ 外から、ですか……………？」

「イエス。最初の対戦では……………このデュエルアバターを動かしてんのは、間違いないけど……………輪のヤツだったはずなんだ。そしてオレは、そいつを近くから見てた。キヤララーじゃねえよ……………なんつうかその、背後霊……………つての？ すぐ近くで、透明になって、ふわふわ漂きながら……………」

そこでハルユキは、思わずビクッと体をすくませた。アツシユ・ローラーの、恐らく子供が見れば泣くだらうガイコツ顔にちらちら視線を送りながら、擦れ声を漏らす。

「……………お、おはけ？」

「ち、違っつてえの！ 長くてカッケエ脚が二本あんだろオラー！ つうか脚がなきやブレーキンタもシフトチェンジもできねーよ!!」

黒いライターブーツの踵が、ベンチ代わりになっているアメ車のフロントバンパーをはこん

と飛び飛ばすと、錆び錆びのナンバープレートが外れて床に落下し、ポリゴンの欠片を散らして消えた。

「と、ともかくだな……。その初対戦の時、オレは空中に浮きながら思ったんだよ。輪のヤツ、何をモタモタやってやがんだ、ってな。それが、いまオマエと会話してる、このオレの最初の思考だ。アイツが、きこもねえ手つきでバイクを操縦してんのを見て、いても立ってもいらなくてよ……。後ろから近づいて、タンダムになって、バイクってのはこう乗るんだよ、って教えてやってるつもりが、いつの間にか……………」

「……………一体化してた……………」

おそろおそろ訊ねると、アサシユはゆっくりとヘルメットを縦に振った。

「オレは……正直なとこ、オレがいつたい何者なのか、正確には理解できてねえ。確かなのは、このデュエルアバターを創ったのが《株》の《目下総輪》だつたことだけだ。だから、たぶんオレは輪の《見貴》なんだろうさ。でも、そいつがいつたいどういうことなのか……。——

どっかの病院ですつと寝てるつう《目下総輪太》が、手前エのニエーロリンカーと超遠距離接続して、こうして話してるのか？ それともオレは、輪がこの世界で戦うために作り出した飯場の人格なのか？ どんだけ考えても答えは聞ねえ……」

小さなため息。両足のごついブーツを、まるで小さな子供がするようにぶらぶら揺らしながら、謎多きライダーは独白を続ける。

「もし仮想人格のほうが正解なら、オレつつう人間は実際には存在しねえってことになる。……でもな、タロウ。オレは、いっそそのほうがいいって思ってたんだよ……」

「え……そ、そんな………だってそれだと、もしかしたら、いつか………」

今の《アツシユ・ローラー》は消えてしまうかもしれない。

ハルユキが口の中に吞み込んだその言葉が、アツシユにはちゃんと聞こえたようだった。ごく小さく鎖き、呟くように言う。

「いいんだ、それでも。——だってよ、仮にオレが本物の白下那輪太なら……オレは、チャンビオンライダーになるつつう手前エの夢が事故って燃えて消えちまったのに、その燃えカス………灰になっちゃったタイヤを諦め置く転がすために、妹………繪の意識、いや魂を利用して………灰になるじゃねえか。年齢的に、バーストリンカーになる資格すらねえのに、妹に乗り移ってこの加速世界で暢気にバイク転がしてるつつうことになるじゃねえかよ。ゴメンだぜ、そんなのは……。アイツには……アイツ自身の、走るべき道があるはずなのによ………」

きつく握りしめられた拳が、自分の膝を思い切り殴りつけようとした。しかし張り下ろされる寸前、ハルユキは反射的にその手首を右手で握んでいた。

「違う……それは違うよ、アツシユさん」

銀色のヘルメットを左右に何度も振る。

「僕らは……現実世界でなくした物や、諦めた夢の代償行為として、この加速世界で戦って

るわけじゃない。自分の傷や病きと向き合って、受け入れて、もう一度前に進むために……そのために、僕らはここにいます。あなたが本物の目下部長太さんであろうとなかろうと……あなたはこうして、ここに存在してるんだ！ 存在して、僕や、他のバーストリンカーたちも、何百回もの対戦を繰り返してきたんです！ それだけは……その記憶だけは、幻でも仮想でもないはずですよ……！」

自分で言っていることながら、ハルユキは、はたして己が何を主張しようとしているのかよく解らなかつた。

昏睡する兄を導く少女・目下部長と、彼女の兄が使っていたというニューロリンカー、この二つが重なって生み出したある種の《奇跡》がアツシュ・ローラーというバーストリンカーなのかもしれない。だとすれば、奇跡であるがゆえの不安定さによって、彼はいずれ今の後ではなくなってしまうのかもしれない。

でも――、そうだとしても、シルバー・タロウとして、初めて戦い、負け、勝った相手がアツシュ・ローラーなのだという事実は変わらない。それだけは、絶対に。

自分の胸に満ちるものを、これ以上どう言葉にしていいいのか解らず、ハルユキはただ懸命にアツシュの左手を握り続けた。

バイク乗りは、腕を引くでも押すでもなく、ただ無言で自分の手首を握むシルバー・タロウの手を見詰め続けていた。かつての細く圓々しい指ではなく、凶悪な鉤爪へと変じてしまった

その手を。

「オレは……、さっき、無制限中立フィールドで、ポイント全損を覚悟した」

不意に、静かな声。

「オリーブ・クラブたち六人の攻撃力は圧倒的で……多分相手がオリーブ一人でも、手も足も出なかつたろうな。とうにかウー・タンの奴だけは逃がそうとしたけど、それもできねえで……。ここで二人、加速世界から消えんのかつて思ったよ。元からいるんだかいねえんだか解んねえオレだけが消えるならまだしも……やつと目を覚ましたウーと、そしてこのア・バターのどつかにいるはずの輪まで消えちまうかと思ふと……悔しくてよ……。——でも、そんなとき、オマエが来てくれたんだ。(黄緑の輪)を召喚したら、手前エがどうなつちまうか解つてたはずなのに……それでもオマエは、鐘を呼び、その力でオレとウーを助けた。そんな時よ……オレ……鐘はどうあれ、バーストリンカーになれて……この世界で戦つてこられてラッキーだったな、つてさ……」

これまで臨々とした態度を崩したことの無い世紀末タイダーが、わずかにせよ言葉を詰まらせる様子を見て、ハルユキもまた胸に鋭い痛みを感じた。

アッシュは照れくさそうにスカルフェイスの鼻のあたりを右手で擦ると、声の調子を戻して続けた。

「ウーの奴も、ポータルから出る前に、言つてたよ。シルバー・クロウに、「ありがとう」っ

て伝えておいてくれ、ってな。それと……」「ごめんでヤンス」も。アイツも、ようやく解ってくれたみてーだ。強さってのは、与えられるモンじゃねえってことがな……」

「そう……ですね。強さは、ただ過程の中にこそ……。何度負けて、遠いつくばっても、諦めずに空を見上げることが……強さの証明……」

ハルユキが、吸い込まれるように咬いた、その瞬間だった。

いままでシルバー・クロウの右手に握られていたアッシュ・ローラーの左手がくるりと回り、逆にクロウの手首を捉えた。

ハルユキは、鈍感状に凝じた自分の手を見られまいと、反射的に振りほどこうとした。だが、黒いレザーグローブはがっちりと固定され、小揺るぎもしない。アッシュ・ローラーは、その体勢のまま、鋭鋭シールドの奥から真剣な眼差しでハルユキを凝視して言った。

「そうだ、オレも師匠にそう教わった。——だがなクロウ、それは、今のオマエ自身にも言えることなんだぜ」

「え……………今の、僕……………」

「そうだ。オマエは、もう《翼の鎧》を自分のデュエルアバターから分離することはできねえって考えて、手前エこと消しちまうことでケリをつけようとする。そうたる」

正論を射るアッシュの言葉に、ハルユキはただ小さく頷くことしかできない。

こうしている今も、《鎧》が浅い眠りから覚め、暴れ出しそうな光が音の奥でちらり

と弾けている。ひとたびダイザスターとして覚醒すれば、ハルユキは目の前のアツシユ・ローラーに猛烈と襲いかかるだろう。そうせずに踏みとどまっていられるのは、ここが《敵》本来の狩り場たる無制限中立フィールドではないから。そしてハルユキの中に闘争心が存在しないからだ。

しかしその危うい均衡は、いつ破れてもおかしくない。仮にアツシユ・ローラーが今、敵意に満ちた本気のパンチを一撃でも繰り出せば、ハルユキは——いや《敵》はそれに敏感に反応するだろう。そして、ダイザスター化するたびに融合は深く進行していく。帰還不能地点がどこなのかは解らないが、先代ダイザスターことチュリー・ルークの例を見ても、現実世界の有田春雪自身が精神干渉を受けるようになるまで、そう長い時間はかかるまい。

だからこそ、ハルユキは自宅のドアをロックし、一人走ったのだ。もしシコッピンダモールのど真ん中でアツシユ・ローラーの本体こと日下郎雄に捕獲されなければ、今頃はどこのダイブカフェから無制限フィールドに飛び込んでいたはずだ。

そんなハルユキの意図を感じ取ったか、アツシユは一時小さく俯いた。だがすぐに顔を上げ、静かな、しかし毅然たる声を発する。

「……タロウ、オマエがそう考えるのも、解らなくもねえ。でもな……、こうは思わねえかよ。タロウ・ディザスターになつちまつたことさよ、過程の一部だ、つてさ。オレには……《敵》がオマエに留ったのが、単なる偶然とはどうしても思えねえ。オマエになら、加害世界

にすーっと續いてきたその呪いを破れるから……だから、オマエが選ばれたんだって、そう思えるんだよ……」

その言葉を聞いた途端、耳の奥に、誰かの声が遠くあえかに響いた。

……だいたいようぶ、あなたなら、きっと、できるよ……。私が、長い、長いあいだ待ち續けていたあなたなら……

しかしハルユキは、顔面の下できつく両眼を閉じ、その声を記憶からぬぐい去ろうとした。根拠のない直感ではあるが、かつてハルユキにその言葉をかけてくれた《彼女》は、《彼》が助起している時は出現できない。つまり、災禍の鐘を再び蘇子状態にまで戻せない限り、二度と会えないということだ。そしてそれは恐らくもう不可能。

――僕は、あの人の期待も、裏切ってしまったんだ。

そんな苦い認識を噛み締めながら、ハルユキは小さく呟いた。

「……残念ですけど……僕には、《災禍》の呪いを破るなんてことは無理そうです。僕は……オリーフ・クラブたちに攻撃されてるアツシユさんとウータンを見た時、助けたいと思うより先に、攻撃者への猛烈な怒りを感じました。そして、その怒りが溢れるままに、鐘を召喚してしまった……。アツシユさんたちの蘇生を待たずに移動したのは、あのまま留まっていたら、お二人にすらも費いかりそうだったからです。今、こうして普通に話をしていられるのも……多分、万に一つの奇跡なんだ……」

ハルユキが口を開けても、アッシュ・ローラーはしばらく何の反応も見せなかった。

十秒近くも経ってから、掴んだままだったシルバー・タロウの手首を解放し、左右の革手袋を両膝の間で組み合わせた。

「……妹……輪が、加速世界での鮮明な記憶を持たねえように、オレも現実世界で生身のアイツがしたこと、考えたことは、うっすらとしか認識してねえ……」

付けられたヘルメットの口元から、そんな言葉が零れた。《輪》と《輪太》という二つの意識がいかなるロジックに基づいて共存しているのか、推測すらもできないハルユキは、ただ黙ってその声に耳を傾けた。

「……だから、輪が何を思っ……いや、何を願ってオマエに直接対戦を挑んだのかは、オレにも正確には解らねえ。そしてそれは、アイツにも予想できていたはずなんだ。加速コマンドを唱え、対戦フィールドに降りたその瞬間、アバターの操作権がこのオレという人格に移ってしまふことはな……。——だから、今、オレにできることはたった一つしかねえ……」

そこで一瞬声を途切れさせ、アッシュ・ローラーはボンネットの上で、体ごとハルユキに向き直った。

右手で、眼鏡を換したヘルメット・シールドをゆっくりと跳ね上げる。その奥から現れた「デュエルアバターの《素顔》」は、やや細めのペールグリーン色のアイレンズを持つ、どこか繊細な少年を思わせるデザインだ。改めて目の当たりにすると、やはり現実世界の目下総輪とかすか

に似ている。

アツシユは、その双眸でハルユキの、向こうからは見えないはずの眼をしほし凝視してから——ぐつ、と深く頭を下げた。同時に、静かな声。

「願ひ、カラス野郎……シルバー・クロウ。加速世界から、いなくならないでくれ。オマエは……《番童》なんだよ。オマエに空への夢を託したレイカー師匠や、復活して、少しずつ力をつけてるネガ・ネビユラスのメンバーにとつてはもちろん……今までオマエと対峙して、勝つたにせよ負けたにせよ、ステージの空を鳥みてえにとこまでも飛ぶオマエの姿を見上げてきた、僕白人のバーストリンカーにとつてもな」

「……………番童」

声にならない声でハルユキが繰り返すと、アツシユは顔を俯かせたまま一度頷いた。

「そうだ。つつても別に、レベル9になつてくれるだろうとか、《土》に勝つてくれるだろうとか、具体的な賞符を背負わせてるワケじゃないぞ。オマエの義は確かに加速世界唯一の力だけれど、それが《同レベル同ボテンシャル原則》を定めような、インチキでスリイもんだなんでもう誰か思つてねえ。オマエは……なんつうか……………」

掠れた声が一時止まり、すぐに続く。

「……………おい、ちと、同じなんだよ。右も左も判らねえレベル1から始めて、時にはポイント全損しそふになつたり、ベシヤンコに囚んだりしながらもじわじわ強くなつて……。それで、オ

レたちが同じようにへこたれて地面に座り込んだ時、空を見上げるとオマエが飛んでるんだ。狙撃だのミサイルだのを危なっかしく回避しながら、両手をいっぱい前に突き出して、一生懸命飛んでやがるんだよ。夕日とか、月の光とかがその銀じかなボディに反射して、こう……空の上で、キラキラッ、て光ってる……。——へへ、オリヤ、いったい何言ってるんだろうな」

アツシユ・ローラーは、右手を握ると、自分の顔を風暴に撃った。頑なに下を向いたまま、いつそう途切れがちになりながらも降り続ける。

「ともかく、よ……そうやって、オマエが飛んでるところを見ると、オレももいっちょ頑張っかって思えんだよ。それはオレだけじゃねえぜ……。このあいだのヘルメス・コードのレースで、オマエがディサスター化したのを見た何百人のギヤラリーが、全員一致で何も言わねえって決めたのは……みんな、オマエを信じてっからだ。オマエなら……《災害の鎧》なんかには負けないで、呪いだかなんだかも全部断ち切って、また元気に空を飛んでくれる、ってよ。だから……だから……」

そこでようやくパイタ使いは顔を上げた。薄緑色のアイレンズには仄かな光の雫が少し滲んでいて、その眼は確かに、現実世界で泣きべそをかきながらハルユキを見詰めた日下部編の顔とよく似ていると思えた。

「——だからよ、諦めんなよ、タロウ。無制限フィールドのどっか片隅で、銅と一纏に自分も

消えちまおうなんて考えるんじやねえよ。オマエには、ロータス先生や、レイカー師匠や、青くてアカイのや緑のウルサイのや……頼りなる仲間が、たくさんいるじやねえか。オマエがそんな消え方したら、レギオンの仲間がどう思うか……いや、今までずっと、飛んでくオマエを追っかけて続けた山ほどのバーストリンカーたちがどう思うかよ……！」

半は叫ぶようにそこまでを口にしたアッシュ・ローラーは、再び深く顔を俯けた。

——でも。

でも、もし僕がこのまま完全にクロム・ディサスター化して、他のバーストリンカーを無差別に燃やそうになったら……僕だけじゃなく、その大事な仲間たちまでが賞金首指定されちゃうかもしれないんです。

ハルユキは、声には出さずに胸中でそう呟いた。

先週の《七七王会議》で、紫のレギオン（オーロラ・オーバー）の副長を務めるムチ使いアスター・ヴァインの威圧的な物言いに、ネガ・ネビュラス副長のスカイ・レイカーはこう言い返した。中小レギオンに所属しているバーストリンカーたちには、加速世界を停滯させている六大レギオンへの不満が溜まっている。もし大レギオンが、なりふり構わない手段で反逆者たるブラッド・ロータスとそのレギオンを潰しにかかれば、加速世界に燃える不満は一気に発火するだろう、と。

そのリストは、大レギオンの幹部たちも悉く認識している。それゆえに彼らはいままで、

「アララク・ロータスの配下だ」という理由だけでハルユキやタタムたちの首に資金をかけることに踏み切れなかったのだ。

だがそれも——レギオンから六代目のクロム・ディザスターが出たとなれば話は別だ。異國の鎧を利用して自軍勢力を拡大しようとしている、などといくらでも理由をつけてレギオンメンバー全員を資金首に指定できる。それを防ごうと思つたら、風雪姫やタタムたちは、ハルユキを自らの手で討伐せねばならない。五代目ディザスターことチエリー・ルータを倒しながらに《悪罪》した者の王ニコのようにな……。

仲間たちを愛すればこそ、ハルユキは皆にそんな選択を突きつけたくはなかった。

「僕だって……レギオンの目標も、自分のレベルアップも、何もかも中途半端なままに加速世界から消えるのは残念です……」

胸中に渦巻く葛藤と、より大きな理念を押し殺し、ハルユキは敗れた。

「……でも、《鎧》をコントロールできなくなって……僕が僕でなくなってしまうてからじゃ、遅いんです。多分……いままでクロム・ディザスターになつてしまった、何人ものパーストリンカーたちも、最初はこの力を制御できると考えたはずです。荒ぶる《獣》を飼い慣らし、その遠慮もない力だけを、仲間のために正しく使える、と。でも……みんな、最終的には鎧に取り込まれてしまった。たくさんさんのパーストリンカーを無差別に殺つて……仲間さえも見分けられなくなって……最後は《王》たちに、それこそ支配みたくに討伐されて消えました」

短い吐息を挟み、鋭い鉤爪に変わってしまった自分の両手をじっと眺める。

「それに……そういう調整方をすると、加速世界から去るのは宿主になったペーストリンカーだけで、銀そのものは討伐者のアイテム欄に移動したり、懸念みたいなパーツを寄生させたりして、生き残ってしまうんです。それじゃ……何年にもわたって眠っていた、この『実体』のサイタルは断ち切れない。また、誰かが次のクロム・ディザスターになって、同じ苦しみと悲しみを振り廻してしまう……。——ここで終わりにするためには、無制限フィールドの、誰も来ないような遠い遠いところまで行つて……エネミー相手にポイントを全損して、ひっそり消えるしか……」

バキヤアッ!!

という耳をつんぐくような金属音が、ハルユキの言葉を遮った。

それは、アフシュ・ローラーが、握り締めた右拳でベンチ代わりの車のボンネットを打ち抜いた音だった。

「あ……アツシユキ……」

「なら……オレも行く」

押し殺した声で発せられたそのひと言に、ハルユキは動かしかけた口を止めた。

「燃費わりいオマエの羽根じゃ、そんな遠くまで行けぬーだろ。オレ様のバイクのケツに乗せてつてやるよ、北海道でも九州でも、好きなところまで。……でもなあ、ンなどこまで行ったら、

東京に帰んのもめんどくせーなあ……。ボイズン喰らうならバラライズまでだ、オレ様もエネミー構うのに付き合ってやつか。へへッ、どうせサメエとオレは腐れ縁だ、最初と最後でツラ突き合わせんのも……悪くねーだろ……………」

アッシュ・ローラーの、陽気を放った台詞が途切れると同時に――ハルユキの両眼からも、熱い液体が溢れた。

ミラーシムバーのヘルメットの下で、假想の眼をともどなく滴らせながら、何度も何處もかぶりを振る。眼から懸命に押し出した声は、幼い子供のように細く震えていた。

「……………そんな……アッシュさんが、僕に付き合って、消える……必要、なんて……………」

「サメエがさっさから言ってるのは、そういうことなんだよ!!」

こちらから溢れた声で叫び、バイク使いはボンネットから引き抜いた右手でハルユキの首もとに装甲を纏んだ。

「サメエが《災禍の鎧》と一緒に消えて、加速世界に平和が戻って……それでハッピーエンドになんか、絶対エなりやしねえんだより! サメエの《翼》や、仲間や、御匠や……それに輪のヤツが、どんだけ泣いて、苦しんで、自分を責めるか、それをサメエは本気で考えたのかよ!!」

「……………なら……………」

たとえ一対対戦フィールドであっても、あまり感情を見すのは危険だ。そうと理解していて

も、ハルユキは狂おしいほどに吹き荒れる激情のままに叫ぶことを止められなかった。

「なら、どうすればいいんです」 このまま《鐘》と融合して、親も仲間も判らなくなつて、闇に葬れ回つて奥義を撒き散らした挙げ句に討たれて果てる……それが正しい結末だつて言うんですか？ そんなことになるくらいなら、今ここで……まだ僕が僕でいられる間に――

消えたほうがいい。

その言葉を吐き出す寸前、ハルユキは鎧冑のようなシヨツタに打たれ、息を詰めた。

――同じだ。

――今、僕が言っていることは、昨日のタタムと同じだ。

彼もハルユキと同様に、闇の力である《ISSキット》に寄生され、その恐るべきパワーでPK集団《スーパードヴァ・レムナント》のメンバーを皆殺しにした。そして、自分が変わつてしまうことを危機し、自身の手で決着をつけようと考へた。

そんなタタムに、ハルユキは言つたはずだ。負けるな、喰え、と。僕と、チユと、レギオンのみんなのためにISSキットと戦つてくれ、と。

ここでハルユキが全てを諦め、無制限フィードの覚悟に一人消えたら、あの言葉は全部嘘になつてしまう。それに、たとえ災禍の鐘が消滅したとしても、現在加速世界を覆いつつあるISSキットの威威は残るのだ。ハルユキは今、キットの本体が存在すると思われる場所――

「東京ミッドタウン・タワー」とそこを守る神獣級エネミー（大天使メタトロン）に関する情報がある程度得ている。少なくともこれだけは、レギオンの管に伝えておかねばならない。

…………でも、もう一度、みんなと顔を会わせたら、僕は……次はもう、きつと走れない。

…………どうすれば、僕は——どうすれば…………。

「就えよ。ギリギリまで、諦めねえで粘れよ」

不意に、耳元でそんな囁き声が響いた。それは、ハルユキの胸部装甲に手をかけたままの、アタシユ・ローターの声だった。

「オレと二度目に戦った時みてえに、齒ア食い轉つて、最後まで抗ってみろよ。クロウ、オマエならそれができる。そんなヤツだから、俺はテメエに惚れたんだ。……妹に手ヲ出すのは許さねえけど、泣かすのはもつと許さねえ」

「……………」

ハルユキは、詰めていた息をゆっくりと吐き出し——少しだけ、笑った。

「…………そんなの、ムチャクチャ、ですよ」

「うるせー。兄貴つてのは、そういうモンなんだよ！」

どこか照れたように叫び、アタシユはハルユキの体を軽く突き飛ばした。

二人揃って、視界上部のタイムカウントを見ると、いつの間にか千七百秒以上が経過していた。あと一分少々で、この対戦は終了してしまう。

体力ダージはハルユキのほうが一方向的に減っているので、アッシュ・ローラーはドロ―申請すべく手を動かしかけたが、ハルユキはそれを押しとどめた。

「きつき、無期限フィールドでいっばいポイント稼いだから、ここはオコリにします」

「……ンなこととしても、論に手は出させねーからな」

「だ、出しませんよー」

ひとしきりそんなやり取りをしてから、ハルユキはふとあることを思い出し、姿勢を改めて言った。

「そうだ……、アッシュさん」

「……………ンだよ？」

「ええと……きつき、アッシュさんは、自分のアバターネームを……燃えて灰になったタイヤを白すっていう意味に解釈してましたけど、僕は……それ、少し違うと思います」

視線を動かし、少し離れた場所に止められている大型のアメリカンバイクを見やる。確かに前後のタイヤの色は合成ゴムの輝きではなく、どこか金属がセラミックスを思わせる灰色なのだ。燃えさしのような眩しさはまるで感じない。

「僕には……あなたの名前は、炎に焼かれて、灰になってしまった地面をならして、もう一度新しい道を作る人……………っていう意味に思えるんです」

ハルユキの言葉に、アッシュ・ローラーはしばらく何も答えなかった。

やがて、ファンと鼻を鳴らす音に競いて、いつもの憎まれ口が聞こえた。

「なんか、焼き畑農業みてーだなソレ。メガ・ター——ルなオレ様には都合わねーけど……まあいいや、採用してやらあ。いつかりアルでナメエと会ったら、アイデア料に百円やんよ」

「ど……どうも」

でも、その（ヘリアル）というのは多分、妹であるところの目下部輪のことではなく……実在するんだかしらないんだか解らないお兄さんのことであつて……。

という、あまり有為とは思えない思考に、『T-ME UP!!』の英文字が重なつた。

たつぷり三十分——すなわち現実時間で一・八秒の対戦を終え、現実世界に復帰したハルエキが真っ先に感じたのは、不思議な心の安らぎだつた。

対戦中に実際にしたことと言えば、アツシユ・ローラーのバイクに三度轢かれただけだし、その後はアメ車のボンネットに座つてたただひたすら話し込んでしまった。いろいろな大切な話をしたにはしたのだが、結論らしきものは何も出ていない。ハルエキが今後どうすればいいのか、その指針はまるで見えないままだ。

それなのに、対戦前まで胸中を吹き荒れていた焦燥やら悔憤、そして絶望は、一時的にはあろうが穏やかに風いでいる。眼を閉じたまま、ハルエキはただ、全身を満たす優しい温度に浸り続けた。

数秒後——ようやくその感覚が、心理的錯覚でも電子的欺瞞情報でもないことに気付き、びくっと体を震ませた。

背中を押し返す高圧な弾力は、桐子の愛車の本革リアシートだ。ハルユキはそこに横向きに仰臥している。そして体の上に、柔らかな、いい匂いがする何かが載っている。イタリア車のタッシヨン材より百倍豪華的な、弾性と剛性を絶妙な割合で併せ持った感触。

おそろおそろ薄目を開けたハルユキは、自分のおなかに密着する、アイボリーのニット生地を見た。正確には、ハルユキの知らない学校のエンブレム入りサマーニット。より正確には、ニットに包まれた、同じ年の女の子の胴体上部。

「……………」

小さくしゃっくりのような声を漏らしながら、ハルユキはじわじわと視線を上に向かった。チエタ柄の細いリボンタイ。白く華奢な首筋と、そこに装着されたメタリクタグラレーのニューロリンカー。少年めいて笑った顎と薄めの唇。控えめながらすっと通った鼻翼——そして、虹彩に薄い灰色が混じる、二つの瞳。

ハルユキの上に全身を乗せ——というよりハルユキを押し倒し、右手で直結用XSSBケーブルのプラグを挿んだままの少女は、相変わらず瞳を限界まで潤ませながら、至近距離で囁いた。

「……………す、すみません、でした。兄が、いろいろ失礼な、ことを……………」

物理的状況および言語的情報がもたらす大混乱に頭を白黒させつつも、ハルユキはともかく声を出すことで事態を収拾させようと試みた。

「えっと、ええっと、まず、その、君は……いまの（対戦）を、憶えてるの……」

確か彼女には、直結する前に言っていたはずだ。対戦中は無我夢中になってしまっただけで、内容をあまり憶えていない、と。それはつまり、加速世界にダイブすると人格が（兄）に交代して、鮮明な記憶を残せない——ということなのではないかと、ハルユキは推測したのだが。

しかし少女——バーストリンカー（アッシュ・ローラー）の本体であるところの目下部編は、こくりと小さく頷いた。

「今は……また、憶えていられ、ます。この……兄のニューロリンカーを、装着している、あーいでは……」

「そ、そう……なの……」

ハルユキの短い返事に詰め込まれた大量の疑問を感じたのか、輪は濡れた眼を瞬かぜ、か細い声で解説を加えた。

「……私、にも……加速世界でだけ現れる（兄）が、本物の、兄さん……渋谷区（シブヤク）の病院で眠っている目下部編太、なのか……それとも、私が割り出した、架空の人格なのかは、判りません……。——でも、確信は、言って、くれました。加速世界で起きることは、必ず何かの意味がある。アッシュ・ローラーとして、（兄）と一緒に戦い続けていれば、きっといつか、

大切な答えが見つかる、って」

「……………そっか……………」

輪はこれまで、自分の言う《謎匠》が、ハルユキの知る倉崎楓子なのかどうかを明言していない。だが今の言葉を聞いて、ハルユキは確信した。楓子は、黒雪姫言うところの《純粋なる正の心意使い》——つまり、希望や絆、愛の力を誰よりも信じるバーストリンカーだ。そんな楓子が口にするのに、これ以上相応しい台詞もあるまい。

つまり、去年の夏休みに病院のカフェテリアでウエイトレスのバイトをしていた輪が、テールブルにお冷やをぶちまけた客こそ倉崎楓子だったのだろう。楓子の自宅は確か杉並区と渋谷区の境界線付近にあったはずだし、サイバネティクス委足のメンテで渋谷の病院に通っていても不思議はない。

ある程度得心し、領いたハルユキの眼を、輪は至近距離からじっと見詰めてきた。

グレーの差し色が入る瞳に、再び涙の紗がかかる。表面張力の眼界を超えた水滴が、ぼた、ぼたとハルユキの頬に落ちる。

「……………なんで」

「え……………」

眩きの意味を理解できず、硬直するハルユキに、輪はくしゃつと顔を歪めて再度訊ねた。

「なんで、攻撃、しなかったんです……………か？ 私……………あなたに、狩られて、消えてもいいって

「……そう思つて、乱入、したのに。私を滅茶苦茶にすること、あなたに取り憑いた（氣橋の體）が、少しでも取まれば、つて……そう思つて、たのに」

思ひかけない言葉に、ハルユキは小さく息を呑んだ。

そう——確かに論は、直結対戦を跳んでくるす前に囁いた。私が（鎧）を消してみせる、怒りと憎しみを全て受け止める、と、対戦の底層によつては、本当にそうなつていた……鎧が消えるかどうかはともかく、ハルユキが暴走して、あらん限りの攻撃力を輪廻手にふるつていた可能性はある。

しかし、開始直後にアッシュ・ローラー（口元）がぶちかました『妹に手を出しやがったな』という合詞ですつかりペースを握られ、さしもの（敵）も起動するスキがなかったという感だ。よもや計算の上でああ叫んだわけではあるまいが、しかし考えてみれば、あのノリこそが、これまで数限りなく繰り返してきたアッシュ・クロウ戦そのものである……。

「狩ったり……するわけないよ」

ハルユキは、我知らず小さく微笑みながら、そつと首を左右に振った。

「え………」

「だってさ……アッシュさんは、僕の、大切な……友達なんだ」

真剣に選んだ言葉だったが、論は泣きぐそ状態のままの顔を傾け、繰り返した。

「……………友達」

はんの少しだけ不満そうな響きを聞き取り、ハルユキは黙ってフォローしつつ続けた。

「う、うん。とっても大事な。——だから、たとえ完全に……鏡に支配されて、タロム・ディザスターになっても……」

先ほどの思考とは矛盾する言葉を、詰まりそうになる喉から懸命に押し出す。

「……アッシュさんを、滅茶苦茶にしたりなんか、しないよ。僕は……あの人が、好きなんだ」

瞬間——。

鏡の夏神に、先刻に悟る量の、しかも融合いさえどこか異なる涙が浮き上がった。

零れた霞つもの掌を追いかけられるように小さな顔が動き、ハルユキの左頬にぶつかった。耳に、熱い吐息と融合した言葉が注がれた。

「……私………怖い。リアルな、私を、あなたに知られて……気味悪がられるのが怖くて、違うレギオンに入って……」一般対戦でも、領土戦でも、戦うことしか、できなかったのに………そんな、ふうに……言ってもらえる、なんて………」

むきゆうううつ、と押しつけられる体の脈動と伝わる体温、そして甘い香りが再度ハルユキの思考を吹き飛ばしかけた。

この状況にあっても、残された理性で考えてしまうのは、「次に会ったら今度こそアッシュさんにぶつ殺される」というような内容だったが、あろうことが右手が意識の制御から外れ、

勝手に持ち上がって、輪の細い背中に触れようと――

「……さっきの言葉、もういちど、聞かせてください」

耳許で響いた声に、びたりと手を止める。慌てて記憶をロールバックし、振れ声で再生。

「えと……アツシユさんは、大切な、友達で……」

「その、次」

「だから、傷つけたりなんか、絶対に……」

「その、次」

「僕は、あの人が……」

コン、コン。

不意に、硬い音が二度、小さく響いた。

ハルユキは半ば焦点を失いかけた両眼を、ほんやりと頭上方向に向けた。

左後ろのドアパネルがまず見え、その上のリアウインドーが視界に入る。濃度可変式のブライバシーガラスは、数分前まで確かに最大濃度モードになっていたはずなのに、いつの間にか完全な透明に変わっている。

そしてその向こうに――にこやかに微笑む――ナチュラルロングヘアの女性か。

窓ガラスを二度叩いた指が動き、ホロウインドウを操作すると同時に、車のドアロックが軽やかな音とともに解除された。すかさずドアを外側から引き開け、車内に上半身乗り入れた

女性は、シートに寝転がるハルユキの真上でもう一度ニツコリと笑い、言った。

「また会えて嬉しいですよ、御さん。」

遂に、ハルユキの上に乗って顔を伏せたままの輪の体が、ピタンと震えた。

同様に全身を硬直させ、引き撃ったスマイルを作りつつ、ハルユキは女性——ネガ・ネビュラス副長、(兼務) スカイ・レイカー——と倉崎親子にとうにか言葉を返した。

「あ……ハ……ハイ……僕も、デス……」

——大丈夫、まだ大丈夫、まだ走って逃げるほどのクライシスではない！ なぜなら

現在ハルユキを絶賛押さよ込み中である日下部輪にハルユキの確保を命じた人物こそが親子なのでありこの状況はその命令の延長線上に存在すると解釈することも決して不可能ではないはずなのでつまるところ話せば解つてももえるに違いないきっと。

そもそも自分が、レギオンの皆から文字通り(走って逃げようとしていたことさえ忘れ、ハルユキは懸命にそんな思考を展開させた。

しかしその直後——。

風子の左側からデユリがひょいっと顔を出し、ハルユキの現状を視認した。

彼女の足下から、真っ赤な透刺光がめらめらと立ち上るさまを幻視したハルユキは、反対側のドアを開けて駆出せんと視線を移した。そして、そちらの窓の向こうに、顔組みをして立つレギオンマスターの姿を発見し、再度の完全凍結状態に陥った。



かちやつ、と右のドアを開け、椅子と同じように身を屈めた黒髪姫は、久々に必殺の「極端気（クワダマキ）クロユキスマイル」を炸裂（バシラ）させてつづつ囁いた。

「邪魔（じゃま）をしてしまったかな、ハルユキ君？」

金バーストリンカー中でも最高レベルの反応力を持つと評されるハルユキが、思考回路を全力で演算させて導き出した応答は、次のようなものだった。

「……………ち、ちやうん、です」

6

処再び、マンション二十三階の有田家リビングルーム。刻は午後七時四十分。

今日、二〇四七年六月二十日の《帝城脱出作戦》が開始されたのが七時ちょうどだったので、まだそれから一時間も経っていないことになる。しかしハルユキの主観では、すでに数日ぶんの出来事が整理されないまま積み重なってしまったかのようだった。

帝城からの脱出と、スザクとの密談。

アツシユ・ローラーの捜索と発見。鏡の召喚と、殺戮劇。

グレート・ウォールの二人との遭遇。そして更なる戦闘……。

ソファセットの一角にぼつねんと腰掛け、そこからあたりまでをしょんぼり回想していたハルユキの目の前に、「ドーズ」の声とともにカフェオレのマグカップが置かれた。

「……………あ、ありがと……………」

渡れてくれたチユリに小声でお礼を言ってから、湯気の立つマグを持ち上げて口許に運ぶ。ずすーっと一吸りした、その瞬間。

「ウオアッチャイイイイ!?」

煮えたぎるような灼熱系液体攻撃に舌を焼かれ、ハルユキは悲鳴を上げた。しかも向かい

のソファに腰掛けたチユリは、素知らぬ顔で自分のカフエオレに口をつけてから、

「あら、御免あそばせ」

と浸ましたコメント。とうやら他の皆に配られたカップは全て適温で、ハルユキのそれだけがレンジでたつぷり加熱してあったらしい。しかしこの単体調整インジカルに、やれやれと苦笑いしてくれているのはタクムだけで、黒雲殿、楓子、そして四世河津までもが無言でカップを傾けている。

その理由は、ハルユキが皆を家に閉じ込めて一人走って逃げたからでも、ましてや（見損の類）を台映してしまったからでもない。

ハルユキの左隣に腰掛け、相変わらずハンベツをかきながら、右手でしっかりとハルユキのTシャツの裾を掴んでいる（七人目）の存在ゆえだ。地下駐車場で楓子の手によってハルユキから引っぱがされてから、エレベーターで二十二階まで進行され、ソファに座らされるまで、彼女は一秒たりともハルユキのシャツを離さなかったのである。

もしこれが仮に赤の正・上月由仁子ことニコだったりすれば、黒雲殿は即座に「ふざけるなその手を離せー」くらいのことを叫び、実際に物理攻撃をすら見舞っていただろう。しかし相手が、ぐすぐすそそそ鼻を鳴らし続ける気弱そうな少女とあらば、さしもの黒の王も実力行使は躊躇われるらしい。

緊迫感に満ちたは熱のなか、ハルユキがふうふうマダカップを吹く音だけがしばし響いた。

やがてカンプを置いたチユリが、こめかみを両手の人差し指でぐりぐりやりながら、時々うな声で言った。

「えええい……っ……」——あたし、まだ状況が理解できない……っというか受け入れられないんだけど……」

顔を上げ、ハルユキの左、つまり自分の正面に座る少女をじっと見て——。

「……本当に、あなたが『アッシュ・ローラー』なの？ あ、の？ ヒヤハアオーレ様メダ・ラッキイ……」の？ バイタにミサイル装備してる、あのアッシュさん？」

とある一面のみを少々強調しすぎな描筆ではあったが、それでもチユリの問いに、少女——アッシュ・ローラーの「本体」こと目下総輪はこっくり頷いた。

現在、輪はすでにニューロリンカーを、兄が使っていたメタリクタダレーのものから自分のバスナルグリーンのそれに替えている。彼女の言葉を信じるなら、この時点でもう先刻行ったハルユキとの対戦の経緯は思い出せなくなっているはずだ。しかしそれでも、加速世界で自分——または兄がどのようなバーストリンカーとして存在しているのかはちゃんと認識しているらしい。両眼にじっとり涙を浮かべたまま、細々とした声で譴責する。

「……………あの、向こうではいつも、いろいろ失礼なことを言ってしまっって、すみま……せん」

「べ、別に謝らなくてもいいけど……あたしも対戦中はだいぶズケズケ言うほうだし……」

ハルユキとタタムが思わずこくこく頷くと、手下二人を模範ビームの一着まで凍らせておいて、チユリは続けた。

「……でも、何て言うか、ここまでは現実世界と加速世界がかけ離れてる人初めて見るから、ちよつとビタタリしただけ。リアルが女の子なのにアバターが異型になることもあるのねえ……」その言葉を聞いた途端、ハルユキは今度は右側の一人掛けソファに座る椅子と一瞬アイコンタクトしてしまった。

チユリたちには給える特殊事情について説明はしていないので、この場で彼女と兄と二つのニューロリンカーにまつわる諸々を知るのはハルユキと、給の（親）である楓子だけだ。彼女の瞳の中に、「説明はいずれ時期を見て」という意思を見て取り、ハルユキはとつきに口を開いた。

「そ、そりやまあ、パーストリンカーは千人以上もいるんだからさ。たまにはセオリーの例外っぽい人がいても不思議じゃないよ」

するとチユリは再びジトーツとした視線を寄越し、次いでつんと顔を遠らしながら言った。「確かにそーよね。現実世界ではそうやってウジウジイジイしてるのに、加速世界だとすぐチョーシ乗って次から次にやらかす人とかねー」

「ウツ」

思わぬ皮鞭に、反射的に首を縮める。ようやく意識にまで冷めたカフエオレを一口飲んで聞

をもたせつつ、脳内で高速思考。単身逃亡・自力解決の策が破れ、こうして再捕獲されてしまった以上、いつまでもその件を棚上げにはしておけない。せめて謝罪くらいは自分から切り出すべきだろうし、ならば今がその機が。

マグカップをソファセット中央のカラストーブルに置き、大きく息を吸いつつ背筋を伸ばしたハルユキは、改めてレギオンの仲間——左端に座る黒髪姫、正面の子ユリとタタム、右端の楓子、そしてスペースの関係でハルユキのすぐ右隣にちよこんと座る謎を順に見て、ぐいっと頭を下げてから言った。

「その、やらかしちゃったわけだけど……ほんとに、ごめんなさい。……今更附ったって、許してもらえとは思わないけど……」

「——我々が、いや私かなを悩んでいるのか、本当に理解しているのか、ハルユキ君？」
 涙と響いたその声は、いままでずっと沈黙を守っていた黒髪姫のものだった。

膝の上で両手の指を組み合わせ、漆黒の双眸でじっとハルユキを凝視しつつ、レギオンマスターにして剣の主は静かに言葉を重ねた。

「キミが《史積の館》を召喚し、封印状態のクロム・ディザスターを解き放ったから——ではないぞ。大切な友達を助けるためにそうしなければならなかったことは、すでにこの場の全員が理解している。だがキミは……我々の言葉も、伸ばした手も振り切り、一人で己を罰しようとした。仮に……仮にキミのその企図が奏功し、銀ともども無制限フィールドの果てに

消えたとして……………」

瞬間、黒雲の聲がわずかに揺れた。ハルユキも胸の奥がきゅっと詰まるのを感じ、無意識のうちに右手でそのあたりのＴシャツの布地を握った。

黒雲殿は、一度ゆっくりと動きしてから、やや反射光の増した両眼をひたとハルユキに向けたまま囁いた。

「……………キミは、我々がその後も、キミ抜きで戦い続けられると本当に思ったのか？ ダスタ・タイカーに囚われたチユリ君を、I S S キットに侵されたタタム君を、空への夢を捨てかけたフリーを、スザクの怒濤に封印された誰を——そしてローカルネットの底に二年間閉じこもっていたこの私を決して見捨てようとしなかったキミを、我々が切り捨て忘れ去ると、本当に思ったのか？」

徐々にボリウムを上げたその声は、ついに鋭い刃となってハルユキの心臓を貫いた。しかしその傷は冷たい痛みではなく、甘く、切なく、そして温かい疼きだけを胸一杯に広げた。

唇を噛み、深く悔いて、ハルユキはしかしその優しい叱咤にすかろうとする自分を抑さえ込んだ。

「……………ごめん、なさい」

震える声でもう一度漏り、すぐに続ける。

「……………でも……………旧ネカ・ネビュラスの四元素と、そして黒雲殿先輩、あなたは

……二年半前、自分を捨ててレギオンの仲間を守ろうとした……そうです、よね。自分ひとり
が（国神の怨霊）で無限王に状態になることで他のメンバーを逃がそうとした、そうでしょう
……？ 僕は……僕にも、その時が来たんだって、さっきはそう思ってたんです。このままじゃ、
僕と一緒にレギオンの全員が賞金首になっちゃうから……それだけは絶対に防がないとって、
そう思ったんです」

「——何を言ってるんだ、ハル！ 一人で悪い話めるより、仲間を信じて手を伸ばそうって、
昨日はくにそう言っただのは君のはず——……」

叫びかけたタタムを、隣に座るチエリが左手でそっと制した。

幼馴染みの、先ほどまでの超火力ビームとは打って変わった、優しく先を促すような視線
に背中を押され、ハルユキは懸命に口を動かした。

「悪い、タタ……。オレもさっき、アツシユさん……じゃない、日守部さんと直接対戦してる
間に、悪い出したよ……」

顔を再び黒雲姫に向け、

「——それに、対戦の最後に、アツシユさんが言ってくれたんです。オマエが無制限フィール
ドのどっか早くで消えるなら、オレも付き合う、って。それで……僕、気づいたんです。加害
世界では、誰かがポイント全損・強制アンインストールになっても、ブレイン・バーストに関
する記憶が消されるのはその当人だけなんだから……つまり、ええと…………」

自分が気づいた大切なことをどうにか伝えようと頑張ったが、そこで言語処理エンジンに限界がきてしまって、ハルユキはただ口と右手を動かした。

すると、右側から、優しく穏やかな声がハルユキの台詞を捕った。楓子だ。

「——つまり、《バーストリンカーの死》とは、その当人のものではない……ということ、よね。なぜなら、当人は自分がバーストリンカーだったこと、加速世界で誰と出会い、何を考え、どこを自決したのかを忘れてしまうのだから。本当に死ぬのは……周りの、親しいひとたちの中にいた彼であり彼女。消えた者の仲間や友達。そして恋人だけが、加速された無量の時間の中で、その《死》を心に抱き続けていくのよ……」

「……………はい」

ハルユキはゆっくり、大きく頷き、再び己の言葉で語り始めた。

「そう、なんです。だから……加速世界では、《自分一人だけの消滅》なんて、そもそもあり得ないんだ、って思ってた……僕がそこまでひっそりエネミー相手にポイント全損して消えたとしても……その時は本当は、周りの大切な人の中にいる僕を助けて……そのふんの、傷ついていうか、穴を作っているんだ、って……………」

変わらぬ鋭しい視線を向け続けている黒書嬢を、最初は上目遣いに、続いて正面からまっすぐに見返し、心の中を余さず吐露する。

「…………だから、今はもう、僕が一人だけ消えたところまで…………それが本質的な解決になるとは、

思つてません……。もしかしたら、デイススターになつてみんなを狩るのと同じくらい、先輩たちを傷つけるかもしれないって解りましたから……。——でも……だけど」

膝の上で、両の拳をきつく握り。

「日曜の《七王会議》までに、僕が目覚めさせてしまった《異調の鎧》をもう一度消すのは……たぶん、いま九十九パーセント、不可能です。無制限フィールドで、あいつと一緒に戦つた僕には、解るんです。鎧はもう、完全にシルバー・クロウと一体化してしまつた……。いえ、それだけじゃない。僕は……今の段階ですでに、鎧の動静と連動を受けてるかもしれない。だって……僕は……」

背がわずかに眼を見開くのを意識しながら、ハルユキは抑え声で告げた。同僚切斷で離脱する直前、異調の鎧——いや、鎧に宿る《獣》と一鎧にあてどない彷徨に鎌京とうとしていた時、自分が感じていたことを。

「……………僕は……………あいつを、何かの外的手段で消してしまうのは嫌だつて、思つてるんです。そうしなきゃならないなら……せめて一鎧に消えたいって、そう思つてるんです……」

再び完全に袖き、きつく唇を噛んだハルユキに——。

すく心臓の狭いスペースに、体を接触させて腰掛ける四壁官能が、チャットで優しく問い掛けた。

「UIV 有田さん。その《あいつ》というのは、オブジェクトとしての異調の鎧を指してい

るのですか？ それとも、他の何か、あるいは誰かのことなのですか……？」

「……………それ、は……………」

しばらく沈黙してから、ハルユキは意を決し、説明した。

災禍の鐘に宿る、二つの意識体について。原型たる（サ・ディステイニー）の中には、山吹色の装甲を持つ不思議な少女。そして重んだ運命が生み出した強化外装（サ・ディサスター）には、荒ぶる闘争本能——（敵）。

「……女の子のほうは、チユも会ってるんで、僕の見た夢とか錯覚じゃないのは確かだと思えます」

ハルユキの言葉に、向かいに座るチユリがこくりと頷いた。

「うん。……ハルト、タシくんと一緒に行ったあの世界、（フレイン・バースト中央サーバー）そのものは夢だったかもしれないって思うけど……あそこで会った女の子は絶対に夢じゃない。だって、あたしもハルト知らないことをいっぱい教えてくれたもん」

「ふむ……。オブジェクトにバーストリンカーの意識が宿る……もしくは、擬似的な思考体として機能する、か。（敵）の精悍な体力を考えると、あり得んことではないな……」

黒髪顔で眩いた黒書生は、先ほどよりは顔容さを奪れさせた顔でハルユキを見詰めた。

「ハルユキ君、キミが消したくないと感じているのは、どちらなんだ？ キミを助け、導いた見知らぬ女性型デュエルアバターなのか……それとも、キミを救いへと駆り立てる敵なのか？」

「……………両方……いえ、もしかしたら………獣のほう、かもしれません」

ハルユキは視線を落としながら呟いた。

「あの女の子の望みは、《死》が完全に消滅して、加速世界に宮々続いてきた災禍のサイクルが断たれることです。だから、その時に鐘と一緒に消えるなら、あの子は産しらないと思います。そして………獣の望みは、自分以外の全てのバーストリンカーを消すこと。もちろん、そんなのとんでもないことだって、僕は思います。でも………あつきの、《バーストリンカーの死》の話をあいつの望みにあてはめれば………あいつは、誰かを許って加速世界から退場させるたびに、その《死》を自分の記憶に溜め込んでいくことになるんです。もし、望み通りに加速世界最後の一人になったら………千人のバーストリンカーの死、消滅を、自分ひとりで背負うことになるんです。言い換えれば………消えていったバーストリンカーを、あいつひとりが記憶の中で生かし続けることになるんだ。それじゃあ、あいつはいい………何のために………」

ばた、ばた、と舞りしめた拳に水滴が落ちた。それが、自分の両眼から滴ったものだとうやう気付き、ハルユキは度々て右胸で顔を擦ろうとした。

それより二秒ほど早く、黒髪が身を乗り出し、それにわずかに先んじてデュラがタイタシュの頬を差したそうとし、それより更に一瞬早く、黒髪がポケットからハンカチを出し、しかしその三人全員を上回るタイミンで動いたのは、いままでもハルユキの左でぐすぐす鼻を鳴らしていた七人目——目下、部輪だった。アイボリーのサマーニットの袖で、ハルユキの頬に滑った

涙を噓い取ると、同学年の女子はか細い声で言った。

「……………ひとりには…………寂しい、です。誰だって…………ひとりで消えるのは、ダメ、です」

「…………あ、うん、その、ええと」

ハルユキは当然フリーズしたが、黒雲姫・チユリ・剛の三者もまたそれぞれの表情とともに固まった。場を動かしたのは、穏やかな楓子のひと言だった。

「輪？」

それだけで、目下部輪はしゃぼんと体を元の位置に戻し、しかしそこに何らかの主張を込めているのか、再び同じようにハルユキのＴシャツの裾を摘んだ。

いまだ複雑な顔ながら、ソファに体を戻した黒雲姫は、軽い咳払いに続けて言った。

「…………ハルユキ君、キミのその感情が、キミの言うように感情の塵による精神干渉から出たものだと……私には思えない。なぜならそれは、いかにもキミ…………私の知る有田春雪が言いそうなことだからな…………」

チユリも論、タタム、楓子が揃ってこもりと頷く。

「そしてそれゆえに、私は鎮を浄化できる可能性が完全に潰れたとも思わん。ハルユキ君——一度でいい、私に…………我々に、機会をくれないか」

——浄化。

その言葉はつまり、《始火の巫女》アーダー・メイデン…………四禁宮譚の持つ特殊能力で、

更清の體（こゝろ）とあの（恨）を焼き尽くすことを意味しているのだらう。

密城本殿の守護騎士を、巨大なマダマに焼き融かし却つてみせた薩の心意の強力は、今更論を俟たないところだ。彼女なら、あるいはシルバー・タロウと完全融合した歸きえも選択的に焼き払う……いや焼き殺すことが可能なのかもしれない。そもそも、大変な苦勞をしてアーダー・メイデンをスザクの祭壇から取り戻したのは、まさにその淨化を行わんがためなのだ。でも、今のハルユキには、それが本当に唯一の正しい解決なのか、確信が持てない。

總部はいまだ思い出せないが、遅かな過去——加速世界の黎明期に、あの山吹色の少女と、ハルユキとよく似たメタルカラー。そして加速研究会会長を名乗る齋藤アバター、ブラッタ・バイスの三者が関わる、とても悲しく、残酷な出来事があつた。余りにも深い絶望にその身を染めたメタルカラーは、神器（ザ・デイスティニー）と長剣（スター・キヤスター）を融合させ、炎橋の體（ザ・ファイザスター）を生み出してしまったのだ。

館に宿る疑似思考体（酸）は、問題の出来事の記憶に徹しく反応し、一度は現実世界のハルユキに負の心意の（逆反現象）を引き起こしすらした。その出来事こそが、加速世界で何度となく繰り返されてきた炎橋の根柢である筈だ。過去にいったい何があつたのか……それを正確に知る、いや思い出すことなしに、館と酸をただ消滅させてしまつていいのだろうか。

もちろん、ハルユキの知らない過去、つまり館そのものの記憶を遡らうとすれば、今まで以上に激しい精神干渉を受けるだらう。（単台）の機軸すらも相えて（支配）へ——つまり、ハ

ルユキの人格が完全に消えてしまうことにもなりかねない。こうして迷っていることすらも、すでに干渉が進んでいるという歴なのかもしれないのだ……。

箱き、唇を噛むハルユキの右手を、腕から伸びてきた小さな左手がそっと包んだ。同時に、右手のみによるタイプが視界に黄色のフォントを表示させる。

【U1V 有田さん、私の持つ真の《浄化能力》は、番城で用いたような、第四象限の破壊の心意ではないのです】

「え………それって………」

肉声による問いに、四柱宮は穏やかな笑みを滲ませながら答えた。

【U1V 物理攻撃力は一切存在しません。テュエルアバターも、強化外装も、エネミーも………単なる地形物ひとつ壊すことはできないのです。私の灰が焼くのは……言わば《因縁》。

寄生体と宿主を繋ぐ情報経路をのみ選択的に消去します。ゆえに、対象となる寄生オブジェクトは、ただ切り離されるだけなのです】

「消えずに……切り離される……」

驚愕返しに絞いてから、ハルユキは「でも」と小さくかぶりを振った。

「でも………それなら、たとえ成功しても、『冥橋の鏡』そのものはまた封印カードの形で残る……んだよね？ カードを誰かが預かったり……ショップに売ったり、いつか海の底に捨てたりしても……あれはきつと、また次の宿主を呼ぶよ……」。――先輩、カードアイテムという

のは……」

ハルユキが視線を向けると、黒霧姫は言外の問いを察して頷いた。

「ああ……例外なく破壊不能だ。現在知られているもつとも確実なカードの破壊手段は、アイテム拾得属性がある神獣級エネミーに食わせることだが……それも確実とは言えないな……」

オレンジ色の閃光照明のみが灯されたリビンタムを、重苦しい沈黙が満ちた。

それを破ったのは、午後八時を告げるかすかなアラーム音だった。

ハルユキの母親が帰宅するまでにはまだ間があるが、小学生の顔はもうろん、他のメンバーもさすがにそろそろ帰宅すべき頃合いだ。いかにレギオンに大問題が降りかかっているようと、現実世界では全員が様々な機関に縛られる学生であるという事実は変わらない。

今すぐ全員で無制限中立フィールドにダイブし、そこで話し合いを続け、あるいはアーダー・メイデンによる「浄化」を試みるという選択肢もないではなかった。しかしそれには大きな問題がある。ハルユキは、前回「強制切断セーフティ」——すなわちケーブル引っこ抜きによってバーストアウトしているため、無制限フィールドにダイブすると、このマンションから遠く離れた六本木ヒルズ・タワーの屋上に単独で出現してしまうのだ。すぐにボータルから正常状態できればいいのだが、ダイブ直後に超の精神干渉が始まれば、そこからもう何が起こるかハルユキ自身にも判らない……。

同じことを考察したのだから、レギオンの副長を察める楓子が、静かに言った。

「嫁きは明日……、だわね。まずは親さんの位置情報を安全にリセットしてからでないとも……」

ハルユキが六本木ヒルズで強制切腹したことは、この経緯から逃げ出す直前に皆に説明してある。本当は、より詳しく伝えねばならない情報が出はどあるのだが、ハルユキの中にもまた記憶が整理しきれない。ヒルズ・タワーで遭遇した二人——緑の王タリー・グランデと、緑のレギオンの幹部集団こと「六眼義甲」の第三席アイアン・バウントとのやり取りをもう一度詳細に思い出し、記憶を鮮明化する時間が必要なのもまた確かだ。

楓子の言葉を受け、レギオンマスターの黒雪姫は、一同をぐらりと見回しながら腹とした声を発した。

「我らネガ・ネビュラスは、今日、大きく前進した。旧『四元素』の一員たる誰——アーダー・マイデンを、脱出不可能と告じられてきた四神の祭壇から取り戻したのだからな。その後、少々予定外の出来事があったとは言え……」

そこで、尚もハルユキのTシャツを掴み続ける目下部隊をちらりと見たが、こほんと腹払いして返ける。

「……今作戦の成功に、シルバー・タロウの頑張りが寄与するところ大だったのは疑いようのない事実だ。ハルユキ君、だから今度は我々がキミのために頑張る番だ。キミの速いや恐れは理解できるが——しかし、頼む。我々に、一度だけチャンスをくれ」

先刻と同じ言葉を繰り返して、真摯な視線を向けてくる黒雪姫の隣に、小さな姿が込み出た。

白いワンピース型の制服に身を包み、四整宮騎た。ポニーテールを揺らしてぺこりと頭を下げ、両手の指で盛然と空を叩く。

「U・V 有田さん。私たちには、あなたが必要なのです。私がネガ・ネビュラスに戻れたのも、また二年半にも及んだ無制限区域状態から脱出できたのも、全てあなたがいてくれたから。そしてまた、私がいまここに居るのは、あなたと《災禍》を乗り越えるため。お願いします、私に、果たすべき務めを果たす機会を与えて欲しいのです」

タイピングを終えた小さな手が胸元でぎゅつと握られると、楓子、チユリ、そしてタタムも同時に震く顔をした。最後に、左に座る日下部輪が、睨んだままのシャツを軽く引つ張った。

ハルユキは——瞬間的な、しかし強烈な葛藤に、小さく体を震わせた。

アーダー・メイダンによる《浄化》を試みる、それはすなわち、愛するレガオンの仲間たちと同時に再び無制限中立フィールドにダイブすることだ。最悪の場合、いきなり彼らに思考を支配され、皆に有無を言わさず戦いかかるということもあり得る。もちろん、いかにタロム・ディザスターといえども、黒の王ブラック・ロータスをマスターに頂くネガ・ネビュラスの五人と同時に戦って勝つてしまうとは思わないが、その場合は黒い蛇たちにハルユキを無力化する……いや、いっそ《断罪の一撃》によって強固アンインストールさせるか否かという選択を迫ることになってしまう。

それだけは、したくない。どうしてでも。

胸の奥でそう呟きながらも、しかしハルユキは顔を上げ――露と、黒髪を順に見詰めてから、小さく頷いた。

「……………解り、ました。僕からも、お願いします……………僕に断ち切れなかった災禍のサイクルを、四巻宮さんと、先輩と……………みんなの力で、終わらせて下さい……………」

ハル、今晚ひとりではんとに大丈夫？ あたしかタンくんちに泊まったほうがいいんじゃないの？

と、最低五回は繰り返したチユリに、大丈夫大丈夫とその都度返答し合ひ、ハルユキは誓を玄関まで送り出した。

楓子に首根っこを引く張られ、名残惜しそうにハルユキのTシャツを離した目下後編は、ローファーに足を踏してから振り向き、言った。

「あの……………頂いたお万両、おいしかった……………です」

「あ……………それなら、そつちのチユ……………倉嶋千百合に言っただけで。あの海苔巻を作ったの、僕女のお母さんだから」

ハルユキがそう答えると、編はもう一度振り向き、すでに其用度下に出ていたチユリに向かつてもう一度頭を下げた。

「ごちそう、さま……………でした」

「…………おそまつさま…………ってあたしが言うのもなんだけど……」

微妙な角度で糸糸を返すチユリと、その隣に立つタタムの顔には、尚も高純度の疑念が浮かんでいる。地下バーキンダから、ハルユキと輪が有田家まで連行されてきた直後にずっと自己紹介しただけで、まだろくに言葉を交わしていないのだから、未だに《輪リアッシュ・ローラ》を受け入れがたいのだろう。気持ちは大いに解る。

しかしながら、肩を締める輪と、そのカーディガンの襟首を掴む楓子の図には得も言われぬ姉弟っぽさが醸し出されているのもまた確かなのだった。明日の夜七時から再び有田家で開始される運びとなった《気拂の浄化作戦》には輪も生身で参加するということなので、色々突っ込んだ話を聞く機会もさつとあるだろう。もちろん、首尾良く作戦が成功すれば——という但し書きつきではあるが。

楓子と輪の輪が廊下に出て、隣がそれに続く、最後に星雪姫がゆっくりと靴を脱いだ。一歩進んでからくりと身を翻し、正面からハルユキと視線を交錯させる。唇が物言いたげに震え、わずかに開き、しかしすぐに閉じられる。

一拍置いてから、敬愛する剣の主は、仄かな微笑みを浮かべて言った。

「いつもいつも、キミの家をレギオンの拠点に使わせて貰って済まないな。甘えついでに、明日もよろしく頼むよ」

「ええ………ぜんぜん、大丈夫です。むしろ、先輩や副団長のほうが、煩るのが大変じゃないで

「ずか……？」

「ハハ、今日もフーコに送って貰うから大丈夫さ。持つべきものはオトナの友達だな」

青楼で楓子が微妙な表情を作り、他のメンバーが短く笑い――そして黒澤龍が後ろ向きに二歩下がって廊下に出た。

「じゃあ、また明日な、ハルユキ君」

「ええ、また明日」

そつと閉じられたドアが、黒澤龍と仲間たちの顔を隠し、家の中と外を隔て――自動ロケットの作動音がかすかに響いた。

皆の靴音が遠ざかり、消えるまで待つて、ハルユキはとほとりとリビングに引き返した。

ちらし寿司と海苔巻きが載っていた大皿はチユウが回収していったので、カフェオレのマグカップだけを洗い、乾燥機能付きの食器棚に戻す。ダイニングテーブルとガラステーブルを試き、椅子を整え、A―掃除機のスイッチを入れる。

自室に戻ると、ハルユキは宿題A、Bを聞き、数学と英語の教題に集中して取り組んだ。二つとも片付け、時計を見ると、午後九時を少し回っていた。

母親はまだ帰宅しない。この時間になって帰らない日は、たいてい零時近くになるのがパターンだ。ハルユキはホームサ―バーにアクセスし、家族用の伝言板を開くと、少し考えてから短いメッセージを打ち込んだ。

「グループ発表の課題をやるので、拓武の家に泊まります。明日の早朝に帰ります」

もちろんこれは嘘だ。しかも、母親と親友の双方に向けた嘘。いや……もしかしたら、レギオンメンバー全員を裏切る嘘か。でも、タタムならきつと、万が一ハルユキの母親から確證の連絡が入ったとしても巧く口裏を合わせてくれるだろう。

強張った指をホロキーボードのエンターキーに叩きつけると、仮想デスクトップを一気にワイプし、ハルユキは立ち上がった。部屋着を、ミリタリーカラーのバギーパンツとプリントTシャツに着替える。キヤフブを挟み、玄関でスニーカーを履いて、ドアを開ける。

午後九時過ぎの共用廊下は、ほんの一時静寂と比べても更に暗く、ひっそりとしているように思えた。

エレベーターに乗りこられた空間には、当たり前だが、つい先ほどここを踏って帰宅していたはずの仲間たちの痕跡など欠片も残っていない。それでもハルユキは、大きく息を吸って、せめて体が呼吸したのと同じ空気を体に溜めようとしてから、玄関の外に出た。背後で、無人となった有田家のドアが、施錠と同時にセキユリテイルベルを上げる電子音が小さく響いた。

ハルユキが、こんな時間にひとり家を出た理由は、先に仲間たちを同じく送ってまで走って逃げた時とは少々異なる。あの時は、近くのダイブカフェから無制限中立フィールドに潜り、そのまま地の果てでユネミー相手にポイント全損するつもりだった。

しかし地上一階のショップビルで、楓子の「子」である日下部結城にはほとんど体当たり

で逃走を阻まれ、その後対戦フィールドで彼女の兄を名乗るアツシユ・ローラーと会話し、ハルユキは考えを改めた。たとえ自分ひとりが消えたところで、それは問題の根本的な解決とはならない。昨夜、まったく同じ状況からハルユキの言葉を受け入れ踏みとどまってくれたタムのためにも、それは許されない。

——僕も、タタと同じように、仲間を……レキオンの絆を信じよう。

今のハルユキは、心の深いところでそう決めている。だからこの、中学生には相応しくない時間の単独外出は、無制限フィールドで一人死ぬためではない。そもそも自宅に誰もいない今なら、わざわざ外に出なくとも自家のベッドで《アンリミテッド・バースト》コマンドを唱えれば済む話だ。

ハルユキが目指しているのは、杉並の……いや東京二十三区の外、西に隣接して広がる武蔵野市だ。もちろんソーシヤルカメラネットが完備され、それゆえに加速世界の一部ではあるが、しかしバーストリンカーはほとんど存在しない無人の地。

そしてその理由は、自分が無制限フィールドにダイブしても、まだ自分のままでいられるかどうかを確かめること。

明日の《浄化ミッション》で、想像し得る限り最悪の展開は、ハルユキがダイブ直後に暴走し、レキオンの仲間にかかってしまうことだ。黒雪姫たちはそれすらも覚悟の上………というか仮にそうなくてもタロム・ディザスターを抑えられると判断しているのかもしれないが、

ハルユキにはそこまで状況を把握できない。(歴代アイザスターのアビリタイを全て使える)という六代目の戦闘力は、我が事ながらまたまた底が見えないのだ。とくに、初代が船に残したアビリタイ(フラスシュ・プリンク)。あれが危ない。物理拘束を完全に無効化して粒子化テレポートを行うあの技を、(歴)と一体化したハルユキが自在に操れるようになれば、苗色系の調整能力者がいないネガ・ネビュラスでは対応し切れない可能性がある……。

そんなことをぼんやりと考えながら、ハルユキは二十三階からエレベータに乗った。滑らかに下降していく箱の中で、思考の続きをまとめる。

明日の浄化作戦で、猛り狂う野獣と化して仲間を襲いかかるわけにはいかない。悲劇を回避するには、無制限フィールドで敗れて(歴)を呼び覚まし、対話し、あるいは戦って、一定のコントロール権を得る以外に方法はない。

そしてそれを行うなら、移並ではためだ。仮に目撃が破れ、精神を完全に隙に乗っ取られた場合、ハルユキ、いや六代目アイザスターはまず移並をホームとするバーストリンカーたちを襲おうとするだろう。同じ理由で東側に近接する鯨馬、中野、新宿、渋谷も避けない。だが、西にある武蔵野市なら、ハルユキがどんなに死ね狂おうともそもそもターゲットがいない。誰かを狩ろうとすれば、いちどポータルから現実世界に戻り、電車なりで移動する必要がある。その間に、わずかなりとも頭が冷えるかもしれない。

以上のような理由で、ハルユキはこの単独行を決意したのだった。

夜丸時を回り、スーパーマーケット以外のテナントがだいたい閉店しつつあるシヨロビングモールを抜けて、赤煉瓦敷きのフロントガーデンに出る。花壇とベンチがふんだんに配されたこの空間は、夜はほほカッブルに占拠される。十時にはメインゲートが閉まり、併設マンションの住人以外は通れなくなるのだから、ぎりぎりまで粘ろうという若者たちのシルエクトが、あちこちのベンチで肩を寄せ合っている。

ハルユキとしてはそんなものを見ても面白くも何ともないので、遅めの時間にマンションを出る時は北側の住民専用ゲートを使うようにしているのだが、高円寺駅には南のメインゲートから出たほうが近い。ゆえに、キヤンプの罫を目標に引き下げ、肩を縮めて足早にガーデンを通り抜けようとした……………

その時。

「少し、座っていかないか」

そんな声か、すぐ傍らのベンチから聞こえた。

反射的にびくつと足を止め、視線を前方に据えたまましばしフリーズする。

口調は男性的だが、しかし声質は明らかに女性のものだ。シルタの音らかると、雪解け水の清澄さ、それらの中に研ぎ上げられた刃の鋭利さを内包したその声を、聞き違えるはずもなかった。

ハルユキは、ギア駆動の人影のような動きで、キリキリと首を七十度ほど右に向けた。

天然木製のベンチに腰掛けた、つい一時間と少し前に別れたばかりの《劍の主》が、穏やかに微笑みながらハルユキを見ていた。深宇宙を思わせる漆黒の瞳が、「キミの行動をぞお見直しさ」と告げていた。

——よもや、この僕が、女のヒトと二人並んでこのベンチに座る日が来ようとは。しかも夜九時以降に。そりやもちろん、周りからは到底素人同士には見えないたるうけど……せいせい姉と弟、ヘタすると女の子のほうの調ゲーム……。

などと考えるハルユキの、膝の上に置かれた左手を、隣から伸びてきたしなやかな五指がきゅつと握った。同時に、声。

「これで姉弟には見えまい。ダメ押しで直結もしておくか？」

直前の思考を八割方マインドリーディングしたかの如きその音調に、ハルユキは驚きかけた声で「いいいいいえじじじやうぶんです」と答えた。——調ゲームの可能性は残ります、と付け加えなかったのは懸命な判断だったろう。

やや恐ろしいのは、頭上に屹立するマンション日機二十一階の倉庫家から、もしチユリが暗視装置つきの双眼鏡なりで真下のガーデンを覗いたりしたらハルユキの現状が丸見えなことだが、それは爆らなんでも考えすぎというものだろう。いやしかし、アイツの動物的カンはずれないからな……この広場の自販機でしか売ってない「豆乳ハナオレ・タピオカ入り」が急に飲みたくなつて買いに来るという可能性も否定できない……。

「別にチエリ君なりタタム君なりに目撃されたところで救うことは何もないじゃないか。それとも、彼らと実質的にお泊まり会をするのはよくて、私には並んでベンチに座る權利もないのか？」

「いいいいいいえそそそんなことありません」

これ以上臨内情眼をダダモレさせておくと大変よろしくないことになりそうだったので、ハルユキは逃遁的思考を打ち切り、ようやく隣に座る女性——もちろんガ・ネビュラスのレギオンマスターにしてハルユキの《義》、黒の王ブラッタ・ロータスこと黒書姫へと視線を向けた。まずは、最大の疑問をおさるおさる口にする。

「……えっと……先輩は、たしかレイカーさんの車で送ってもらった……んですよね？ それがどうしてここに……？」

「ん……まあ、単純な理由だ。フリーコの《子》……曰下部君と言ったか、彼女の家が、私の自宅と反対方向の中野区江古田と言うんでね。ういういの家はフリーコの家と近いからいいんだが、私まで送ってもらうと移動経路が非効率的すぎるからな。ここからタクシーを拾うと言って遠慮したんだ。ちなみに、《何時に拾う》とまでは言っていないから、フリーコたちに嘘はついていないぞ」

「な、ナルホト……。——って、あれ、先輩のお家ってどっちのほうでしたっけ……？」

ハルユキが何気なく訊ねると、黒書姫はびくりと肩を動かし、次いでなぜか羞戚っぽい微笑

を浮かべた。

「キミなあ……。私の生徒手帳、見たんじやなかったのか？」

どこかで聞いたような台詞に「瞬時（しゅんじ）けてしまつてから、悦（よろこ）んで首をぶるぶる動かす。

「な、な、中身は見えてませんよー どうかいつの話ですかー」

「フフフ……約八ヶ月前か、懐かしいな」

しばし肩を揺らして笑つていた黒雪姫は、やかて何かを舉（あ）げつたような顔になると、重ね合わせていたハルユキの左手をきゅつと握（にぎ）みながら小声で言つた。

「ところで、ハルユキ君、キミがこんな時間に一人外に出てきたのは、二十三区外の無人エリアで無制限中立フィールドにダイブするため……という私の兼務に相違はないな？」

いきなり核心中の核心に斬（き）り込む問いに、思わす首をコツタリ動かしてしまふ。

「あ、で、でも、別に一人で全損するためじゃなくて……」

慌（あわ）ててそう付け加えたが、黒雪姫はそれすらもお見通しと言わんがばかりに頷（うなづ）くと、質問を重ねた。

「——ということとは、楓（か）葉（は）さん宛（あ）に、深夜外出に対する何らかのエクスキューズを残してきたんだらう？」

「え、ええ……！ タループ課道をやるんで、タタの家に泊（と）めて……」

偽証（ぎしやう）罪（つみ）を咎（とが）められるか、と一瞬（しゆん）思（おも）つたか、あに顔（か）らんや黒雪姫は再度（たふ）卓然（たつぜん）と頷（うなづ）いた。

「ン、よろしい。ならば移動しよう」

言うや否や、ハルユキの手を握ったままきつと立ち上がる。引つ張られるままにハルユキが腰を上げると、そのまま視界と歩き出す。マンションのエントランス方面——ではなく、南東方向のメインゲートに向かつて。

「えっ、あの、いったい……」

もともと目指していた経路ではあるのだが、ハルユキは黒雪姫の意図を掴みかね、もともと口を動かした。しかし黒衣の先導者はもう何も答えず、カッブルまみれのフロントガーデンを一気に横断すると、立ち止まることなく、ゲートからマンション外——環状七号線の歩道へと足を踏み出した。

どうやら、いつの間にか仮想デスタトップからリタエストを出していたらしく、見事なタイミングで、目の前の歩道にウインカーを出しつつ一台のE.V.が停車した。白い車体にブルーのライン、屋根には音ながらのアンドンを乗せたタタシーだ。自動で開いた後座のドアに、黒雪姫は有難を言わずハルユキを押し込むと、続いて自分もするりと乗り込んだ。初老の男性、ドライバリーにひと言「よろしく」と声をかけると、「はい」という応答とともに車は滑らかに動き出す。

この時代、ニューロリンカーから近傍を走行中のタタシーに乗車リタエストを出した時点で目的地も伝達済みなのが普通なので、ハルユキには車がどこを自動しているのか解らない。半

分（ぶん）秒（びょう）然（ぜん）、半分（はんぶん）トギマキしながらフロントウインドウの向こうを覗（のぞ）いてみると、環（かん）七（しち）を北（きた）に走り始めたタクシーはすぐに早（はや）稲（いな）田（で）通（と）りを左（ひだり）折（まが）り、まっすぐ西（にし）へと向（む）かう。

さては、一（いち）緒（しょ）に武蔵（むさし）野（の）市（し）に行くつもりなのか、それはダメだ……とハルユキが考えたのも東（とう）の関（かん）、車（くるま）は一（いち）キロも行（い）かないうちに再（また）び左（ひだり）折（まが）り、住（す）宅（たく）街（がい）の中（なか）を抜（ぬ）け、中央（ちゅうおう）線（せん）の高（たか）架（か）を潜（くぐ）って更（さら）に南下（なんが）。数（かず）分（ぶん）で青（あお）梅（ばい）街（がい）道（どう）に出（で）ると今（いま）度（ど）は右（みぎ）折（まが）り、またすぐに左（ひだり）折（まが）り。

大（だい）まかに言（い）えば、ハルユキの自（じ）宅（たく）マシ（マシ）ン（ン）から、梅（うめ）郷（きょう）中（ちゅう）学（がく）方（はう）面（めん）にやや近（よ）づいて再（また）び離（はな）れている……はずなのだが、目的（もく）的（てき）地（ち）は謎（めい）のままだ。車（くるま）窓（まど）の外（がわ）は再（また）び住（す）宅（たく）地（ち）に変わ（かわ）り、だんだん線（せん）が増（ぞ）えてきた——と思（おも）った数（かず）十（じゅう）秒（びょう）後（ご）、タクシーはハサートランプを点（てん）灯（とう）させながら停（と）まった。

支（し）払（はら）いもまた、黒（くろ）雪（ゆき）姫（ひめ）がニ（ニ）ュー（ュー）ロリンカーで行（い）ってゐるためにハルユキには見（み）えない。運（うん）転（てん）手（て）の、「毎（まい）度（ど）——」の声（こゑ）とともにドアが開（あ）き、黒（くろ）雪（ゆき）姫（ひめ）が礼（れい）を言（い）って降（くだ）車（くるま）したので、ハルユキもそれに続（つづ）いた。

静（しず）かに走（は）り去（さ）るE.V.の向（む）こうに見（み）えたのは——おおよそ日（に）本（ほん）の、しかも杉（すぎ）並（なみ）区（く）のと真（ま）ん中（ちゅう）とは思（おも）えない光（ひかり）景（けい）だつた。

芝（しば）生（せい）や街（まち）路（ろ）樹（じゅ）がふんだんに配（はい）された、やたらと広（ひろ）い敷（しき）地（ち）に、満（み）ちよ（よ）酒（さけ）な白（しろ）壁（かき）のタウ（タウ）ン（ン）ハ（ハ）ウスが整（せい）然（ぜん）とした間（ま）隔（かく）で建（た）ち並（なみ）んでゐる。まるでアメリ（アメリ）カ製（せい）ファミリード（ド）ラマの舞（ま）合（が）だが、家（い）のデ（デ）サインが共（き）通（と）してお（お）り、また一（いち）軒（けん）一（いち）軒（けん）のサ（サ）イズは決（けつ）して大（だい）きくない。

「……あ、あの、ここは……いいたい……」

「ン、そうか、キミはまだ二年になったばかりだからな。二学期になれば社会科学科の授業に出てくるはずだ。ここは『阿佐ヶ谷住宅』という都市新生機構の、百年近い歴史がある分譲型集合住宅だよ。今世紀初頭に再開発されたが、この区画だけは往時の景観をはほ残している」

「は、ははあ……」

言われてみれば、オレンジ色の街灯に浮かび上がる住宅地の佇まいには、建築家の主張のよりなものか強く感ぜられている——ような気がしなくもない。

「……つまり、文化遺産的な住宅地……ってことですか……?」

あやふやな問いに、黒雪姫は「ン、まあ、そう言えないこともないかな」と応じると、再びハルエキの手を取り、河由する街路を歩き始めた。

——先輩は、この場所を僕に見せることで、きつと何かを伝えようとしているんだ。今の僕に必要な……いや、僕が自分で気付かなければならない、大事な何かを……

内心でそんな思考を囁み締めながら、ハルエキは黒雪姫の隣を歩いた。六月の湿った空気が、無機質な市街地では馴染みしただけだが、この場所では植物の呼吸を濃厚に含んでいつそ清々しいときえ果える。少し前に小雨でも降ったのか、濡く濡れた二車線の道をほんの二十メートルほど踏み、黒雪姫は右に折れる小径に踏み込む。

天然石のタイルを敷設に使ったペーブルメントは、二人が並んで歩くのが精一杯の幅で、公道というよりも建物に付属の私道ではないのかと思えたが、黒雪姫の足取りに迷いはない。しか

し、もし私有地に侵入しているのだとしたら、住民にお通りさんを呼ばれかねない。その危険を冒してまで、黒雪筆がハルユキに何かを伝えようとしているのだとしたら、それは――

耳から煙が出そうなほどに騒みそを回転させるハルユキを、黒雪筆は一軒のタウンハウスの前で立ち止まらせた。直後、ためらいなく右手を持ち上げ、黒い錆鉄製の門扉を押し開ける。

「……………は？ え？」

勝手にヒトんちの門を開けるのはいくらなんでも、と思う間もなく、ハルユキは更なる驚愕に見舞われ、眼と口をフルオープンさせた。何と黒雪筆は、開け放った門扉を顔色ひとつ変えずに通過し、その先に建つこじんまりとした家屋のドアノブに手を伸ばすではないか。

「あつ、あのっ、そのっ」

門の手前に立ち止まったまま、ハルユキはうわずった声を出した。

「な、何してるんですか先輩っ！ お、おお怒られますよそんなことすると！」

「ン？ なぜだ？ というか誰にだ？」

「誰について……そりやもちろん、そのお家のヒトに……」

すると黒雪筆は、小さく肩をすくめ、言った。

「その心配は無用だな。なぜならここは、私の家だ」

「……………ハ？」

すでに全開状態だった口を、眼界を超えてこじ開けつつ仰け反るハルユキに、続けて冷静な

声が掛けられた。

「中に入ったら、門を開めてくれ。ロツタは自動で掛かる」

「……………ハイ」

と替える以外のいかなるリアクションも、もはや実行不可能なハルユキだった。

ロフトつき平屋、間取り1LDK、専用庭つき。

それが、謎多き黒衣の雇人の住処だった。

ほぼ夢遊病状態で靴を履き、家にながったハルユキを、黒書箱は広さ十四畳ほどのリビング・ダイニングへと導いた。

「着替えてくるから、適当に座っていてくれ」

そう言い残し、西側の壁に設けられたドアの奥へと消えていく。ハルユキは再びふらふらと移動し、リビングの中央で立ち止まると、思考は停止しっぱなしながらもとりあえず視覚的情報を収集しようとした。

一戸建てとしてはコンパクトめな設計ながら、床や柱にはふんだんに天然木が使われ、車庫きの扉も大きいので開放感がある。意外なのは、室内があまり黒くないことだ。壁紙や天井はライトグレーだし、ラグマットとカーテンは茶系のストライプ。床は少なめで、リビング・ダイニングには、小ぶりのテーブルとビーズクッションが一つ、西の壁一面にラダーラックが

置かれている程度だ。カウンター越しに隣接するキッチンにも、小型の冷蔵庫と多目的レンジ、スリムな食器棚が見えるくらいで、正直、料理してます感は相当に薄い。

そんな、全体的には至極控えめなインテリアの中で、もっとも目を引くのは――南東の角に設置された、大型の水槽だった。ハルユキは吸い寄せられるように移動し、オレンジがかったLEDの光に照らされるアクアリウムに見入った。

魚は、小型の熱帯魚が二十匹くらいか。幅一メートル近い水槽のサイズに比してかなり少なめな気がする。代わりに水中世界を占拠しているのは、たくさん水草だ。もしやもしやとしたカーベットのようなもの、楕円形の薄葉をたなびかせるもの、まるでミクロの竹叢に見えるもの、と色々あるが、もっとも目立つのは、底砂の中央から屹立し水面まで伸びる何本もの細長い草だった。

水槽の上部は水質浄化や保温などを行う装置でフタをされているので、ハルユキは腰を屈め、水中から外界を見上げる魚の気持ちで水面を覗いた。すると、十数本の茎たちは特徴的な丸い葉を水に浮かべ、更に空気中にまで葉を伸ばしているようだった。

その、濃い緑色の葉のかたちには見覚えがあった。水草になんか興味すら持ったことがない僕がなんで、と首を捻ってから、ハルユキは不意に思い出した。

約十四年の人生で、たった一度。ネットで何日も情報収集し、実際に店先に行ってから一時間以上悩んで、貯めていたお小遣いの全額をはたいて水生植物を買ったことがある。この、

長い茎と丸い葉を持つ植物は、あの時ハルユキが運び、花束にしてみらい、とある病院にお見舞いとして持っていった（薔薇スイレン）だ。

「……キミがくれたスイレンな、調べたら、『リンジー・ウッズ』という品種だったよ」

いきなり耳元でそんな囁き声（ささやきこゑ）が響き、ハルユキはすきつと体を九十度スライドターンさせた。校舎中の制服から、ノースリーブのすんとしたルームワンピースに着替えた園芸部が、中腰で水槽を覗いていた。部員着なのだろうが、全体が統一色なので、どこかバーティードレスっぽい雰囲気を出している。ここまじやうやく、今までエンスト寸前のアイドリング状態だったハルユキの脳が八割ほど出力を取り戻し、状況を強調認識させた。

——僕は、夜十時を回ろうというこんな時間に、黒髪姫先輩のお家（うち）に初めてお邪魔して、しかも二人つきりで、その上自宅には今日は帰らないってメッセージ残してて、これってどうなの？ どういうことなの？

そんな思考が一瞬閃いたが、その先を考えるのはとてつもなくデングキラスな気がしたので、ハルユキは懸命に目先の情報に飛びついた。

「……………そ、そうでしたか。ぼほ僕、あの時は、色だけで決めちゃって……」

体勢を戻し、もう一度水槽を覗きながらそう答えると、すぐ右隣で黒髪姫はふふつと笑った。「私も、観賞用スイレンの名前なんか当時は一つも知らなかったさ。詳しくなったのは、キミがあの花をプレゼントしてくれてからだよ」

そう、ハルユキは去年の秋、重傷を負った黒雪姫がICJから一般病室に移動してきたその日に、お見舞いとして熱帯スイレンの花束を持参したのだ。もちろん、黒雪姫のデュエルアバターである（黒き降魔）に因んだ選抜だったのだが、店員さんが作ってくれたブーケには、スイレンの花の他に葉っぱも四、五枚ほど添えてあった。その、細い切り込みが入った丸い形を憶えていたから、花を見ずともハルユキには眼前の水槽で育っているのがスイレンだと推測できたわけだ。

「じゃ、じゃあ、もしかするとこのスイレンは、あの時の花と同じ品種……なんですか？」

ハルユキの質問に、黒雪姫はどこか羞恥っぽい、あるいはおさな子が何かを自費するような無気な笑みを浮かべるとかぶりを振った。

「同じ品種なのは確かだが、それだけじゃないぞ。ここで栽培しているのは、キミが八ヶ月前にくれた花そのもの……いや、正確に言えば（子）かな」

「えっ……」

ハルユキは驚き、生近距離からまじまじと黒雪姫の、水槽照明用ライトに照らされた横顔を見詰めた。

「で、でも、あの時侯が買ったのは切り花で……砂に差しても、根付かないと思うんですけど……」

「ん、その通りだな。でも、私も調べてから知ったんだが、キミがくれた（ヘリンジー・ワッ

ズ」をきむ一部のスイレンは（ムカゴ種）と言って、葉の付け根にできるムカゴ、つまり肉芽から数算し根が育つんだ」

「え……は、愚つばかり？」

「そうさ。それを知って、あの花束に入っていた五枚の葉をよく見てみたら、たった一つだけムカゴができているのがあってね。水を煮つた鉢で発芽させて、退院後にこの水槽に移したんだよ。八月月でここまで増やすのはけっこう大変だったんだぞ。残念ながら、花が咲くにはもうひと月ほどかかりそうだが」

「……………」

植物の生命力に対する驚きと、自分が買った一輪の花の命を、黒雪姫がそこまでの手間をかけて繋いでくれたことへの感激が胸に満ち、ハルユキはじつと水中で揺れる茎たちに視線を注いだ。そのまま、不思議な程やかきに満ちた沈黙が数秒……あるいは数分間も続いたが、やがて黒雪姫が体を伸ばし、ハルユキの背中にそつと触れながら言った。

「花が咲いたら、また見に来てくれ。——さ、そろそろ座ろう」

リビングの窓際に敷かれたラグの上には、かなり大きなビーズクッションが置かれていて、その片側に身を沈めた黒雪姫は、硬直するハルユキの胸を引つ張って容赦なく隣に座らせた。

緻密なパウダービーズが、変形しつつハルユキの質量を滑らかに受け止める。すると必然的にクッションの中央部へと体が傾き、右に座る黒雪姫もわずかに滑り落ちてくる。二人の胸が

触れ合い、ハルユキは再び意識を成層圏外まで飛ばしそうになったが、黒雪姫のほうは落ち着いた動作で右手を掲げると、仮想デスクトップを素早く操作した。

リビングの照明がきりきりまで絞られ、今まで閉じられていたカーテンが一メートルほど自動的に開き、調光フライバシーガラスが透明度を上げた。窓の向こうに、控えめな街灯に照らされる芝生の庭と広葉樹の並木が浮かび上がり、そしてずっと遠景には、再開発された高層集合住宅の明かりが夜空を貫かんばかりに煌めいている。

その眺めは、まるで二〇四七年現在の首都東京を、遠く昔の前世紀から覗き込んでいるかのようだった。ハルユキは改めて、黒雪姫という人はこの阿佐ヶ谷住宅の片隅に建つ小体なタウンハウスで、おそらくは——いや間違いない、一人暮らしをしているのだと認識し、無意識のうちにぼつりと涙を流していた。

「先輩は……いつから、このお家に……？」

問いに対する答えは、五秒ほど遅れて与えられた。

「もともと住んでいた家を出て、ここで暮らし始めたのは、梅郷中に入学する直前のことだ。より正確に表現すれば……私がこの手で、初代おの王（レッド・タイダー）の首を落としてから半日後、ということになる」

「……………」

ハルユキは息を呑み、今の言葉の意味を考えた。いや、考えるまでもなく明らかだ。黒雪姫

は、自分が生家を出たのは、中学進学という現実世界の原因によるものではなく、赤の王殺害という加速世界の出来事のせいだと告げたのだ。

しかし、それはいったいどういうことなのか？ 黒雪姫が「レベル9サドンデス・ルール」によってレッド・ライダーをポイント全無させたのは、当時の《純色の七王》間で結ばれようとしていた相互不可侵条約に対抗せんがためだった、とハルユキは理解している。つまり、原因も結果も加速世界の内だけで完結しているわけで、それがどうして実家を出なくてはならない理由に結びつくのか。

「……………今まで、誰にも……………それこそフリーコや誰たちにも打ち明けたことはなかったが……………」

不意に、ハルユキの右肩に頸をもたれさせた黒雪姫が、そう囁いた。

「私が狩ろうとした王は、レッド・ライダーだけではないんだ。もう一人の王を、私は自らの手で討とうと試みた。しかも、異常な《対戦》によってではない。現実世界に於ける、物理的脅迫……………つまり暴力を背景としたリアルアタックによって、だ」

「え？……………」

再び息を詰まらせかける。ハルユキを驚かせたのは、テスト中の加速コマンド使用すら許さない黒雪姫が、忌むべきリアルアタック、つまり《PK》を行おうとしたことだけではない。それが可能だったということは、すなわち――

「せ、先輩は、王の誰かの（リアル）を知ってる……んですか………？」

応ずる声は、しばらく生まれなかった。

長い沈黙を経て、黒雪姫は、短くひと言だけ呟いた。

「……………すまない」

続けて、体を左に回転させ、頭だけでなく全身をハルユキの右半身に接触させる。五感に伝わる柔らかなと温かさに再び意識がすっ飛びかけるが、今度もまたギリギリで踏みとどまる。

なぜなら、黒雪姫のその行為は、どこか幼い子供が庇護を求めて縋り付く仕草を思わせたのだ。「いつか……………話せる時が来たら、必ず話す」

聞こえるか聞こえないか程度のボリュウムで発せられた声に、ハルユキも小さく頷いた。

「……………はい」

どうにか言えたのはたったそれだけだったが、黒雪姫はきゅっとハルユキのTシャツの袖を握り、「ありがとう」と囁いた。

そのまま、無言の——しかし穏やかな時間が数分間流れた。この部屋の間にはとうやら時計の類はないので、時刻を知るには仮想ディスプレイの右下を見るしかない。しかしハルユキの視点からだと、小さなデジタル数字がA表示されているのは黒雪姫のちようと胸元のあたりだ。どうやら世の女性という生物種には、男のけしからぬ視線を察知する超感覚があるらしく、ハルユキもこれまでデュリに「どこ見てんのよエロユキ！」と辛辣い口撃を受けた経験が少な

からずある。ハルユキとしては、意図した眼罩運動ではなく頭の原始的部位から不可避的に発生される命令なのだとか抗弁したい所だが、少なくとも今この状況で黒雪姫にあらぬ誤解をされ
ては何か大事なものが台無しになるのは確実だ。ゆえにハルユキは、仮想アスタロップ全体を
左にずらしつつ右手を見るという高等技術に挑戦せざるを――

「……そういえば、またキミに、何をしていたのが説明して貰っていなかったな」
突然のそんな言葉に、ひくんと視線を固定する。

「な、何って別にその、ととと時計を見ようと」

「……時計など好きなだけ見ればよろう。そうじゃなくて……」

黒雪姫は顔を上げると、少し拗ねたように唇を尖らせ、続けた。

「フーコの車の中で、キミと、あの目下郎君がいったい何をしていたのか、だよ」

予想だにしない角度・威力の攻撃に、ハルユキは再度固まった。そういえば、黒雪姫に
は、E.V.の後部座席でハルユキと目下郎君が密着しつつ直結していたシーンをばっちり目撃さ
れているのだ。

「え、ええとあれはその、りん……目下郎さんと対戦フィールドで話をしていただけで、それ
以上の意味は一切ナッシングとかその」

「ふ――ん。それにしても、彼女の表情がえらく情緒的だった気がするが。本当にそれ
だけか？」

切れ長の双眸にじっとと凝視されれば、ハルユキとしては容赦なく思い出さざるを得ない。事実は《それだけ》とは到底言い難い……というか、ぶっちゃけ輪に真っ正面から告白してしまったのだ。あのシンブルかつストロンタな、好きです、というひと言は他に弊害のしようがない。

「え、え、ええと……あ、アッシユさんとは、本当に何もなかったですー そりゃ、無制限フィールドの地は果てまで行こうとしてた後に、パイタに乗せてってくれろとは言ってくれませんでした、それくらいで、ええ」

これは事実だ。バーストリンカー《アッシユ・ローラー》とハルユキの間には、ライバルとして育んだ友情以外の何ら存在しない。なぜなら加速世界であの世紀末ライダーを動かしているのは目下部輪ではなく、彼女の兄である目下部輪太当人か、その模倣人格だからだ。

ざりざり嘘とまでは言えないハルユキの説明に、黒書姫は黙わしそうに再度口を失せさせた。

彼女と、チュリ・タタム・譲の四人は、まだ目下部輪の特殊事情を知らない。あの当時歳目の気弱そうな少女が、加速世界では性格反転してヒヤハア・ブローロ・ローンなロールプレイをしているのだと思っている。だがその事情を、ハルユキの口から説明することはできない。それは輪当人が、せめて輪の《親》である倉崎楓子が告げるべき事情だ。

幸い黒書姫は、ほんの数秒でふっと表情を和らげ、ハルユキの丸いほっぺたを指先で摘みながら言った。

「……ま、今更一人増えたところて感概に大差ないと言わべきかな」

「な……何が、です？」

「それを私に説明させるのか」

きゅつ、と指先に力が入ったので、ハルユキは腕でてぶるぶる首を振る。

「い、いへ、いいでふいいふ」

「……………まったく」

もう一度、微妙なニュアンスの笑みを零し、黒雪姫は手を放した。ピーズクツションの上でころりとは体を転がし、天井を見ながら続ける。

「それにしても……………まったく寛きだな。キミの初対面の相手であるあのバイト使いの中身が、私より学年が下の女の子だったとは……。今日の今日まで、リアルもあんな感じの男だと信じて疑わなかったぞ」

「ええ、僕もです……」

「——まあ、フーコとの接点という部分ではやや納得だが。キミの家から駐車場まで移動する間に少しでも話を聞いたが、どうやら掛かり付けの病院で出会ったらしいな。はとんど初見でピンと来たらしい。私がキミを見つけた時と同じく、な」

「は、ははあ……。——どういう風にピンと来たんでしょうね……」

「ン……。では、フーコの台詞を全引用しよう。「わたしの中の、ある種のスイッチを押す強



きを、鴨さんが100ポイントとすればういいういは200、しかし輪は1000だったのです。ひと目見た瞬間、鍛えたいーって思っただんですよ——だそうだ」

「……………そう、ですか」

乾き気味の声でハルユキは答えた。何かが100ポイントの自分が旧東京タワーの天辺から突き落とされたなら、1000ポイントの輪はいつたいどのような指導を受けてきたのか、想像するだに恐ろしい。

しかし続けて、黒雪姫は苦笑がちにとんでもない情報を付け加えた。

「ちなみに、フリーコ曰く、出会った当時の私は10万ポイントだったそうだ。彼女の《子》ではなく友人だったことを喜ぶべきだろうな」

「……………そ、そう、デスカ」

黒雪姫と鴨子は、確か互いに低レベルの頃からの親友なのだから、出会った当時は二人とも小学校の中学年くらいだろうが。いったいどんな子供だったのか、現在の黒雪姫からは想像もできない。

「僕も……………もっとずっと早く、先輩と出会えてれば……白木ガ・ネビュラスのメンバーとして、一緒に色々できたのになあ……………」

無意識のうちにそんなことを呟くと、黒雪姫はひょいっと頭をもたげ、ごく近くからハルユキの眼を覗き込んできた。

「何を言う。その頃のキミと私にはリアルでの接点などありようはずもないのだから、（私と）やレギオンメンバーどころか敵として初邂逅していた可能性のほうが高いんだぞ」

「あつ……そ、そっか、そうですよね……」

しゅんと胸きかけたハルユキの頬を、細い指先が刺する。

「ま、その場合でも、私は何か何でもキミを白陣にリクルートしようとしただろうがね。もし本当にそうになっていたら……つまり、他の王のレギオンに属している状態で私に移籍を誘われたら、キミはどうしていた？」

冗談のようでもあり、その奥にホンキの何かを秘めているようでもある問いに、ハルユキは一瞬口ごもった。しかしすぐ、やや斜めの角度から黒き髪の間を見返し、答える。

「僕も、どんな苦勞をしても、黒の王のレギオンに移ってたと思います。これは、その……おためごかしとかじやなくて、タタ……シアン、バイルも、去年の秋に青のレギオンから黒のレギオンに移転するにあたって、すっごい大変な目に遭ったっばいんです。本人はどう訊いても許しいことは教えてくれませんがね……。だから僕も、さっさとそうします。だって、たとえ（私）やレギオンマスターじゃなかったとしても、先輩は……黒の王ブラック・ロータスは、僕の……」

懸命に紡いできた言葉だったが、そこでついに著稿誌の観界が訪れた。これがニューロリンカー搭載のテキストエディタで打っている文章なら、予測エンジンが適切な単語のリストを

表示してくれたりもするが、今は自分で自分の言葉を見つけろしかない。何故か口を閉鎖させてから、ハルユキはようやく最後のひと言を告げた。

「……………僕の、希望、だから」

聴えりのない本心だったが、黒蓮姫はしばし考えるように視線を彷徨わせ、次いで暗き半分、複雑き半分というような微笑を浮かべた。

「希望、か。有り難い言葉だが……………しかしそれは、私こそキミに対して言いたいな。事実、出会った頃から、私は何故もキミに言っているはずだよ。ハルユキ君、キミは加速世界で最速のバーストランカーだ、キミはいつか王たちすらも越え、世界の根幹へと達する者だ、とな。ああ……………それと、確かコレも言ったはずだな」

そこで黒衣の住人は、真っ白い面輪をほんの少しだけ色づかせ、またび体を反転させると――両腕をハルユキの首に回し、ぎゅつと互いの体を密着させた。

ひんやりとした温度、甘く爽やかな芳香、そしてしなやかな弾力がハルユキの感覚系に過剰な信号を流し込んだ。そこに、トドメのワンフレーズ。

「ハルユキ君……………私は、キミが好きだ」

脳内の神経回路が激つか焼き切れたのではないかと思えるほどの衝撃に、ハルユキは本氣

で気絶しそうになった。きりきりのところでシステムダウンは回復したが、翌朝は紙く言葉
をハルユキの右耳に、軽やかな吐息とともに流し込んでくる。

「加速世界のシルバー・クロウも、現実世界の有田春樹君も、同じくらい好きだよ。この感情
をみちしるべに、私は再びバスストリンカーとして立ち、今日まで歩いて来られた。これこそ
まさに……心意システムなど遥かに超える、本物の奇跡だな。キミのためなら何でもできると
思えるし、キミと手を繋いでいればどこにだって行けると信じられる……」

「……………せん、ばい」

ハルユキには、とうにかさう囁き返すだけで精一杯だった。

自分には、誰かに好きだと言って貰えるような資格なんかない——というネカタイプ纏まる
自己規定こそ、この頃はようやく振り払えるようになってきてはいるが、だからと言って正面
から平然と受け止めることなどできようはずもない。

それに考えてみれば——この状況で他の女の子のことを考えるのはまったく許されざる罪だ
が——今日は、約二時間半前に、アツシユ・ローラーのリアルサイドこと目下部輪にも密着状
況で「好きです」とストリートな言葉を聞かされているのだ。一日に、二人の女性から立て続
けに告白されるなどという体験は、ハルユキの脳には処理どころか認識すら不可能に近い。

いったいどんなレベルで因果律がねじ曲かれればこんなことが起きるのか、と疑き切れかけた
意識で考え——そしてハルユキは、不意に理解した。

もちろん、それは、ハルユキが消えようとしたからだ。

レギオンの仲間の前から、戦友たちの視界から。加速世界そのものから。そんなハルユキに手を差し伸べ、繋ぎ止めるために、最も多く戦ったライバルである日下（ひげ）節緒と、最も長い時を過ごした剣の主たる黒雪姫は、宝石のように貴い感情を言葉に変え、ハルユキに聞かせてくれたのだ……。

——僕は、幸せ者だ。こんなに幸せなパーストリンカーが、いや中学生が、他にいるだろうか。

ハルユキは、胸の裡でそう呟いた。その思考は、ハルユキにとって、この世に生まれ直すに等しいほど革新的なものだった。

いままでずっと、自分を嫌って来た。憎んで来た。黒雪姫や、レギオンの仲間たちや、ニコやバドさん、そしてアッシュ・ローラーといった友人たちが向けてくれる笑顔や気持ちは届かなかったけれど、自分が見た目も中身も変わらなければ、それに応える資格はないと思って来た。しかし、今この瞬間に、初めてハルユキは思った。自分は自分でいいのかもしれない、と。まだそう言い切るには心のエネルギーが足りないけれど、でもいつか——いつか、自分をまったく肯定できる日が来たら……その時は……。

「先輩……………僕は……………」

ハルユキは抑え声でそう呟き、黒雪姫の華やかな右肩に、そっと左手を添えようとした。

しかし、できなかった。口もまた、それ以上の言葉を紡ぐ前に停止した。

なぜなら、ハルユキに、(いつか)は来ないかもしれないのだ。シルバー・クロウに、いやハルユキ自身と半ば以上融合した炎樹の殻を浄化できねば、地の果てで孤獨に全損するにせよ、六王の刺客たちに討たれるにせよ、ハルユキはバーストリンカーではなくなる。そしてその時、ハルユキは悉く、黒雪姫に関する記憶と感情の大部分を失う。そう、いま胸いっぱいになる、この切なく疼く気持ちも――。

——でも、記憶は消されても、事實は消えない。先賢が僕を好きだって言ってくれたこと。僕が自分を幸せだと思えたこと。なら、その事實はきつと、全部が終わってしまった後でも僕を励まし、導いてくれるはずだ。なぜ持っているのか解らなくても、確かに手の中にある宝石のように。

そう考えた瞬間、ハルユキの周囲から、今まで必死に堪えていた涙が二枚、ぽろりと零れた。それはたちまち目尻から滴り、胸元に頭を押しつける黒雪姫の殻に落ちた。

直後、ハルユキの首に回された細い腕に、皆の力が込められた。同時に、ほとんど音にならない声。

「ハルユキ君。キミは私のものだよ。私は諦めない。キミを失うことなど許さできない。断じて」

言葉ひとつひとつを互いの胸に刻み込むようにそう告げ、黒雪姫はゆっくりと顔を上げた。

その白い頬には、ハルユキが零したもののほかにもうひとつ——黒髪自身の際から流れ落ちた軌跡が銀色に輝いていた。ほとんど触れ合わんばかりの距離で唇が触れ、更なる言葉を紡いだ。

「……たとえ隠クラスの、つまりは加速世界で最大級の浄化能力者を以てしても、キミと融合する（鎧）を切り離せるかどうかは大いなる賭けだ。かつてあの狂戦士と一度ならず剣を交えた私にも、鎧の内包する箇の底はついに見えなかった……」

息を殺して聞か入るハルユキの瞳をじっと覗き込み、黒髪は少しだけ張りを取り戻した声で続ける。

「だが、たったひとつだけ、浄化の成功率を上げられるかもしれない手段がある。……かつてのディザスターたちは、ある状況下に於いて、ほぼ必ず負の心算活性が低下したのだ。それは……敵敵と激しい戦いを繰り広げた直後。しかも、憎悪と憎悪をぶつけ合うような（殺し合い）ではなく、互いの技と心を高いレベルで交感させる、真に（対戦）と呼べるような戦いだ。覚えているか……私とキミ、そして赤の小組の三人で挑んだ五代目ディザスターも、我々と全身全霊の接近戦を行った直後、レインの主眼を回避できずに深手を受けた。本来のディザスターなら、あの直撃ですらオーラだけで弾いたはずだ……」

言われてみれば——確かに、五代目つまりチェリー・ルータは、黒の王ブラッド・ロータスと凄まじい剣戟を繰り広げたのを転機に、気配が変わった気がする。そんな理由でもなければ、

あの狂戦士が、当時まだレベル4に上がったばかりで心意の使い方すら知らなかったハルユキから逃げようとするはずがないではないか。

——いや、五代目の例を引くまでもない。六代目たるハルユキの現状が、まさにその推測を裏付けている。鋭く息を吸い込み、ハルユキは二、三度鎮きながら口を開いた。

「先輩……僕がいま、こうして普通道に供でいられるのも、もしかしたらそれが理由です……」
「ほう……」

「あの、さっき、僕の家では詳しく説明しなかったんですけど……僕、無騎旗フィールドの六本木ヒルズで、他のレキオンのメンバーと戦闘になったって言いましたよね」

「一瞬口を開いて、ごくりと喉を動かしてから、その先を告げる。」

「相手は、ままと、緑のレキオンの幹部……六層装甲とか言ってたかな、その『アイアン・パウンド』っていうレベル7と……」

「なに……ぐ、ダレウオの『鉄拳』パウンドだよ？」

「あ……う、ご存知で……？」

訊ねると、黒髪姫はハルユキの首に回したままの腕を動かして、両手でハルユキの耳をにゅーっとして引っ張りながら言った。

「ご存知も何も……ありやあ（鉄腕）レイカーの旧敵だぞ。飛行中のフリーコを撃ち落とすために、パウンドが鎧を曲げて飛び道具を身につけたのは加速世界の伝説のひとつだ」

「あー……あのロケットパンチは、そうゆう……」

なるほど。と頷いてから、著しく考える。スカイ・レイカーと、赤のレギオンの副長フラッド・レバードが強敵と書いてとると読む間柄なのはずっと前に聞いたし、それ以外にもレイカーは、青のレギオンの副長コンジ、コバルト・ブレードとヤンガン・フレードをかつて新編部隊の尖鋭からぶら下げたりしたらしい。更に、紫のレギオンの副長アスター・ヴァインとも「やっ」発止やり合っていたし、いったい何人の《旧敵》がいるのか……。

ぶるりと背筋を震わせてから、ハルユキは脇道に逸れかけた思考を引き戻した。視線が合うと、黒書姫は仄かな苦笑を浮かべながら囁いた。

「そりゃまたとんでもないのに出くわしたものだ。——そうか、キミはあの《敵軍》と戦ったのか……」

「あ、えっと……それが、バウンドさんだけじゃなくて……」

「なんでも、他にも《六層装甲》の奴らがいたのか？　まさか《数撃》より上座か？」

「上と言えは上ですが……」

両耳を掻く摘まれたまま、ハルユキはおそろおそろその名を口にした。

「み、緑の上の……グリーン・クランデもそこにいて……何て言うか、成り行きで……」

「…………おい、まさか」

むぎゅー！　とハルユキの耳を拡張しながら、黒書姫はやや引きつった声を出した。

「い……一戦交えたのか？ あの鎧男（よろひおとこ）とも？」

「交えた……というか、剣と盾を、一回打ち合わせただけですか……」

「……………」

剣の士は、細長く息を吐き出しつつ、びん、とゴムを弾くようにハルユキの耳介（みみかぎ）を解放した。再び腕を首に回し、後頭部の髪を薙（は）げながら囁く。

「……キミの無茶（むちゃ）には今更（いまさら）解（わ）かないつもりだったか……。——剣を打ち込んだということは、あの太閤（たかう）（サ・ストライフ）のエクストラ効果を喰らったんだろう？ よく無事だったな……………」

「え、えぐすとも効果？ そんな力なんですか？」

「『攻撃を完全に受け切ると、その威力を倍返しで反射する』のだ。つまりあの盾による防御を崩すには、超々威力の一撃で弾き飛ばすか、終わりをき連続攻撃で隙（ひま）を作りアバター本体を引うしかない。そのどちらかも、成功したのを見た記憶（きおく）はほとんどないがね」

「は、反射。……してたかも、しれません、確かに」

鎧の王を相手に、剣と盾、心意と心意をせめぎ合わせた一瞬（ひととき）は遠かな過去のようにも思えたが、それでもハルユキはぶるりと身を震わせた。

「……でも、多分その威力は全部周りの空間に行って……お陰で、六本木ビルズ・タワーが半分吹っ飛びましたけど……」

「はあ……もしかして、それがあの暴発か？ 我々が、雪城の南大橋から自撃した……」

聖雲姫の問いに、いつとき考え、ハルユキは小さくかぶりを振った。

「いえ……多分、違うと思います。パウンドさんと、緑の王との連戦の後に……もう一つ、大きな出来事があった……。でも、その説明は後にして、ちょっと話を戻します。さっき先輩は、『英雄の鎧』は強敵と激しい戦闘を行うとしはらく活性が低下するって言いましたよね。僕の今の状況が、まさにそれだと思ふんです。鎧に宿る（敵）がいま眠ってる……いえ、ウトウトしてるのは、グレウオの二人と、心意の最後の一騎まで絞り尽くすような対戦をしたからです。だから僕は、り……アッシュさんとも普通に話ができたし、先輩と今ここでこうしてられる。……でも、あいつはいつか……いえ、きつと明日には目を覚まします。そして僕を戦いに駆り立てようとする。それに抗って、僕のままでいられるかは……正直、自信が……ありません……」

ハルユキにとって、これほど長い白詞を、しかも誰よりも敬慕する人と抱き合った状態で、つかえずに言い終えることは相当に高難易度であるはずだった。しかしそうも意識することもなく説明を終えると、じつと聞き入っていた黒雪姫は、なぜか仄かに微笑んだ。

「……うむ、素晴らしい論理的な分析だ。私もそれが事実だろうと思う。であるならば……明日の（淨化）を成功させるために、我々がこれからトライすべき行為はたった一つだな」

「えっ……ここ、ここ……ここ行為……ってななんですか？」

先刻の長台詞が台無しになる勢いで囁きまくるハルユキに、黒書姫はもう一度につきりと微笑みかけ、素早く仮装システムトップを操作した。

すると、すぐそばの、今まで何もなかった天然木のフロアリングから、ういんと音を立てて迫り上がるものがあつた。直径十五センチ、高さ五十センチほどの円筒形機器は、悉くこの家のホームサーバーに繋がる統合ターミナルだ。本来はニューロリンカーなしで寒気類を制御するための装置だが、黒書姫は別の用途で使っているらしい。小さな塔の中段から、巻取り式のXSIBケーブルを引っ張り出し、自分のニューロリンカーにきゅっと挿入したのだ。

「ハルユキ君、キミが強制切斷によって、ハーストアウトしたのは、六本木ヒルズの屋上ということではないか？」

いきなりの予想せざる問いに、もうコクコク頷くことしかできない。

「ン。ならば五秒……いや、三秒だな。私が加速して三秒経ったらこのケーブルを抜いてくれ」

「え……あの、いったい、何を」

「説明は後だ。いいか、頼んだぞ。(アンリミテッド・バースト)」

あまりにも無断作にコマンドが発せられ、直後黒書姫の体からくたりと力が抜けた。もう何かにやら解らないが、とうあえず指示に従うしかない。視界を右下のデジタル数字が三つ増え

た瞬間、ピアノプラッタのニューロランカーから勢いよくプラッタを引き抜く。

ハルユキの目の前で、ぱちりと両眼を見開いた黒雪姫は、真顔で言った。

「ただいま、ハルユキ君」

「……あの、先輩、僕には何がなにやら……」

「何って、決まっているじゃないか。無制限中立フィールドで、移送から六本木ヒルズまで移動してきたのだ」

「……それは、はい？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまう。それは確かに、先制開いたコマンドは無制限フィールドにダイブするためのものに相違ないが——いかに一千倍に加速された世界とは言え、現実時間の三秒は向こう側でもたった五十分だ。タクシーなど存在するはずもない世界で、阿佐ヶ谷から六本木まで徒歩移動しようと思ったら、ムチャクチャ頭張って走る必要が……

いや。いや、考えるべきはそこではない。黒雪姫がなぜそんなことをしたか、だ。

そしてその答えは自明ではないか。向こう側で、ハルユキとランデブーするためだ。

「だ……ダメです、先輩——僕が無制限フィールドにダイブしたら、もういつ（彼）が目を覚ましてもおかしく……」

「だからだよ。だから行くのだ」

真顔でそう言い切り、黒雪姫は統合ターミナルから、二本目のテーブルを引き出した。それ

をハルユキの首筋に近づけながら、同時に互いの顔をも接近させる。甘い吐息が触れる距離で、思考音声以上にタリアナの声が紡がれる。

「ハルユキ君。私とキミは（親子）であると同時に（師弟）だ。ならばいつか、必ずその時は訪れる。それが今なんだよ。展開や結果を察れる必要はない。キミは今あるかままでのキミとして、私の前に立ててはいいい」

「……………先輩」

声ならぬ声で呼びかけながら、ハルユキは懸命に、硬直した首を左右に動かそうとした。

黒雪姫の言わんとする処はもはや明らかだ。

戦う——ということ。災禍の渦に宿る（敵）が、激しい戦いによって何らかのエネルギーを消尽するというなら、黒の王自らに対戦相手となり、明日夜の浄化作戦まで戦を確定なる観りに導こうというのだ。しかし……………しかし。

「僕は…………バーストリンカーになった頃から、決めてるんです。たとえ何があっても、先輩とは戦わないって。そんなことになるくらいなら、自分の意思でブレイン・バーストをアンインストールするって」

泣き出す寸前の子供のような声でハルユキがそう言い募ると、黒雪姫は優しく苦笑し、諭すようにハルユキの頭をぽんぽんと撫でた。

「戦うと言っても、憎しみによる闘争とは違う。（対戦）だ。ブレイン・バーストの存在する

唯一にして最大の理由だよ。それとも……」

わずかに頬を膨らませ、

「キミは、アツシュ・ローラー……いや目下諸君とは対戦できても、私とはできないと、そう言うのか？」

「い、いえ、そういうわけじゃ……」

「いいか、加速世界には、言葉ではなく拳や剣、銃弾を交えねば伝わらないことも確かに存在するんだ。……だいたい、考えてみれば、『ヘルメス・コード駆走レース』の前夜にキミは自分から私に対戦を求めたじゃないか。あの時キミは、言葉ではなく両の拳で、私にたくさん、たくさん大切な話をしてくれたよ。今度は、私がキミに、伝えるべきものを伝える番だ。キミの〈義〉として」

「………せん、ばい………」

胸に色々な感情が込み上げ、ハルユキはもうそんなふうに嘔ぐことしかできなかった。風雲は優しく微笑みながら頷きかけると、統合ターミナルから新たに引き出したXSBケーブルのプラグを、ハルユキのニューロリンカーにそつと挿入した。

「さ、私にも」

促され、ハルユキは自分が一本目のXSBケーブルを挿ったままであることによりやく気ついた。心は混乱のたた中にあるのに、指先がほとんど自動的に動き、ぎこちなく黒管艇のニユ

ーロリンカーにブラダを近づけた。

瞳を閉じて接触を受け入れた黒雲殿は、ワイヤード・コネクション警告が消えるや、微笑を保ったまま低く囁いた。

「カウントファイブで行こう。もし、お互い無事に帰って来られたら……」

そのまま暫かかすかに動いたが、言葉は聞き取れなかった。

一拍置いてから、ボリニームを増した声が、くつきりと時を刻み始めた。

「それでは、カウント開始。五、四、三、二、一」

次にこのコマンドを唱えれば、もう今の自分としては戻って来られないかもしれない。そう覚悟していたひと言を、ハルニキは相反する法意と迷いを抱えたまま、黒雲殿の声にそつと重ねた。

「アンリミテッド・バースト」

8

六本木ヒルズ・タワーは竣工後すでに四十五年という月日が経過しているが、東横近辺では今なお群を抜いて巨大な建築物だ。屋上の面積は約六千平方メートルにも及び、これは梅郷中学校のグラウンドよりずっと広い。二百三十八メートルという高さこそ、北東にそびえる東京ミッドタウン・タワーに十メートルほど後塵を拝しているが、フロア面積では一・五倍も上回っている。

ゆえにハルユキは、臉を同けた途端視界に飛び込んできた、広大な（空中庭園）とでも言うべき絶景にしばし魂を奪われた。

ギリシャの遺跡を思わせる壁や円柱は全て、陶磁器のように白い石灰岩。ひび割れ、所々で崩れ落ちたそれらの足下に、名も知れぬ小さな草花が揺れている。空は藍色に光る雲がゆつたりと流れ、遙か西の地平線近くには、大きな金貨にも似た太陽。

自然系・地質性に分類される（資源）ステージだ。地形オブジェクトが壊れやすいことと、石ばかりのようだが可燃物が多いこと、物陰は意外に暗いことあたりが特徴で、あまり暖手なステージ特性はない。

しかしハルユキにとってここは、個人的に重要な意味を持つ場所だった。

忘れもしない去年の秋、突如目の前に舞い降りた黒雲の裾に異世界への鍵を与えられ、彼女と二人で初めて訪れたのがこの永遠の黄昏の國だったのだ。そこであの人は、頑なに俯くハルユキに手を差し伸べ、言ってくれた。「このたかが仮面の二メートルが、キミにはそんなに遠いのか？」と――。

あれから八ヶ月が過ぎた昨日、板野中の保健室で直結対戦した折、黒雲はハルユキにひとつのきさやかな、しかし真の奇跡を見せた。心意システム――つまり事象の上書き現象によっておのがデュエルバターの属性を打ち消し、右手の剣を五本の豪華な指に変えたのだ。新たに生まれた《手》はわずか十七秒で砕け散ってしまったけれど、あの心意こそ、黒雲の真の宣言に他ならない。在りし日の距離二メートルを、自分からも極めてみせる、という。

そんな愚念を脳裏にたゆたわせながら、ハルユキは視線を水平に動かし、黒雲の姿を探そうとした。

しかし、その直前、自分が何より真つ先に確認すべきことを失念していたと気づく。慌てて両手を持ち上げ、広げた指を仔細に眺める。シルバー・クロウの、本来は格闘型とも思えないほど華奢なはずの十指は、装甲厚を増増させ先端は鉤爪状に鋭く尖っている――ものの、この状態は先に目下部輪と直結対戦した時とはは変わりない。

続いて全身のフォームと色を確認すると、こちらも二時間前と同じ、へ八割クロウ二割ディフスター」という程度の混ざり具合だ。最後に両眼を開き、意識を自分の奥深く、脊髄の中心

あたりに集中したが、そこに存在するはずの（歌）はいまだ浅い眠りにまどろんでいるようだった。突き刺すような痛みも、低い唸り声も知覚できない。

「……………もう少しだけ、そのまま寝ててくれよ……………」

呟き、ハルユキは頭を上げると、改めて周囲を見回した。

ヒルズ・タワーの屋上は広大だが、興奮ステージの地形効果によって無数の円柱やら石壁やらが迷路状に配置され、暗まで見通すことはできない。耳を澄ませても、窸々と吹き過ぎる風鳴りの他は、いかなる音も聞こえない……………」

「……………先輩？」

少しだけ声を張り、ハルユキは待ち人を呼んだ。だが視界には、黒曜石の装甲どころか動的オブジェクトひとつ捉えられない。しかし考えてみれば、黒曜石は先刻、杉並からこのヒルズ・タワー屋上まで移動したと言っただけで、ハルユキの出現位置を正確に把握するのは彼女にも不可能だったはずだ。なら、きっとこの迷路のどこかで、同じようにこちらを探しているに違いない。

そう考え、ハルユキは白亜の石壁に挟まれた狭い通路を歩き始めた。ビル本体とは異なり、裝飾的オブジェクトである塼や柱の強度は低いはずなので、いっそ片っ端から壊してしまおう手もあったかもしれないが、それはどうしても躊躇われた。稀少な（貴族）ステージは、それはとハルユキにとって記念すべき、神聖な場所なのだ。

通路はすぐ壁に突き当たり、左右に分岐する。直感的に右に曲がる。石敷きの道の左右に咲く小さな花たちを踏まないように、屋上の中心と想える方向を目指す。更に何度か右へ、また左へと曲がり、崩れかけたアーチを抜けたその先に、直径二十メートルほどの、圓蓋よりやや低くなった広場があった。

現実のヒルス・タワーの屋上も、中央はウッドデッキから一段低いヘリポートになっている。ならばここが中心部だろう。もちろんヘリポートの百マークは存在せず、代わりに十数本の柱が環状に並んでいる。そしてその中央に、ひときわ太く、高い円柱。上部からさらさらと水が流れ出し、下は浅い池になっているようだ。

ハルユキは、吸い寄せられるように広場へと降り、中央の柱に歩み寄った。石灰岩の濡れた表面に手を近づけ、触れようとした、その寸前――。

「……タロウ」

柱の高欄から、低く澄やかな呼びかけが聞こえた。

「あつ……せ、先輩！」

こんなとこにいたんですか、と言いなから柱を回り込みましたハルユキを、続いた声が割した。

「待て、そのまま動かずに聞くんた」

「え………は、はい……」

広場中央に立つ円柱の直径は、大きいと言ってもせいぜい八十センチ程度だ。小型アバターとは言えず、また手足のエッジ部がかなり鋭角されたデザインのパラタク・ロータスが柱の隙に完全に隠れるには、全身を相当に縮こまらせる必要があるだろう。その様子をつい想像しながら、ハルユキは立ち止まった。

「シルバー・タロウ。私は、『寄生者の館』に寄生された君をどうすれば助けられるのか、ずっと考えてきた」

抑揚をわざと抑えたような、少しだけフラットな響きのある無表情の聲が、再び石柱の向こうから届いた。ハルユキは小さく息を呑み、続きを待った。

「幾つかのアイデアを検討したが、やはりこれが最善手のようだ。タロウ……残念ながら君は、今や巨大すぎる危険要因となってしまった。レキオンにとっても、加害世界そのものにとっても、そして私にとっても」

「……………せ、先……輩？」

曰く言い難い途端に、放たれた言葉は、確かに事実を表しているのだが——その言い方が、なんだか事務的……いや、いっそ冷ややかとさよ……………

「ゆえに——これが、私の決断だ。世界から……消えてくれ」

一切の感情を奪わせない声が、柱越しにハルユキの耳を打った。

ほぼ同時に、眼前の分厚い石灰岩を貫き、一直線に伸びてくるものがあつた。思く、鋭い刃

……剣。いや、黒の王ブラッタ・ロータスの、手。

ハルユキは呆然と、自分の胸の真ん中、デュエルアバター最大のタリテイカル・ポイントに正確に照準する漆黒の切っ先を眺めた。思考は停止し、四肢の感覚もなかったが、体が勝手に反応したのか、上半身がほんの五センチほど左に傾いた。

とすっ。

というように、ごくささやかな衝撃だけを生み、黒い刃はシルバー・クロウの右胸を深く深く貫き背中から抜けた。

一瞬の、ひやりとする冷感。そして――灼熱の激痛。

「う……あつ……」

ハルユキは抜けた悲鳴を漏らし、両脚にありったけの意志力を注ぎ込んで真後ろに跳んだ。再度の痛みを生み出しながら刃が胸から抜け、空中に真っ赤なダメージ・エフェクトの光が、まるで鮮血のように瞬いた。その輝きを寄びながらよろめき、地面に左膝を突く。

心臓への直撃は免れたとは言え、体幹部に深手を負い、体力ゲージは一気に二割以上も減少している。当然、ダメージに見合うだけ多数枝ゲーজもチャージされているが、それに加えてもう一つ、明らかな変化がハルユキの内部に生まれようとしていた。

……………ダル、ル。

低い唸り声。滑けた鉄にも似た赤熱の怒りが溢れ出さんとする、その最初の一滴。(狀)が

目覚めようとしている。数秒前に、黒い剣の不意打ちを数センチにせよ回避できたのは、偶然でもハルユキの反射的行動でもない。獣がこのフェエルバターを動かしたのだ。

「せん……ばい、なんで………」

右手で胸の傷口を——あるいはそこから湧くとする獣の怒りを押さえるみ、ハルユキは声を振り絞った。

「どうして……なんですか………」

確かに、ハルユキと獣は、戦うためにこの無制限フィールドに降り立った。しかしこんな——姿を見せない不意打ちでは、獣の怒りを鎮め、完全覚醒を呼び寄せるだけだ。

いや……それとも、黒雲煙は、最初から《対戦》などするつもりはなかったのだろうか？

ハルユキを加減世界に連れ出し、叩きのめして、止めの《断崖の一撃》でこの問題を一気に片付けるつもりなのだろうか……？

——ダルル……。敵……。敵ハ……誰タロウト……居ヤ、ノ……。

——タトエソレガ……。汝ノ、《悪》デアロウトそ……。

精神の奥底で、軋むような《声》が陸々と響いた。獣の覚醒はもう止められない。

しかしハルユキは、片腰を突き、体を小さく丸めたまま、己に宿る疑念を体へと必死に語りかけた。

——待て、《獣》——進もう……絶対に進もう——

そう。

遠う。確かに、柱の向こうから掛けられた声も、胸を突き刺した方も黒の王ブラック・ロータスその人のものとしか罪えないが……それでも、遠う。あの人は、あんなことを言わない。あんなことをしない。ならば、何者かが黒の王の声と技を騙っているのだ。それが唯一の結論、いや事実だ。

ハルユキは咄つくりと立ち上がり、城の堂裏に伴って装甲色が黒ずみつつある己の体を一瞥してから、毅然と叫んだ。

「その柱の裏から出てきてくだき……いや、出てこい！ お前は、誰だ!!」

一瞬、何かを授けられるかのように風が止まり、足許の草花すら顔を伏せた。

やがて——憎らかな、声。

「……………悲しいな、クロウ。私の声をその耳で聞き……私の技をその身で受けても、まだ君がそんなことを言うとは」

《真昼》ステージの大本本ビルス・タワー屋上中央に立つ白亜の内柱は、右側が落日に照らされて金色に輝き、左側は強いコントラストを作って影に沈んでいる。

その左の影の中に、ひとつのシルエットが、するりと音もなく踏み出した。

両サイドがV字型に尖ったフェイスマスク。極限まで精密な腰回りには、麗しの花卉を模したアーマースカーと。長大な剣を彫作る、両腕と両脚。そして——全身の装甲をおるのは、影

よりなお鋭いリアルブラック。

「……………そんな……………」

ハルユキは、真つ黒い絶望かばたりと胸に落ちるのを感じた。それは、グラスの水に滴った高濃度のインクのように、アバターの内部を黒色に染めていく。

比例して、喉の吐き声がそのポリウムを増す。ど、どと金属質の軋みを放って、両手満足の握爪が巨大化。額の左右に残っていた突起も大きさを増し、野獣のあざとに似たバイザーに変わり始める。

だが、自身に訪れつつある変化すら意識できずに、ハルユキはただ円柱の陰に立つ漆黒のデューエルアバターを見詰め続けた。

あのフォルム。そしてあの色を持つアバターが、黒の王以外に存在するはずがない。ならばやはり、先刻の言葉はブラック・ロータス……黒書院の真意だったのか？ シルバー・クロウを、いや和田春雪を一個の危険要因と切り捨て、加速世界から排除すると告げた、あの冷酷な言葉が……………？

ぎいん！ と冷たい音を放ち、四肢の装甲が一気に形状を変えた。鋭くエッジが立った、黒銀の重装甲。丸いヘルメットを包む上下のバイザーもすでにジエネレートを終え、あとは牙伏のセレーシオンを固く噛み合わせるだけだ。

——アレハ敵ダ。我ヲノ敵ダ。倒ヲ呼ベ。炎ヲ滾ラセロ！

「威」が、明瞭さを増した声でハルユキに命じた。

しかし——それでもなお、ハルユキはバイザーの下で歯を食い縛り、小さくかぶりを振った。「嫌だ……認めない。僕は信じてない。あれは先達じゃない」

半ば自分に言い聞かせるように、低く呻く。声を發、そして色が黒の王そのものであるうとも、しかしあれはフラック・ロータス……黒書庫ではない。直感が、魂がそう叫んでいる。

大きな円柱が作り出す、黄昏ステージ特有の色濃い影。あらゆるディテールを呑み込み、塗り潰すあの影が、視覚を……いや五感全てを妨けている。黒の王と見えるアバターは、まるで光を遮けるかのように、全身を暗かりに沈めたまま動こうとしない。そこに何らかの作動を感じる。

どうにかして影を、一瞬でも遠ざける方法がないか。柱を壊す……ダメだ。いま物理攻撃を行ったら、ディザスター化が一気に完了してしまう。壊すのではなく——隠す。新しい、強い光で。

……「威」。一回だけ確かめさせてくれ。オレの心意発動を邪魔しないでくれ。

そう囁きかけると、疑惧思念は不満そうに唸った。

……「タルル」……ソレデ敵ヲ見定メラレルナラ、好きニシロ。

……ああ……見定める。あれがいったい「何」なのか。

眩し、ハルユキは凶悪な輪爪へと変じた右手の五指を、ゆっくりと暗かりの「黒の王」へと

向けた。まるで、強烈な磁極衝動に耐えかねるかのような動き。しかし心は遂に、水面の如く阻いでいく。恐らくチャンスは一回、しかも一瞬。イメージの集中、起動、解放をかつてないほど短時間で終わねばならない。

元。光達のイメージ。かつて何度となく放った心意珠（光線剣）の源となっている心象それ自体を全身からかき集め、右手の奥の奥で高密度に凝縮する。透刺光すら生まれぬほど小さく、鋭く研ぎ上げたそのイメージを……一気に全解放！

「光よ!!」

意識せず、そんなふうに叫んだ。同時に、半ば以上ディザスター化したシルバー・タロウの右手から、純粹な光だけが真つ白く湧き、世界を照らした。

そしてハルユキは見た。

全身のフォルムは確かに黒の王と寸分違わない。だが、それは、ごく限られた方向から見た場合にのみ浮き上がる形だ。つまり——厚みがないのだ。剣状の四肢も、花弁を模したアーマーも、紙より薄い板から切り出し並べただけの、言わば影絵——。暗がりの奥では確かにブラタ・ロータスと見えたそのアバターが、ストロボにも似た刹那の肉光の中で露呈させた、それが真の姿だ。

「お前は……誰だ!!」

掲げたままの右手の指をまっすぐ突きつけ、ハルユキは叫んだ。

再び円柱の作り出す暗かりに沈んだ影絵のアバターは、まるでストロボライトによって焼き付けられてしまったかの如く機動たにしない。舞臺の中ではやはりブラック・ロータスに限りなく酷似しているが、そうと気づけばたった一首所、本物の黒の王と異なる点がある。本来ならば、常時ホバー移動を行う黒の王の爪先は床面から一、二センチほど浮いているはずなのだが、影絵アバターの両足は、速に尖端がむすかに沈み込んでいるのだ。機軸だが、しかし決定的な差異。

ハルユキの知るがの眼光を浴び疑いながらも、王を騙る何者かは更に数秒間沈黙を続けたが、やがてこれ以上の欺瞞は不可能と判断してか、両手の剣——を模したべらべらの薄板を、ゆるりと左右に広げた。同時に、声。

「これは、お見逃しした。(銀)にそこまで深く侵されながら、まだ第一象限の心意を操るとは、成長したものだね」

声音もまた、加速世界に於ける黒銀のそれをはば完全に再現している。だがその言葉遣いとイントネーションが、ハルユキの記憶を不快に惹かせた。こんなふうに喋る相手と、確かにいつか、どこかで遭遇した気がする。あれは……そう、やはり無制限中立フィードの……同じように濃い影に彩られたステージで……。

「お前……お前は……」

ハルユキが低く唸ったのと時を同じくして、眼の奥で(敵)もまた鋭い電気を響かせた。

——貴様、ハ。貴様ハ……アノ、時ノ……。

二人分の敵意が内包された視線を浴びても、影絵アバターは平然と立って、いや空間に貼り付いている。広げた両腕を機械じみた動きで降ろしながら、再度の独白。

「ここで黒のレギオンの諸君と接触するのは予定される行動なれど、こんな機会もそうそうないだろうしね。いやあ、ミッドタウン・タワーの《メタトロン》が三日ぶりに暴れたっていうから、念のためと思って特捜していたら、思わぬお客さんでびっくりしたよ」

翼々とした、どこか教師の真振を思わせるその口調は再び記憶をさらさらと刺激したが、それを上書きするほどの違和感が、ハルユキの口を動かした。

「特捜していた………だヒョ」

《メタトロン》とは、北東五白メートルの位置にそびえる東京ミッドタウン・タワーを守護する神祕組織エネミー、《大天使メタトロン》のことだろう。確かにハルユキは、あの恐るべき不可視の怪物が、アイアン・バウンドの放ったロケットパンチに反応して超超超のレーザー攻撃を行い、六本木の市街に巨大なクレーターを作るのを見た。恐らく眼前の影絵アバターは、その現象を引き起こしたのが何者なのかを探るために、特好の監視場所であるこのヒルズ・タワー屋上に潜んでいたのだろう。

だが——そんなことは、事実上不可能だ。

ハルユキがメタトロンの攻撃を見たのは、現実世界で約三時間前。つまり、この監視隊中立

ワールドでは、あれからすでに三千時間……次に百二十五日が開始しているのだ。そんな膨大な期間、経ることすらせずに偶然とした《何か》を待ち続けられる者がいるはずもない

……………

愚者がそこまで至った、その瞬間。

ハルユキは、ずっと以前にもこれと同じような衝撃を受けたことがあったのを、理よきながら思い出した。

あれは——やはり無制限ワールドで、シルバー・クロウの銀翼を奪った強敵、《暗黒者》ダスタ・タイカーと最後の決闘を行った時のこと。彼が約束を遡らせて手勢を伏せさせるのを防ぐため、ハルユキとタカムは最大限の手段を講じたのに、決闘場所となった施設中のクラウンDには、あらかじめ潜伏していた者がいたのだ。

偶然とするハルユキたちに、ダスタ・タイカーは得々として語った。加暴世界で唯一、彼は超長時間の待機が可能なのだ。なぜなら彼は、駅内のB-1-Cによってパーストリンタ中にも思考加速を停止できる、たった一人の《減速能力者》なのだから、と——。

「お前……………」 お前、は……………」

黒い切り絵細工のような、べらべらと薄い二次元のアバターに向かって、ハルユキは礼んだ叫び声を投げかけた。

「加速研究会副会長………」（フラック・バイス）!!」

その名を聞いた途端、影絵のアバターは右手を胸の前にかざし、腰を折って姿勢に一礼した。直後、地面に浅く埋まった右足の爪先を軸に、全身がべらりと九十度回転する。あらゆるパーツが板の板でできているため、その角度になるとハルユキの目にはほとんど一本の線にしが見えない。だが目を凝らすまでもなく、その薄板は左右に十枚以上も再分割され、数センチの間隙を取って錯綜に基ぶ。作り出されたのは、まるで細密な放熱フィンを人の形に切り抜いたような（積層アバター）だ。これこそ、かつてハルユキたちをその異質な力で大いに苦しめたフラック・バイスの真の姿に他ならない。

バイスは、右腕を胸に当てた感嘆な姿勢のままだったが、偽フラック・ロータスの時と異なり、左腕が付け根から欠損していた。しかしダメージを受けたのではあるまい。この奇怪なアバターは、己が体を構成する板たちを自在に分離し、遠隔操作する力を持っているのだ。その能力が現在発動しているのなら、目的は恐らく……。

「お前……先軍に、異の王に、何を……」

自分と一緒にこのヒルス・タワー屋上に出現するはずだった本物の黒雪姫がいまだに姿を見せないのは、フラック・バイスが何かを仕掛けたからに違いない。ハルユキは瞬時にそう推測し、バイスを問い詰めようと一歩踏み出しかけた——その、時。



いきなり、脅腕の中央を、探服の後頭が貫いた。

「タルアアアアッ!!」

という凄まじい怒りの咆吼が、己の意識の中だけで響いたのか、それとも実際に口から送ったのか、ハルユキには解らなかった。続けて、今度はその頭の奥で、《魔》が狂ったように吼え狂る声が聞こえた。

——キサマ……殺ス！ 殺ス！ コロスコロスコロス!!

遠慮もない負の思念の爆発に、ハルユキは物理的衝撃を受けたかの如くよろめいた。

同時に、視界いつぱいに、幾つかの光景が断片的にフラッシュした。

地面に穿たれた、鋸り鉢状の大きな穴。その底に立つ薄黒の十字架に拘束される、山吹色の鎧甲を持つF型アバター。

十字架の傍に口を開けた深い縦穴から、ずるりと音響な長虫が姿を現す。無数の牙が並んだ口で少女を喰え、ばさばさと音を立てて鎧甲を噛み砕く。

鋸り鉢穴の縁には、数十人ものバーストリンカーたちが並び、無言で惨劇を見守っている。

その一角に、他の集団とは距離を取って立つ三つの影がある。四つもの眼を不気味に光らせる小柄なアバター。全身が白い光に包まれていて、実体が見えないアバター。そして——源蔵を人型に何枚も並べた、艶潤し黒の精細アバター……。

《魔》の記憶に残るその姿が、目の前のプラフタ・バイスと寸分の狂いなく重なった、その刹那。

ハルユキは、大量の情報が、真つ赤に溶けた金属の如く自分の意識に流れ込んでくるのを感じた。いや、それは元々ハルユキ自身の中に存在したのもかもしれない。二日前、四重宮^{シロヤミ}とともにも番城に参入し、短い休息を取っている間に見た（夢）。いままでずっと忘れていた、長く悲しい夢——あるいは初代「ディザスター」こと（タロム・ファルコン）の記憶の全てが、ついに甦^{よみがえ}ったのだ。

——あいつだ。

——全損者をゼロに、という理想を抱いていた山吹色の少女……（サフラン・ブロッサム）を腕^{うで}に掛け、地獄の長虫ヨルムンガンドに何度か何度か殺させたのはあいつだ。神祕の大番星（「ザ・ディステイニー」と高気外装（スター・キヤスター）を運^{はこ}ませ、笑^{わら}いの蠅^は（「ザ・ディザスター」）へと変えた出来事を引き起こした者こそ、まさしく眼前に立つブラック・ハイスだったのだ。

「お前……………オマエカ……………」

今や、獣の怒りはハルユキの怒りだった。圧倒的な殺意と破壊衝動^{はくわいしゅどう}に導かれるように、全身の軽装甲が一気に黒銀の重鎧へと変化し、背中からずるりと長大な尾が伸びた。

「オマエが……………フランを、殺したンタ……………」

叫^{こゑ}ふと同時に、鋭い金属音を放つて額のバイザーが下りた。視界が薄いグレーに染まり、敵の姿だけがくつきりと強調される。

シルバー、クロウが完全にクロム・ディザスターへの変身を遂げて、結晶アバターは寧ろ立ち続けていた。薄霧を並べただけの頭を傾け、小声でひとりごちる。

「ふむ。興味深いね……過去のわたしを知っている、いや覚えていたのか」

その声は、先刻までの黒雲様に類似したトーンではなく、低く落ち着いた男のそれに戻っていた。ポリウムはごく低かったが、ハルユキの強化された聴覚は、覺せられた言葉をクリアに聞き取った。

「忘レル……ハズが、ないだろう……オマエヲ、殺すために、オレは、この世界ニ、存在し続けてキタンダ……」

切れ切れの台詞は、吐き出されるそばから真つ赤な火花へと変わり大気を焦がした。

黒霧の鏡タロム、ディザスターの存在理由は、突き詰めれば（全バーストリンカーの抹殺）ということになる。その怪誕なる衝動の源泉は、無敵サフラン・プロッサムの死だ。バーストリンカーの相互補填システムを築き、加速世界の全住人を全損の恐怖から解き放つという理想を抱いていたプロッサムを、三十人ものバーストリンカーが裏切り、既に潰れた。ならば最後に、望み通り全損の果ての消滅を与えよう——。（初代）たるクロム・ファルコンのその決意が強化外装に宿り、彼に続く後継者たちを終わりを告げへと駆り立てた。

しかしあくまで、巨大に膨れ上がったその衝動の芯になっているのは、プロッサムの悲劇を演出した（三人）への憎悪である。あの出来事以来、現実時間で七年以上も表舞台に姿を現さ

なかった三人のうちの一人——（拘束者）ブラック・パイスが、今ついに覚醒状態のクロム・ディザスターと邂逅したのだ。

極限まで圧縮されていた復讐心に火が入り、引き起こされた凄まじい激怒の爆発は、ハルユキの理性による制御をたやすく吹き飛ばしてしまった。ダークシルバーに染まった全身の装甲から、いっそう濃い闇色のオーラを立ち上らせながら、ハルユキ、いや六代目ディザスターは重々しく一歩を踏み出した。

「オマエの体ガ……破片ノ山に委フルマデ、ヒタスラ斬リ刻ンデヤル……」

灼熱の吐息に燃せてそう囁きかけ、ハルユキは右手を高々とかざした。

（書信）ステージの、美しい、闇色の空がにわかにかき曇る。どこからともなく黒々とした積乱雲が発生し、青白い雷をまといながら轟状に寄寄せ来る。その中心点から、ひととき渦巻を捲き——かつて（スター・キヤスター）の名で呼ばれた大剣が、ハルユキの掲げた拳へと召喚されようとした、その寸前。

これまで静観を続けていたブラック・パイスが、動いた。

右腕を構成する板たちが、外側のものから素早くスライドしながら足下の影へと沈み込む。ほとんどタイムラグなしに、ハルユキ自身の影から、二枚の薄板が追いつかる。それらは左右からアバターを挟み込み、捕えようとする。以前にも喰らったパイスの拘束技、（停止重圧）だ。

ハルユキは剣の召喚を一時停止し、素早く叫んだ。

「フラッシュ・プリンター」

二ヶ月前にこの板に挟まれた時は、ハルユキは脱出するために、上半身の鎧甲全てを失いながら無理矢理に這い出るしかなかった。しかし、今のハルユキには、無傷での回避手段が存在する。初代ことクロム・ファルコンが鑑に残したアビリティ、疑似テレポートだ。ずつとずつと音、ファルコン自身もこの技によって薄板の抵抗力から逃れたのだ。

ハルユキの体が、無数の微小粒子に変じ、前方に超高速移動しようとした——判別。
まるでその反応を予測していたかのように、フラッタ・バイスが囁いた。

（六面圧縮）

ハルユキの視界が、間に閉ざされた。いや、光が失われたわけではない。前方に、新たな薄板が出現し行く手を塞いだのだ。

粒子となって突進しかけていたアバターが壁に衝突し、再実体化しつつ跳ね返される。よろめいた背中が、後ろにも出現していた板にぶつかる。距離移動系アビリティとしてはほとんど万能に近い性能を持つ（フラッシュ・プリンター）だが、真の瞬間移動というわけではない。粒子化した体が通過できる穴や隙間で繋がっていない場所には移動できないのだ。

「タル……」

ハルユキは怒りの声を漏らした。前後左右はマッドブラッタの壁に完全に囲まれ行き場がな

い。ならば上——と瞬間的に判断し、跳ばうとする。だが、またしてもその行動を先読みされたのか、真上と真下の間隙を、ガアン——と鋭い音を立てて照い籠が塞いだ。

あらゆる光が消滅し、ハルユキは自分が直方体の内部に完全に閉じ込められたことを悟った。いや、それだけではない。六方向の板たちが、ゆっくりと、しかし確たる動きで迫ってくる。

頭と胸、腕、背中、そして足裏に恐るべき圧力が伝わり、全身の装甲が火花を散らしながら激しく軋む。

「タ……ルオオオッ………」

吼え、ハルユキはあらん限りの力で板を押し戻そうとした。完全スビードタイプのシルバ―・クロウとは違い、クロム・デイズスターは速度とパワーを兼ね備えた万端型だ。臂力は比べものにならないほど上昇している。なのに——六枚の板たちは、まるで世界そのものの境界面でもあるかの如く、わずかに揺みすらもない。

と、その時。どこか若い教師を思わせる、あの声が聞こえた。

「クロウ君……いや、デイズスター君。きみがそうであるように、わたしもきみのその板を見るのは二度目なんだよ。前はあつまり抜けられてしまったのでね、少し工夫してみたんだ」

声はまるで、上下左右の全方向から届いてくるかのようだった。いや、事実そうなのだろう。喋っているのは、ハルユキを包む六枚の板そのものだ。

「ルルッ……ダ、オオ………」

余裕に満ちたバイスの台詞に、ハルユキ——あるいはハルユキと精神融合した（獣）は再びの咆吼を遣らせた。煉獄の植面に両手の鉄爪を立て、引を緩こうとする。だが、かつてあらゆるデュエルアバターの装甲を切り裂いてきたその爪も、空しく火花を散らすばかりだ。せめて手元に大剣があれば壁を貫けたかもしれないが、この閉鎖空間は装化外装の召喚すら阻むらしく、いくら叫んでも反応がない。

野獣の如く吼え狂いながら、ハルユキは無常苦茶に両手を壁に叩きつけ、足で蹴り飛ばした。制剣を失い、荒れ狂う破壊者を憐れむように、再び声が響いた。

「——予定より少し早いが、その鐘は回収・解析させて置くつもり。タロウ君は残念ながら加速世界から退場して貰わねはならないが、なに、きみもそんな状態のまま無制限フィールドを彷徨うのは本意ではなからう。まあ、会長との意向次第では別の道もあるかもしれないけれどね……」

ずつ。

と音を立てて、ハルユキを包む直方体が真下に沈んだ。両足を、生暖かい粘液に踏み込んでしまったかのような、とても妙な感覚が包む。これは——《影》だ。ブラッタ・バイスはハルユキを、拘束する直方体ごと影に沈め、いずこへか運ぼうというのだ。

影に浸された両足から、痺れるような冷気が広がり、体の力を奪う。獣と融合したハルユキは尚も露れようとするが、四肢の動きは徐々に勢いを失う。影はみるみる水位を増し、腿から

腰、腹へと迫り上がってくる……………」。

その、刹那。

真紅のラインが、ハルユキの視界正面を、左から右へと横切った。

極細の輝線は、そのまま右側に回り込み、後ろでまた九十度曲がり、もう一度曲がって最初のラインと合流する。四方を取り囲んだ赤い光が消えると、その隙間から、外界の光景がわずかに覗き……。

いきなり、分厚い硝子（がらす）が割れ砕けるような衝撃音を放って、ハルユキを拘束していた濃黒の六面体が崩壊した。

胸までを呑み込んでいた影の中から一気に弾き出され、ハルユキは重い音を立てて（音響）ステージの白い石畳（いしじよう）に転がった。

見開いた両眼で睨（にら）えたのは、左腕に皺（しわ）き右腕をも失った状態で立つ（拘束者）ブラック・ハイスと。

彼から十メートルほど離れた、円形広場の西側入り口近くに静かに佇む、もうひとりの黒きデュエルアバターだった。

皮膚なる四本の剣、睡蓮の花を模した隠鏡、飛び立つ寸前の綻笑を思わせるフェイスマスク。それらのシルエツトこそ、先にブラック・ハイスが作り出した影絵と酷似している。だが、

金色の夕陽を受けるその姿には、攝造しきれない特徴が幾つか存在する。

まず、残照のオレンジ色を内部に留めて美しく輝く、黒水晶のような半透明装甲のテクスチャ。そして、強烈な意志を湛らせて青紫色に煌めく、二つのアイレンズー。

ハルユキのダイブから遅れること十数分、ついに姿を現した真なる黒の王、レギオン・ネガ・ネビュラス頭目、《叛逆者》ブラッタ・ロータスは、緩やかなホバー移動で三メートルほど進み出た。よく見ると、右腕の剣を身代りオーラの残り火が取り巻いている。あの頃から放たれた遠距離攻撃が、バイスの《六面王（総）》を切断し、ハルユキを解放したに違いない。

しかし、前進を止めた黒の王は、惘れ込むハルユキを見ようとせず、代わりに凄絶なる眼光で黒色の精層アバターを射貫いた。初心者ならそれだけで《零化》しかねないほどの視線を、ブラッタ・バイスは平然と受け止め、両腕を善用に上り下させた。

「……貴女にはいつも驚かされるね、黒の王」

緊張の色をよんで震わせない、飄々とした声。

「この前はあつさり破られてしまったので、今度こそ両手足の剣は完全に拘束・無力化させて頂いたはずだったが……いったいどうやって抜け出たのかな？ ま、無傷とは行かなかったようではあるけれど」

その言葉どおり、ブラッタ・ロータスの左の剣は、先端から二十センチほどが無残にも砕け落ちている。だが刀身そのものはまだ充分に残っており、もし彼女がバイスの作った拘束具に

四股の剣を完全固定されていたのだとすると、まず何らかの手段で自ら左腕を破壊し、自由になったその腕で右腕と両脚の戒めを断ち切った、ということか。

バイスの問いに対する黒の王の答えは、素っ気ないものだった。

「貴様に頼みかしをしてやる義理はないな。だいたい、以前出くわした時、能弁すぎることのデマリットを説いていたのは貴族だろうに」

冷やかな舌鋒に、騎騎アバターは軽い苦笑を漏らした。

「はは、これは一本取られた。確かに今日のわたしは少し喋りすぎかもしれないわ。しかし、無駄足覚悟で二時間以上も待ちぼうけていたところに、思わぬ素敵なプレゼントが舞い込んできたんだ。少々興奮してしまうのも已むなしというものだよ」

「フン。――プレゼントを開けたら爆弾だった、ということもままあると思うが。見たところこちら以上に欠損ダメージを受けているようだし、私のパートナーに色々とし小細工を仕掛けてくれたようだが、状況が依然として二対一なのは変わらないと思うぞ」

――そう。

黒雪姫とブラック・バイスのやり取りを聞いている間も、《眼》と融合したハルスキの思考の大部分を占めていたのは、いかにして憎むべき宿層アバターを今度こそ完全破壊するかという冷静なる計算だった。

ブラント・ロータスとクロム・ディザスターの双方に、大がかりな拘束技を同時に仕掛けて

のけたフラック・バイスの能力は恐るべきものがあるが、結果としてそのどちらかが破られ、バイスは現在両腕を喪失している。つまり、先の《六重圧縮》を含む大技はもう使えないと見ていいはずだ。

しかし、彼は以前に言つてのけた。わたしの最大の能力は《逃げ足》だ、と。

その言葉どおり、バイスには己の体を一枚の板にまで変え、ステージのどこにでも存在する影に沈んで移動するという究極とも言える逃走術がある。《音響》ステージのヒルズ・タワー屋上には無数の壁や柱が林立していて、その影を伝つて屋上の端まで移動するのは容易いことだ。そして、巨大なヒルの壁面が作り出している影にまで連してしまえば、あとはもうどこにでも逃げられる。西日に照らされる高さ二百三十八メートルのヒルズ・タワーの影は、六本木の街を一キロ以上も吞み込んでいるのだ。

ゆえに、あの熱敵を確実に仕留め、板を一枚ずつ引き解がして纏たらしく殺してやるには、闇雲に突っかけるだけではだめだ。まず逃走手段を奪う必要がある。

「タル……………」

低く唸りながら、ハルニキは吸つくりと体を持ち上げ、低い姿勢で床面にうすくまった。もちろんと、ゲージ類を確認。最初に胸に受けた不意打ちも、直方体内部での圧迫ダメージによって、体力ゲージは三割強減少している。しかし必殺技ゲージは、《フラッシュ・ブリンク》を発動後に潰されたためほぼゼロだ。飛行その他のアビリティはしばらく使えない。ならば、最初に

組うべきはハイス本体ではなく、広場の中央に立つ大きな柱だ。あれを破壊し、ハイスが當に体を触れさせている影をまずは奪う――。

ハルユキ自身には意識できないことだったが、(敗)と完全に融合してなおこのような計算を遂げることができるといふのは、歴代のタロム・ディザスターたちには存在しない能力だった。彼らは、いちど《災禍の龍》を纏えば、あとは闘争本能の命じるままに死ね狂うことしかできなかったのだ。その結果として徐々に精神力を磨耗させ、最後は真に落ちた大型獣のようにして狩られていった。

しかし六代目たるハルユキは、サフラン・プロラサムを殺したブラッタ・ハイスへの思慕せぬ怒りに駆られてなお、シルバー・タロウの最大の力とも言える分析・判断力を維持していた。それが、ディザスターとなつてまた間もないからなのか――あるいは、今までの事よりも深く鎖とシンクロしているからなのか。

その答えは、思わぬほど早く――わずか数十秒後に与えられた。

最初に動いたのは、意外にもブラッタ・ハイスだった。これまで決して離れようとしなかった、広場中央の石柱の影から、ゆるりとした動きで進み出てその身を陽光に晒す。

同じ《ブラッタ》の名を冠していても、赤い残照の下では、黒の王との質感の違いは明らかだった。黒水晶のように煌めくロータスの半遠近感甲と異なり、ハイスのアバターを構成する薄板は、ほとんど光を反射しないマットブラックなのだ。

その、単なる黒い紙を並べたようにすら見える右足の感先を、うすぐまるハルユキに向け、
 パイスは悠然と言つてのけた。

「二対一。なるほど、貴女はそうまで深くその功を……『世預』へと変わり果ててしまつてもなお信願しているんだね。『聖子』の魂、か……実に羨ましいよ。わたしには最初から縁のないものだつたからね」

不意に——パイスの右足を構成する板の、外側の一枚がふわりと分離した。空中で正方形に変わるや、高速で回転し始める。たちまちそれは、灰色に霞む極薄の円盤にしか見えなくなる。『羨ましいから……せめて、その終だけは固いていくとしよう』

そんな眩しさと同時に、円盤が血のように赤く光った。『過剰光』。何らかの遠隔望心象攻撃が来る。ハルユキは身構えたが、直後視界に表示された情報列を見て、わずかに呆惑した。なぜなら、そこには——

『攻撃予備／心意攻撃 射撃拡張／切裂系 脅威度／5』、とのみ記してあったのだ。赤いラインで表示される予備軌道も、単なる直線。鑑の分析能力を信じるならば、一歩動く、あるいは胸の装甲で弾くだけで対処できる程度の技だ。

しかし、その攻撃は、実際には行われなかった。

「させん!!」

黒の王が一声鋭く叫び、フラフラ・パイスに向けて猛然と突進したのだ。右手の剣を、鮮や

かな青い遺精光が包む。心意によって威力をブーストされた必殺技が、青いなる技名コールとともに発動する。

「（デス・バイ・ドアーシング）!!」

巨大なヒルズ・タワー全体をびりびりと震わせるほどの威力を秘めて放たれた切っ先を——墨色の精端アバターは、避けようとも防ごうともしなかった。

代わりに、必殺技が命中する寸前、体のアオルムを再び変化させた。

高速回転していたものを含め、全身のパーツがたった一枚の薄板へと瞬時に重ね合わされる。ごく細い線になってしまった体が、くると数十度回転し、再び空間に人型を描く。

ハルユキの視界に、またしても奥行きのない、べらうとした影絵が映し出された。しかしその影は、先刻ハルユキを欺こうとしたブラック・ロスタスもときではなかった。

すそが外側に跳ねた形のシルエットへア。花びらを羅わせる肩と腰のアーマー。華奢な手肘と、左手に握られた可愛らしい形のバトン——。

黒一色のはずの影絵が、その一瞬だけ、（黄燈）ステージの未成の残照を反射して眩い山吹色に輝いた。同時に、ハルユキは、自分の口から一つの名前が零れ落ちるのを聞いた。

「……………フラン」

震える囁き声に——確かな衝撃音が重なった。

黒の王が放った突き技が、山吹色の少女型アバターの胸を、深々と貫いた音だった。

少女はゆつくりと仰け反りながら、ハルユキのほうに右手を差し伸べた。耳のずっと奥で、微風にも似たかすかな声が聞こえた気がした。

「……………ファル……………」

バチッ!! という凄まじいスパークが、ハルユキの頭の中で弾けた。視界全てが真っ赤に染まり、空も、地面も、あらゆる地形オブジェクトも消え去った。血の色を背景に、絡み合う二つのシルエツトだけがくつきりと浮き上がった。

鋭利な剣に胸を深くと貫かれた少女は、力なく膝を折り、体の右側から地面に崩れ落ちると、そのまま吸い込まれて消滅した。残されたもう一人は、しばし技の出終わり姿勢のまま固まっていたが、やがて弾かれたように腰をこちらに向けた。しかしそれが誰なのか、ハルユキにはもう認識することはできなかった。

再び、先に悟する規模のスパークが意識を真っ白に焼いた。

この瞬間、《判断力》という形でわずかに残存していたハルユキ——シルバー・クロウの理性は、完全に消え去った。後に残ったのは、恍惚と殺意のみを求める、一匹の獣だけだった。

「ダ……ルオオオアアアアアア———ッ!!」

天地を揺るがすような咆哮が轟くと、再びステージの上空に、どす黒い雲が渦を巻くから出現した。高々と突き上げた右手に、渦雲の中心から凄烈の稲妻が降り注ぐ。それは瞬時に実体を得て、凶悪な形状の大剣へと変わる。

「ルアアアアグ!!」

もう一度吼え、戦は一気に地を震った。数メートル先に、走り付いたように佇む黒いアバタ——道よりも愛する少女を殺した(攻撃者)で、すなわち(敵)に向かつて。

猛然と突き進みながら、右手に握った剣を高々と振りかぶる。黒いスパータの軌跡を引きながら放たれた斬撃は、秘められた威力こそ途方もないものだったが、タイミンクさえ見切ればある程度の手練れなら容易く避けられたはずだった。

しかし、(敵)は避けなかった。代わりに、剣状の四肢を——左側は先端が砕けているものの——クロスさせ、そこに鮮やかな緑色の光を宿した。

闇のいかすちをまとった大剣と、緑の十字を描く双剣が接触し、極小の一点へと圧縮された。超エネルギーが、新星のように真っ白く輝いた。

直後、くわあん! という中高い共鳴音を伴い、威力が周囲の空間へと同心円状に解放された。ヒルズ・タワーの屋上に林立する無数の石鉄岩オブリエクトは、そのエネルギーの波に吞まれた瞬間、音もなく崩壊し、消えた。かつて緑の王に同じ攻撃を打ち込んだ時のようにビル自体の分解までには至らなかったものの、それでも屋上全体が一瞬で更地に変わるほどの凄まじい衝撃だった。

衝撃波が収まって、両者はまた剣を撃ち合わせたままだった。交差点がぎり、ぎりとお互にたび、眩いスパータが散って双方の顔を照らす。

黒い鏡面ゴーグルの奥で、青紫色の眼を苦しそうに睇める《敵》は、敵の大剣を受け止めながら必死に何かを叫んでいるようだった。しかしその言葉は、もはや理性無き闘争本能の境と化した獣には届かなかった。

「ダルアソヨ」

短く呟え、敵は固く握った左拳を、《敵》の革者な体へと叩き込んだ。相手は見事な反応で右側に回り込むとしたものの、敵の背中から伸びる腕が左側のみ強く振動し、体全体を急激に回転させてパンチの軌道を変えた。敵の依代となっているハーストリンカーが、かつて懸命の修行で会得した《空中連続攻撃》という技術の応用だったが、その記憶すらもう敵の中には残っていないかった。

敵のオーラをまとった拳は、《敵》の右体側を突え、装甲を割り砕きながら容赦なく拳を抜いた。

巨大なハンマーで横殴りにされたかの如き勢いで、《敵》は真横に十メートル以上も吹き飛び、更地となった屋上にバウンドして倒れた。敵は、相手が起き上がる前に腕を使って猛然と飛びかかり、仰向けの体に両足りになるや再び叫んだ。

「タ……オアアアアア——ッ!!」

右手の剣を、《敵》の無傷なほうの剣に交差する形で地面に突き立て、動きを制する。柄から離した手を固く握り——張り上げ——《敵》のマスクへと叩き付ける。

一撃で、黒い鉄面ゴータルに蜘蛛の巣状のヒビが走った。左手も振ると、今度は胸部装甲を撃ち抜く。飛び散った数個の破片が、夕陽を反射してきらきらと赤く輝く。

右、左、右。絶え間なく吼え続けながら、腕は交互に拳を（敵）へと叩き付けた。

それはもう対戦、いや戦いとすら呼べるものではなかった。長い、長い年月をかけて蓄積された恨みと憎しみの、醜悪極まる爆発だった。

左右の拳を舞臺苦茶に叩き付ける獣の嘶聲に、轟かの声が、弱々しく――そして優しく響いた。

――それで……いい、んだ。

――キミを苦しめるものは、ぜんぶ、私が、受け止める。

――なぜなら、私はキミの（敵）で、（陣）で、（生霊）で………

――そして、誰よりも、キミを愛しているからだ。

美しかった黒水晶の装甲は見る影もなく碎かれ、無数の欠片となって宙を舞った。

それらの破片の間を、色合いの異なる銀色の光が幾つも、筆直に滴った。

光の源は、獣の顔を覆う凶悪なバイザーだった。肉食獣のあざとのように噛み合った上下のパーツの間隔から、銀の雫が次々にこぼれ、ぼろぼろに散壊された黒い装甲に音もなく降り注

いでいる。まるで、雨のよう
に。

ハルユキは、一切の光が届かない深い穴の底で、壁を擦えてうすくまっていた。

頭の上、ずっと高いところから、鈍く重い衝撃音が周期的に降り注いでくる。何の音なのかは解らない。でも、ハルユキはおぼろげに感じている。

この穴――あるいは牢獄の外で、何か起きてはいけないことが起きている。

そして、あの音が止んだ時、全てが取り返しのつかない形で終わってしまう。

何度か、穴の壁を這い上ろうとはしてみた。しかし黒い垂直面にはハシゴはおろか手がかり一つない。そのうえ鉄のように硬く、爪を立てても傷ひとつつかない。もちろん、飛んで脱出することなど絶対に不可能だ。

なぜなら、ハルユキはいま、デュエルアバター（シルバー・クロウ）ではなく、ぶよぶよと丸い生身の姿なのだ。制服のボケクトには何の道具も入っていないし、壁がたつた二回しかできないこの体で垂直の壁なんか登れるはずもない。

だからハルユキは、無力な両腕で膝を抱え、顔を思い切り伏せて、全ての終わりをカウントする重低音をただ聴き続けている。きつくつぶった面の陰から、大粒の涙をばろばろと零しながら。

……僕は、昔から、ずっとこうだった。

……小学三年生の二学期に、初めて上履を脱された時。五年生の頃、教室でブタの真似をさせられた時。中学に上がってから、なけなしの小遣いを巻き上げられたり、理由もなく殴られたりするたびに、自分だけの隠れ場所に逃げ込んで、膝を抱えて泣いた。

……だから、全部終わってしまっても、あの頃に戻るだけだ。楽しい夢から醒めて、現実に戻るだけなんだ。

胸の奥でそう呟き、ハルユキはついに、降り注ぐ音すらも遮断しようとした。

だが、耳を塞ぐために持ち上げた両手は、なぜか途中で止まった。ほんの少しだけ顔を上げ、薄く臉を聞いて、前に持ってきた二つの手を見詰める。

短く、丸っこい指。長い間、ずっとポケットに隠し続けてきたせいで生白い掌。誰かに向けて差し出すことも、戦うために握りしめることも、ひたすら拒み続けた両手――。

——このたかが仮想の二メートルが、キミにはそんなに遠いのか？

不意に、誰かの声が、遠くかすかに響いた気がした。更に、その問いに答える自分の声。

……遠いです。

「……………でも」

遠か記憶の彼方から届いたやり取りに、暗い穴の底にうずくまったまま、ハルユキは声に出して言葉を続けた。

「前に伸ばせば、少し近づくんた。一歩進めば、もっと近づく。僕はそれを……大切な人に、教えてもらったんだ」

両手を壁にあて、よろよろと立ち上がる。頭上を振り仰ぐが、穴の出口は見えない。垂直の壁がどこまでも伸びるばかりだ。

手の甲で両眼に漆む涙を拭い、ハルユキは振り向くと、目の前にそびえる黒い壁に相対した。いままでも何度か登ろうとしては諦めた無限の断崖。

ふと思いつく。記憶は曖昧だが、以前にもこんなことがあった気がする。絶望の底に叩き落とされ、でもそこから高い壁を登って、新たな道を見いだしたことが。

ハルユキは、無意識のうちに右手をきつく握りしめていた。冷ややかに輝く黒い壁面と、白く柔らかな生身の拳を交互に眺める。歯を食い縛り、意を決して振りがぶる。

不格好な、遠さも重さもないパンチだったが、それでも拳が壁にぶつかった瞬間、焼けるような痛みが右手から頭の芯までを貫きハルユキは悲鳴を上げた。

「うあ……！」

危うく倒れ込みかけるのを堪へ、疼く右手を胸に抱き込む。見れば、骨の突き出たあたりが赤く擦り割れて血が滲んでいる。当然、壁にはビビどころか凹みひとつついていない。

萎えそうになる決意を奮い立たせ、今度は左拳を振った。

「……ううー」

情けない叫び声とともに突き出す。ガツッ！ と鈍い衝撃、そして再びの激痛。収まりかけていた腕がどつと溢れる。同じように血が滲んできた拳を口許に押しつけ、泣き声が漏れそりになるのを必死に押さえつける。

盛り込みたかった。壁に背を向け、肺を抱えて、今度はそそ全てが終わるまで眼と耳を塞いでいたかった。

しかし、ハルユキは頭のどこかで理解していた。そうしてしまえば、自分ひとり元の世界に戻るだけでは済まない。新しい世界で得た沢山の友人たちを、ずっと昔からハルユキの傍にいてくれた幼馴染を悲しませ——そして、誰よりも大切な「あの一人」を酷く傷つけ、損ない、歩むべき道を永遠に閉ざしてしまうのだ、と。

「う……あああー」

叫び、傷ついた右拳をもう一度壁に叩き付けた。黒い壁面に、少しだが血が飛び散り、眼の眩むような痛みが頭の芯を貫いた。

「ああ……あああつ……」

今度は左拳。肉が潰れ、骨が軋む。涙と鼻水が混ざりながら顔を濡れ、胸元にばたばたと落ちる。

石とも鉄ともつかない硬質の拳は、生身の拳による殴打ごときでどうにかできる代物とは思えなかった。しかしハルユキは、半分悲鳴の混じった叫び声を上げ、顔をぐしゃぐしゃにしなから、右、左、右と握り拳を叩き付け続けた。ずっと上からは、相変わらずボン、ボンと破滅を刻む鐘の音が降り注いでくる。そのペースに合わせ、壁を殴る。殴る。

両手はたちまち真っ赤な血にまみれ、ぐずぐずに腫れ上がった。痛みを痛みとして感じられる段階を通り越し、直接表で表られるような耐え難い熱感が神経を駆け巡る。ほんの少しでも気を抜けば、そのまま倒れて二度と立ち上がれなさそうだった。だからハルユキはひび割れそうなおぼろしく歯を食い縛り、その隙間から甲高い絶叫を響き散らしながら、何度も何度も壁を殴り続けた。

何度も、何度も。右、左、右、左、また右——

「無駄だよ」

不意に、背後で小さな声があった。

ぼろぼろに壊れかけた両拳をいつときぞろし、ハルユキは窮乏しに振り向いた。

ずっと年下の少年が一人、穴の底に立っていた。顔に見覚えはない。Ｔシャツと膝丈のジーンズを身につけ、少し長めの髪を顔に垂らしている。ハルユキよりずっと低い身長と幼い顔立ちからして、せいぜい小学校の二年か三年生くらいだろう。

少年は、どこか憐れむような、虚構的な視線をハルユキに向け、もう一度言った。

「無駄だよ。その聲は聴けない」

荒い息の下から、ハルユキはか細い声で言い返した。

「そん、なの……やってみなきゃ、解らない、だろ」

壁かに両手は押ける寸前だが、まだ動かし、まだ揺れる。その後は足があるし、肩があるし、頭だってある。体が完全に破壊され、立っていられなくなるまで、止めるつもりはない。

壁の透む両眼にそんな意思を込めて少年を見返し、ハルユキは再度壁に向かおうとした。しかしその寸前、少年が小さく首を振りながら囁いた。

「無理なんだよ。だってこの《夢遊》は……きみのじゃなく、ぼくのなんだ。ここは、ぼくの《心の穴》なんだよ」

「え……………」

「この深さまで降りてきたのは、きみが初めてだ。でも、もつとずつと浅いところからでも、穴から出られた人はいなかった。きみの前の人も、その前の人も、その前の人もね……。この穴が消えるのは、加減世界そのものが消える時。フタを裏切り、苦しめた彼らが、一人残ら



ず消える時まで、ばくの絶望は終わらない……」

その言葉を聞いた瞬間、ハルユキは悟った。

眼前に立つ幼い少年こそが、〈最初の一人〉なのだ。加速世界の黎明期に、余りにも巨大な怒りと絶望の心意によって神器〈サ・ディステイニー〉と大剣〈スター・キヤスター〉を兼ね、災禍の種〈サ・ディザスター〉へと変容させたバーストリンカー。

〈タコム・ファルコン〉。

「君は……ずっと、ここに、いたのか」

ハルユキは掠れ声で呟いた。いや、それも当然だ。艦に宿る疑似思考体、あの〈獣〉を生み出したのは彼なのだから。獣のコア部分、ずっとずっと奥底に、ファルコンの思念が隠されていて、不思議はない。

しかし、だとすれば、何という皮肉だろう。災禍の種を構成するデータのどこかには、ファルコンが愛した〈サフラン・プロッサム〉の思念も残存しているのだ。だが、プロッサム——あの山吹色の少女は、強化外装がディザスターとして発動している時は出現できない。そして同様にファルコンは、ディステイニーが召喚されている間は出現できない。眼りなく近くにいるのに、永遠に遇り会えない思ひ人たち——。

……いや。

いや、違ふ。召喚されている形態がどうであれ、ディステイニーとディザスターは同一のオ

プロジェクトだ。ハルユキはそれを、『フレイン・バースト中央サーバー』の中で確かに見た。振動する銀河の中央で眩く輝いていた北の七星の六番星、あの内部に二人の思念が残留しているのなら、とつくに邂逅できていたはずだ。

両手の痛みも一時忘れ、ハルユキは懸命に考えた。

災禍の體（サ・ディサスター）と、七の神格（サ・ティステイニー）の根本的な違い。

それは――ディサスター状態の時は體が大剣スター・キヤスターを呑み込んでおり、ティステイニー状態の時は二つが分離しているということだ。剣が分離している、つまり独立して演算されている時だけ、サフラン・プロッサムは出現できる。

プロッサムが宿っているのは、體ではない。

剣なのだ。六番星（銀陽）の傍で仄かに輝く、小さな伴星。彼女本人すらも気付いていないのかもしれないが、あの中にこそ、プロッサムの思念が存在するのだ。

敵との完全融合によって、死なされた、長く悲しい夢の記憶。あの華園の最終幕で、サフラン・プロッサムは地獄の長虫ヨルムンガンドに何度となく喰い殺され、そしてスター・キヤスターはそのヨルムンガンドからドロップした。まるで、ある種の、遺体のように。

「そう………だった、のか」

ハルユキは、声ならぬ声で呟いた。

もしこの推測が正しければ、災禍という名の呪いを解き、加速世界に迷途と誤ってきた悲劇

のサイタルを断ち切る方法がたった一つだけ存在する——かもしれない。しかしそれを試みるには、どうあろうとこの闇の底から脱出しなければならない。全てが終わってしまう前に。

働き、立ち尽くす幼い少年……クロム・ファルコンをじつと見詰め、ハルユキは言った。

「僕は……諦めない。だって、僕はまだ、ここに存在してるんだ。」

振り向き、ぼろぼろの右手を持ち上げる。もうどの指も満足に動かないが、激痛に耐えながら小指から順に折り曲げ、拳の形を作る。

「う……あああ………」

声を上げながら思い切り振りかぶり——

「ああああああ!!」

絶叫とともに壁へとまっすぐ撃ち込む。バキーン——と破損な音が響き、真紅の光が頭の志を駆け渡る。

「うおお……おおあああ——!!」

続いて左拳。体の回転力と重さの全てを乗せたストレートパンチが激突し、鮮血が壁に飛び散る。

「無理なんだよ………」

背後で、密やかな吸きが響いた。

「この絶望からは、誰も抜け出せない。冥府の連鎖は、誰にも断ち切れない。世界の終わりに、

ただひとり残る、その時まで」

「……………君は……本気で……そんなことを、望んでいるのか」

右拳を振りかぶりながら、ハルエキは訊ねた。

「最後の一人になるってことは……君が、全ての悲しみを、たった一人で背負っていくってことだ。消えていったバーストリンカーたちの記憶を、君だけが抱え続けるってことだ。本当にそんな孤独か……君の、望むものなのか!!」

ガキイアリと力任せに拳を叩き付ける。引き戻した手から、ぼたぼたと血が滴る。

「はくの望み？ それは違うよ」

冷静な……どこか寂しそうですらある声が、ひっそりと答えた。

「戦争の果ての靖康を望んだのは、彼らだ。フランを裏切り殺した者たちのほうだ。ぼくは、その望みに応えようとしているだけだよ」

「なら……………、なら、君に訊くぞー」

左拳を壁に叩き付け、飛び散った血を顔に受けながら、ハルエキは叫んだ。

「サフラン・フロウサムの望みはどうなる？ 加速世界から、誰も消えずに済むようにっていうあの人の願いはどうなるんだ？ 今の君は、ブロンサムの希望を裏切っていることになるんじゃないのか？」

答えは、しばらく返らなかった。やがて、いっそうかすかな声が、厳密な調を帯びた。

「……………フランは、もういないんだ」

もう一度。

「フランは、消えてしまった。フランのいない世界に、希望なんかいらぬ。フランを殺した奴らに、希望を求める資格はない」

「違う……………、違う、違う!!」

血まみれの拳を交互に振るいながら、ハルユキは絶叫した。

「プロッサムが溺れても、彼女の希望は残っている!! 君のすぐ傍に残っているんだ!!」

「……………喊だ」

「嘘じゃない!! 手を伸ばせば……………この壁の向こうに、ほんの少し手を伸ばせば、そこに……………」

「嘘だ!!」

……………ついに、タロム・ファルコンの残留思念である少年は、声を荒らげて叫んだ。

「この世界に存在するのは絶望だけだ!! 誰もこの絶望の底からは逃れられない!! きみも……………そして、ぼくでさえも!!」

「絶望を……………知っているのが……………君だけだとしても、思っているのか!!」

血と涙を散き散らしながら、ハルユキは呟えた。

「この壁が、君の絶望だっていうなら……………そんなもの、僕が壊してやる!! この〈アリブー、

〈ゲロユキ〉、〈ビヤマル〉、〈フタくん〉、有田春樹が……………」

次の一撃で、拳が完全に碎け散るだろうという確信を抱きながら、なおもハルユキは右手を思い切り引き絞った。ダッシユの勢いすら乗せて、体ごとぶち当たる勢いで――

「――ぶっ壊してやる!!」

ガアアアアン!!

まるで、シルバー・クロウの金属装甲が破裂した時のような衝撃音が、闇の底に轟いた。

「闇の静寂ののち――」

びしっ、とごくごくかすかな、しかし確かな響きが生まれた。

そしてハルユキは見た。壁と右拳の接点から、微細な白いラインが、放射状に少しずつ広がっていくのを。

世界が震える。ひび割れは徐々に速度を増しながら伸び、扭曲する壁から床までを覆う。

「……………きみは……………」

そんな叫びが、後ろから聞こえた。

ハルユキは、ゆっくりと振り返り、立ち尽くす少年を見た。何度も噛み締めたせいで血の滲みから、無意識の言葉が溢れ出した。

「僕と、君は、同じなんだ。……………この世界にいる誰もが、きっと、僕つこのところでは同じなんだ……………」

それを聞いた少年――タロム・ファルコンは、今までずっと俯けていた顔を、わずかながら

持ち上げた。表情は読み取れなかったが、二つの澄んだ瞳がハルユキの眼を捉えた、その瞬間、暗闇の世界が、地めく無数の硝子片と化して、一気に砕け散った。

「ダ……ルウウオアアア!!」

凶暴な雄叫びとともに、ダークメタルの装甲に包まれた右拳が、今まさに振り下ろされようとしていた。

ハルユキはその軌道を、反射的な制御で右にすらした。拳の下で、(雷音)ステージの石灰岩の壁が放射状にひび割れ、拡散した衝撃波が六本木ビルズ・タワー全体を小さく身震いさせた。

まっすぐ突き出した腕の、すぐ左側に――。

これ以上は不可能と思えるほど徹底的に破壊された、黒の王ブラック・ロータスのフェイスマスクがあった。

V字のサイドホーンは両方とも半ばからへし折られ、艶やかに輝いていた鏡面ゴーグルにも無残なクラックがびっしりと走っている。ダメージは上半身の全体に及び、装甲の無事な部分を探すほうが難しいほどだ。

それらの破壊を行ったのが、ディザスター化したシルバー・クロウの――つまりはハルユキ自身の同手であることは明らかだった。ハルユキが愕然と両眼を見開くあいだにも、アバター

の左腕が震え、勝手に振りがおされ、次の一撃を放とうとした。

黒の王に馬乗りになった体勢のまま、ハルユキは意志力を振り絞り、その腕を停止させた。
 遠く、頭の上で、《敵》の怒りに満ちた吠え声が強烈に響いた。

――なぜ、我ニ抗ウ!!

――ソレハ《敵》ダ!! 滅ボスベキ敵ダ!!

再び体全体がきしりと震えたが、それ以上動くことはなかった。少なくとも現在、このデュエルアバターの操作権はハルユキにある。

左拳を高く掲げたまま、ハルユキは顔裏で必死に叫び返した。

――違ウ!!

――この人は《敵》じゃない!! 僕の……誰よりも、大切な……

だが、そこで無理矢理に思念をカットする。アバターの優先権がいつまで持続するかはまるで解らないのだ。再びパーサータ状態に陥つてしまう前に、為さねはならないことがある。

ぼろぼろになり、ほぼ意識を失った様子の黒首姫の右腕と交差するように、禍々しいフォルムの大剣が地面に突き立てられている。だがこの剣は、はじめからこの姿だったわけではない。遠かな過去、最期の長虫コルムンガンドに屠られ果てた少女、サフラン・プロッサム。彼女の遺志を伝えようとするかの如くエネミーの中から出現した白銀の長剣スター・キヤスターを、タロム・ファルコンの怒りと嘆きが込め、《異端》の一部として取りこんでしまったのだ。

ハルユキの推測とおり、またこの剣の内部にフロッサムの魂が残っているのなら、そして、**（冥剣）**を生み出したのが、彼女とフロアルコンの久遠にわたる別離だとすれば、二人は、再び遇り合わねばならない。そのためにできることは、もうたった一つしか思いつけない。

しかし、巨大な障害がまだ残っている。

（獣）がなぜあちも狂う狂い、ブラッタ・ロータスを襲ったかは明らかだ。黒の王に攻撃される寸前、ブラッタ・バイスが己の形状をサブラン・フロッサムの影絵へと変化させ、**（獣）**の原則にして最大の傷をこじ開けたからだ。

意識を暗闇の底まで引き飛ばされる寸前のハルユキの記憶によれば、あの時、黒の王の必殺技に胸を貫かれた彼フロッサムは、ゆっくり倒れ落ちる様を待いつつ二人の足跡の影に沈んだ。

そしてそのシーンの直後、ヒルズ・タワー屋上に存在する柱や壁などのあらゆる黒影オブリエクトは、ブラッタ・ロータスとタロム・ディザスターの衝突の余波によって完全に吹き飛ばされた。それはすなわち、オブリエクトの作る影もまた消滅したということだ。**（影から影へと移動する）**というあの力はもう使えない。

つまり——ブラッタ・バイスは、目の前の地面に黒々と舞まれた影の中に、まだ潜んでいるのだ。

今この瞬間ならば、また奴はハルユキが暴走状態から脱したことに気付いていないだろう。しかしわずかにも異常を感じれば影から出てきて、次なる悪魔的な策を打ってくるに違いない。

それに先んじて連戦の一撃を浴びせるためには、ここからの行動に、たったひとつのミスさえも許されない。

サフラン・ブロッサムとクロム・ファルコンを非情な嵐に突き落とし、《究極の敵》が出現する契機を作った者たちこそがブラック・パイスト（加速研究家）だ。以来、現実時間で七年にもわたって繰り返されてきた悲劇のサイクルを断ち切れるのか——それとも、《研究会》に捕らえられ、奴らの手札の一枚となってしまうのか。

ここが、その分水嶺。

勝負の際の際だ。

「ダルアアアッ!!」

ハルユキは、敢えて凶暴な咆哮を轟かせつつ、宙に掲げた左手で、すぐ近くの地面に突き立つたままになっていた黒軍の大剣を引き抜いた。

すかさず右手を伸ばし、地面に倒れたまま動こうとしないブラック・ロータスの、革製の首を掴みにする。

——先輩、すみません！ あとでいっぱい謝ります……!!

左手に剣、右手に黒の王を確保したハルユキは、全身を鉅け反らせ、再び吼えた。

「ルウ……オオアアアッ!!」

長い尾がうねり、背中の金属板がいっぱいに広がる。激しく右半身を振り廻し、陣地。螺旋

を結く軌道で、西の空に架かる黄金色の太陽を自照す。重要なのは、距離と角度。視界の片隅にヒルズ・タワーの屋上を捉えつつ、三十メートルほど飛んでホバリングする。

急激な重力の変化に意識を呼び覚まされたか、ブラック・ロータスのひび割れた鏡面ゴーグルの奥で、青紫色のアイレンズがごくかすかに瞬いた。

ハルユキは、肉食獣のあざとを模したバイザーの下から、必死の感情を込めた視線を黒の王の双眸に注いだ。聴覚に、消え去る寸前のような囁き声が触れた。

「……………ハルユキ、君……………？」

——先輩、異言姫先輩!!

アバターの操作機を奪い返そうと暴れる敵と懸命の綱引きを続けながら、ハルユキも全力の思念を送した。

——あなたを、こんなに傷つけてしまった僕の言葉なんか、信じられないでしょうけど

……………でも、いま、この一瞬だけ！僕を、信じてください!!

すると——それを聞いた黒の王が、仄かに微笑んだ、気がした。

……………何を、言う。

……………私は、いつだって、キミを信じているよ。これまでも……………そして、これから……………

永遠に……………。

その言葉が、色とりどりの寶石のようにハルユキの意識に零れ、煌めいた瞬間、胸の奥に狂

おしいほどの熱情が込み上げた。

左手の剣を捨て、両手で黒書巻を抱き隠めたかった。だが、それをするのは全てが終わってからだ。今はまだ、果たすべき責務がある。劍の呪いを解き、悲しみの連鎖を終わらせるには、
 (二人) をもう一度、運命させねばならないのだ。

「タルオオ………アアアアア———」

ハルユキは、ひとさわ狂々しい雄叫びを永遠の黄昏に轟かせると、左手に握っていた大剣を逆手に持ち替え、高々と掲げた。

もし下から見上げていけば、左手の剣で右手に捕らえるアバターを貫こうとしているとしか思えないだろう。ことに、ヒルズ・タワーには完全に背中を向けているため、劍の切っ先は大柄なアバターと広げた翼に隠れて見えないはずだ。

息を止め、あらん限りの意思力——祈りや願いの名で呼ばれる『正の心意』を左手にかき集めて、ハルユキは剣を振り下ろした。

鋭い切っ先は、黒の王の体を抜けただけでその様を通過し、災禍の源の中心部——ハルユキ自身の心臓へと深く突き立った。

——我ヲ、裏切ルノカリ 汝マデモカ、我ヲ裏切り、滅シヨウトイウノカリ

騒動で、（獣）の凄まじいまでの怒りの声が鳴り響いた。しかしその叫びには、ほんの少しだけ、哀しげな後響が含まれているように思えた。

——違う！ 僕はお前を滅ぼしたりしない！ この剣は、お前を傷つけない！

ハルユキは（獣）に向けてありったけの思念を振り絞った。だがすぐに、圧倒的な憎しみの奔流がそれを呑み込もうとする。

——嘘だ！ アラエル者ハ欺キ、騙シ、裏切ルノタリ！ 我ハ何者ヲモ信ジナイ！

どこか泣き叫ぶかのような声が響いた直後、胸部装甲に穿たれた傷口から、凍阻のオーラが爆発も溢れた。それらは大剣の刀身に絡みつき、胸から弾き出そうとする。その反発力に必死に抗いつつ、ハルユキも叫ぶ。

——僕を信じろ、とは言わない！ でも……この世界に、たった一人、お前を愛し、思いやつてくれている人がいるんだ！ その人を……信じてくれ！！

大剣を握るハルユキの左手から、純粹なる白い光が逸った。

静らかに輝くオーラは、横々しいフォルムの大剣を、柄から切っ先へと向かって包み込んでいく。先に触れた部分が、蒸発するようにデザインを変え、内部から新たな剣が姿を現す。半ば過ぎ通った刀身に纏つものの星を閉じ込めた、流麗なるしろがねの長剣。強化外装、（スタ

ー・キヤスター」。

「うお……ああああ———っ!!」

自分自身の声による喊叫びとともに、ハルユキは、本来の姿を取り戻した長剣で自分の胸を深くと貫いた。

数秒的ダメージは、発生しなかった。痛みも、衝撃すらも感じなかった。代わりにハルユキは、ひとつのイメージを五感で受け取った。

分厚い、超硬質の殻に満ちる無量の闇。

世界を覆う金属の殻に、小さな亀裂が走る。そこから、春の日差しを思わせる薄らかな白光がさつと射し込む。亀裂はたちまち大きくなり、先ちとどんどん強くなる。その、直視できないほど眩しい輝きの彼方から——誰かが、両手を差し伸べながら闇の世界へと飛び込んでくる。

全身を包む、花びらを模した山吹色の鎧甲。シヨートヘアの下で、さらさらと光の殻を穿つ空色のアイレンス。長剣スター・キヤスターに宿り、長い長いあいだひたすらに祈り続けていた少女——《サフラン・プロッサム》。

ふわりと降り立ったプロッサムは、凍とした立ち姿で、闇の世界の中心と対峙した。

そこには、巨大な何かが存在した。漆黒の皮を全身にまとい、血の色の双眼と長い牙を持つもの。《獣》。

山吹色の少女は、怖れるふうもなくまっすぐに歩み寄りながら、獣に向かって右手を差し出

した。

「ごめんね。長いあいだ、ひとりにして。寂しかったよね……。苦しかったよね」

獣の巨大な口から、低い唸り声が零れる。目の前の、少女の存在が信じられないというように、小刻みに首を振り、尻尾を揺らして後退ろうとする。

だが、ブロッサムは毅然とした表情で獣のすぐ前まで達すると、伸ばした両手で、いつかの隣にいたその巨大な首を抱いた。烈火にも似た毛皮を優しく撫でながら、囁く。

「これからは、ずっと一緒だよ。ずっと、ずーっと一緒……」

直後、

ぱっ、と音を立てて、獣のまとう黒い炎が弾けた。巨大なエネルギーの波動が殻の内部に拡散し、やがて収束した。その後に存在したのは――。

デュエルアバターではなく、生身の、幼い一人の少女だった。

髪はボーイッシュなショートカット。少し大きめのパーカーと、キエロットスカートを身に付けている。そして、両腕に抱かれているのは、小さな一匹の黒猫。

少女は優しく微笑むと、仔細を抱いたまま、数歩前に進んだ。するとその方向、少し離れた場所に、あの少年――タロム・ファルコンが立っていた。

少年の唇が震え、右手がおずおずと持ち上げられた。

そちらに向かって、タツと少女が走り始めた。二人はみるみる近づき、互いに差し伸べた指

先が融れ、結まり、しつかりと握り合わされ——。

——ファル!!

——フラン!!

それぞれの名を呼び合う声が、金属殻の内部に、優しい波動となって響き渡った、その瞬間、闇を閉じ込めていた分厚い殻が、無数の花びらとなって一気に分解した。

舞い散る純白の光たちに溶けるように、殻の内部に満たされていた苦しみや憎しみ、悲しみたちが昇華されていく。きつらきと強く震える鈴の音に導かれて、全てが融れ、たゆたい、遠ざかっていく——。

イメージの世界から、西色のフィールドへと戻るす前、ハルエキは、その声を聞いた気がした。

——サラバタ、我々最後ノ共同者ヨ。

——汝ハ……強カッタ。我ヨリモ。我々滅ボシ、マタ我々滅ボシタ、アラユル者タチヨリモ。

——願ワタハ……汝ノ光ヲ、世界ニ残ル、最後ノ棋棋ヲ斷テ切ランコトヲ……………。

声が消え去ると同時に、ハルエキは、再び加速世界——（黄昏）ステージの空へと帰帰した。右腕には、傷ついたブラント・ロータスの体。左手には何も持っていない。

そして全身の金属装甲は、夕焼けの色を照り返す、純粋なるミラー・シルバーに輝いていた。

「………先軍」

ハルユキは、万感の思いを込めて、ただそのひと言を口にした。

あれほど恐れた暴走状態にあえなく陥り、必ず守ると誓った剣の主、ブラクタ・ロータス——黒雪姫をこうまでも傷つけてしまったことには、いつそ己が全身をばらばらに引きちぎってしまいたいほどの阿責を感じずにいられない。

しかし、黒雪姫はきつと、我を失い荒れ狂うハルユキの拳を、敢えてその身に受けたのだ。超級エネミー（四神スザク）にすら莫大なるダメージを与えた王の実力を以てすれば、たとえ相手が暴走するクロム・ディサスターであろうとも、少なくとも相討ちに持ち込むことは可能だったはずだ。しかしそうせず、容赦なく振り下ろされる無数の打撃を全て受け止めた。その果てに、ハルユキが再び己を取り戻すと信じて――。

中空にホバリングするシルバー・クロウの陣の中で、震え声による呼びかけを聞いた黒雪姫は、ほろほろの鏡面ゴーグルの下で青雲色のアイレンズを不規則に曇かせた。どこまでも優しく、穏やかないらえがステージの微風に染って流れる。

「……おかえり、シルバー・クロウ。よく、頑張ったな………」

辛ばから折損した左手の腕が、丸いヘルメットの側面をそつと断じた。

「ぜん……、ばい……」

もう一度、切れ切れの言葉を絞り出し、ハルユキはこみあげてくる囁きを必死に堪えた。

黒雪姫の胸に顔をうずめ、子供のように泣き喚きたかった。しかし、まだその時ではない。あともうひとつだけ、やらねばならないことがある。いつときは確かにハルユキの相棒だった疑恨思考体、（獣）との約束を果たすのだ。（世界の樹根を断つ）という誓いを完遂するにはまだまだ長い時間がかかるだろうが——しかし、反転攻勢の最初の一弾は、この戦場で放つ。黒のレギオンの、そしてバーストランカーとしての矜持を示すために。

ハルユキの意思を、黒雪姫も触れ合う装甲越しに感じてくれたようだった。ごく小さな動きで一度頷き、頷く。

「——僕は一時一度だ。我々は二人とも近接型だから、攻撃は遠隔型心意によって行わねばならない。だが、のんびりとイマジネーションを練っている余裕はないからな……キミは距離にだけ集中しろ。威力は私が乗せる」

どう見てもこれ以上の戦闘など不可能と思えるほど窮乏窮乏なのに、黒雪姫の言葉は断固たる闘志に満ちていた。ハルユキも小さく頷き返し、意識を研ぎ澄ませた。

「カウント3で行くぞ……、2、1、ゼロ！」

テレパシーの如く伝わったその指示に合わせ、一気に体を縮す。

視界中央やや下方に、夕陽を浴びてそびえる白亜の巨塔——六本木ヒルズ・タワー。屋上は、先のブラッタ・ロータスとクロム・ディザスターの激突によって全オブジェクトが一掃され、真っ白い平面へと変わっている。

その中央に、ぼつりと滲む小さな黒点がひとつ。太陽を背にして浮遊するハルユキと黒雪姫の体を作り出す影だ。しかし今この瞬間だけは、単なる仮想世界のライティング効果ではない。憎んでも憎みきれない仇敵の隠れ家。

そう——、いまこの瞬間、あのちっぽけな影の中には、加速研究会副会長を名乗る精鋭アバター、**《拘束者》**ブラッタ・バイスが身を潜めているのだ。**《敵》**がハルユキに言い残した、断つべき**《世界の操縦》**の一人。

「クロウ、手を!!」

鋭く叫び、黒雪姫が健在な右手の剣を高く掲げた。その切っ先が仄かな金色の過剰光に輝き、びしりと分割されて、五本の華奢な指を作り出した。ハルユキは本能的に左手を伸ばし、自分の指を黒雪姫の指にしっかりと絡めた。

握り合われた二人の手から、真紅と白銀の、二色のオーラが眩く迸った。

この時点でついに異常を察したのだらう、三十メートル下方の屋上に滲む影の中から、すうっと一枚の黒い薄板が出現した。ブラッタ・バイスだ。板は床面に貼り付いたまま滑るように動きだし、屋上の奥側の縁——正確には、ビルの東の壁面に落ちる巨大な影を目指す。

屋上が本来の、柱や壁が立ち並ぶ状態を保っていれば、影から影へと移動するという異能力を持つあの精霊アバターは要を晒すことなく悠々と戦場を離脱できたはずだ。

しかし、影を生み出し得るあらゆるオブジェクトはすでに破壊されている。そしてヒルズ・タワーはこの近辺で最も高い建築物だ。屋上に刻まれる影は、太陽を背にするハルユキたちのものだけ。偶然ではない。そうなるように角度と距離を緻密に計算したうえで、ハルユキはこの座標目指して飛んだのだ。

以上の理由によりブラッタ・バイスは、これまで何故となくそうしたように、影に潜り込まず離脱する——彼の言う《最大の能力たる逃げ足》を発揮することはできない。

これこそが、一瞬、一度の機だ。

ハルユキは、いまの自分にして得る限界のスピードで光のイメージネーションを左手に集中した。生まれた銀色の過剰光に、黒雪姫の右手が発生させた真紅の過剰光が、螺旋を描いて融合した。

「光線槍」!!

「零命撃」!!

二つの異なる技の名が、まるでユニソンの如く綺麗に重なって響いた。

握り合わされた手の中で、二色のオーラが、DNAの二重螺旋を導く軌跡を描きながら伸長し、一つの巨大な槍を作り出した。



二人はそれを、完璧にシンタロした動作で、陛下の三番目掛けて投擲した。銀と紅の槍は、仮想の太気に燃つもの波紋を広げつつ突進し——滑るように疾駆する黒い津板にたちまち追いつき、平行する二本の尖端が板の中心に触れ——。

そしてハルユキは見た。

漆黒の覆板が、無数の欠片を散らして放射状に分解するのを。

槍はそこで停まらず、白い屋上に触れ、水面を拜しのけるかのように容易く穿ち。

甲高い共鳴音だけを残しながら、高さ二百三十八メートルの巨大ビルディングの内部へと滑えた。

数秒後、ビルのずっと下の方から、地震さにも似た振動波が駆け上ってきた。ビル外壁の、古代ギリシャの神殿を思わせる円柱やレリーフを飾った飾り窓が激しく震え、一部は脱落する。破壊はそれだけに留まらず、外壁全体に次々と深い亀裂が走り、その奥から炎にも似たエネルギーの奔流が噴き出し——。

次の刻、間違ひなく加速世界に於ける最大の構造物の一つであるランドマーク、大本木ヒルズ・タワーは、無限個の瓦礫オブジェクトへとその巨体を変化させつつ、真下へと崩落し始めた。

引き起こされた現象こそ途轍もないものだが、ハルユキにとっては、巨大ビルの完全破壊もただ必殺技ゲージをフルチャージさせただけのことに過ぎない。より重要なのは、境界左側に

小さく流れた、バーストポイント加算のシステム・メッセージだ。それはすなわち、先の複合心意攻撃によって、伏魔ブランク・バイスの体力ゲージがゼロになった——イコール死んだことを示している。

もちろん、加速世界での死は、多くのバーストリンカーにとっては日常茶飯事だ。單にポイントが燃えか減る程度のベナルティを受け、通常対戦フィールドなら次の対戦で、無制限中立フィールドならば一時間後には無傷で蘇生できる。しかし、そのルールにも、《例外》は存在する。

「――先輩！」

互いの手を握り合わせたまま、ハルユキは黒薔薇に向き直り、叫んだ。

「どうでした!?」

主語を省略した問いに、黒の王は——小さく一度、かぶりを振った。

「ダメだ。加算ポイントの数値からして、奴はどうやらレベル8だな……」

「……………そう、ですか……………」

結んでいた息を吐き出しながら、ハルユキは呟いた。

もし《拘束者》ブランク・バイスのレベルが黒薔薇と同じ9に到達していれば、いまの死によって《レベル9サドンデス・ルール》が課せられ、一発でポイントを全損し加速世界から永遠に退場していたはずだ。最古書と言ってもいいバイスの威歴と底知れない実力からして、

その可能性は少なからずある、とハルユキは予想していたのだが——残念ながら、あの賢士はレベルを8に留めていたらしい。

ということとは、心意の槍に貫かれて一撃死した精霊アバターは、小さな「死亡マーク」となってフィールドに残り、一時間後に蘇生するはずだ。そこを逃さず再び戦いを挑み、倒すことをひたすら繰り返せばいつか全損に追い込めるはず……なのではあるが。

「あの瓦礫の山からマークーを探すのは困難だな……」

黒書姫の声に、ハルユキは元ヒルズ・タワーだった巨大な崩落跡に眼をやった。ピラミッド状に増殖した残骸オブジェクトはいったい何万、何十万個あるのか見当もつかないし、それらを全部ひっくり返して死亡マークーを発見するのは確かに難しいだろう。

「……それに、地上には影がいっぱいありますからね。次は多分、連敗逃げられて終わりの気がします」

「ン、その通りだな。……ま、あれほど逃げ足を誇っていた彼奴を、一度にせよ倒したのだ。反攻の宣言としては充分だろう」

そう応じると、黒書姫は、今までずっとハルユキの左手と繋いでいた右手をそっと解いた。華奢な五本の指が、かしゅん、と優しい響きを出して砕け散る。

「あっ……」

小さく叫んでしまうハルユキに、優しく微笑みかけながら黒の王は言った。

「二分ちもよつと。ぶつちぎりの最長持続記録だ」

「……………先達……………」

ハルユキは、改めて右手を伸ばし、平ばかり折れた袖の剣を包み込んだ。

言いたいこと、言わねばならないことは余りにも多いのに、またしても胸一杯に込み上げてきた感情の大渦がそれを妨げた。

全てが終わった——わけではない。災禍の臨（きん）（サ・ディサスター）は、それを作り出していた呪いを解かれ表裏的には消えたものの、システム的にはまだいかなる形によってかシルバ―・タロウを構成するデータのどこかに残存しているはずだ。それを（浄化）によってアイテムとして分離せねば今回のミラシオンは終わらないし、また（E.S.S.キット）の発生源と思われる加速研究会の策謀も、いまだ全容が見えない。

左手で支えた黒書経の、ぼろぼろに傷ついた体を力いっぱい抱き締めたいという衝動を再び苦勞して押しとどめてから、ハルユキはホバリングする体の向きを少し北東方向へとずらした。視線で、約五百メートル先にそびえ立つ、ヒルズ・タワーをすら上回る尊容——東京ミッドタウン・タワーを睨（にら）める。

「見えますか、先達。あのミッドタウン・タワーの天辺に潜（ひそ）んでる、透明なエネミ……………」

「……………ああ」

数秒後、黒書経は低く囁いた。

オレンジ色の夕陽を受ける巨塔の先端付近には、一見何も無いように見える。しかしよくよく眼を凝らすと、太陽光線をわずかに屈折させる、巨大な「何か」の存在に気付く。

「あれは、神獣級エネミー〈大天使メタトロン〉だ、つて饒のレギオンのアイアン・パウンドさんが言っていました。何者かが餌に馴らして、ダンジョンの奥底からあそこに移したんだ、つて」

「……………メタトロンが、聖堂から出たか。つまり……………出現確率が極めて低い〈地獄〉ステージ以外では、あの塔にはまるで近寄れないというわけだな……………」

「そう、なんです。前のダイブで、先達たちが南の方向に見たでっかい爆発は、あのメタトロンのパウンドさんのロケットパンチに反応して、とんでもない威力のレーザーを発射した時のものです」

「なるほどな……………。ならばあの規模も納得だ。そして、ということはずなわち、ミッドタウン・タワーこそが……………」

黒雲蛇の嘴を引き取って、ハルユキは言った。

「はい。あそこが、ISSキットの本体所在地……………つまり、加速研究会の本拠地です」

「……………」

鋭い視線を彼方の巨塔に向けたまま、黒雲蛇はしばし沈黙を続けた。数秒後、わずかに体の力を抜き、眠く。

「このまま頼り込んでやりたいのは山々だが……フリーコたちが抜け駆けだと怒るだろうからな。城攻めは、のちの楽しみにしておこう」

不敵極まる台詞に、ハルエキはヘルメットの下で思わす口汗を隠めてしまった。その気配を感じたのか、黒雲姫も小さく微笑ひと、口調を切り替えて言った。

「さあ、そろそろ帰還すべき頃合いだ。最寄りのポータルは……」

「あ………し、しまった、ヒルズ・タワーの中にあったはずなんですけど……もしかして、ビルごと吹っ飛んで……」

慌てるハルエキに、黒雲姫はもういちど笑い声を上げた。

「ははは、大丈夫だよ。いかなる攻撃でも、離脱ポイントのポータルだけは破壊できない。座標も完全固定されているから、タワーが崩壊しても本来あるべき場所に浮いているはずだ……」

その言葉にきよきよろ線線を追らせると、斜め下方へ数十メートル離れた空間に、ぼつんと浮かぶ青い楕円形が幕かに存在した。水面のように揺らめくその輝きは、現実世界へ繋がる一方通行のドアに間違いない。

ハルエキは、黒雲姫の無ついた体を両腕でそっと抱え直すと、本来の輝きを取り戻した背中を鎧冑を広げ、軽やかな滑空を開始した。虚空に留まるポータルはたちまち大きくなり、二人を優しく吸納する光で出迎える。

青い水面に突入する寸前、くもりと体を反転させ、（黄昏）ステージに広がる永遠の夕景を視察いっばいに探えた。六本木から白金、品川へと続く街並みの彼方に、オレンジ色の斜陽を反射してきらきらと瞬く東京湾が見えた。その光景はなぜか、泣きたいほどの儚かしさをハルユキの中に強く呼び起こした。

無制限中立フィールドから、青い光のリングを潜って現実世界に帰還した、その途端、

何か柔らかな弾性体かむぎゅうううつとハルユキの顔面を圧迫し、視覚を完全に閉ざした。

自分かどこからどのようにダイブしていたのか暗闇に思い出せず、ハルユキは両手をわたわたと動かした。

すると、指先に、絹糸のような——もちろん本物の天然シルクなど触ったことはないのだが——滑らかな極まる感触が伝わり、思わず上下に振でてしまう。さらさらと心地良いこの手触りは、ごく最近……そう、バスケの試合中にぶつ倒れて運ばれた梅郷中の保健室で、ベッドに横たわるハルユキの上に乗つかるという大胆な体勢で有線直結した黒雲雀のロングヘアのそれに、とても良く似ている……というかそのものというか……。

「……………本当に、よく頑張ったな、ハルユキ君」

不意に、左の耳畔で、そんな囁き声が生まれた。

梅郷、ハルユキはようやく、ここがどこなのかを思い出した。

杉並区の南端、(URB岡佐ヶ谷住宅)の片隅に建つ露酒なタウンハウスのリビングルーム。の意匠に置かれた大型ビーズタペシヨンの上。そしてハルユキの頭を力一杯抱き締めている人こそ、その家の主にしてハルユキの(親)、レキオン(ネカ・ネビュラス)頭首あるいは梅郷中学校副生徒会長、黒の王ブラッド・ロータスこと魔術姫に執ならない。

……僕は、初めて先輩の家に招いてもらって……でっかいタペシヨンに並んで直結して、アンリミテッド・バースト・コマンドを使って、一緒に無制限フィールドにタイプして……そして……

ようやくそこまで現実認識が追いついた瞬間、ハルユキは全身を激しく震わせていた。無意識の音が、唇から小刻みに零れる。

「せ……せん、ばい……。僕……僕、先輩を……。いっばい、いっばい、傷つけて……」

「そこまでだー」

しかし、鋭い声がハルユキの自責を逆った。胸に抱いていたハルユキの頭をそっと離し、黒髪は眉近から互いの瞳を見交わさせると、語調を緩めて言った。

「キミが附ることなど何一つないよ。キミは立派に戦い、為すべきことを為し遂げた。それが全てだ。責められるべき者がいるとすれば、それは待ち伏せの可能性をまるで考慮しなかったこの私さ……」

「そ……そんな、僕こそ……警戒しておくべきだったんです。ダイブの出現場所が、(取ら)

の本拠のすぐ近くだったこと、解つてたはずなんだから……」

「たとえ嚴重に警戒していても、あの忌々しいバスターの不意打ちに対処できたかどうかは微妙なところだ。その意味では……我々は二人とも、善戦したと言っているんじゃないかな。何せ……今ここでこうして、ダイブ前と同じ私とキミのまま、言葉を交わしているんだから……」

黒雲殿の、どこまでも滑らかなシルキー・ボイスが、ハルユキの疲弊した五感を優しく慰撫した。そつと頭を離れてくれる手の感触に浸っていると、ふうつと意識が遠のきそうになったが、そのす前にとあることを思い出してハルユキは再度眼を開いた。

「あ……そういえば先輩、確か……ダイブする直前に、何か言っていましたよね？」

「ン、そうだったかな？」

「ええと……二人とも、無事に帰ってきたら……とか何とか……」

きょとんと向けた視線の先で――

なにゆえか、黒雲殿の白磁を思わせる肌が、さつと桜色に染まった。跳ねるように上体を起こしたものの、動きが急激すぎたのか、ピーズタデシジョンの上でバランスを崩す。

ハルユキが手を伸ばした甲斐もなく、どてん！ と素直な音をさせてワンピースのお尻からフロリーングに落下。二秒後、雷知らぬ顔で立ち上がった黒衣の麗人は、わざとらしい咳払いに続けて言った。

「ウホーン……そ、そんなことも言っただけかな。ええとそれはつまり、二人とも無事に帰還できた
ら、お祝いに私のエクセレントな料理を振る舞ってやろうということだ」

表情及び口調にそこはかとないきこちなさがあるような気もしたもの、ハルユキの思考力
の大部分は、《料理》という単語に持って行かれた。何せ、六時半頃に大皿のちらし寿司と
海苔巻きをレギオンの六人、いや日下部輪を入れて七人で分けて食べたっけなのだ。肉体的
には大して動いていないが、精神的に巨大な負債の掛かる出来事は山ほどあった。ざっと列挙
しただけでも――。

二〇四七年六月二十日午後七時、無制限中立フィールド内《帝城》本殿に四重奏／ア
ター・メイテンとともにダイブ。謎の若武者アバター、トリリード・テトラオキサイドことリ
ードの協力を得て、守護エネミーを倒しつつ帝城脱出。

同時刻、帝城南門外の大橋にて、超級エネミー《四神スザク》と接戦。先にメイデンだけを
脱出させ、四となった黒書姫＆種子を救出しつつ、心意奥行技《光速襲》を使用して大気圏
外まで垂直上昇。炎の加減を失ったスザクを、黒書姫の超特級心意技《星光速襲》によ
って撃破。

同時刻、南の大橋から中立フィールドに警備隊が出た。（アーダー・メイタン救出ミッション）を完了するものの、合流しているはずだったアッシュ・ローラーを捜索するため単身で再出撃。

同時刻、渋谷エリアの明治通り上にて、六人のISSキット装着者たちに一方的に攻撃されるアッシュ・ローラーを発見。冷静さを失い、種子扶植の（気候の館）を召喚。六代目クロム・ディザスターとしての力でキットユーザーたちを瞬殺し、その場を脱出。

同時刻、六本木エリアのヒルズ・タワー屋上にて緑の王タリオン・グランデ、その護衛アイアン・パウンドと接触。激闘のうちにパウンドを撃破、緑の王とも一合戦合わせた直後、現実世界で発動された（緊急切断セーフティ）によってバーストアウト。

午後七時二十分、自宅にレギオンの仲間たちを閉じ込めたうえで逃走。しかしショッピンダモール一階にて、種子の（子）であるアッシュ・ローラー／目下車輪に捕獲される。地下パークキングの車中に移動し会話、のち直結対峙。

午後七時四十分、種子およびチユリおよび黒雪姫に再捕獲される。ひとりで先走らないと約束し、午後八時に解散。その後、自宅でおとなしく宿願をする。

午後九時、母親宛に外泊メッセージを残して再度家を出る。しかしまたしても、マンション前庭にて黒雪姫に捕獲される。そのままタクシーに乗せられ、南阿佐谷の黒雪姫の自宅まで移動。長い路のあと、二人きりで再び無限中立フィールドにダイブ。

午後十時十五分、六本木ヒルズ・タワー屋上スカイデッキにて《加速研究会》副会長、ブラクタ・バイスと交戦。奸計によってかつてないレベルの暴走状態に陥るものの、イマジネーション回路の最深处に於いて初代たるクロム・ファルコンと邂逅。《更なる覚悟》を構成する二つの強化外装の秘密に気付き、ついに解脫に成功する――。

以上の、余りにも多くの出来事が、わずか三時間と少しの間に立て続けに起きたのだ。ハルユキが意識させた精神的エネルギーは自己計測で二千五百キロカロリーに及び、ゆえに《黒雪姫の手料理》という魅惑的すぎる星路に思考を引きずられるのもヤムナシという状況なのだ。自分もどさんとピースタシオンから降りると、ハルユキはキツチンへと向かう黒いワンピースの背中を追った。

ワビタと繋がるキツチンスペースは、一人暮らし用物件にしてはかなりの面積だったが、シントも一旦コンロもびびかきで、使われてない感では有田家と大差ない。付け加えればナベ

カマ鍋もほとんど見当たらない。しかしこれは、鮎利き主婦は片付けも上手いなソレに違いないと解読し、ハルエキは冷蔵庫に向かう黒雲姫に声を掛けた。

「あ、あの、手伝いますよ。あんまり料理得意じゃないですけど……じゃかいいもの皮剥きくらいならできますから……」

「ほう、それは嬉しいな。今度コツを教えてください。私が剥くと、あいつら妙に質量が減少してな」

「は、はい、いつでも、つて………え？」

エタセレント・シエフであるはずの人の微妙な台詞に、ハルエキがばちくりと翻された、その直後。かなり大型の冷凍冷蔵庫ががばつと開かれた。中に詰まっていたのは、色とりどりの野菜でも、肉でも魚でも果物でもなく——整然と積み重ねられた、無数の白い角形パッケージだった。

「ハルエキ君、和洋中イタスベドイフラどれがいい？」

真顔で訊かれ、一瞬考える。和洋中はいいとして、イタがイタリアたとすれば、順にスペイン、ドイツ、フランス……だろうか？ だとしても、ひとつ意外な疑問が浮かぶ。

「あ、あの……《洋》と《イタスベドイフラ》はどう違うんですか？」

「ん、決まってるだろう、《洋》は洋食だ。言っておくが、洋食というのは日本の伝統料理なんだぞ。私はビーフシチューとマカロニグラタンが好きだな」

「な、なるほど……………じゃ、じゃあその、《件》のビーフシチューをお願いします……………」
 「了解だ。ならば私はグラタンにするか」

黒書庫は、ごっそりスタックされた白箱の隅から手慣れた動作で二つを抜き出すと、それを隣の高出力レンジに入れ、ボタンをひとつ押した。

「五分で調理完了だ。テーブルで待っていてくれ」

……………これを手料理と呼んでいいのかかなり微妙なラインと思えたが、少なくとも加熱ボタンを押してくれたのは黒書庫その人の指なのだ。自分にそう言い聞かせ、ハルユキはすすすしりピンダルームへ戻った。

パッケージから陶器の皿に移され、熱々の湯気を上げるビーフシチューは、面白はどうあれ大変に美味しかった。大量生産品の冷凍デイツシュと比べればだいぶ薄味ながら、しつかりとした旨味があり、根菜類もたっぷり入っている。パッケージがやたら簡潔だったことも含め、恐らくいづれ名のあるレストランのプライベート・ブランド商品だろう。サラダもついていて栄養面にはまったく問題はなさそうだが、しかし一生懸命スプーンを動かしながら、ハルユキは自分の常食たる冷凍ピザとの共通点を、たったひとつながら見いださずにいられたかった。それは、つまり……………

「トレードしよう、ハルユキ君。ほら、あーん」

突然そんな言葉とともに口許にフォークが突き出されたので、ハルユキは反射的にあーんと

口を開いてしまった。滑らかなベシヤメル・ソースをたっぷりまとった大きめのマカロニは、冷凍アイツシユなのに歯ごたえしやつきりアルデンテで、夢中で咀嚼してしまふ。そんなハルユキに優しい笑顔を見せていた黒雪姫は、テーブルに頬髻を落とすと続けて言つた。

「じゃあ、交換委員は、そのでっかいニンジン……」

「あ、はい……」

「……の隣の座でっかいビーフだ」

「あ、はい……って、ええっ、そんなー。ここの子は、僕が今まで大事に育てた……」

「条件を臥かずにトレードを受け入れたキミの失策だ。はい、あーん」

という台詞に続いて、眼を閉じ口を丸く開かれては、最後の楽しみに残しておいたお肉ちゃんを泣く泣く献上せざるを得ない。悲しみに包まれながらも、それでもちよつとだけドキドキしながらテーブルの向かいにスプーンで肉を運ぶと、それをバタリモダモダゴツタンと容赦なく処理した黒雪姫は、臉を持ち上げて愉快そうに笑つた。

「やはり、置かと食べるご飯は美味しいな」

——その台詞は、つい先ほどハルユキの腦裏を掠めた考えをびつたり言い当てていた。

そう、料理はどんなに上等でも、黒雪姫はきつとこの食卓に、毎晩ひとりで座っているのだ。ひとりで食べるご飯は、寂しい。美味しいとか、栄養がどうか以前に……寂しい。ハルユキはそれを、よく知っている。

「……………あの、先輩」

でかどーフを収容された感しみるも忘れ、ハルユキは胸に溢れてくる感情のままに口を開いた。
「ン？ 返せと言われてもう遅いぞ？」

「い、いえ、肉のことじゃなくて……その、ええと……………」

右手のスプーンを、まるでお守りのように力一杯握りしめ、八十センチ先にある虚無の瞳を
一生懸命に見つめて言う。

「ええと、今すぐには無理ですけど……いつか、その、毎日、一緒にご飯を……食べられるようになるといいな、って……………」

方法はあるはずだ。毎日は言葉のアヤとしても、たとえは学校の帰りにハルユキの家へ寄って貰うとか、強制下校時刻をなんとか調整して生徒会室に残るとか、黒雪姫にひとりじゃない夕食の回数を増やしてもらう手段が。

そのような意図で発した、ハルユキの台詞だったのだが。

黒雪姫の反応は、やや予想外のものだった。右手からフォークがガラタン皿に落ち、それを拾おうとして熱々のソースに指先を触れさせ、「アツッ！」と叫んで氷水のグラスに手を伸ばし、それすらも倒してしまふ。

幸い中はほとんど空で、転がってきたグラスをハルユキは堪えてキャッチした。立てて置きながら、きょとんとナーブルの向かいを見る。

黒雪姫は、右手を左手で胸にかき抱いた姿勢で、完全に硬直していた。顔色はやけに赤成分が強いが、表情はどうにも読み取れない。驚いているようでもあり、まるで別の感情に支配されているようでもあり――。

数秒後、ようやく少し肩の力が抜け、短い言葉が漏れた。

「……………またか。またなのか」

「へっ？ ま、またって……………何がです？ 前にもご飯の話しましたっけ？」

「いや……………手口は初めてだが……………キミが私の新環境系をトラブらせようとするのが二度目だ」
かなり意味不明な眩きに続いて、はーっと長くため息をつく。愕然とするハルエキの視線を改めて正面から捉ええると、黒雪姫は以前どこかで腹にしたような、この上なく優しい微笑を浮かべ、言った。

「……………わかったよ。何度でも、約束してやるさ」

立ち上がり、テーブルを回り込んでハルエキのすぐ隣まで歩くと、まっすぐ右手を差し出した。ゆるく握られた掌から、小指だけが伸びている。

「ほら、指切りだ」

言われるままに、ハルエキもおずおずと手を上げ、自分のまるっこい小指を絡めた。二人の手をゆっくりと上下に振りながら、黒雪姫はもう一度微笑み、囁いた。

「約束するよ。いつか、一緒に晩ご飯を食べよう。毎日、な」

明くる六月二十一日金曜日、午後七時、

有田家のリビングタールムには、昨日と同じく、本ガ・ネビユラスの現メンバー六人が勢揃いしていた。残金ながら、と言つていいのか悪いのか、アツシュ・ローラーこと日下部輪の姿はない。昨日、夜八時の門限を越つてしまったので、父親から本日寄り道禁止の至急命令が発令されたのだそうだ。

「どーりであの人、キヤラのわりに夜対戦が少ないと思つてたのよね……」
 テュリが納得したように言ふと、輪の《親》である親子がうふふと笑う。

「乗り物の操縦も、電動スクーターどころか無動力自転車さえ書き字を子ですからね。加速世界に《完全一致》のデニエルアバターは少ないながら存在しますが、《完全不一致》と言えるのは輪ひとりでしょうね」

「あはは、確かに！ まあ、ミスマツチ度合いじゃハルもいい線行つてるけどね！」
 いきなり子先を向けられ、ハルユキは著先からそうめんを取り落とした。

さすがにこうも速目テュリママに大田料理を作つてもらうのもどうかということ、今日は皆で自作したメニューだ、と言つても、男二人かそうめんを茹で、女性陣がツユと調味の用意

をしたんだけど。実際二十分の食卓なれど、六月下旬の蒸し暑さの中で食べる、水できんぎんに冷やしたさうめんは格別だ。心を解いた仲間たちと四むのなら尚更。

やたら大きなガラス鉢から改めて掬い上げた麺を、刻みミロウがとともにすぞぞと吸ってから、ハルエキは拭弁した。

「お、オレとシルバー・タロウは異次元くらいあるぞ。ええと……打たれ弱いとか、聲質悪いとか、静電気がばちつてくるのが大嫌いとか……」

【UIV それ、全部場点なのです】

四壁蒼白が、壁をきちんと整置きに戻してから行儀良くタイプした文字列に、一同は大いに笑った。

十五分後、食事と片付けを終えて、揃ってソファセットに移動した頃には、それでも多少の緊張感が皆の顔に見えた。

上座に掛けた黒書燈が、ぐらりと揺揺を漏らせてから、落ち着いた声で言う。

「――事前の説明した通り、昨夜のハルエキ君の緊張りによって、『災禍の顔』はそれが存在するためのエネルギーと言える負の残留心算を解き放った。現在、あの顔は、意思を持たないごくノーマルな強化外装に戻っている……はすた」

ちらりと向けられた黒書燈の瞳に、ハルエキはぐつと頷き返す。

昨日の、一同が解散してからの出来事のはらまはしは、今日の昼休みに一生懸命作文したデキ

ストメールでタタムたち四人にも説明済みだ。――とは言え、黒雪姫の自宅に招かれたことだけは除外せざるを得なかったが。

「しかしながら、體はいまだ、システムの寄生属性オブジェクトとしてハルキ君のアドバイザーの深部に残留している。それを、露の持つ《浄化能力》によって完全に分離せねば、頭の硬い六王どもは露の消滅を認めまい。――露？」

視線を向けられ、この場で最年少の少女は、毅然とした表情でホロキーボードを叩いた。

【UIV お任せあれ、なのです。私はそのためにこそ、今この場所に居るのですから。……ただし、対象が《七の神懸》クラスの超高レベル外装となると、浄化にも相当の時間がかかることが予想されます。恐らく、最低でも一時間】

「うむ。つまり、ハルキ君と露以外の四人の役目は、浄化が完了するまで二人をエネミー、あるいは可能性は低いが無のバーストランカーの攻撃から守り抜くことだ。もちろん、大型エネミーの巡回コースからは外れた場所を選ぶが、知っての通り、奴らは《心意の匂い》に引き寄せられるからな……」

黒雪姫が口を閉じると、今度はタタムが頼もしい微笑とともに発言した。

「そうなればなつたで、全員分の無制限フィールド進入ポイントが稼げるといふものですよ、マスター」

「ふふ、その通りね。いざという時は、エネミーを新宿まで引っ張って行って、青のレギオン

あたりのエネミー狩りパーティーになすりつけば済むことです」

《本当は怖いレイカー先生》がにこやかに口にした台詞に、一同がこわばり気味な笑顔を作ったところでミーティング終了。昨日と同じように、安全装置として有田家のホームサーバーを経由する形で全員のニューロリンカーを有線接続する。

ハルユキが無制限中立フィールドを訪れるのは、この一週間で、実に四回目のことだった。しかし、皆の声に合わせて《アンリミテッド・バースト》コマンドを唱える時、胸中にはもう不安も怖れもなく、ただ仲間たちを信じる気持ちだけが温かく広がっていた。

第一期ネガ・ネビュラス《国元素》のひとり、《浄化の巫女》ことアーダー・メイデン——四聖宮譚の持つ力の凄まじさを、ハルユキはもう十二分に知っているはずだった。――SSキックを装着したオリブ・クラブを無傷で倒し、同じくブラッシュ・ウータンをフィールドごと焼き払い、更には《帝城》本殿を守護する巨大な騎士エネミーすらもマダマの池に捕らえて蹴かし尽くしたメイデンの姿は、加速世界でも最大級の攻撃力だろうと確信していたのだ。

しかし、譚の力の本質は、《破壊》ではなかった。それをハルユキは、我が身を以て知るこゝとなつた。

浄化の舞台として選はれたのは、高円寺——地名ではなく、その由来となつた、ハルユキの自宅マンションに程近い大きなお寺——の境内だった。アーダー・メイデンは巫女なのだから

神社のほうが相応しかろうと彼が思ったのだが、本人はお寺でもまったく構わないと言うし、そもそも近くに神社が存在しないので致し方ない。

とは言え、(月光) スタージの清潤な月明かりが降り注ぐ境内はこの上ない神聖さを漂わせていて、白衣した蘇持をまとう巫女の姿を歪む要素は何一つ存在しなかった。誰は、広い空間の中央にハルユキを立たせると、三メートルほど距離を開けて正対し、す、と右手を前に伸ばした。

華奢な指先に小さな炎が宿り、それはすぐに純白の扇子へと姿を変えろ。ばん、と小気味よい音を立てて開いた扇子を、巫女は左から右へと緩やかに振る。

すると、ハルユキの右前、左前、左後ろ、右後ろの順に、赤々としたかがり火が噴き上がった。燃れて立つ黒煙、扇子、チェリ、タタムが息を殺して見守るなか、誰は扇子を正面に戻し、足袋状のつま先でとんと地面を踏んで――

「あたら桜の……あたら桜の科は、散るを怒みなる……」

朗々たる《歌》が、無制限フィールドの冷たい大気を震わせたその瞬間、ハルユキを取り囲む四つのかがり火の内部に、轟々たる火焰が巻き起こった。視界全体が真紅に染め上げられ、物理的な圧力がシルバー・クロウの体を一メートル以上も空中に持ち上げる。

しかしハルユキは、一切の怖れを感じることなく、ただその力に全身を任せた。熱も痛みもまったく感じないし、視界左上の体力ゲージもフル状態のまま微動だにしない。それでいて、

圧倒的な火力が確かに何かを焼き払って——いや（黙って）いくのを強く感じる。黒雪姫の言葉を借りれば、炎が焼いているのはシステム的な（オブジェクトの寄生状態）なのだろうが、ハルユキは烈火に五体を洗われながら、暗黒で（因縁）や（執着）といった言葉を思い浮かべていた。

そう——確かに、最初にシルバー・クロウの背中に寄生したのは銀のほうだ。その後、銀に宿る疑似思考体（敵）はたびたびハルユキに語りかけ、融合のレベルを高め、ついには六代目のクロム・ディザスターとして完全覚醒するに至った。だが、その過程で、ハルユキ自身の心に力を——銀のもたらす圧倒的破壊力を欲する（執着）が生まれなかったと言えは嘘になる。逆に言えば、その執着心が存在しなければ、銀とあままで深く融合してしまうこともなかったはずなのだ。

ハルユキは、因縁意識の心意が生み出す雨嵐にして冷涼たる炎の中で、自分の中にわずかに残っていた我執が穏やかに燃え尽きていくのを感じていた。眼を閉じ、四肢をゆるたりと広げながら、いつときの共闘者に向けて、胸の奥底でそっと囁きかけた。

——おい、（敵）。

——僕、お前のことが、嫌いじゃなかったよ。お前と二人で、協力して戦うのは……けっこう、楽しかった。

——また、いつか……逢う形で会えたら、その時は今度こそ（対戦）しような。一対一でも、タタタバートナーでもいいから……本物の、（対戦）を。

答えはなかった。しかしハルユキは、どこかずっとずっと遠くで、あの藍色の炎をまとった猛々しくも美しい（獣）が月に向かって遠吠えするのを聞いたような気がした。

アーダー・メイデンは、一時間三十分にわたって華麗に舞い続けた。

危惧された、エネミーあるいはバーストリンカーの妨害はなかった。巫女の動きがゆるゆると減速し、やがてついに停止すると、火柱もまた無数の火の粉となって散り、夜風に溶けて消えた。

両足から地面に降り立ったハルユキは、自分の手の中に、二つの小さなオブジェクトが出現しているのに気付いた。月の光を受けて透き通った銀色に輝く、四角いカード。

片方の表面には、【STAR CARD】という文字列が刻まれ、そしてもう一方には、【THE DESTINY】の名前が煌めいている。剣と——剣。これらこそが、加速世界の黎明期に現れ、多くのバーストリンカーの運命を変えた（流星）の、最初の姿に他ならない。

この二つが封印カード形態に戻ったということは、すなわち、異世界の鐘たる【THE DISASTER】が、もはや世界のどこにも存在しないことを意味する——。

一枚のカードをしつかりと握ったまま、ハルユキは教室内に出ると、さすがに動揺^{ウレカ}なき果てた様子の四壁^{ヨナ}百端^{ヒャクタン}に向かつて深々と頭を下げた。

「……ありがとう、メイさん。終わったよ……何もかも……」

「……私ひとりが成したことはありません。クーさんが、ちゃんと（彼）にお別れを言えたからなのです」

そんな言葉とともに、小さな手が優しくハルユキのヘルメットを握^とった。顔を上げると、壁の向こうで、黒髪^{クロカミ}姫^{ヒメ}、楓^{カエデ}子^コ、チユリ、タタムが同じように微笑^{エガ}んでいるのが見えた。

数歩下がったアーダー・メイデンを、スカイ・レイカーが支える。代わりに懸^か念^{ねん}のホバー移動で進み出たブラツタ・ロータスが、力強く頷^{うなづ}いて言った。

「クロウ、よく頑張ったな。これで、来る日曜日の（七王会議）に於いて、キミは何びとも諍^{しやう}りを受けることはない。会議では恐らく、ISSキットと加速研究会への対処方針が主たる議題となるだろうが、胸を張って発言していいんだぞ。——そしてまた、その二つの強化外装をどうするかも、キミに一任しようと思う。じっくり考えて、決断してくれ」

無条件の信頼に満ちたレギオンマスターの言葉を嬉しく思いつつも、しかしハルユキは小さくかぶりを振った。

「いえ、あの……実は、もう決めてるんです」

「はう？」

首を傾げる黒雪姫から視線を外し、仲間全員の顔を見回しながら続ける。

「みんな、特にメイさん、疲れてるところを申し訳ないんですが……あと少したけ、手伝って貰えますか？」

ハルユキはまず、自分の体力ゲージに触れて「インストメニュー」を出すと、ほぼ空っぽのアイテム欄に二枚のカードを一時収納した。

疑いて、お寺の外にある地形オブジェクトを適当に破壊し、必殺技ゲージをフルチャージする。右腕に懸、左腕にチユリを挟んで少し宙に浮き、両腕にタタムをふら下げる。黒雪姫は、ブースター型強化外装（タイルスラスター）を装備した楓子の背中に乗ってもらう。

そんな形で六人は、環状七号線をまっすぐ南下した。世田谷エリアを抜けて目黒通りで東に転進し、都心部を避ける形で目指したのは、東京湾に面した（芝浦埠頭）だ。

首都高台場線の芝浦パークキングエリアを北に見る地点で降下したハルユキは、楓子と黒雪姫がブースターによるロングジャンプで追いついてくるのを待って、周囲の地形をおぼろな記憶と離れに照合した。

《月光》ステージでは什置な神殿風建築に姿を変えている、埠頭の倉庫群。それらを貫く広いトラクタ道路が、東西に交わるとある交差点――。

「……………」

「嘘さ、何か何だか解らない様子の五人に向かって言う。」

「あの、この交差点のどこかに、アイテムが一つ落ちてるはずなんです」

「アイテム……？ カードじゃなくてオブジェクトかい？」

タタムの質問に、こくろと言葉。

「でもさ、確か無制限フィールドの地面に落ちたものは、（変遷）のたんびに排除されて消えちゃうんじゃないかってっけ？」

今度はチユリがそう答えるので、ハルユキは首を一度縦に、縦いて横に動かした。

「ああ、普通はそうなんだけど……確か、物凄い大事なもの、変遷が起きても、何日……いや何年経っても消えないって聞いた気がするんだ。——そうですよ、先輩？」

風雲殿に視線を向けると、恐らくこの場では最古参のバーストリンカーは、小さく頷いた。

「ン、確かにその通りだが……耐久力無限のアイテムとなると相当に限られるぞ、ヘレギオンマスター・タエスト」の達成証とか……四大ダンジョンの通行証……」

「それと、お家の鍵もよね」

何気なく発せられた梶子の言葉に、ハルユキは大きく頷き、耳んだ。

「それです！ 探して欲しいのは、（鍵）なんです」

《月光》ステージの地面は、さらさら乾いた超微細な白砂に薄く覆われている。それゆえに

捜し物にはあまり向いていないとは言えないが、そこかしこが毒の窟と化している（『魔蝕録』ステージや、纏ったらしい蟲がわらわら這い回る『深獄』ステージに比べればまだしもマシだ。そう考えながら、ハルユキは広大な交差点に敷き詰められた白い砂を、懸命に両手で掻き分け続けた。

実のところ、この場所に（鍵）が埋もれているという保証があるわけではない。しかしその反面、自分が何かに……あるいは誰かに導かれて今ここにいるのだという確信も存在する。帝城の中で見た、長い長い夢——あの寂しい物語の最終章が言わば史実ならば、鍵は必ずここで見つかるはずだ。ずっと幼い頃、両親と一緒に登った奥多摩の山で、ちっぽけな黒曜石の矢尻を拾ったことがある。あの石礫と同じように、いつか鍵が見つ付けてくれる時を、ひそやかに待ち続けているはずなのだ。

何百回目かに砂を撫でた右手の指先に、こっぴ、と何かが触れた。

ハルユキはびたりと手を止め、次いで踵に砂の底を探り、その何かを掴み上げた。それは、悠久の——推定七千年、近くの年月を経てもなお一点の曇りもなく輝く、銀色の、小さな鍵だった。

「……………あつた……………」

眩き、ハルユキは立ち上がった。その動作に気付き、仲間たちが手を止めて集まってくる。皆の眼に見えるように、月光を受けてきらきらと光る小さなオブジニクトを掲げながら、ハル

ユキはもう一度言った。

「ありました。これが、僕の探していたものです」

「タロウ……、それは、どこの産なの？」

チユリの問いに、ハルユキは軽く頷き、答えた。

「これから案内するよ。もちろん僕の家じゃないけど……たぶん、持ち主たちも許してくれると思う」

見つけ出した小さな産も大事にアイナム欄にしようと、ハルユキは次なる目的地を目指した。と言つても、今度はさして異距離を飛ぶ必要はない。芝罘埠頭からレインボーブリッジを渡り、お台場に入つて南下。現実世界では（「眺望公園」）と呼ばれる場所のすぐ北側で、地面に降り立つ。

細い道路沿いに、他の地形オブジェクトとは少し異なる色合いの、小さな家が建っている。

もしハルユキがさつき拾った鑑を持つていなければ、この家はそもそも触れることも見つけることもすらもできない。なぜならこれは、無制限中立フィールドに点在する（ショップ）で遠くもなく高価な鑑を買ったパーストリンカーにのみアクセスが許される、いわゆる（フレイヤーホーム）だからだ。

真っ白い石積みの上に仄かな月光を浴びて佇むその家は、昨夜訪れた黒雪姫の自宅とどこか

似ていた。ハルユキは、きさやかな面積の前庭に数歩踏み込むと振り返り、仲間たちに告げた。

「ここが、〈タロム・ファルコン〉さんと、〈サフラン・ブロッサム〉さんの家です」

それを聞いた五人は、揃って眼を見開いた。皆には、〈火網の籠〉にまつわる物語についてはおおよそのところしか説明していないが、それでも全員がすぐに悟ったようだった。ハルユキが、なぜ苦勞して鍵を渡した、この場所を目指したのかを。

「……では、さっきの、芝罘埠頭の交差点が……」

籠の囁き声に、ハルユキはこくりと首肯した。

「ええ。ブロッサムさんが、ポイントを全損して、世界から消えた場所……。そしてそのあと、初代タロム・ディザスターになったファルコンさんが最終的に討伐された場所でもあります。

籠がどちらの所有物でも、あの場所に絶対残っているはずだと思っただんです」

「なるほど、な……。——確かに、二つの強化外装を隠らせるのに、これ以上相応しい場所は

あるまい……」

黒髪姫はそう呟き、ハルユキを正面から見ると、それでいい、というように深く頷いた。

ハルユキも傾き起すと、ストレージを開き、三つのアイテムを順番にオブジェクト化させた。二枚のアイテムカードを左手に、小さな籠を右手に持ち、ゆっくりと家へ参り寄る。

ドアノブに籠を押し込むまでもなく、ハルユキが近づいただけで可愛らしい扉は音もなく開いた。

「……お邪魔します」

眩き、ドアをくぐる。

家の中は、色々な家具や小物で入金にかスタマイズされ、素白い月明かりの下でも、実に居心地良さそうに見えた。しかしやはり、長いあいだ静止していた部屋の空気には、濃い寂しさが漂っているように思えた。それも当然だ。かつてこの家で暮らした二人は、もう世界のどこにも存在しないのだから――。

ちらりと振り向くと、黒髪姫たちは玄關の外で待つと決めたらしく、無言でハルユキを見守っている。ならば、あまり長いこと待たせるわけにもいかない。ただでさえ、長時間の《静止》で疲労しているはずの臨をすでに二時間近くも付き合わせてしまっているのだ。

もう一度部屋の奥に向き直り、ハルユキは囁いた。

「……プロッサムさん。あなたが助けてくれたから、僕はまた、大切な人たちのところに戻れました。……ファルコンさん、あなたが盗んだものの、壊そうとしたもの、それが何なのか、僕はこれからも考え続けます。………ありがとう」

乏しい言語化能力では、胸に満ちる沢山の思いをそんな言葉にするのが精一杯だった。それでも二人に伝えるべきものは伝えられたと信じ、ハルユキは一歩進むと、かつて愛し合う二人が食事をし、語り、見つめ合っていたのであろうテーブルの上に、二枚のアイテムカードをそっと並べた。その隣に、銀色の腕も置く。

「……………さようなら」

一歩下がって、さびすを返すと、ハルユキは仲間たちの待つ下アを目指した。

部屋を出る寸前、誰かに呼び止められたような気がした。

もう一度振り向いたハルユキが見たのは――。

テーブルの傍らに立つ、やや濃い藍色の、シルバー・タロウととてもよく似た細身のメタルカラー・アバター。その隣、白い椅子に腰掛ける、山吹色の少女型アバター。

そして、少女の膝で丸くなり、幸せそうに眼を閉じる、一匹の小さな黒猫だった。

三者の姿は、月明かりを半ば透過し、おぼろに映っていた。しかしハルユキは、彼らが単なる幻覚ではないと確信した。少年と少女、そして二人の黒いが生み出した仔猫は、ついに還るべき場所へと還ったのだ。

――さよなら。また、いつか。

溢れそうになる涙を堪えながら、ハルユキはもう一度心の中で別れの言葉を呟くと、ドアの外で待つ仲間たちの元へ戻るために、大きく右足を踏み出した。

12

更に明くる六月二十二日土曜日、午後二時三十分。

ハルユキは、梅郷中学校の裏庭をひとり歩いてた。

土曜なので、もちろん授業は午前中で終わってた。前世紀の末頃からしばらくは、ほとんどの小中学校が週五日制——つまり土日休みになるという夢のような時代が続いていたらしいが、二〇一〇年代には自主的に土曜授業を再開する学校が増え、四七年現在では文科省も学校週五日制など最初から存在しなかったような顔をしている。

もっとも、ハルユキとしては、仮に土曜が休みだったとしても一日中家でゴロゴロするわけにもいかない。なぜなら、毎週土曜日の夕方五時には、ブレイン・パーストの《領土戦争》が開催されるのだ。最少人数三対三のチームバトルで戦域の支配権を争奪するこのイベントは、レギオンの存在理由そのものと言っていい。

これまで、黒のレギオン（ネガ・ネビュラス）は杉並区内の全エリアを五人で守り抜いてきたが、今日からはそれが六人になる。もちろん、旧《四元素》の一人アーダー・メイダン——四葉宮蔵がレギオンに復帰してくれたからだ。メンバーを三人ずつに分けて二領土を同時に防衛できるだけでなく、待望の《赤の遠隔型》加入である。いままでは攻撃側のチームに、前衛に

やたら強い盾を並べてその旗からズンドコ大陸を撃つという戦法を散々やられてきたが、今日からはそうはいかない。編成でせひとも盾と同じチームにして貰って、「メイさん、後ろの砲台覗いてくるんで、援護射撃頼みますー」というカンコイイ台詞を一度は言ってみたい

~~~~~

いつしか森羅の真ん中で立ち止まり、にへらにへらと頬を緩めていた自分に気付き、慌てて歩行を再開する。向かう先はもちろん、梅郷中の敷地北西の角に、ほとんどの生徒に知られることなく存在する木造の小屋だ。

去年の秋、ネガ・ネビュラスがたった三人で領土戦を始めてからは、ハルニキにとって十曜の午後というのは正直手持ち無沙汰な時間だった。四時開目のしじふが終わって教室から解放されるのが十二時五十分。その後閑散とした学食でお昼を食べてもせいぜい一時半で、領土戦が始まる五時までが実に長いのだ。

黒雪姫は生徒会の仕事、タタムとテュリは部活の練習で、暇つぶしに付き合ってもらうことはできない。バトルそのものには杉並エリアのどこからでも参加できるので、いつも帰宅してしまっても問題はないのだが、学校からダイブする黒雪姫たち三人と勝利の喜び（あるいは敗北の悔しさ）を共有できないのは寂しすぎる。ゆえにこれまでは、図書室で紙の本をめくってみたり、ローカルネットで懐かしのスカッシュゲームのハイスコア更新に挑んでみたりしていたのだが――そんな寂しい暮らしも、今週突然に終わった。

ハルユキにも、ついに土曜の放課後を賣やすべき任務が課せられたのである。梅郷中学校飼育委員会の委員長職、という。

飼育小屋の前に到着したハルユキは、日課となつてゐる挨拶から始めるべく金網の奥を覗き込んだ。小屋とは言うが相當に広い内部には、二本の止まり木が立てられている。その左側、一番高い枝の定位置に、片足で跳まりながら睨そうに睨を閉じる鳥の姿があつた。体長およそ二十センチ、白い羽毛に灰色の模様が浮かび、胸の羽毛に鋭い嘴を隠める猛禽類——アフリカオオコノハズタの（ホウ）だ。

まだ出会ってから五日しか経つていないので、あまり心を開いてくれた感じもないのだが、それでもホウは気配を感じたのか右の脇だけを持ち上げると、綺麗な赤金色の瞳でじつとハルユキを見た。

「おつす、ホウ。今日はちよつと暑いよな」

言葉を掛けながら仮想アスタトップを操作し、ホウの止まり木に仕込まれている体重・体温センサーと接続する。両方とも適正値範囲内、引つ越し直後は減り気味だった体重もだいぶん戻つてきたようだ。

ハルユキの機嫌に、コノハズタは面倒そうに一度顔をわかめさつとさせて答えてから、再び睨睨りモードに入つた。苦笑し、まずは小屋の敷紙を洗つて交換するために屏の電子錠を無理アンロックしようとした、その時。

背後から、蒼むした地面を踏む小さな足音が聞こえた。ホウの本来の顔の主である、松乃木学園初等部四年生の西井宮崎がもう来たのだろうか、と考へながら振り向いたハルユキが見たのは、予想だにしない、と言うか見覚えのない人物だった。

白い半袖シャツと、少し緑がかったダレーのスカートは梅郷中の制服だ。胸元のリボンタイは青——二年生。ゆるめにカールさせたロングの髪と細く整えられた眉、教師に見とがめられないギリギリの濃さまで攻め込んだアイラインは、相手がハルユキとは違か様違い階層に属する生徒であることを示している。體育に優くニューロリンカーも、ドロッシードンタの外装に山ほどラインストーンを貼り付けた（デコリン）仕様。

女子生徒の、キレイではあれど、どうにも威圧させられる系の顔を〇・二秒ほど見てから、ハルユキは視線を地面方向に逸らし、モゴモゴ語で言った。

「え、あの、何か……落とした物、とかですか？ だったら、もし見つけたら、ローカルネットの差し物販に、書き込んでおきますんで……」

それ以外にこの手の生徒が裏庭に来ることなど有り得なからうという推測のもと発した台詞だったが、数秒後に聞こえたのは、更に予期外の言葉だった。

「あー、忘れてる。イインチョーのくせに」

「……」

反射的にびくっと顔を上げ、もう一度相手の顔を、今度は〇・五秒見る。すると確かに、ど

こかで会ったような気もしてくる。それは、同じ学校の同学年なのだから黙下ですれ違ったりはしているだろうが、そういうことではなく……いや特で、イインチャー？ それって飼育委員長のこと？

「あつ……そ、そうか、確かええと……B組の……い、イザ……」

記憶の地層から懸命に発掘した名前を口にしたが、その途端、

「イーゼーキー 井関玲那」

怖い声で訂正されてしまう。もはや相手の顔を見ることができず、ハルユキはごくごく深く存在からして綺麗に忘れていたが、この井関さんは、つまるところハルユキの同僚——同じ飼育委員だ。今週初め、系列の松乃木学園から飼育動物（ホウのこと）を受け入れるにあたって、二年生から新規選出された三人のうち一人。ハルユキは立候補して委員長になったのだから、委員の顔と名前を失念するなど到底許されざる行いだ。

やばいやらかした題やらかした、と軽くバニタつていると、井関さんは幸いそれ以上は委員長を糾弾することなく、すたすたと小座の前まで移動した。金網を覗き込み、やや險の取れた声を出す。

「おー、スゲー。ほんとにフタロウいるし。やべー、超ふわふわじゃね？」

口調はともかく、声色には素直な驚きが表れていて、しかも明らかに寝ているホウのためにポリウムを落とす気遣いまで存在したので、ハルユキはやや恐慌状態から脱しつつ頷いた。



「う、うん、フクロウ。……アフリカオオコノハズクっていうんだ」

おそろおそろそう注釈すると、井岡さんはちらりと振り向き、巻いた髪を揺らしながら訊ねてくる。

「フクロウとコノハズクってどう違うの？」

「あ、えつと……コノハズクはフクロウの一種で……正確には、フクロウ目フクロウ科コノハズク属」

「へー。この子、名前は？」

「ホウ」

「……すっげー安易なネーミングだね？ 誰がつけたの？」

「と、投票で決まったらしいよ」

訊かれたことにどうにか答えるだけだったが、一応会話は成立し、井岡さんは「ふーん」と鎮くと再び小屋に眼を向けた。口許に手をあて、小声で呼びかける。

「ホウ、ホーウ」

……あの無愛想極まりないコノハズク先生が、こんな真つ昼間から、初対面の人間に反応するはずがない。とハルユキは思ったのだが――井岡さんの声を聞いた途端、ホウはぱちりと、しかも両方の眼を見開いた。顔をくりんと回転させ、金網の前に立つ人間を識別していたようだったが、驚いたことに両方の翼を広げると、止まり木から飛び立つ。

小屋の中を優雅に飛躍するホウの姿に、井関さんは歓声を上げた。

「わっ、すこっ、飛んだ！ 飛んでるー やべー超きれい！」

……僕の場合は片眼開けただけだったのに、何だよそのサーピスは。とハルユキは思わず胸中で愚痴ったが、ホウは素知らぬ顔でたっぷり五回もしてから止まり本に戻った。片足を持ち上げ耳羽を寝かせたお休みモードへ復帰したホウに、井関さんは顔も熱心に見入っている。その横顔に向かって、ハルユキはおそろおそろ訊ねた。

「……で、その、井関さん……今日は、なんで急に……？」

途端、じろつと横目で睨まれてしまい、再度硬直。

「あたしも飼育委員だし。別に来ても悪くなくない？」

「そ、それはそうですね……でも、その、初日に、あんまりその、委員になったの、嬉しいと思うじゃない……こともない感じが……」

「そりゃ、あんときは、マジだるーって思っ、委員長がいいつつたからつい帰っちゃったけどーでも、あとでちゃんと活動日時がアップされてるの見て、帰ったの後悔したっつーか、委員長一人にあの小屋掃除させたのありえねーって思ったの！ 悪いぞ」

なんだか、責められているのか謝られているのか解らなくなりつつも、ハルユキは首をぶるぶると横に振った。

「い、いえ、悪くないです」

「だから、早めにゴメンしとこうと愚ったのに、委員長ぜんぜんあたしらに仕事振らないし！ 毎日一人で委員会やって、日誌アップしちやうから、だからこつちから来たんじゃない！ 悪い！」

「い、いえ、ぜんぜん、悪くないです」

再び頭をぶるぶるさせつつ、ハルユキは錯綜する情報を脳内に統合処理し、そして一つの結論へと達した。上目遣いに井岡さんを見ながら、おそろおそろ確証。

「えっと……つ、つまり、その、井岡さんは、委員会の活動を……ホウの世話をしに、来てくれた……の？」

「最初っからそう言ってるし！」

……そうだったけ？ と首を傾げるのはやめにして、ハルユキは詰めていた息をふうふうと長く吐いた。

そういうことであれば、たとえ相手が目撃者（目撃者）だったく聞（き）き取りにくい階層に属する、しかも女子であろうとも正直者である。小嵐が広いので排除はけっこう大変だし、一人だと扉の開け閉めにかなり気を遣うのだ。空っぽになった扉に、縁（えり）の匂（にお）いがある六月の空気をいっぱい吸い込んで、ハルユキは鼻（はな）を切（き）って言った。

「じゃあ……ええと、小嵐の前にまたたいぶ驚（おどろ）けばとか溜（た）まってきたから、まずはそれを排除しようか。ほうきでざっと集めるくらいでいいから」

## 「オッケー」

幸い、今度はダルーイともメンドクサーイとも言わずに、井筒さんはハルユキが差し出した竹ぼうきを受け取ってくれた。慣れない手つきで溜った落ち葉を掃き始める姿にこっそり胸をなで下ろし、ハルユキも作業を開始した。

金網の前で働く人間二人を、ホウはもう氣に留める様子もなく、止まり木の上でうつらうつら居眠りを続けている。新居に引っ越して五日、すっかり落ち着いた様子のコノハズタに、ハルユキは手を動かしつつ心の中で語りかけた。

……ホウ。僕、お前にもお礼を言わないとだよな。

……生き物の世話をするのって初めてだったけど、逆に色々教わったような気がするんだ。生きること……飛ぶこと……その意味。ちゃんとした言葉にはできないけど、お前と知り合えたから、僕はあの時、四神ミサタより速く、高く飛べたんだと思う。

……現実世界でも、加速世界でも、相変わらずダメダメだけどさ……それでも、少しずつだけれど、前に進めるのになって……最近では、そう思えるようになったんだ……。

自身のそんな思考を噛み締めながら、実際に一歩前に踏み出そうとした——  
その瞬間。

何かがシャッの音中部分をくいつと引っ張った。

## 「……………」

きよつとして振り向いたハルユキの視線の先に存在したのは、またしても予想されざる人物だった。学校の制服姿だが、アイボリーのサマーカーデイガンとチエツタ柄のスカートは梅舞中のものではない。ふわふわした綿っ毛のシヨートヘア、ニューロリンカーは明るい緑色。右手の指先でハルユキのシヤツをしつかと擠み、なぜか両の頬をうるうるさせている。

予想外の登場ではあるが、知らない相手ではない。ハルユキは右頬を強襲らせ、上すった声で訊ねた。

「く、くく、日下郎さん……ど、ど、どうしてここに」

そして、どうしていきなり涙目。

音声化された質問とされない質問の双方を輪廻にスルーして、緑のレキオン所属のレベル5 パーストランカー、(アッシュ・ローラー)のリアルサイドたる少女・日下郎は、小さく口を開いた。

「どなた……です、か？」

もちろんハルユキへの人定質問ではない。輪の視線は、少し離れたところで、竹はうきを持つたままぼかんと眼を見開く調査委員、井関さんに向けられている。いまだ状況を理解できずにハルユキが硬直していると、何たることか井関さんがすたすたと近づいてきて、ほんのわずかにばかり鼻のある声を出した。

「誰って、それあたしが訊きたいし。その制服、渋谷のすすじのっしょ？ オジヨーサマが

こんなところで何してんの？………つてか、え？ 何？ そうなの？」

何かそうなのかはまるで解らないが、井國さんが自分と輪を交互に見る眼にそこはかとなく不機嫌なものを感じたハルユキは、とりあえず状況をサスペンドするために、左手をわたわたと振った。

「いいい井國さん、ちよちよちよつと待ってて！」

そしてシャツを掴んだままの輪を引きずるように第二校舎の登廊まで移動し、小声かつ早口で問い質す。

「ああああの目下郎さん……」

「兄も目下郎だから、（輪）でいい、です」

「り、りりりり輪さん、ええとその……何でここに？ 今日はいこれから領土戦が……あ、ひひよつとして、ここから参加するの？ つてことは、もしかして……」

——まさか、昨日の今日でレギオンを移籍した、のだからか？ グレート・ウォールを抜けてネカ・ネビュラスに？ つてことは、今日からあのオレ様メガラッキーな世紀末ライダーが仲間……？

と考えたハルユキだったが、輪は首を微妙な角度で傾かし、言った。

「参加は、します。でも………今日も、攻める側、です。レギオンの移籍とかは………兄の決める、ことですから……」



「あ、そ、そうなの……」

はっとしたような残念なような感覚を味わいつつ一度領き、続いてまたしてもぎよっとする。

「……って、せせ攻める側？ でででも、領土戦は最低三人だし……あと二人は、どこに

「渋谷と杉並の、エリア境界で、待機してもらって……ます。メンバーは、ウーくん……」

ウーくんというのは、お馴染み（オイラでヤンス）のブッシュ・ウータンだ。一度はISSキットの魔方に吞まれた後だが、仲間と奮闘られ、狩られかけるといふ体験を通して自分を取り戻してくれたらしい。仮にキットがアバターに残存していても、今日の領土戦が終わった後にでもアダー・メイデンに浄化してもらうことは可能だろう。

「……あと一人は、アイアン・パウンドさんです」

「うん、そっか。ウータンが元に戻ってくれて、敵方ではあるけど僕も嬉しいよ……って、え、ええええええ？」

輪かきらりと口にした三人目の名前に、ハルユキは思わず絶叫した。聞き間違いでなければ、輪の攻撃側チームには、ダレウオの（六層装甲）ナンバー3、（鉄拳）の異名を持つというあの恐るべきボクサーアバターが……

「お——い、イインチ…… いつまでこによこによやってんの？ 仕事まだ全然終わってないし——」



痺れを切らしたような井岡さんの声に、ハルユキは再び状況のサスペンドを造られた。領土域の前にまず、今は委員会活動を難事に終えねばならない。井岡さんが輪の存在をどう解釈したのかは不明だが、このまま説明を怠った場合、果敢あたり大変さなくさいウワサが極端中の本校舎二階を駆け巡っているような気がする。

輪をシャツにぶら下げたまま小屋の近くに戻ったハルユキは、無理矢理ひねくり出した説明を、いっそう上ずった声でまぐし立てた。

「え、えーと、井岡さん、この人は日下部さんというんだけど、その、飼育委員に、松乃木学園の特別メンバーがいるのは知ってるよね？ その人の、友達の友達で、今日は手伝いに来てくれて……」

完全なウソというわけではない。特別メンバーこと四壁宮邸の《友達》である倉崎楓子は、日下部輪の《師匠》なのだから。手伝いに来た、というのはハルユキの嘘の創作だが、後付けで事実にすることは可能だ。こうなったら輪にも本当に掃除を手伝ってもらえない。

「ふう——ん」

納得したのかしていないのか、井岡さんは腰尾を長く引つ張った声を出すと、輪からハルユキに視線を移して続けた。

「……イインチョも、けっこうやるじゃん？ もしか、あたし邪魔だった？」

「な、な、何もやってないよ！ あとせぜ全然邪魔じゃないよ、超助かってるよ、超！」

悲鳴じみた返答を、いちおう聴としてくれたのか、井國さんはカールした髪を揺らして頷くと言った。

「んじや、とりま接触の疑いするし。落ち葉全部集めたけどどうすんの？ 燃やすの？」

「そ、そ、そんなことしたらバトカーと消防車が廻くるよ、超！」

「ジョークだし」

にやりと笑って小屋のほうに戻っていく阿部を、ハルユキも肩で息をしつつ追った。ようやくシヤツを解放してくれた袖に、右手に握りしめていた竹ぼうきを預け、自分は飼育小屋脇の用具入れにチリトリとゴミ袋を取りに……

料亭、厩間のあたりにビキューンと走る雷光。

——救急グ……と飛び廻ろうとしたが、それより早く、新たな危機の到来を告げる声が真庭に響き渡った。

「あーっ！ ハル、何なのよその状況!!」

ごく、と全身を緊張らせ、ハルユキは声の聞こえた東側を向くが、それとも南西の中庭方面へと走って逃げるべきか真剣に検討した。この場に井國さんがいなければあるいは後者を選択したかもしれないが、作業中の番頭をほぼり出して番頭長が逃亡するわけにもいかない。

やむなく、備事仕掛けのようにきりきりと体の向きを変えたハルユキが見たのは――。

陸上部のジャージ姿で、右手に差し入れらしい勝負の袋を提げたチユリ。

宣讀

その左には、赤いランドセルを背負い、ホウのこはんセット一式入りのバッグを携えた四壁  
更にその後方、にこにこと微笑みながらも、ある種の端役すべからざるオーラをまとう倉崎  
楓子。

そしてチエリの右を歩くのは、黒服のカスタマイズ制服に身を包み、凄みさえ感じる笑顔に  
何故か抜き身の銘刀を隠せる表情を漂わせる権威中調生徒会長、黒雪姫――。

四人の後方に、これもジャージ姿のタタムが見え隠れするのが救いではあるが、その顔には  
「ハルがんばれ」的な笑みが浮かんでいる。ハルユキは小刻みにかぶりを振り、必死に「タタ  
ムすけて」的表情を作ろうとした――のだが。

「なんか起いっぱい来たし。あれもセンプ手伝い？」

そんな声にちらっと振り向くと、ほうき片手の井筒さんが、今度こそ本格的オドロキアキレ  
顔でハルユキを見ていた。

「……イインチョコー、あんな何者？」

「な、ナニモノでもないよー」

小声でそう答へ――。

ようやく逃走への末路を捨てたハルユキは、背筋を伸ばして黒雪姫たちに正対すると、胸の  
奥でもう一度繰り返した。

——そう、僕は、ひとりじゃまったく何者でもない。どこにでもいる、何の取り柄もない、気弱であがり症でゲームマニアの男子中学生でしかない。

——でも、大切な仲間たちと一緒にいる時だけは、僕はきつと何者かになれる。ひとりの時より少しだけがんばれるし、少しだけ真つ直ぐに立てる。そして、少しだけ、自分を信じられるんだ。

剣宵小屋の中で、闇が来たことを感じたのが、ホウが力強く両翼を打ち鳴らした。その弱ばたきに背中を押されるように一歩踏み出すと、ハルユキは近づく五人に向けて、大きく右手を振った。

(終わり)



あとがき

川原真澄（かわはら ますみ）です。「アクセル・ワールド9 七千年の祈り」をお読み下さり、ありがとうございます。

二巻で初登場し、六巻で物語の主題に据えられた《冥界の鎧（よろい）クロム・ディザスター》編ですが、この九巻でようやくひとまずの結末を見ることができました。六、七、八巻と三連発してしまつた「つづく」攻撃に堪え忍び、今巻の「終わり」までお付き合ひ下さいました皆様には本当に感謝しております。

もっとも、鎧（よろい）だの伏魔（ふま）だのはまだまだ積みっぱなしなので（というかこの巻でも山ほど追加されているような……）物語そのものの終わりにには充分廻り着けなさそうです。ハルユキは最終的に何を目指すのか？ 黒雪姫の過去には何かあつたのか？ 加速世界はなぜ存在するのか？——というあたりまで本当に書き切れるのかどうかは定かではありませんが、これから一巻一巻、自分でも楽しみながら進めていきたいなと思っております。とりあえず次の十巻は、明るく楽しい一巻完結ものにしたい！です！！

そして、触れようか触れまいか迷つたのですが、ちょこっとだけ……。私の別シリーズの、「ソードアート・オンライン」八巻をお読み下さった方は、巻末のアクセル九巻予告ページでどーんと見開きで通せんぼしていた新キャラクターの女の子に、「誰？！」と思ひになったこ

とでしよう。誰なのかは今巻第四節で明らかになっておりますが、私は彼女の登場を以てして、○○○さんは女の子だよーと宣言するつもりはございません！（いちおうネタバレ回避）彼女については、今後もっと詳しく書く機会もあろうかと思っておりますので、どうぞそれまでは「どっちやねん！」ともややもやして頂けると嬉しい……というか助かります（笑）。

残り行数も少なくなってきたので、ここでひとつお知らせを……。この九巻の帯にも恐らく書いてあると思いますが、このたび「アタセル・ワールド」がテレビアニメになることになりました。製作はサンライズままです。あのサンライズ（敬称略）です。私はガンダム世代と真ん中でして、デニエルアパターの造形もいわゆるサンライズロボットものの影響を多々受けていますので、画面で動くクロウやロータスを見られるというだけでこんなに嬉しいことはないです。皆様におかれましては、アニメ版アタセルもどうぞ宜しくお願いいたしますー！

例の新キャラさんを入魂のデザインで描いてくださったイラストのHIMAさん、その子のシーンにかつて無いほど大量の直しを下さった（笑）担当の三木さん、そして繰り返しになりますが、『編輯』の最後までお付き合ひ下さった読者さま方、ありがとうございましたー！

二〇二一年八月十一日

川原礫

# ル・ワールド10

## 「遠い日の水音」

西暦二〇四六年、秋。

新生くネガ・ネビュラスの一員となった

シルバー・タロウことハルユキ。

レギオンメンバーであるタカム・シアン・バイルと共に

く対戦を繰り返していたなか、

ハルユキはとある過失でバーストポイントを超えて  
城から脱走してしまう。

窮地に立ったハルユキに、

タカムは知識世界のく用心棒「バウンサー」を探すことを  
提案する。

そして、バウンサーとの待ち合わせ場所に向かったハルユキも、  
待ち受けていたのは意外な人物で——！

## Elements

著/川原礫 イラスト/HIMA



アクセル  
ワールド 01&02



あくちえる  
わーるど。①

コミックス発売中!

原作/川原 礫

キャラクターデザイン/ HIMA

作画/ 吉崎ひろ幸(『アクセルワールド』)

作画/ あがり(『アクセルワールド』)

『電撃文庫MAGAZINE』

(既刊10月号)にて 連載中!!!



《最強のカタルシス》で送る、第15回電撃

11 accel World 10

# アクセ

## 【結果での南緯】

西暦2047年、春。

スルバー・クロウはブレインバーストに敗れ、

敗北を認めるに配属された。

【結果での南緯】はブレインバーストに成功しており、

結果的には敗北などというだけでなく、

スルバー・クロウは敗北を認めるに配属された。

【結果での南緯】はブレインバーストに成功しており、

結果的には敗北などというだけでなく、

スルバー・クロウは敗北を認めるに配属された。

【結果での南緯】はブレインバーストに成功しており、

結果的には敗北などというだけでなく、

## 『パーサス』

西暦2047年、春。

スルバー・クロウはブレインバースト内で、

【結果での南緯】はブレインバーストに成功しており、

結果的には敗北などというだけでなく、

スルバー・クロウは敗北を認めるに配属された。

【結果での南緯】はブレインバーストに成功しており、

結果的には敗北などというだけでなく、

スルバー・クロウは敗北を認めるに配属された。

【結果での南緯】はブレインバーストに成功しており、

電撃文庫シリーズ初の特別編『SAO』とのコラボ小説も収録!

# 『アクセル・ワールド10 Elements』

# 2011年12月10日発売!!!

**特報!!** 『ソードアート・オンライン9』は2012年春頃発売予定!!

● 川原 礫著作リスト

「アクセル・ワールド1―黒い星の星―」 (文庫文庫)

「アクセル・ワールド2―紅い星の星―」 (同)

「アクセル・ワールド3―夕陽の戦争―」 (同)

「アクセル・ワールド4―世界への挑戦―」 (同)

「アクセル・ワールド5―星の守護―」 (同)

「アクセル・ワールド6―神火の誓―」 (同)

「アクセル・ワールド7―光輝の星―」 (同)

「アクセル・ワールド8―星の星―」 (同)

「ソードアート・オンライン1―アインタラント―」 (同)

「ソードアート・オンライン2―アインタラント―」 (同)

「ソードアート・オンライン3―フェアリーダンス―」 (同)

「ソードアート・オンライン4―フェアリーダンス―」 (同)

「ソードアート・オンライン5―ファントムバレット―」 (同)

「ソードアート・オンライン6―ファントムバレット―」 (同)

「ソードアート・オンライン7―マギーズ・ロザリオ―」 (同)

「ソードアート・オンライン8―マギーズ・ファンデーション―」 (同)

本書に対するご意見、感想をお寄せください。



あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見 1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「川原 礫先生」係

「HIMA 先生」係





## 電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで「小さな巨人」としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の脚として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その潮を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、親視の上でイギリスのペンギン・ブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると嘗てよい。

文庫出版の意味するものは、随處の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times/Changing Publishing)時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日  
角川歴彦



## 電撃文庫

## アクセル・ワールド1 ―黒雪姫の帰還―

川原 礫

イラスト／H・M・A

ISBN978-4-04-067517-0

「黒雪姫」と呼ばれる少女との出会いが、アクセルをはじめたつ子の未来を変える。ウェブ上でカリスマ的人気を誇る作家が、ついに電撃大賞（大賞）受賞。

か16-1 1716

## アクセル・ワールド2 ―紅の暴風姫―

川原 礫

イラスト／H・M・A

ISBN978-4-04-067518-7

アクセルをはじめたつ子の少年・ハルキオの人生は、黒雪姫との出会いによって一変した。そんな彼のところに、「お兄ちゃん」と呼ぶ黒髪少女の少女が現れては

か16-3 1775

## アクセル・ワールド3 ―夕闇の暗闘者―

川原 礫

イラスト／H・M・A

ISBN978-4-04-067519-4

「ゲームオーバーです。有罪実証……」いふシルバークロウ。黒雪姫不在の中、スクールカリストの頂点に立つた新人高。圧倒的な戦力的脅威。ハルキオは慣れ――

か16-5 1834

## アクセル・ワールド4 ―蒼空への飛翔―

川原 礫

イラスト／H・M・A

ISBN978-4-04-067520-1

「ここから、もう一度会い逢ってみせる。僕はもう、下だけ内いて歩くのはやめたんだ」翼をもがれたシルバークロウ。ハルキオが、ついに復讐する――

か16-7 1899

## アクセル・ワールド5 ―星影の浮き橋―

川原 礫

イラスト／H・M・A

ISBN978-4-04-067521-8

とある日、ハルキオは新たなギêm・スタージュ出現の気配を感じる。（※意思）スタート。そこに降り着いたハルキオは、歴史的なゲームイベントを経験する――

か16-9 1953

# アクセル・ワールド6―浄火の神子―

川原 雅

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-870326-9

全人類の意思に操られていたハルユキは、星雲殿以外の大王から、浄化の命を下される。その命を遂げるアバターは、意外な理由に選ばれている……

か-16-11 2018

# アクセル・ワールド7―災禍の鐘―

川原 雅

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-870326-9

「希望」に閉じ込められた「ウルパー」の口で、現実不可能と思われることで、ハルユキは不幸運命を覚悟する。それは、災禍の鐘に響く二人の物語……

か-16-13 2082

# アクセル・ワールド8―運命の連星―

川原 雅

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-870326-9

星まわしを強化外装「ヘイダスキット」に就かれ、銀河騎士で戦うことになったタムとハルユキ。人の心算が導く共鳴し合い、激突する……。その結果は……

か-16-15 2135

# アクセル・ワールド9―七千年の祈り―

川原 雅

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-870326-9

再び「タロム・フィザスター」となったハルユキ。決ますべき戦いを始めて、加速世界を駆け巡る。そして、その運命の意思のアバターの姿が立ちあがり……

か-16-17 2282

# ソードアート・オンライン―アイズオブブルー―

川原 雅

イラスト／HIMA

ISBN978-4-04-870326-9

クリアするまでの最長不可戦、ゲームオーバーは死を意味する。この仮想空間は、ゲームであっても遊びではない。第15回 電撃大賞（大賞）受賞者が輝く大作！

か-16-2 1749





マザーズ・マザリオ  
マザーズ・マザリオ



Figure 1

1800-4-A-87041-1

衣類代、旅行代、食料代、ホテル代、ハイム・オンラインなどにアスナが連動した、とあるアバターとのお太極を想い出とは？「マザーズ・ロザリオ」編、巻末巻一

0-0314 2107

1-2-3-4-5-6-7-8-9-10-11-12-13-14-15-16-17-18-19-20-21-22-23-24-25-26-27-28-29-30-31-32-33-34-35-36-37-38-39-40-41-42-43-44-45-46-47-48-49-50-51-52-53-54-55-56-57-58-59-60-61-62-63-64-65-66-67-68-69-70-71-72-73-74-75-76-77-78-79-80-81-82-83-84-85-86-87-88-89-90-91-92-93-94-95-96-97-98-99-100-101-102-103-104-105-106-107-108-109-110-111-112-113-114-115-116-117-118-119-120-121-122-123-124-125-126-127-128-129-130-131-132-133-134-135-136-137-138-139-140-141-142-143-144-145-146-147-148-149-150-151-152-153-154-155-156-157-158-159-160-161-162-163-164-165-166-167-168-169-170-171-172-173-174-175-176-177-178-179-180-181-182-183-184-185-186-187-188-189-190-191-192-193-194-195-196-197-198-199-200-201-202-203-204-205-206-207-208-209-210-211-212-213-214-215-216-217-218-219-220-221-222-223-224-225-226-227-228-229-230-231-232-233-234-235-236-237-238-239-240-241-242-243-244-245-246-247-248-249-250-251-252-253-254-255-256-257-258-259-260-261-262-263-264-265-266-267-268-269-270-271-272-273-274-275-276-277-278-279-280-281-282-283-284-285-286-287-288-289-290-291-292-293-294-295-296-297-298-299-300-301-302-303-304-305-306-307-308-309-310-311-312-313-314-315-316-317-318-319-320-321-322-323-324-325-326-327-328-329-330-331-332-333-334-335-336-337-338-339-340-341-342-343-344-345-346-347-348-349-350-351-352-353-354-355-356-357-358-359-360-361-362-363-364-365-366-367-368-369-370-371-372-373-374-375-376-377-378-379-380-381-382-383-384-385-386-387-388-389-390-391-392-393-394-395-396-397-398-399-400-401-402-403-404-405-406-407-408-409-410-411-412-413-414-415-416-417-418-419-420-421-422-423-424-425-426-427-428-429-430-431-432-433-434-435-436-437-438-439-440-441-442-443-444-445-446-447-448-449-450-451-452-453-454-455-456-457-458-459-460-461-462-463-464-465-466-467-468-469-470-471-472-473-474-475-476-477-478-479-480-481-482-483-484-485-486-487-488-489-490-491-492-493-494-495-496-497-498-499-500-501-502-503-504-505-506-507-508-509-510-511-512-513-514-515-516-517-518-519-520-521-522-523-524-525-526-527-528-529-530-531-532-533-534-535-536-537-538-539-540-541-542-543-544-545-546-547-548-549-550-551-552-553-554-555-556-557-558-559-560-561-562-563-564-565-566-567-568-569-570-571-572-573-574-575-576-577-578-579-580-581-582-583-584-585-586-587-588-589-590-591-592-593-594-595-596-597-598-599-600-601-602-603-604-605-606-607-608-609-610-611-612-613-614-615-616-617-618-619-620-621-622-623-624-625-626-627-628-629-630-631-632-633-634-635-636-637-638-639-640-641-642-643-644-645-646-647-648-649-650-651-652-653-654-655-656-657-658-659-660-661-662-663-664-665-666-667-668-669-670-671-672-673-674-675-676-677-678-679-680-681-682-683-684-685-686-687-688-689-690-691-692-693-694-695-696-697-698-699-700-701-702-703-704-705-706-707-708-709-710-711-712-713-714-715-716-717-718-719-720-721-722-723-724-725-726-727-728-729-730-731-732-733-734-735-736-737-738-739-740-741-742-743-744-745-746-747-748-749-750-751-752-753-754-755-756-757-758-759-760-761-762-763-764-765-766-767-768-769-770-771-772-773-774-775-776-777-778-779-780-781-782-783-784-785-786-787-788-789-790-791-792-793-794-795-796-797-798-799-800-801-802-803-804-805-806-807-808-809-810-811-812-813-814-815-816-817-818-819-820-821-822-823-824-825-826-827-828-829-830-831-832-833-834-835-836-837-838-839-840-841-842-843-844-845-846-847-848-849-850-851-852-853-854-855-856-857-858-859-860-861-862-863-864-865-866-867-868-869-870-871-872-873-874-875-876-877-878-879-880-881-882-883-884-885-886-887-888-889-890-891-892-893-894-895-896-897-898-899-900-901-902-903-904-905-906-907-908-909-910-911-912-913-914-915-916-917-918-919-920-921-922-923-924-925-926-927-928-929-930-931-932-933-934-935-936-937-938-939-940-941-942-943-944-945-946-947-948-949-950-951-952-953-954-955-956-957-958-959-960-961-962-963-964-965-966-967-968-969-970-971-972-973-974-975-976-977-978-979-980-981-982-983-984-985-986-987-988-989-990-991-992-993-994-995-996-997-998-999-1000-1001-1002-1003-1004-1005-1006-1007-1008-1009-1010-1011-1012-1013-1014-1015-1016-1017-1018-1019-1020-1021-1022-1023-1024-1025-1026-1027-1028-1029-1030-1031-1032-1033-1034-1035-1036-1037-1038-1039-104

2000

[illegible]

含Aの2種と含Bの2種を混合したものを含ABの2種と見做す。含Aの2種は含Bの2種と混合したものを含ABの2種と見做す。含Aの2種は含Bの2種と混合したものを含ABの2種と見做す。

1618 279

はたらく魔王さま！

Figure 1

186473-4-04-370770-6

警察は新聞報道だった魔王が、勇者に敗れて捕  
り鎖いた先は、異世界「東京」だったや  
六畳一間のアパートを彼の魔王様、ワリー  
ターとして働く魔王の姉ははとつちとや

|      |      |
|------|------|
| 2017 | 2018 |
|------|------|

はたらく魔王さま！2

2

卷下

**Abstract**

時を代りに見逃し、まぎらす修行的な「國土」  
 となるのは、國土版「脱獄案」の六巻一話の  
 間に、友の手が割つ隙にできた。心算  
 ずれてしまった、千歳と美奈はつとて、

243 | 244

はたらく魔王さま！ 3

Figure 1

# THE 2011-2012 BUDGET

東京・世田谷の六景一同の魔王様に、異世界からのゲートが開く。そこから現れた怖い少女は、魔王をババ、勇者をママと呼んで——。 魔法少女の青春3弾！

|      |      |
|------|------|
| 2013 | 2014 |
|------|------|

# 竜と勇者と可愛い私

志村一矢  
イラスト／宮ん太

ISBN978-4-04-868335-7

人間不信、可愛げゼロな、おけど、せんを彼女のは悲しいほどに愛つてくで……風和な魔法少女とハタレ騎士士の新婚愛の物語。

し-7-20 1903

# 竜と勇者と可愛い私2

志村一矢  
イラスト／宮ん太

ISBN978-4-04-868771-0

魔王と勇者の旅を続けるアンジュたちも、学校戦術フルブライトで迎えたエルフ族の美しい少女、レックスを誘うライブル心で出陣の彼女とアンジュは……

し-7-21 1904

# 竜と勇者と可愛い私3

志村一矢  
イラスト／宮ん太

ISBN978-4-04-870179-2

アンジュたち一行の前に現れた、二人の魔界の姉。本拠を創すべく相手でありながら、互いに対立する彼女たちの間を、なぜか仲介するたてがみは……

し-7-22 2071

# 竜と勇者と可愛い私4

志村一矢  
イラスト／宮ん太

ISBN978-4-04-870389-9

イオの空中魔城へたどりついたアンジュたちは、トネエの魔法で格められた、あまりに悪質な事実を知ることになり、そして……

し-7-23 2147

# 竜と勇者と可愛い私5

志村一矢  
イラスト／宮ん太


ISBN978-4-04-870576-0

魔法少女のアンジュとハタレ勇者レックスが、魔法少女フェリシアの女王、ティアマリアと対峙することになり、戦いの果てに……

し-7-24 2217

おもしろいこと、あなたから。

# 電撃大賞



自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。  
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高樹彰七郎(『肉眼のシャナ』)、成田良悟(『バッカーノ!』)、文倉秀砂(『狼と蒼牟耜』)、有川 悠・浪花スクモ(『闘雲龍戦中』)、川原 礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代的一线を走るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中国。

## 電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

- 賞(共通)
- |    |             |
|----|-------------|
| 大賞 | 正賞+副賞 100万円 |
| 金賞 | 正賞+副賞 50万円  |
| 銀賞 | 正賞+副賞 30万円  |

- (小説賞のみ)
- |               |
|---------------|
| メディアワークス文庫賞   |
| 正賞+副賞 50万円    |
| 電撃文庫MAGAZINE賞 |
| 正賞+副賞 20万円    |

編集部から選評をお送りします！

小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を  
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。  
<http://asclimw.jp/award/taisyoy/>